博士論文

心態詞の意味と機能の研究
－*mal* を中心に－

平成２１年３月

広島大学大学院社会科学研究科
筒井友弥

目次

0. 序論 ..... (1)
0.1. 本研究の目的 ..... (1)
0.2. 本研究の構成 ..... (3)
1. 概説 ..... (5)
1.1. ドイツ語の心態詞 ..... (5)
1.2. 他言語における類似表現 ..... (9)
1.2.1. 日本語 ..... (9)
1.2.2. 英語 ..... (11)
1.2.3. 中国語 ..... (12)
1.3. 心態詞の歴史 ..... (13)
1.4. 意味最大限主義と意味最小限主義 ..... (15)
1.5. 心態詞の種類とその特徴 ..... (16)
1.5.1. 先行研究における心態詞の特徴 ..... (17)
1.5.2. 本研究における心態詞の必要条件 ..... (21)
1.6. 第 1 章のまとめ ..... (26)
2. 心態詞の特徴 ..... (28)
2.1. 形態論的・音声学的特徴 ..... (28)
2.2. 統語論的・意味論的特徴 ..... (30)
2.3. 意味論的・語用論的特徴 ..... (45)
2.3.1. 文の叙法(Satzmodus)と心態詞の生起制限 ..... (45)
2.3.2. 心態詞の機能 ..... (48)
2.3.2.1. 発話行為タイプ標識／発話行為タイプ修飾語としての機能 ..... (48)
2.3.2.2. メタ語用論的指令としての機能 ..... (51)
2.3.2.3. 心的態度表明としての機能 ..... (52)
2.3.3. 心態詞の結合可能性 ..... (54)
2.4. 第 2 章のまとめ ..... (55)
3. 心態詞と話法詞の境界 ..... (58)
3.1. 真理条件意味論 ..... (61)

3.1.1. 文の内包と命題 ..... (63)
3.1.2. 文の外延と直示 ..... (65)
3.1.3. 文基と命題内容 ..... (65)
3.2. 認知言語学における「文の意味」 ..... (70)
3.3. 語用論の観点 ..... (72)
3.3.1. 関連性理論における命題 ..... (74)
3.4. 本研究における「命題」－first approximation－ ..... (76)
3.5. モダリティ ..... (77)
3.5.1. 命題とモダリティの関係 ..... (78)
3.5.2. 本研究における話法詞の解釈 ..... (81)
3.5.2.1. S モダリティの客観性 ..... (82)
3.5.2.2. S モダリティの内在性 ..... (83)
3.5.2.3. 話法詞 *wahrscheinlich* と *bedauerlicherweise* の真理条件 ..... (84)
3.5.3. 文演算子としての心態詞 ..... (87)
3.5.4.「含意」としての心的態度 ..... (90)
3.5.4.1. Grice の理論 ..... (95)
3.5.4.2.「手続き的コード化」としての心的態度 ..... (101)
3.6. 本研究における「命題」の再考 －second approximation－ ..... (105)
3.6.1.「思想」の概念 ..... (106)
3.6.2.「命題」の再定義 ..... (108)
3.7. 第 3 章のまとめ ..... (111)
4. 心態詞 *mal* の分析 ..... (113)
4.1. 心態詞 *mal* の使用環境と機能 ..... (114)
4.2. 心態詞 *mal* の形態 ..... (116)
4.3. 心態詞 *mal* の意味論的考察 ..... (116)
4.3.1. 時間副詞 *einmal* の考察 ..... (117)
4.3.2. 頻度副詞 *einmal* の考察 ..... (124)
4.3.3. 心態詞 *mal*, 時間副詞 *einmal*, 頻度副詞 *einmal* の区別とその関連 ..... (129)

4.4. 心態詞 *mal* の語用論的考察 ..... (132)
4.4.1. 先行研究 ..... (133)
4.4.2. *können* と *mal* の共起性の問題 ..... (138)
4.4.2.1. *mal* の使用に関する条件 ..... (139)
4.4.2.2. *mal* の使用に関するアンケート調査 ..... (140)
4.4.2.2.1. 統計処理に関して ..... (146)
4.4.2.2.2. 分析結果 ..... (147)
4.4.2.2.3. *mal* の不適格性の考察 ..... (150)
4.4.3. *mal* の使用意義 ..... (155)
4.4.3.1. 日本語の程度副詞「ちょっと」との比較分析 ..... (156)
4.4.3.2.「ちょっと」の使用に関するアンケート調査 ..... (159)
4.4.3.3. 分析結果 ..... (161)
4.4.3.4. *mal* と「ちょっと」の機能に関する相違 ..... (163)
4.4.3.5. *mal* の積極的な用法 ..... (167)
4.4.3.5.1. アンケート調査 ..... (168)
4.4.3.5.2. 分析結果 ..... (169)
4.4.3.5.3.「連帯性の指標」としての *mal* ..... (172)
4.5. 第 4 章のまとめ ..... (178)
4.5.1. *mal* の「丁寧さ」 ..... (179)
4.5.2. 心態詞 *mal* の意味と機能 ..... (181)
4.5.2.1. *mal* の基本的意味と心的態度 ..... (183)
4.5.3. 課題 ..... (194)
5. 心態詞の結合 －*mal* 分析の展望に代えて－ ..... (198)
5.1. 概要 ..... (199)
5.1.1. 心態詞 *ja* と *wohl* の結合 ..... (209)
5.1.1.1. 心態詞 *ja* の意味と機能 ..... (209)
5.1.1.2. 不変化詞 *wohl* ..... (214)
5.1.1.2.1. „wohl“の共時的な意味的共通性 ..... (219)
5.1.1.2.2. „wohl“の意味的核に関する示唆 ..... (224)
5.1.1.2.3. *WOHL* の解釈 ..... (228)

5.1.1.3.「文タイプ修飾語」としての *wohl*……(236)
5.1.1.3.1. *wohl* の統語的な振舞い……(240)
5.1.1.4. *ja* と *wohl* の語順とその解釈……(242)
5.2. *mal* の結合……(244)
5.2.1. *mal* に関する意味論的仮説 ー発話行為オペレータ修飾語……(246)
5.2.2. *mal* に関する統語論的仮説 ー生成位置と移動……(251)
5.2.3. *ja mal, denn mal, wohl mal* の解釈……(256)
5.3. 第 5 章のまとめ……(267)
6. 本研究のまとめ……(269)
参考文献……(280)
謝辞……(298)

0. 序論

「心態詞」とは，字の如く「心の態度を表す詞」のことである。「心の態度」といっても非常に抽象的であるが，「驚き」や「苛立ち」，「不満」や「疑い」などの話し手の「気持ち」といえば少し具体的になるだろう。あるいは，「依頼」，「促し」，「了解」といった話し手が心に抱く態度ともいえる。さらに限定すると，ここでの「心の態度」とは，相互的な言語コミュニケーションにおける話し手の気持ちや心の動きを意味し，心態詞は，そのような気持ちや心の動きを言語的に表現する手段ということになる。このような表現手段は，当然ドイツ語に限られるものではない。例えば日本語でも，「～ね」や「～よ」といった文末に置かれる語（終助詞）がその代表的なものとみなされている。ただ，特にドイツ語は，そうした心態詞の種類が豊富であり，現代ドイツ語の特に話し言葉において多用されるものである。「心態詞」という用語は日本語による訳語である。1.3.で詳述するが，ドイツ語では„Abtönungspartikeln“や„Modalpartikeln“と呼ばれる。前者を直訳すると，「色などに濃淡をつける不変化詞」となり，後者は「話法の不変化詞」となる。ある事態（言われた内容）を色に喩えた場合，そのあり方に対して，緊張／強調（濃）や緩和（淡）といった態度を反映させる（色彩を与える）という点で，前者の用語は今日まで浸透してきた。一方，気持ちや態度を話し方に反映させるという意味では，後者の方が捉えやすいとも考えられるが，名称が„Modalwort“（話法詞）と似ていて混同されやすいといった欠点もある。本研究は，日本語による記述であるため，これら二種の用語の違いには重点を置かず，一貫して「心態詞」という訳語を使用する。

0.1. 本研究の目的

本研究のテーマの１つは，「心態詞」という語群の特徴をあらためて整理し，他の語群との明確な区別を図ることにある。心態詞研究を行う上で，「心態詞」という概念そのものの捉え方を明確にしておかなければ，その意味と機能を見直すことの必要性を論じる意義を見い出せないからである。無論，本研究で心態詞とみなされうる全ての語に関して，意味と機能を徹底的に網羅することはできない。というのは，それこそが，「心態詞」をどのような立場でどのように捉えるかという視点に依存するからである。従って，ある特定の心態詞を取り上げ，詳細な分析を行うための土台作りとしては，「心態詞」という概念の見直しが本研究における最初の課題となる。このことをふまえ，本研究では，日常のドイツ語におい

て，「命令」や「依頼」の発話で頻繁に使用される心態詞*(ein)mal*[1]に注目する。心態詞 *mal* は，„Direktive“（行為指示型）の発話で用いられ，その「要求」（Aufforderung）の強制力の度合いを緩和する語用論的な機能を持つ不変化詞と考えられてきた（Franck 1980; Thurmair 1989; Helbig 1994[3]; Zifonun et al. 1997; 岩崎 1998; 井口 2000; Bublitz 2003）。Weydt（1969）に端を発して盛期をむかえた心態詞研究では，これまで数多くの論文・著書が発表されてきたが，その中で，心態詞 *mal* に焦点を当てたものはほとんど見当たらない。心態詞全般に関する辞書的・辞典的な文献（Weydt/Hentschel 1983; Helbig 1994[3], etc.）において，*mal* が他の不変化詞と同様，個別に記述されることはあるが，辞書・辞典の性格上，これらの記述は心態詞 *mal* を研究の中心に据えているわけではない。また，英語との比較（cf. Bublitz 1978）あるいは心態詞の結合（cf. Thurmair 1989）といった一貫したテーマのもとで，心態詞 *mal* を研究対象の一部とする文献も見受けられるが，あくまで心態詞 *mal* についても部分的に言及しているにすぎず，決して *mal* の意味や機能について，詳細な分析を行っているわけではない。

では，そもそもなぜ心態詞 *mal* を取り上げるのか。一言でいえば，それだけ捉えどころのない研究対象に対する挑戦である。実際は，筆者が「捉えどころがない」と思い込んでいるだけで，結局は研究として扱うほどの将来的な問題性がないために，これまで際立って注目されてこなかった可能性もある。しかし，この心態詞は，ドイツ語の母語話者に対してというより，外国語としてのドイツ語学習者にとって，その使用の面で困難をきたすと考えられる。先に，心態詞 *mal* が，ドイツ語の日常会話で頻繁に使用されることを述べたが（cf. Wagner 1974; Stolt 1979; Bublitz 2003），そうであればこそ，この心態詞が抱える問題を解き明かすことは，ドイツ語によるコミュニケーションの向上を目指すうえで不可欠なテーマではないだろうか。そこで，本研究では，この心態詞を主に統語論，意味論，語用論の見地から分析し，その意味と機能をあらためて見直す。それにより，とりわけ語用論的観点の分析に基づき，日本におけるドイツ語教育の一端として，‘生きた’コミュニケーション能力の向上を図るとともに，他の心態詞分析に関する将来的な展望を提供することを目的とする。

さらに，心態詞全般についていえば，„Partikellose Sprache ist im Deutschen eindeutig als barsch, schroff oder apodiktisch markiert“（心態詞を伴わないと，ドイツ語では明らかに，無愛想で素気なく，断定的な話し方とみなされる）（Busse 1992: 39）や，„Es ist daher unabdingbar,

[1] 心態詞 *mal* は，本来 *einmal* という形で成立し（cf. Burkhardt 2001: 56ff.），それが短縮されたものと考えられる。しかし，今日では，*einmal* の形ではほとんど使用されなくなった（cf. Thurmair 1989: 184）。

dass Nicht-Muttersprachler Partikeln als unentbehrliche Mittel der Beziehungspflege lernen.“（従って，非母語話者が，人間関係を維持するために，心態詞を不可欠な手段として学ぶことは必須である）（Bublitz 2003: 184）といった記述が見受けられる。Thurmair（1989: 298）は，„Da die Modalpartikeln nicht auf der propositionalen Ebene wirken, sind sie ein wichtiges Mittel zur Erweiterung der Ausdrucksmöglichkeiten.“（心態詞は命題レベルに作用しないため，表現力の可能性を拡大させる重要な手段である）と心態詞の意義に言及している。また，Busse（1992: 54）によれば，„Einüben der Partikeln ist [...] immer auch Einüben in Formen des sozialen Umgangs der Deutschen.“（心態詞を学ぶことは，［...］常に，ドイツ人との社交という形での学習でもある）と捉えられる。従って，心態詞の意味および用法の分析，それによる可能な修正は，ドイツ語による言語コミュニケーションの実態を見直す手がかりを提供するとともに，日本におけるドイツ語教育の現場で，実際のコミュニケーション能力の向上，ならびにその使用に際しての人間関係の構築・維持に貢献するものとなるはずである。本研究では，この目的において主に心態詞 *mal* を取り上げ，この心態詞を徹底的に分析する。

0.2. 本研究の構成

本研究の構成は次のとおりである。まず第 1 章は概説である。最初に，いくつかの例を示しながらドイツ語の心態詞を概観し，次に，他言語における類似表現や心態詞の歴史を述べる。続いて，心態詞研究における二つの代表的な立場，および先行文献に基づく心態詞の種類と特徴を紹介し，最後に，本研究の立場を明確にしたうえで，本研究における心態詞の必要条件をまとめる。

第 2 章では，第 1 章でまとめた心態詞の個々の必要条件に関して，形態論的・音声学的特徴，統語論的・意味論的特徴，意味論的・語用論的特徴に大別したうえで，具体的な説明を与える。その際，本研究において必要条件とみなさない特徴に関しても，先行文献に基づいてその理由を述べる。また，意味論的・語用論的特徴の説明では，「文の叙法」という概念に触れたあと，心態詞の機能に関する先行文献の捉え方の相違を紹介した上で，本研究における見解を明確にする。最後に，１つの文の中で，複数の心態詞が結合して生起する特徴についても言及する。

第 3 章では，心態詞と話法詞の境界づけを試みる。ともに話し手の心的な評価や判断を表すとされる話法詞と心態詞の区別は，心態詞あるいは話法詞研究における１つの重要な課題である。この課題に取り組むにあたり，先行文献における「命題」と「モダリティ」とい

う概念を詳述したうえで，それぞれの概念に関する本研究の捉え方を提起する。その際，心態詞の心的態度を「含意」とみなすことが最大の論点となる。この観点から，話法詞と心態詞を意味論的・語用論的に区別することが目的である。最後に，その区別に際して生じうる「命題」に関する問題点を挙げ，その解決案として「思想」の概念を引き合いに出す。

第 4 章では，心態詞 *mal* を具体的に分析する。まず，心態詞 *mal* の使用環境，機能，形態を概観する。次に，心態詞 *mal* の意味論的考察として，その派生元である時間副詞 *einmal* に焦点を当て，先行文献における意味論的な分析を紹介する。続いて，時間副詞 *einmal* の語彙形成過程で関連づけられる頻度副詞としての *einmal* についても触れ，心態詞 *mal*，時間副詞 *einmal*，頻度副詞 *einmal* の明確な区別を図る。続く本章の 4 節では，心態詞 *mal* の機能に関して語用論的な考察を行う。まず，先行文献で述べられてきた心態詞 *mal* の機能に関して，アンケート調査およびその統計処理に基づき，導かれうる問題点を指摘する。さらに，心態詞 *mal* の使用意義の見直しを図るうえで，日本語の程度副詞「ちょっと」との比較分析を行い，*mal* の使用意義を「連帯性の指標」という点に見い出す。この際，「丁寧さ」という概念が論点となる。最後に，心態詞 *mal* による「丁寧さ」，および本研究で導き出す心態詞 *mal* の新たな心的態度，さらにいまだ残された課題を述べることでまとめとする。

第 5 章では，*mal* 分析に関する今後の展望として，心態詞の結合形を考察する。この際，心態詞 *ja*, *denn*, *wohl* との結合を取り上げるが，特に *wohl* に関しては，まず，*wohl* 単独の分析を行う。話し手の推測や確信を表すとされる不変化詞 *wohl* は，話法詞か心態詞かという境界で，常に特殊な立場に置かれてきた。本研究では，第 3 章における分析をもとに，不変化詞 *wohl* を心態詞とみなすに至るが，その結果として生じる„wohl“の意味的共通性の問題を抱えることとなる。第 5 章の前半は，この問題の解明に尽くす。その後，心態詞 *mal* に関して，統語論的・意味論的な見地からの仮説を立て，*ja mal*, *denn mal*, *wohl mal* の結合を考察対象としてその検証を行う。そこから，「構造と意味のインターフェース」という大きなテーマのもとで，心態詞 *mal* が本来的に示す多義的な振舞いを導き出すとともに，*mal* に留まらず，心態詞全般に関しても，今後の研究に対する開かれた展望を提供する。

最終章は，本研究の全体的なまとめである。

1. 概説

本章では，ドイツ語における「心態詞」の導入的考察を行う。最初に，心態詞の主な機能を概観したうえで，ドイツ語以外の言語において，同様の機能を果たしうる表現を提示する。他言語との比較によって，別の視点からも，「心態詞」という概念の理解を容易にするためである。また，先行研究を通して，今日「心態詞」とされる語の研究が，20 世紀中頃からどのような経緯をたどってきたかにも言及し，現代における２つの研究上の立場－意味最大限主義・意味最小限主義－を紹介する。さらに，先行研究における心態詞の種類とその特徴を取り上げたのち，本研究における心態詞の扱いを明確にする。その際，心態詞の必要条件をまとめる。

1.1. ドイツ語の心態詞

広い意味におけるドイツ語の副詞（Adverb）は，程度・時間・空間・様態などを表すものと，話し手の判断・心情・評価などを表すものに大別される。井口（2000）によると，前者のような副詞は，命題の形成に関与するものであることから，「命題内機能」を持つ副詞と表される。それに対し，後者の副詞は，命題の外で，その命題についての話し手の判断などを表現することから，「命題外機能」を持つ副詞と呼ばれる[2]。

まず，命題内機能を持つ副詞には，程度副詞（程度を補正する機能），空間副詞・時間副詞・様態副詞・因果副詞（状況を表現する機能），接続副詞（文を接続する機能），疑問副詞（訊ねる機能）がある。これらは，「狭い意味で『副詞』と考えられている語とほぼ一致する。それは，副詞の伝統的かつ今日でも一般的な定義の『動詞・形容詞・他の副詞を修飾する』という働きをもつものである」（井口 2000: 9）。

次に，命題外機能を持つ副詞には，とりたて詞（とりたて機能），スケール詞（スケール機能）[3]，否定詞（否定機能）[4]，話法詞（話法機能），心態詞（心態機能），応答詞（応答機能）と呼ば

---

[2] 第 3 章で扱うが，「命題外」という考え方およびその用語には，本研究の捉え方とは若干の相違がある。筆者は，「命題」という概念の捉え方によって，ここで「命題外」とされる語群が，「命題内」であると考える立場をとるためである。しかし，ここでは，副詞の大まかな分類を紹介するという立場で，井口（2000）を参照することにした。

[3] スケール機能というのは，井口（2000）独自の分類であり，「スケール詞としている語はとりたて詞と共に Gradpartikel として取り扱われることが多い」（井口 2000: 68）。

[4] 否定詞 *nicht* が「命題外」というのは，井口（2000: 79ff.）によれば，次の点に依拠する。「どのような立場でも『否定』が成り立つためには『肯定』があることが前提とされている。[...] たとえば, Er schläft nicht.（彼は眠っていない）という文が初めからあるのではない。[...] Er schläft nicht.と表現されるのは，その前に Er schläft.（彼は眠っている）ということが話題になったか，話し手がそれを思い浮かべていたからである。いずれにせよ，話し手の想定世界の中には er

れるものが属する。これらは，「『いつどこでなぜ誰が何をどうする』ということを表す命題には含まれず，命題に関して何らかのことを表現するものである」（井口 2000: 57）。下記（1a-f）に，それぞれの例を挙げる（cf. 井口 1999, 2000）。

(1) a. **とりたて詞（Gradpartikel/Fokuspartikel）**

例: *Auch* Peter ist gekommen.（Peter も来た）

例: *Nur* Peter ist gekommen.（Peter だけが来た）

b. **スケール詞（Gradpartikel）**

例: Peter schläft *noch*.（Peter はまだ眠っている）

例: Peter arbeitete *schon* um 7 Uhr.（Peter は 7 時にはもう働いていた）

c. **否定詞（Negationspartikel）**

例: Peter wohnt *nicht* in Berlin.（Peter はベルリンに住んでいない）

d. **話法詞（Modalwort）**[5]

例: Peter ist *vermutlich* krank.（Peter はたぶん病気だろう）

例: Peter ist *leider* krank.（残念ながら Peter は病気です）

e. **心態詞（Abtönungspartikel）**

例: Willst du *etwa* ihn einladen?（君，まさか彼を招待するつもりなの？）

例: Komm *mal* her!（ちょっとこっちへおいで）[6]

f. **応答詞（Antwortpartikel）**

例: Kommt Peter?－*Ja*.（Peter は来るの。－うん）

例: Peter kommt nicht!－*Doch*.（Peter は来ない！－いや，来るよ）

（訳の下線は筒井による）

---

schläft という命題があった。[...]『否定』は想定世界と現実世界の食い違いを表す表現手段と考える」。しかし，脚注 2 で記したとおり，ここでは，「副詞」の下位分類の紹介が目的であり，（話し手の想定世界の外という意味で）否定詞 *nicht* を「命題外」とするこの考え方を，本研究で応用する主旨ではない。

[5] 文副詞（Satzadverb）と呼ばれることもある（cf. Meibauer 1994: 37; Bußmann 2002: 579; Kwon 2005: 21, etc.）。ただし，井口（2000: 89）は，「その文の中でも特に 1 つの要素をとりあげて，それに関して判断を述べるのがふつうである」として，「話法詞」という語を用いている。

[6] 本来，心態詞に訳語をつけることは望まれず（cf. 岩崎 1986: 35; 1988: 13; 1998: xixff.），筆者もこの点に同意するが，ここでは，心態詞の表すニュアンスを単に紹介する上で，あえて訳を提示することにした（以下，本研究において邦訳をつけた箇所は，いずれも同様の理由に基づくものとする）。ただし，「日本語にドイツ語の心態詞に対してほぼ 1 対 1 の対応を示す語類が存在しない」（岩崎 1986: 37）ことを強調しておく。

本研究で扱うドイツ語の *mal* は，この中の「(e)心態詞」に属する。(d)に挙げた話法詞と並び，心態詞は，話し手の推量や心情，評価や立場を表現するドイツ語の不変化詞(Partikel)に属し，話し手の心的態度を表す。日本語の「心態詞」という訳語は，「話し手の心的態度を表す詞」という意味に依拠している。「詞」を「単独で文節を構成しうる語」と正確に捉えるのであれば，「心態詞」とみなされる語は自立語ではないため，「心態辞」という用語を当てるべきかもしれないが，上記で見たとおり，心態詞は副詞の一種(一部)とみなされてきたことから，日本語では「心態詞」という用語で扱われている。

ここで，当然問題となるのは，同じく話し手の心的態度を反映すると考えられる，話法詞と心態詞の区別であろう。本研究では，この点に関して，「文の真理条件」という概念に基づき，第 3 章で詳しく論じることにする(不変化詞 *wohl*（たぶん）に関する考察として 5.1.1.2. も参照)。心態詞は，発話行為の様相にも関わるもので，文の真理条件(truth conditions/Wahrheitsbedingungen)に関与しない(cf. Helbig 1994[3]: 23ff.)。例えば，下記(2a)と(2b)は，ともに「このスープは熱い」という同じ命題を表している。この際，(2a)の *ja*，(2b)の *aber* といった心態詞が付与されると，同じ命題に対して，それぞれ(2a')や(2b')のような話し手の心的態度が反映される。ここでは，いずれの心的態度も，「驚き」の態度／気持ちを表しているといえる。しかし，この２つの発話における「驚き」は，話し手による把握の仕方の点で異なっている。(2a)では，話し手は「スープが熱いということ」に驚いており，話し手が予期していたのは熱くないスープである。一方，*aber* を用いた(2b)では，話し手は熱いスープを予期していたが，「それほどに熱い」とは予期していなかったことが表現されている。「つまり，ja は表現される事柄が『そうであること』(daß)についての驚きを信号化し，aber は表現される事柄の『程度』(wie)についての驚きを信号化する」(Hentschel/Weydt 1990 の邦訳: 297)。

(2) a. Die Suppe ist **ja** h e i ß!（このスープは熱いんだな！）

a'. 心的態度: 熱いとは全く思っていなかった。

b. Die Suppe ist **aber** heiß!（このスープはやけに熱いな！）

b'. 心的態度: 熱いにしてもこれほど熱いとは思っていなかった。(三瓶 1997: 17)

また，心態詞 *ja* は，(2a)と同様に平叙文(Deklarativsätze)で現れた場合にも，(3a)のように

「あなたもご存知ですよね」といった確認を表す態度や,（3b）のように「～なのだから」といった具合に，先行する発言や状況の理由を表明したりもする（cf. 太田 1998: 18ff.）。これらの心態詞 *ja* には,（3a）では「既知情報・共有知識（bekannt/gemeinsames Vorwissen）の確認,自明の事柄（als evident）や相互了解（Übereinstimmung）の主張」（cf. Helbig 1994[3]: 165ff.），また（3b）の場合には「理由づけ」（cf. 岩崎 1998: 694）などといった機能があると考えることができる。

(3) a. Sie wissen **ja**, dass man hier nicht rauchen darf.

（ここが禁煙だということはご存知ですよね）（太田 1998）

b. Dränge nicht so! Ich komme **ja** schon.

（そんなにせかすなよ。今行くからさ）（ibid.）

他にも，下記（4a-f）などのように，ドイツ語の心態詞は語彙が豊富である。そして,（制限はあるが）（2.3.1.の（45）を参照）使用される文形式（Satztypen）によって，１つの心態詞であっても，それぞれ異なる機能を担い，異なる発話行為と関係し，異なる心的態度を表すとされる。

(4) a. Wir waren **doch** darüber einig, dass wir am Sonntag zu Hause bleiben!

（僕らは日曜は家にいるってことで話がまとまったじゃないか。（忘れてしまったの？）（三瓶 1997）

b. Heute müssen wir **eben/halt** noch Überstunden machen.

（今日はこれから残業しなくちゃならないんだな。（あーあしょうがない...））（ibid.）

c. Kennt ihr euch **denn** schon?

（（なんだ,）君たちもう知り合いなのか!））（ibid.）

d. Hast du **etwa** das Fenster offen gelassen?

（君はひょっとして窓を開けっぱなしにしてきた？（まさかそんなことはないと思うけど））（ibid.）

e. Wie heißt du **eigentlich**?（ところで名前はなんていうの？）（ibid.）

f. Gib **nur/bloß** nicht auf!（とにかくあきらめるな!）（ibid.）

1.2. 他言語における類似表現

以上で，ドイツ語の心態詞を概観したが，他の言語においてそのような機能を果たす表現が全く見当たらないわけではない。例えば，対人コミュニケーションにおいて，非常に繊細な言語手段が求められる日本語のような言語でも，当然，統語的な観点における相違もあるにせよ，意味的には，終助詞がドイツ語の心態詞と非常に類似した役目を担う。また，ドイツ語と同じく西ゲルマン語に属する英語においても，心態詞に相当すると考えられるいくつかの表現が観察される。日本語と同様に文末表現という点では，中国語における類似の文末表現が報告されている。このような他言語との対照からも，ドイツ語の心態詞のあり方が見えてくると思われる。以下, 1.2.1.から 1.2.3.で，日本語，英語，中国語の類似表現を具体的に見ていく。

1.2.1. 日本語

ドイツ語の心態詞研究に関する日本語の文献は，関口（1954，初版: 1939）が最初である。関口（1954: 201-206）では，「Doch とは何ぞや？」という主題のもと，大先生と小先生による対話といった形式で，心態詞 *doch* に関する具体的な説明が試みられている。

Iwasaki（1972）や Kawashima（1972, 1987, 1989）では，ドイツ語の心態詞と日本語の終助詞の関わりが取り上げられる。Iwasaki（1972）は，時枝（1950）に従って助詞（Hilfspartikeln）を４つに分類し，そのうち，„emotionale Hilfspartikeln“（感情の助詞）が，日本語において「命題に感情表現を色づける手段」であるとする。

(5) a. kasus-angebende Hilfspartikeln（格付与の助詞（格助詞））（例: Kaze-*ga* fuite-iru.）

b. begrenzende Hilfspartikeln（限定の助詞（副助詞））（例: A-*dake* benkyô shiteiru.）

c. konjunktionale Hilfspartikeln（接続の助詞（接続助詞））（例: ame-ga furu-*node*,）

d. emotionale Hilfspartikeln（感情の助詞） （訳は筒井による）

例: (i) Oya yuki-*ka*.（Es schneit ja!）

(ii) Kawaii-*ne*.（Wie lieblich!）［Wie süß! / Wie niedlich!］

(iii) Maa subarashii-*koto*.（Wie wunderbar!）

(iv) Kyo-wa ame-*kashira*.（Ob es heute wohl regnet?）

(v) Kore-o goran-*yo*.（Guck mal!）

(vi) Guzuguzu suru-*na*.（Beeile dich doch!）（Iwasaki 1972: 107ff.）

しかしながら, Iwasaki（1972: 108）では, „Außerdem dienen japanische Partikeln vor allem als Stilmittel, wodurch unter anderem Alters- bzw. Klassenunterschiede zwischen den Gesprächspartnern, das Geschlecht des Sprechenden (männlich oder weiblich), der Grad der Höflichkeit, die Gesellschaftsschicht, der man angehört, der Redestil, die Redeabsicht usw. zum Ausdruck kommen, was bei deutschen Abtönungspartikeln bei weitem nicht der Fall ist.“（さらに, 日本語の助詞は, 特に書き方や話し方の手段として使われ, それによって, とりわけ会話参加者間の年齢や階級の相違, 話し手の性別（男性あるいは女性）, 丁寧さの比重, 属する社会層, 話のスタイル, 話の目的などが表現される。このことは, ドイツ語の心態詞にはおおよそ当てはまらない）とされる[7]。Kawashima（1989）は, ドイツ語の心態詞と日本語の終助詞（Finalpartikeln）が, 共に対話スタイルのテクストでのみ現れる点に注目したうえで, 心態詞と終助詞は, 共に話者の相互行為において重要な役割を果たすと主張し, その際, 敬意, 軽蔑, 控えめ, 親しみの念が表されるとする。また, Kawashima（1989）においても, 心態詞には男女差がないが, 終助詞の使用には男女の別があることが指摘されている。

Werner（1998; 2002）は, 日本語を中心に, 日本語とドイツ語の「丁寧な依頼」（höfliche Bitte）における不変化詞の対照研究に従事し, ドイツ語の心態詞に相当するものとして, Kawashima/Kaneko（1987）に従い, (6) のような日本語の終助詞（Satzschlusspartikeln）を挙げる。

(6) ga, i, ka, kara, kasira, keredo, kke, koto, mai, mono, na, naa, na, ne, nee, ni, no, noni, sa, si, to, towa, tomo, ttara, tte, tteba, wa, ya, yara, yo, ze, zo.（cf. Werner 2002: 109）

また,「丁寧な依頼」に現れる日本語の不変化詞として, *chotto*, *chodai*, *ga*, *ka*, *kashira*, *kedo*, *na*, *ne*, *no*, *sa*, *tara*, *yo* を扱い, これらに相応するドイツ語の心態詞に *doch*, *denn*, *mal*, *vielleicht* を挙げる。Werner（2002: 121）によれば, 終助詞の特徴は下記（7a-j）のように記述され, 終助詞が文末にのみ置かれ, 心態詞が文中（中域）（結果的に文末になる場合もある）に置かれるといった決定的な相違点を除けば, 後述する心態詞の特徴と終助詞の特徴は非常に類似しているということになる。

[7] 母語話者によっては, ドイツ語の心態詞でも, 世代間の相違や社会層, 話のスタイルがその使用に影響を与えるという意見もある。また, 本論で扱う心態詞 *mal* は, とりわけ丁寧さの比重と関係する表現手段である。しかし, その他の観点については, 現段階ではまだ確証を得ていないため, 今後の課題とする。

(7) a. Sie [= Satzschlusspartikeln] haben Endposition im Satz.［終助詞は文末に置かれる］

b. Sie können nicht erfragt werden.［終助詞は質問の対象にならない］

c. Sie können nicht negiert werden.［終助詞は否定の対象にならない］

d. Sie sind nicht flektierbar.［終助詞は語形変化しない］

e. Sie sind keine Satzglieder, Satzgliedteile oder Fügteile.

［終助詞は文肢（文成分），文肢部または継合部でない］

f. Es gibt Polyseme in anderen Wortarten.

［終助詞は多義語であり，他の品詞の形で現れる］

g. Sie sind bedingt kombinierbar, sowohl untereinander als auch mit anderen Illokutions-modifizierern.

［終助詞は，制限的に他の終助詞や他の発語内的修飾語と互いに結合可能である］

h. Sie haben Satzskopus.［終助詞は文を作用域にとる］

i. Die Satzproposition ändert sich nicht, wenn sie weggelassen werden.

［終助詞を省いても，文の命題は変わらない］

j. Sie haben feste Kompatibilitäten mit Satztypen und Illokutionstypen.

［終助詞は，特定の文形式や発話行為の型と結びつく］

1.2.2. 英語

Bublitz（1978: 192ff.）によると，話し手の心的態度を表す英語の不変化詞には *well*, *why*, *then*, *just*, *ever* などがある。下記にいくつかの例を挙げる。

(8) a. It may <u>well</u> be the case that Labour lost most of its constituencies.

a'. Es kann <u>durchaus/schon</u> sein, daß Labour die meisten ihrer Wahlkreise verloren hat.

（労働党が，彼らの選挙区のほとんどを失うことは<u>十分に</u>起こりうることである）

b. That may <u>well</u> be a mistake, but I refuse to accept his invitation.

b'. Das mag <u>durchaus / schon</u> ein Fehler sein, aber ich weigere mich, seine Einladung anzunehmen.

（それは<u>確かに</u>間違いかもしれないが，私は，彼の誘いを断る）

c. … and no school on Friday; it's just unbelievable!

c'. ... und keine Schule am Freitag; es ist einfach unglaublich!

（... そして金曜日は学校が休みだ。まったくもって信じられない！）

d. She's ever so nice!

d'. Sie ist ja so（solch） ein Schatz!（彼女は，まさに愛すべき人だ）

e. It's ever so light outside!

e'. Es ist ja so hell draußen!（外は，いやはや明るい）

また，不変化詞に限らず，程度の度合いを緩和する機能を持った表現手段は，英語では，まとめて„hedge"と呼ばれる。Brown/Levinson（1987: 145）によれば，*hedge* は(9)のように定義され，例えば *sort of*, *regular*, *pretty*, *rather* などが *hedge* として扱われる。

(9) 'hedge' is a particle, word, or phrase that modifies the degree of membership of a predicate or noun phrase in a set.

hedge は，日本語で「緩和表現」あるいは「緩和詞」などと訳され，岡田（1985: 39ff.）によれば，緩和詞には，意味的に４つの下位分類があるとされる。

(10) 1. 妥協詞（*quite* など）: I *kind/sort of* like it.

2. 減少詞（*partially*, *slightly*, *somewhat* など）: We know them *slightly*.

3. 極小詞（*a bit* など）: Do you like her? *A bit*.

4. 近似詞（*almost*, *nearly*, *as good as* など）: He *as good as* promised it to us.

1.2.3. 中国語

楊･久井（2004）は，日本語の終助詞「よ」,「ね」と中国語の文末表現「啊」,「吧」を比較分析し,（11a-e）のような例文を挙げている。

(11) a. 明天下午三点在三楼会议室开会啊!

（明日午後三時に三階の会議室で会議があるよ！）

b. 明天下午三点在三楼会议室开会吧?

（明日午後三時に三階の会議室で会議があるね？）

c. 漂亮的星星啊!（美しい星よ！）

d. 你们不要那么快，等等我啊!（そんなに急がないで，私を待ってよ！）

e. 那么，咱们明天去吧.（じゃ，明日行きましょうね）

これらの文末表現は，中国語で「语气词」（語気詞）と呼ばれ，楊･久井（2004）によれば，「啊」や「吧」のほかに，「阿」，「呀」，「哇」，「哪」なども語気詞に属する。語気詞は，文末に添えて，命令・強調・勧誘・招請・感動・疑問・親密さ・丁寧さ・尊敬・激情などを表現するとされ，使用される文タイプによって語気（心的態度）が変わると考えられている。また，その際イントネーションが重要な役割を果たす。

1.3. 心態詞の歴史

本節では，現代において「心態詞」とされる語彙が，研究対象として，またその名称の点においても，どのような歴史的経緯をたどってきたかを見ておきたい。そのうえで，次節 1.4. で，現代の心態詞研究における２つの立場を取り上げ，それぞれの研究を紹介する。その際，本研究における立場を明確にする。

ドイツ語の„Abtönungspartikeln“（直訳：色などに濃淡をつける不変化詞）という術語（Terminus）は，Weydt（1969）に初出の用語であり，Helbig（1994[3]:14），Burkhardt（2001: 42），Kwon（2005: 1）などの記述に従うと，それ以前には，Lindqvist（1961）による„inhaltslose Redefüllsel“（談話における無意味な詰め物），Adler（1964）による„Füllwörter“（埴辞），Reiners（1944），Riesel（1963），Moser（1960）による„Flickwörter“（虚辞），Thiel（1962）による„Würzwörter“（薬味語）などのことばで，等閑に（vernachlässigt）付されてきた。また，Iwasaki（1972）では，Erben（1966）による„emotionale-expressive Partikeln“（感情表現詞）や Schulz/Griesbach（1970）による„Modalglieder“（話法肢），Becker（1976: 7）では，Engel（1968）による„adjungierte Adverbialia“（付加的状況語）といった用語が紹介されている。さらに，Krivonosov（1977a）では„modale Partikel“（モダリティの不変化詞），Doherty（1985）では，„Einstellungspartikel“（態度詞）という語が使われている。

Weydt（1969）以後，今日に至るまでとりわけ研究者の間で好んで用いられてきた用語に

„Modalpartikeln“（e.g. Krivonosov 1977b; Bublitz 1978; Bastert 1985; Wolski 1986）がある。しかし，序論で述べたとおり，「『話法性という術語では心態詞の機能を非常に漠然としか記述することができず，さらにまた名称が話法詞（Modalwort）と似ているため，これと混同されるのを避けるべきである』（ヘルビヒ Helbig 1988 年: 31 頁）ので，この術語は適切でないと言える」（Hentschel/Weydt 1990 の邦訳: 293）といった指摘もある。

心態詞は，現代になって集中的に研究されるようになったが，それ以前は長い間，語彙における周辺的な要素（periphere Elemente）として扱われていた。Reiners（1959）を引用した Burkhardt（1994: 131）によると，心態詞は，„Läuse im Pelz unserer Sprache“（ドイツ語という毛皮についたシラミ）などと非難され，いわば„Papierkörbe der Sprachwissenschaft“（言語学のごみ箱）に投げ入れられていた。しかし，本来，心態詞はドイツ語において特徴的な現象であり（cf. Burkhardt 2001: 42），英語やその他の多くの言語にはあまり見られない特殊な語彙である。それは，語彙の数だけでなく，そのような語が，頻繁に用いられる点においても，ドイツ語は他の言語と異なる（cf. Öhlschläger 1985: 354）。また，Bublitz（2003: 184）では，ドイツ語で豊富に現れる心態詞は，丁寧さの表現手段（Höflichkeitsmitteln）（ここでは，コミュニケーションにおいて，普遍的で，社会に適した合理的な基本行為における手段）としての役割を果たすと述べられている。そこで，心態詞は，「近年ではその存在が見直され，特にコミュニケーションにおいて重要な働きをするものとして位置づけられている」（井口 2000: 120）。また，心態詞を独立した品詞（Wortart）として扱おうとする傾向が辞書や文法書で見られるようになり，たとえ副詞として分類されていても，「話し手の主観的心情を反映して」や「話者の気持ち」といった注意書きがされるようになった（cf. 井口 2000: 120）。実際，Meibauer（1994），Ormelius-Sandblom（1997），Werner（1998）では，心態詞は独自の品詞として扱われる。一方，Altmann（1979），Thurmair（1989），Oppenrieder/Thurmair（1989）では，心態詞は，統語的な機能，つまり 1 つの品詞としてではなく，不変化詞の心態詞機能（Modalpartikel-Funktion）として理解すべきであるとされる。

言語学の分野で心態詞に関心が寄せられるようになったのは，Krivonosov（1963）と Weydt（1969）の研究成果による（cf. Öhlschläger 1985: 351）。70 年代における語用論ないしは発話行為論の発展にともない，コミュニケーションの機能が注目を浴びるようになると，心態詞の研究が盛んに行われ，そのコンテクスト依存性や多義性が研究対象として扱われるようになった。言語学における「コミュニケーション的・語用論的な転換」（kommunikativ-pragmatische

Wende)（Helbig 1994[3]: 17）において，このような不変化詞の研究は，„plötzliche Blüte der Partikelforschung“（不変化詞研究の突然の開花）（Franck 1979: 11）や„Partikologie“（不変化詞学）（Weydt 1981: 46），あるいは„Partikel Linguistik“（不変化詞言語学）（Henne 1979: 132）などと称された（cf. Helbig 1994[3]: 17）。

1.4. 意味最大限主義と意味最小限主義

心態詞研究は，発話行為理論（Sprechakttheorie），テクスト言語学（Textlinguistik），会話分析（Konversationsanalyse），談話分析（Diskursanalyse）などの異なる理論的基盤上で多くの方法論によって試みられ，さまざまな研究の視点を生み出した。その結果，大別すると２つの方向性が導かれる: „Bedeutungsmaximalismus“（意味最大限主義）と„Bedeutungsminimalismus“（意味最小限主義）である。両者の立場の相違を, Posner（1979b）に従って下記（12）に引用する。

(12) **Bedeutungsmaximalisten** versuchen, soviel wie möglich auf die wörtliche Bedeutung der sprachlichen Ausdrücke zurückzuführen und neigen zu der Annahme reichhaltiger Wortbedeutungen und vieldeutiger Wörter. **Bedeutungsminimalisten** dagegen räumen den pragmatischen Regeln zur Uminterpretation gegebener wörtlicher Bedeutungen einen größeren Spielraum ein und neigen zur Annahme minimaler Wortbedeutungen und eindeutiger Wörter.
［**意味最大限主義者**は，それぞれの言語表現を，可能な限り字義通りの意味に還元しようとし，豊富な語の意味と，語の多義性を仮定する立場をとる。それに対し，**意味最小限主義者**は，与えられた字義通りの意味を再解釈するための語用論的な規則に比較的寛大な余地を認め，最小限の語の意味と語の一義性を仮定する立場をとる］

（Posner 1979b: 380）

換言すると，前者は，文脈や場面によって決まる多様な具体的機能を意味とみなす立場であり，その代表的な研究者には, Borst（1985）, Brauße（1986; 1988）, Franck（1980）， Helbig（1994[3]）, Helbig/Kötz（1985）が挙げられる（cf. Kwon 2005: 2）。それに対し，後者の意味最小限主義では，心態詞でいえば，それぞれの語彙の心態詞の用法にも共通する最小の抽象的意味が抽出される。つまり，全ての心態詞には基本的な意味があるとされる。Doherty（1985）, Thurmair（1989）, Jacobs（1991）, Meibauer（1994）, Ormelius-Sandblom（1997）, Autenrieth

(2002)などが，この立場をとる代表的な研究者である(cf. Kwon 2005: 3)。岩崎・池上・Hundsnurscher (1994: 606)によれば，意味最大限主義から意味最小限主義への移行がうかがえ，特に Doherty (1985)は，後者の立場に徹底し，分析言語による意味記述を通じて，意味論の実用論的拡張を行った点で注目される。

本研究では，意味最小限主義の立場をとる。2.3.2.2.で触れるが，意味最大限主義の考え方であるメタ語用論的指令としてのアプローチでは，文脈との関わりから心態詞の意味を導くという点で，心態詞の変種を無闇に増やす危険性を回避できない。そのような文脈の数だけ多数の機能を仮定するといった方法では，膨大な辞書的記述となり，ドイツ語母語話者がそれをどのように学習するのかが説明できないだけでなく，外国語としてのドイツ語教育においても教授が困難となってしまう。さらに，とりわけ„Peter ist *ja vermutlich* zu Hause.“(cf. *Peter ist *vermutlich ja* zu Hause.)のような話法詞との共起や，„Peter ist *ja doch* zu Hause.“(cf. *Peter ist *doch ja* zu Hause.)のような心態詞同士の結合における語順の規則は，意味最大限主義的な考察では説明できない。こうした規則に解釈を与えるには，それぞれの心態詞の意味をコンテクストと切り離して意味論的に抽出し，それらの意味の総和を構成的に分析する必要がある。そこで，本研究では意味最小限主義の立場に基づき，不変化詞 *mal* の心態詞以外の用法である時間副詞 *einmal*(かつて，いつか)および頻度副詞 *einmal*(一回／一度)との関連に言及して，いずれにも共通の抽象的意味／基本的意味(Grundbedeutung)を抽出することで，心態詞 *mal* の実用的な機能の見直しを図る。

1.5. 心態詞の種類とその特徴

1.1.において，ドイツ語の心態詞は語彙が豊富であると述べたが，具体的には，どれほどの数が観察されるのであろうか。ここでは，今日「心態詞」として扱われる語の種類を限定し，それらの語に共通する特徴に関して先行研究を見ていく。

心態詞に関しては，過去多くの研究者がテーマに取り上げ，その先行文献は非常に豊富である。しかし，そもそも何を「心態詞」とするかという基準が，現代においてなお曖昧であるために，研究者によってその扱いの範囲が異なっている。Burkhardt (2001: 42)によれば，表(13)に挙げたように，古高ドイツ語の時代(年代の範囲は諸説ある)以降，20 世紀に至るまでに少なくとも 50 もの心態詞が観察される。

(13)

Die Entstehungszeiten der deutschen Abtönungspartikeln (in nhd. Formen) （ドイツ語の心態詞の発生時期（新高ドイツ語の形で））						
ahd.	mhd.	16. Jh.	17. Jh.	18. Jh.	19. Jh.	20. Jh.
denn	da	*dreist**	allerdings	einfach	bloß	langsam
doch	halt	eben	aber	erst	eh	schlicht
		eigentlich	auch	fein	gefälligst	zufällig
		freilich	einmal	gleich	noch	irgendwie
		man	etwa	hübsch	nochmal	dabei
		ja	natürlich	immerhin	ruhig	
		*je**	schon	jedenfalls	schließlich	
		jetzt		mal	schön	
		nämlich		ohnehin	vielleicht	
		nicht		so		
		nur		sowieso		
		wohl		überhaupt		
				übrigens		

* = inzwischen ungebräuchlich（後に使用されなくなったもの）　（Burkhardt 2001: 56）

その後，形態論的・統語論的・意味論的・語用論的な特徴（Merkmale/Charakteristika/Eigenschaften）に従った基準によってその数も減少してきた。例えば, Weydt（1969: 19）では, *aber*, *auch*, *bloß*, *denn*, *doch*, *eben*, *eigentlich*, *einfach*, *(ein)mal*, *etwa*, *gerade*, *halt*, *ja*, *ruhig*, *schon*, *vielleicht*, *wohl* の計 17，また, Bublitz（1978: 31）では, *aber*, *auch*, *bloß*, *denn*, *doch*, *eben*, *etwa*, *eigentlich*, *ja*, *mal*, *nun (mal)*, *nur*, *ruhig*, *schon*, *vielleicht*, *wohl* の計 16 の心態詞が挙げられている。Wegener（1998: 42）は，ドイツ語の心態詞の正確な数は決まっていないと指摘し，その理由として，アクセントのある形や *einfach*, *immerhin*, *überhaupt*, *wohl* などの語彙を心態詞とみなすかが疑わしいためであるとする。そのうえで，心態詞を，話し手の態度を表明し，文頭に生起しない語彙に制限する場合，それらの語彙の数は 15 から最大で 20 あるとしている: *aber*, *auch*, *bloß*, *denn*, *doch*, *eben*, *eh*, *eigentlich*, *einfach*, *etwa*, *halt*, *ja*, *mal*, *nur*, *ruhig*, *schon*, *vielleicht*, *wohl*（cf. also Helbig 1994[3]: 36）。

1.5.1. 先行研究における心態詞の特徴

心態詞の特徴として，例えば Weydt（1969: 68, 1977: 218）では（14a-h）が挙げられる。

(14)　Abtönungspartikeln; ［心態詞（に）は;］

　　a. sind unflektierbar. ［語形変化しない］

b. dienen dazu, die Stellung des Sprechers zum Gesagten auszudrücken.

［発話内容に対する話し手の態度を表明する］

c. können nicht in gleicher Bedeutung eine Antwort auf eine Frage bilden.

［同じ意味を表して，質問の応答にならない］

d. können nicht die erste Stelle im Satz ausfüllen.［文頭に生起しない］

e. beziehen sich auf den ganzen Satz.［文全体を作用域にとる］

f. sind unbetont.［強勢が置かれない］

g. sind im Satz integriert.［文の中域に生起する］

h. haben einen Lautkörper, der anders akzentuiert ist oder in anderer syntaktischer Stellung mindestens noch eine andere Bedeutung hat und dann einer anderen Funktionsklasse angehört.

［別にアクセントを置く音形，あるいは異なる統語構造において，少なくとももう１つ別の意味を表す音形があり，その音形は異なる機能をもったクラスに属する］

（14f）の特徴「心態詞には強勢が置かれない」に関しては，「現在では文アクセントを持っていても心態詞とされることが多い」（井口 2000: 122）とあり，Weydt（1981: 53）では，*Wie* h é i ß t *du denn*?（お名前はなんていうのかな？）（訳: 三瓶 1997: 19）vs. *Wie heißt du* dén n?（お名前はそれじゃあなんていうの？）（訳: ibid.），*Wie* h é i ß t *du eigentlich*?（ところで名前はなんていうの？）（訳: ibid.）vs. *Wie heißt du* éi g e n t l i c h?（名前は本当はなんていうの？）（訳: ibid.）といった例が言及されている。Helbig（1994[3]: 36）には，„In der Tat gibt es einige Abtönungspartikeln (z. B. *denn*, *eigentlich*, *ja*, *bloß*), die in bestimmten Funktionen (Satzarten) betont auftreten.“（実際，いくつかの心態詞（例えば，*denn*, *eigentlich*, *ja*, *bloß*）には，特定の機能（文タイプ）において強勢が置かれる）と述べられている。

その他，上記に挙げた心態詞の特徴は，多くの研究者（Hartmann 1975; Gerstenkorn 1976; Krivonosov 1977b; Iwasaki 1977; Bublitz 1978; Kemme 1979; Franck 1980; Doherty 1985; Helbig/Kötz 1981; Gornik-Gerhardt 1981; Hentschel 1983）によって部分的に採用され，また，下記（15a-i）のように，部分的な修正や補足が加えられた（cf. Helbig 1994[3]: 32ff.）。

(15) Abtönungspartikeln; ［心態詞は;］

a. sind weder selbständige Satzglieder (vgl. [(14d)]), noch können sie als Satzäquivalente auftreten (vgl. [(14c)]).

［独立した文成分ではなく（［(14d)］参照），文相当でもない（［(14c)］参照）］

b. bilden zusammen mit einem anderen Wort (dem Verb) ein Satzglied, gehören zum Prädikat und stellen zusammen mit dem Verb eine intonatorische Einheit (ein „phonetisches Wort“) dar.

［他の単語（動詞）と共に１つの文成分を形成し，述語に属し，動詞と結びついてイントネーションのまとまり（１つの「音声的な語」）を作る］

c. sind syntaktisch immer fakultativ, d. h. ohne Gefahr für die Grammatikalität des Satzes weglaßbar.

［統語的に常に随意的であり，削除しても文の文法性に支障をきたさない］

d. haben keine selbständige lexikalische Bedeutung und tragen nichts zur sachlichen Information des Satzes (zu den Wahrheitsbedingungen von Sätzen) bei, können deshalb auch unter semantischem Aspekt weggelassen werden.

［独立した語彙的な意味をもたず，文の事実に関する情報（文の真理条件）に関与しない。それゆえ，意味論的な観点においても，削除することが可能である］

e. sind statt dessen Signale für die Stellungnahme des Sprechers zur Proposition (vgl. [(14b)]), sind „Ausdrucksweisen der Sprechereinstellung“, haben deshalb eher eine meta-kommunikative Funktion (als Signale an den Hörer, wie er die in der Äußerung enthaltene Information aufnehmen bzw. auf sie reagieren sollte).

［その代わり，命題に対する話し手の態度表明を含意する（［(14b)］参照），つまり「話し手の態度を表現する手段」である。それゆえ，むしろメタ-コミュニケーション的な機能（発話に含まれた情報を，聞き手がどのように受け入れるべきか，あるいは反応すべきかを聞き手に含意する機能）をもつ］

f. haben deutliche Restriktionsbeschränkungen hinsichtlich ihres Vorkommens in Aussage-, Frage- und Aufforderungssätzen, weil sie mit unterschiedlichen Sprechhandlungen verbunden sind.

［異なる発話行為と結びついているため，平叙文，疑問文，命令文での現れにおいて，明示的な制限が課せられる］

g. sind kurze, in der Regel einsilbige Wörter.［短い語，通常は一音節の語である］

h. stehen im Satz nach dem finiten Verb; zwischen finiten Verb und Abtönungspartikel können andere (unbetonte) Glieder stehen. Die Abtönungspartikeln sind in gewisser Weise permutierbar und flexibel (ähnlich wie die Sondernegation). Sie stehen an der Grenze zwischen Thema und Rhema, also immer vor dem Rhema und sind auf diese Weise an der kommunikativen Gliederung des Satzes beteiligt.

［文において定動詞の後ろに置かれる; 定動詞と心態詞の間には, 他の（強調されない）文成分が置かれる。心態詞は, ある程度は位置が置換可能であり, 語順の順応性がある（部分否定と類似）。心態詞は, テーマとレーマの境界に置かれ, 常にレーマの前に生起することで, 文のコミュニケーション的な構成に関与する］

i. sind nicht negierbar – wie auch die anderen Elemente mit Satzkopus, d. h. mit dem gesamten Satz als Bezugsbereich (z. B. die Modalwörter) nicht negierbar sind – und stehen deshalb vor dem Negationswort.

［否定の対象にならないー同様に, 文全体を作用域にとる他の要素（例えば話法詞）も否定の対象にならないー。それゆえ, 心態詞は否定詞の前に置かれる］

また, Helbig（1994[3]: 34ff.）は,（15a-i）をふまえて,「不変化詞の他の下位クラス（Subklasse）（Gradpartikel（スケール詞）や Steigerungspartikel（程度詞））とも区別できる心態詞の特徴」（ibid.: 34ff.）として, 下記（16a-e）にまとめる。

(16) Abtönungspartikeln; ［心態詞（に）は;］

a. beziehen sich nicht auf einzelne Satzglieder, sondern auf das Prädikat und damit auf den ganzen Satz.

［個々の文成分と関係するのではなく, 述語とそれを伴う文全体と関連する］

b. haben keine spezifische (sondern nur eine allgemeine) semantische Bedeutung, ihre Funktion liegt in erster Linie auf kommunikativer Ebene: Sie verändern nicht die Wahrheitsbedingungen des Satzes, sondern drücken Einstellungen des Sprechers zur Proposition aus, [...]

［特有の意味論的な意味はなく, 一般的な意味しかない。その機能は, 第一にコミュニケーションレベルで現れる: 心態詞は, 文の真理条件に関与せず, 命題に対する話し手の態度を表す［...］］

c. zeigen bestimmte Restriktionen hinsichtlich der Sprechhandlung und der Satzart: [...]
［発話行為と文タイプに関して特定の制限がある: [...]］

d. sind in der Regel nicht negierbar.［通例，否定の対象にならない］

e. zeigen Beschränkungen im Hinblick auf ihre Position: Die zentrale Gruppe der Abtönungspartikeln ist nicht erststellenfähig, [...]
［文中の位置に関して制限がある: 心態詞の中心的なグループは，文頭に生起しない[...]］

以上，(14a-h)，(15a-i)および(16a-e)に，各々の研究者による一連の特徴を列記した。次節では，これらの特徴を理論的研究対象の分野別に整理し，本研究において，心態詞の必要条件と考えられるものを抽出する。

1.5.2. 本研究における心態詞の必要条件

以下では，本研究における心態詞を特定するにあたり，その「必要条件」をまとめる。下記(17a-h)は，主に Weydt (1969: 68, 1977: 218), Thurmair (1989: 37), Helbig(1994[3]: 32ff., 34ff., 36), Werner (2002: 70)で記述された心態詞の特徴(のいくつか)に，筆者が修正を施して，心態詞の必要条件，つまり「ある語が心態詞であれば，必ず満たされる個々の条件」を可能な限り簡略的にまとめたものである。そして，これら全ての条件を伴って，「ある語を心態詞たらしめる条件」，つまり心態詞の必要十分条件が形成される。

(17) Abtönungspartikeln;［心態詞(に)は;］

a. sind unflektierbar. (= morphologisches Merkmal)［語形変化しない(＝形態論的特徴)］

b. können selbstständig nicht die erste Stelle im Satz ausfüllen und sind weder Satzglieder noch Fügteile. (= syntaktisches Merkmal)
［単独で文頭に生起せず，文肢(文成分)でも継合部でもない(＝統語論的特徴)］

c. haben einen Lautkörper, der anders akzentuiert ist oder in anderer syntaktischer Stellung mindestens noch eine andere Bedeutung hat und dann einer anderen Funktionsklasse angehört. (= syntaktisch-semantisches Merkmal)
［別にアクセントを置く音形，あるいは異なる統語構造において，少なくとももう１つ別の意味を表す音形があり，その音形は異なる機能をもったクラスに属する(＝統語論的・意味論的特徴)］

d. können nicht eine Antwort auf eine Frage bilden.（= syntaktisch-semantisches Merkmal）
［質問の応答にならない（＝統語論的・意味論的特徴）］

e. haben Satzskopus.（= semantisches Merkmal）［文全体を作用域にとる（＝意味論的特徴）］

f. tragen nichts zu den Wahrheitsbedingungen von Sätzen bei.（= semantisch-pragmatisches Merkmal）［文の真理条件に関与しない（＝意味論的・語用論的特徴）］（第 3 章）

g. zeigen bestimmte Restriktionen hinsichtlich der Satztypen/Satzmodi und der Illokutionstypen.（= semantisch-pragmatisches Merkmal）
［心態詞は，文タイプ／文の叙法と発話行為タイプに関して特定の制限がある（＝意味論的・語用論的特徴）］

h. signalisieren（implizieren）die Stellung des Sprechers zur Proposition.（= pragmatisches Merkmal）［命題に対する話し手の心的態度を含意する（＝語用論的特徴）］

これら個々の必要条件に関しては，第 2 章で具体的に述べるとして，下記（18）に，「本研究における心態詞」を提示する。なかでも，Thurmair（1991: 20）に従えば，*aber*，*auch*，*bloß*，*denn*，*doch*，*eben*，*eigentlich*，*etwa*，*halt*，*ja*，*mal*，*nur*，*ruhig*，*schon*，*vielleicht*，*wohl* は'classical' sixteen と呼ばれる[8]。そして，（17c）で示したとおり，（18）における語は，いずれも心態詞としての機能と並び，それ以外の機能を第一義的に持っている。（19a-t）に，個々の語におけるいくつかの用例を列挙する。

(18) *aber, auch, bloß, denn, doch, eben, eigentlich, einfach, (ein)mal, erst, etwa, halt, ja, nicht, noch, nur, ruhig, schon, vielleicht, wohl*

(19) a_1. ***aber***（Koordinierende Konjunktion）（並列接続詞） しかし，だが

例: Er liebt sie, *aber* sie liebt ihn nicht.

（彼は彼女を愛している。しかし，彼女は彼を愛していない）

a_2. ***aber***（Abtönungspartikel = AP）（心態詞）

例: Du bist *aber* gewachsen!（お前は大きくなったじゃないか！）

[8] この中には，なぜか *einfach* が見当たらないが，管見では，*einfach* を心態詞とみなさない理由はなく，他多くの文献でも，*einfach* は心態詞として扱われるのが常である。

b_1. ***auch***（Gradpartikel/Fokuspartikel）（とりたて詞）**～もまた，～でさえも**

例: *Auch* Hanako weinte.（花子も泣いた）

b_2. ***auch***（AP）（心態詞）

例: Ist das *auch* wahr?（それは本当に本当なのかい）

c_1. ***bloß***（Adjektiv）（形容詞）**裸の，むき出しの**

例: Er hat das Licht mit *bloßem* Auge gesehen.（彼は，その光を肉眼で見た）

（Gradpartikel/Fokuspartikel）（とりたて詞）**単に，ただ～だけ**

例: Ich habe *bloß* noch 100 Yen.（私はもう, 100 円しか持っていない）

c_2. ***bloß***（AP）（心態詞）

例: Was ist *bloß* mit ihm geschehen?（彼はどうしたというのだろう）

d_1. ***denn***（koordinierende Konjunktion）（並列接続詞）**なぜなら**

例: Sie geht schnell nach Hause, *denn* ihr Kind ist krank.

（彼女は急いで帰る。なぜなら，彼女の子供が病気だからだ）

d_2. ***denn***（AP）（心態詞）

例: Hast du *denn* schon wieder Hunger?（君はもうおなかがすいたの）

e_1. ***doch***（koordinierende Konjunktion）（並列接続詞）**しかし**

例: Ich klopfte, *doch* niemand öffnete.

（私はノックした。でも誰も開けてくれなかった）

（Konjunktionaladverb）（接続副詞）**けれども，なにしろ～だから**

例: Er hat sie angerufen, *doch* war sie nicht zu Hause.

（彼は彼女に電話をした。だが，彼女は留守だった）

（Antwortpartikel）（応答詞）（否定疑問文に対する肯定の返事）**いや**

例: Ist sie nicht zu Hause? －*Doch*!

（彼女は家にいないのですか。－いや（いますよ））

e_2. ***doch***（AP）（心態詞）

例: Das haben Sie *doch* selbst gesagt.

（だって，あなたが自分でそう言ったではないですか）

f_1. ***eben***（Adjektiv）（形容詞）**平らな**

例: Das Auto kann nur auf einem *ebenen* Weg fahren.

（その車は，平坦な道しか走れない）

（Temporaladverb）（時間副詞） **ちょうど，たった今**

例: *Eben* war sie noch hier.（たった今しがた彼女はまだここにいた）

f_2. ***eben***（AP）（心態詞）

例: Das ist *eben* so.（それはしょせんそうなのだ）

g_1. ***eigentlich***（Adjektiv）（形容詞） **本来の，真の**

例: Den *eigentlichen* Sinn des Wortes versteht niemand.

（そのことばの本来の意味を誰も知らない）

g_2. ***eigentlich***（AP）（心態詞）

例: Was denkst du *eigentlich*?（君はいったい何を考えているんだい）

h_1. ***einfach***（einfach）（形容詞）**単純な，簡単な，地味な**

例: Das ist eine *einfache* Aufgabe.（それは簡単な問題だ）

h_2. ***einfach***（AP）（心態詞）

例: Es ist *einfach* Zeitverschwendung.（それは全くの時間の浪費だ）

i_1. ***(ein)mal***（Temporaladverb）（時間副詞） **かつて，いつか**

例: Es war *einmal* ein König.（昔々，あるところに一人の王様がおりました）

例: Ich bin *mal* in Deutschland gewesen.（私はかつて，ドイツにいたことがある）

i_2. ***(ein)mal***（AP）（心態詞）

例: Komm（*ein)mal* her!（ちょっとこっちへおいで）

j_1. ***erst***（Adjektiv）（形容詞） **一番目の，最初の**

例: Der *Erste* Weltkrieg ist 1914 ausgebrochen.

（第一次世界大戦は 1914 年に起こった）

（Gradpartikel）（スケール詞） **ようやく，やっと**

例: Er begriff *erst*, als sie es ihm sagte.

（彼女が彼にそのことを話して，ようやく彼は理解した）

j_2. ***erst***（AP）（心態詞）

例: Wenn er (nur) *erst* wieder gesund wäre!

（まずは彼がまた元気になってくれればよいのだが）

k_1. ***etwa***（Gradpartikel/Fokuspartikel）（とりたて詞） **ほぼ，だいたい**

例: Sie bleibt hier *etwa* 5 Tage.（彼女は，だいたい 5 日間ここに滞在しました）

k_2. ***etwa***（AP）（心態詞）

例: Rauchst du *etwa*?（君，まさかタバコは吸わないよね）

l_1. ***halt***（Verb（Imperativ））（動詞（命令法））[9] **止まれ，やめろ，待て**

例: *Halt*! Wer da?（［軍］止まれ，誰か）

l_2. ***halt***（AP）（心態詞）

例: Das Spiel ist *halt* verloren.（とにかく試合には負けたのだ）

m_1. ***ja***（Antwortpartikel）（応答詞） **はい**

例: Ist sie zu Hause? －*Ja*.（彼女は家にいますか。－はい）

m_2. ***ja***（AP）（心態詞）

例: Das wissen wir *ja* schon längst.

（そんなことは，私たちはむろんとっくに知っている）

n_1. ***nicht***（Negationspartikel）（否定詞） **～でない，～（し）ない**

例: Sie wohnt *nicht* in Tokyo.（彼女は東京に住んでいない）

n_2. ***nicht***（AP）（心態詞）

例: Was du *nicht* sagst!（おまえはなんてことを言うんだ）

o_1. ***noch***（Gradpartikel）（スケール詞） **まだ，なお，そのうち**

例: Eva schläft *noch*.（Eva はまだ眠っている）

o_2. ***noch***（AP）（心態詞）

例: Wie hieß *noch* das Lokal?（あのレストランはなんて名前だったかな）

p_1. ***nur***（Gradpartikel/Fokuspartikel）（とりたて詞） **～だけ，～（で）しかない**

例: *Nur* Eva ist gekommen.（Eva だけが来た）

p_2. ***nur***（AP）（心態詞）

例: Wo bleibt er *nur*?（彼はいったいどこにいっちまったんだろう）

q_1. ***ruhig***（Adjektiv）（形容詞） **静かな，落ち着いた**

例: Er ist ein *ruhiger* Mann.（彼はおとなしい人だ）

q_2. ***ruhig***（AP）（心態詞）

例: Du darfst *ruhig* hereinkommen.（入ってきてかまわないよ）

---

[9] *halt* の派生過程としては,「むしろ」の意味を表す古高･中高ドイツ語の副詞，あるいは「みなす，考える」の意味を表す動詞（für etwas halten）が挙げられる（cf. Burkhardt 2001: 62）。辞書（独和大辞典他）には「間投詞」という記述もあるが, Thurmair（1989: 37）や Helbig（1994: 159）が述べるように，動詞 *halten*（持っている，保つ，止まる）の命令形（Halt mal den Schlüssel!）（ちょっとこの鍵を持っていて）との密接な関連がうかがえるため，ここでは「動詞」に分類した。ただ, Meibauer（1994: 29）は，心態詞 *halt* と動詞 *halten*（命令形）との関連に同意していない。

r_1. ***schon***（Gradpartikel）（スケール詞）**もう，早くも，すでに**

例: Es ist *schon* Mittag.（もう正午だ）

r_2. ***schon***（AP）（心態詞）

例: Du hast *schon* recht.（君は確かに正しいよ）

s_1. ***vielleicht***（Modalwort）（話法詞）**ひょっとしたら**

例: *Vielleicht* kommt sie noch heute.

（もしかしたら彼女は今日中に来るかもしれない）

s_2. ***vielleicht***（AP）（心態詞）

例: Heute ist es *vielleicht* kalt!（今日はなんと寒い日なのか）

t_1. ***wohl***（prädikatives Adverb）（述語形容詞）**元気で，気分がよく**

例: Ich fühle mich *wohl*.（私は気分爽快だ）

t_2. ***wohl***（AP）（心態詞）

例: Warum ist er *wohl* nicht gekommen?（彼はどうして来なかったんだろう）

1.6. 第 1 章のまとめ

最後に，再度，本研究における立場を明記する。まず，本研究では，意味最小限主義の立場をとる。理由は, 1.4.で述べたとおりである。この立場に基づき，心態詞の意味は，「心態詞以外の用法にも共通する最小の抽象的意味／基本的意味（Grundbedeutung）」であるとする。本研究で中心的に扱う心態詞 *mal* の場合は，時間副詞 *einmal* および頻度副詞 *einmal* にも共通する意味論的な意味ということになる（4 章，5 章）。また，（16b）で「心態詞には特有の意味論的な意味はなく，一般的な意味しかない。その機能は，第一にコミュニケーションレベルで現れる」という記述があるが，これは，そもそも Helbig（1994[3]）が，意味最大限主義の立場をとる研究者であることに基づくもので，意味最小限主義の研究者（例えば Thurmair（1989）や Meibauer（1994））の記述には，この特徴は見当たらない。そのうえで，同音異義語（Homonym）として他の品詞でも現れるということは，本研究の心態詞とは, Helbig（1994[3]）が中心的な下位クラスに属するものとした語群（後述参照）ということになり，すなわち，それらは「純粋な心態詞（狭義における心態詞）」と呼ばれるものに相当する。

心態詞の必要条件としては，（17a-h）に挙げたとおりであるが，このうち，下記（20）に再録する（17f）の特徴に関しては，特に詳細な分析が必要となる。

(20) = (17f) Abtönungspartikeln tragen nichts zu den Wahrheitsbedingungen von Sätzen bei.

［心態詞は，文の真理条件に関与しない］

意味論の分野で「文の真理条件」と言われる場合，それは「文の内包（的意味）／文の意義」（Intension/Konnotation eines Satzes/Sinn eines Satzes）のことを指す。本研究では，この点を「命題に対する話し手の心的態度を含意する（=（17h））」という心態詞の特徴と関連づけて，第3章で詳述する。

2. 心態詞の特徴

本章では，1.5.2.の（17a-h）に挙げた個々の必要条件を具体的に説明する。その際，（17a-h）で行ったように，それぞれの特徴を理論的研究対象としての各分野に大別し，大まかにではあるが，その順序に沿って記すこととする。そこで, 2.1.では形態論的・音声学的特徴について, 2.2.では統語論的・意味論的特徴について述べ，最後に, 2.3.で意味論的・語用論的特徴について言及する。また，先行研究で挙げられるものの，本研究においては必要条件に該当しないとみなした特徴に関しても，一部その根拠を述べる。

2.1. 形態論的・音声学的特徴

心態詞（Abtönungspartikel）は不変化詞（Partikel）の下位クラスである。不変化詞とは，形態論（Morphologie）の観点において，屈折変化せず（nicht-konjugierbar），性・数・格によって変化せず（nicht-deklinierbar），比較変化しない（nicht-komparierbar）語のことを指す。そのため，心態詞が，**「（17a）語形変化しない（unflektierbar）」**という特徴を持つのは当然である。他，前置詞（Präposition）や接続詞（Konjunktion）も不変化詞に数えられ，冒頭で挙げたとりたて詞，スケール詞，否定詞，話法詞，応答詞のいずれもがこの特徴を有する。また，（15g）で示した „Abtönungspartikeln sind kurze, in der Regel einsilbige Wörter.“（心態詞は，短い語，通常は一音節の語である）という特徴に関しては，（18）に挙げた本研究における 20 語の心態詞のなかで，*eigentlich*, *einfach*, *etwa*, *ruhig*, *vielleicht* の 5 語が二音節以上であることから，本研究では，この特徴を心態詞の必要条件と認めないこととした。本研究で中心的に扱う心態詞 *mal* も，„Die Modalpartikel *mal* ist wohl ursprünglich auch als verkürzte Form von *einmal* zu sehen,“（もともと *einmal* の短縮形としても捉えられる）（Thurmair 1994: 184）ことから，等しく心態詞として機能する場合の *einmal* も二音節ということになるが，„wird aber heute in der langen Form kaum mehr verwendet.“（今日, *einmal* の形では＜心態詞としては＞ほとんど使用されない（<>は筒井による））（ibid.）という点に基づいて，心態詞 *mal* は 1 音節とみなす。

音声学的特徴として, Weydt（1969: 45ff., 69）, Krivonosov（1977b: 195）, Bublitz（1978: 37）, Helbig（1994[3]: 32）などで，「心態詞には，大抵強勢が置かれない（meist unbetont）」という特徴について言及されるが，1.5.1.でも示したとおり,「現在では文アクセントを持っていても心態詞とされることが多い」（井口 2000: 122）。この特徴は, Weydt（1977: 218）では,「心態

詞にとっての決定的な定義づけ（Enddefinition）ではないが，前提として常に含意され」（ibid.），とりわけ, Krivonosov（1977b）や Helbig（1994[3]）は，„immer betonungslos“ や „immer unbetont“のように，常に（immer）強勢が置かれないものとして心態詞を扱う。Helbig（1994: 32）に至っては, Weydt（1969, 68: 1977a, 217f.）を参照してその特徴を導いているが，実際には，Weydt（1969: 68）において，そもそも„immer unbetont“という記述は見られず，アクセントに関する定義づけすらもない。従って，これまで他の品詞と区別する基準の１つとして考えられてきたこの「非アクセント性」（Unbetonbarkeit）も，本研究においては，心態詞の必要条件から除外することとした。Kwon（2005: 15）でも, „[...] dass das Kriterium *Unbetonbarkeit* [...] nicht für alle Modalpartikeln zutrifft, [...]“（[...]非アクセント性は，[...]あらゆる心態詞に該当する基準でない）と明記される。

ちなみに，文アクセントを持つ心態詞の例には, *ja*, *bloß/nur*, *denn*, *doch*, *wohl* などが挙げられる。特に，心態詞 *ja* は顕著な例であり，等しく心態詞であっても，強勢の有無によって話し手の心的態度が異なる。例えば，下記（21a）や（21b）のような平叙文で心態詞 *ja* が現れる場合，*ja* には強勢が置かれず，ここでは「その事態が，話し手・聞き手両者にとって既知であるという話し手の判断」が心的態度として表される。それに対し，（21c）や（21d）のような命令文で心態詞 *ja* が用いられると，そこに文アクセントが置かれて，要求の性質が緊急性を強め，場合によって警告や脅迫などの発語内行為を導く役目を果たす。それによって，「要求された行為の実行の必要性に対する聞き手の賛同を強く望む」といった話し手の気持ちが反映される。

(21) a. Warum fragst du? Du weißt es *ja*.

（なぜ聞くんだ？ 君だって知ってるじゃないか）（岩崎 1998: 693）

b. Die Prüfung ist *ja* bald vorüber. (Wir wissen es alle.)（Helbig 1994[3]: 165）

（試験はもうすぐ終わるね（私たちは全員そのことを知っている））

c. Lies *já* das Buch durch! (sonst versäumst du Wichtiges)（ibid.: 168）

（その本をしっかり読みなさい（さもないと君は大事なことを見落とす））

d. Arbeite *já* fleißig! (sonst wirst du die Prüfung nicht bestehen)（ibid.）

（一生懸命勉強しなさいよ（さもないと君は試験に合格できない））

Meibauer（1994）によれば，心態詞*ja*の„Kontrastakzent“（対照アクセント）は，当該発話のコンテクストにおいて，„auf eine weitere, im Kontext relevante, geäußerte oder erschlossene Proposition verweist, die zu der Proposition, auf die sich die Modalpartikel unmittelbar bezieht, im Kontrast steht.“（そのコンテクストと関連のある，発話されたあるいは推定されたもう１つの命題を指示し，その命題は，心態詞 *ja* が直接作用する命題と対照をなす）（ibid.: 240）とある。この点に関して, Kwon（2005: 13）は，心態詞 *ja* の対照性は当然であるとした上で，その対照性は２つの命題間にあるのではなく，話し手の意思（der Wille des Sprechers）と聞き手の意思（der Wille des Gesprächspartners）の間に見られると指摘する。しかし，ここでは, *ja* の対照性に関する問題は詳述しない。

2.2. 統語論的・意味論的特徴

「（17b）心態詞は，単独で文頭に生起せず，文肢（文成分）でも継合部でもない」という特徴について，ここで補足的な記述を行う。（17b）に示すとおり，本研究では，この特徴を Thurmair（1989: 27）の記述を参照して，「単独で文頭に生起しない」と明記する。なぜなら，例えば„Abtönungspartikeln können nicht die erste Stelle im Satz ausfüllen.“（心態詞は文頭に生起しない）という Weydt（1969: 68, 1977: 218）の記述や, Helbig（1994[3]: 35）の„nicht erststellenfähig“（文頭に置かれない）という用語では必要条件の記述として不十分であると思われるためである。これらの記述は，「文の前域に置かれない」（Nicht-Vorfeldfähigkeit, nicht vorfeldfähig）（Thurmair 1989: 26; König 1997: 58）として理解される場合があり，このことは，„Abtönungs-partikeln stehen im Satz nach dem finiten Verb.“（心態詞は文の中で定動詞の後ろに置かれる）（Helbig 1994[3]: 33）という記述と関係する[10]。しかし, Thurmair（1989: 25ff.），Meibauer（1994: 31, 56ff.）, Kwon（2005: 16ff.）などで指摘されるとおり，いくつかの心態詞は，疑問詞と結びつくことで前域（定動詞の前）に置かれる。

(22) a. *Warum bloß liebt sie diesen Schwachkopf?*（Thurmair 1989: 26）

（いったいなぜ，彼女はこの馬鹿者を愛しているんだ）

[10] ここでの「文」とは主文のみを指すものと思われる。副文では，心態詞が定動詞よりも前に置かれる（cf. „[...], weil Politiker *ja doch* egoistisch sind.“）。

b. *Was nur findet sie an ihm?*（ibid.）

（いったい，彼女は彼のどこがいいんだ）

c. *Warum auch sollte ich nett zu ihm sein?*（ibid.）

（どうしてまた，私が彼に優しくしなければいけないんだ）

d. *Warum auch/denn/bloß/nur/wohl/?doch sollte die Jagd aufeinander eröffnet werden?*

（TAZ, 13.02.1990, 11）（Kwon 2005: 16）

（いったいなぜに，互いの闘争が始まってしまったんだ）

e. Wer denn von uns allen will das?（Meibauer 1994: 31）

（我々全員のなかで，いったい誰がそれをしたいっていうんだ）

e' *Wer von uns allen denn will das?（ibid.）　　（*印 ＝ 非文法的）

また，Werner（1998: 95, 2002: 70）では，心態詞を定義づける特徴（Definitionskriterien）の１つとして„Modalpartikeln sind keine Satzglieder, Satzgliedteile oder Fügteile.“（心態詞は文肢（文成分），文肢部または継合部でない）と記されるが，（22）のような例では，それぞれの心態詞が疑問詞と結びつくことでまさに文肢部（文成分と結合して，文肢の一部を担う）として機能している。従って，本研究における心態詞の必要条件では，「文肢部でない」という特徴を削除した。

「心態詞は，単独で文頭に生起しない」という制限は，文肢性（文成分であるか否か）と密接な関係にある。文献によって，心態詞の特徴の一つに，„sie [= Modalpartikeln] können weder koordiniert noch modifiziert werden.“（心態詞は，並列されることも修飾されることもない）（Cardinaletti 2007: 93）という点が挙げられるが（=（23a, b）），この特徴は，心態詞が文成分でないことの具体的な言換えであり，（17b）の必要条件に含まれるものとした。

(23) a. *Gehen Sie doch und mal zum Arzt.（Cardinaletti 2007: 93）

b. *Trinken Sie sehr ruhig noch ein Bier!（ibid.）

ここで，心態詞の統語構造に関して少し触れる。まず，本研究の考え方として，筆者は心

態詞を「完全な」最大範疇として扱うことを述べておく。そして，さしあたり，心態詞が命題の真理条件的な意味（語彙的意味）に関与する「演算子」（Operator）でない点，および「CP の指定部にある要素は，解釈規則によって，演算子と解釈されなければならない」（中村 他 2001: 134; cf. Chomsky 1995: 203）点に則り，心態詞が文頭に置かれない理由を導く[11]。上で，「完全な」という言い方をしたのは，以下で紹介する２つの分析において，心態詞がいずれも「不完全な」範疇として扱われる点による。また，筆者が心態詞を最大範疇として扱う利点は，（特に，副詞を同音意義に持つ）心態詞の構造に関する将来的な展望を提供するのに有益であると考えられるためである（第 5 章を参照）。

「心態詞は文頭位置に生じない」ということは，心態詞が統語構造において CP の指定部に現れないことを意味している。この点に関して, Brandt et al.（1999: 233）には（24）のような記述がある。

(24) Syntaktisch sind Modalpartikeln jedoch von den satzmodalen Adverbien unterschieden, indem sie nicht allein die erste Stelle im Satz [Spez, CP] besetzen können. Wir nehmen daher an, daß es sich bei den Modalpartikeln nicht um maximale Projektionen, also funktionsfähige Phrasen handelt. Modalpartikeln sind damit „defekte“ X^0 - Kategorien, die nicht projizieren.

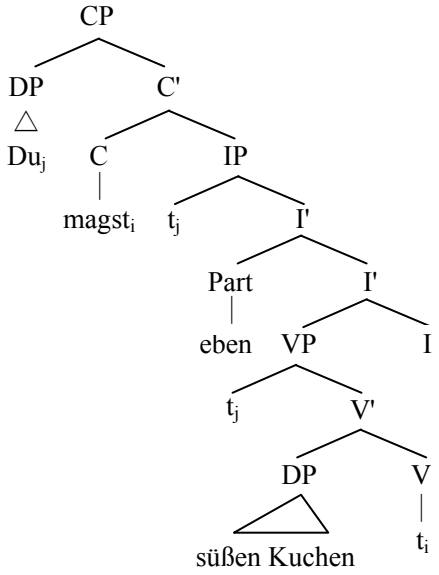
［しかしながら，心態詞は単独で文頭（Spez, CP）に生起不可能である点で，統語的に，文のモダリティを表す副詞とは異なる。従って我々は，心態詞は最大範疇ではない，つまり句としての能力をもたないと仮定する。この仮定のもとで，心態詞は，投射を行わない「不完全な」X^0 であるとみなす］

つまり, Brandt et al.（1999）は，心態詞が文頭に置かれないのは，心態詞が最大範疇に投射することがない点に基づくとしている。また，心態詞 *eben* を例とした彼らの樹形図（25）では，心態詞は基底構造において I'の付加位置に生じるとしたうえで，（24）にもあるとおり，その

[11] ドイツ語の場合, „*Es* wurde gestern getanzt.“（昨日は踊った）や„*Es* war einmal ein König.“（むかしむかし一人の王様がいました）におけるような「虚辞の es／穴埋めの es」と呼ばれるものがある。この場合の *es* は，ドイツ語の動詞第二位の原則を満たすためのもので，演算子ではないが文頭に置かれる。しかし，心態詞はこのような虚辞ではないため，上の解釈規則に反する例外とはみなされない。

範疇を「『不完全な』ゼロ範疇」と定めている。確かに，心態詞が最大範疇まで投射するとした場合，潜在的に CP の指定部に置かれる場合も許されてしまう。そこで，心態詞をゼロ範疇と定めたうえで，基底構造で I'の位置に生じさせるため，「不完全な」という制限を加えている。

(25) Du magst eben süßen Kuchen.（Brandt et al. 1999: 232）
（まったく君は，甘いケーキには目が無いね）



さらに，最新の研究の１つとして，Cardinaletti（2007）が挙げられる。結論を先に述べると，Cardinaletti（2007: 89ff.）は，心態詞を„„schwache‘ Adverbien“（「弱い」副詞）とみなし，„Man muss [...] die MP als ‚besondere‘ Adverbien definieren, die eine eingeschränkte Distribution haben und sehr spezielle syntaktische Eigenschaften besitzen.“（[...] 心態詞は，語の配置において制限され，非常に特殊な統語的特徴をもった「特別な」副詞として定義される）としている。

Cardinaletti（2007）による分析の焦点の１つは，かき混ぜ文における弱代名詞の統語的な振舞い（*Ich habe es nochmals gekauft*., **Ich habe nochmals es gekauft*.）を，心態詞との比較において観察することで，まず問題となるのは，心態詞を主要部（Kopf）とみなすか，句（Phrase）とみなすかにある。この際，心態詞を一般的な副詞と同様に捉え，語彙的な要素を担う最大範疇とみなす場合，先の Brandt et al.（1999）でも紹介したとおり，やはり文頭配置可能性を

排除することができないため, Cardinaletti (2007) はまず主要部として扱う。そして,「心態詞は, 並列されることも修飾されることもなく, 孤立して現れることもない」という特徴が, ロマンス諸語における接語 (Klitika) の生成現象を想起させることに基づき, まず, 心態詞と接語的な代名詞との比較を試みる。このような分析は非常に興味深いものであるが, Cardinaletti 自身が指摘するとおり, 心態詞が接語的な要素とみなされないことは, 次の２つの点から導かれる: 1. 心態詞は, 語アクセント (Wortakzent) を担う (接語的な代名詞が, 長母音で発音されることはない)。2. いくつかの心態詞は二音節である (接語的要素[12]は常に一音節である) (cf. Cardinaletti 2007: 94)。

そこで, 次に心態詞と「弱代名詞」(die schwachen Pronomen) (cf. Cardinaletti 2007: 95ff.) との比較がなされる。「人」を指示しない場合の *es* や *sie* といった弱代名詞は, (26b-d) に見られるとおり, 上で述べた心態詞の特徴と合致する。

(26) a. Es/Sie schmeckt/schmecken mir. (Cardinaletti 2007: 95ff.) (それは／それらはおいしい)

b. *Es/Sie und das andere/die anderen schmecken mir. (ibid.)

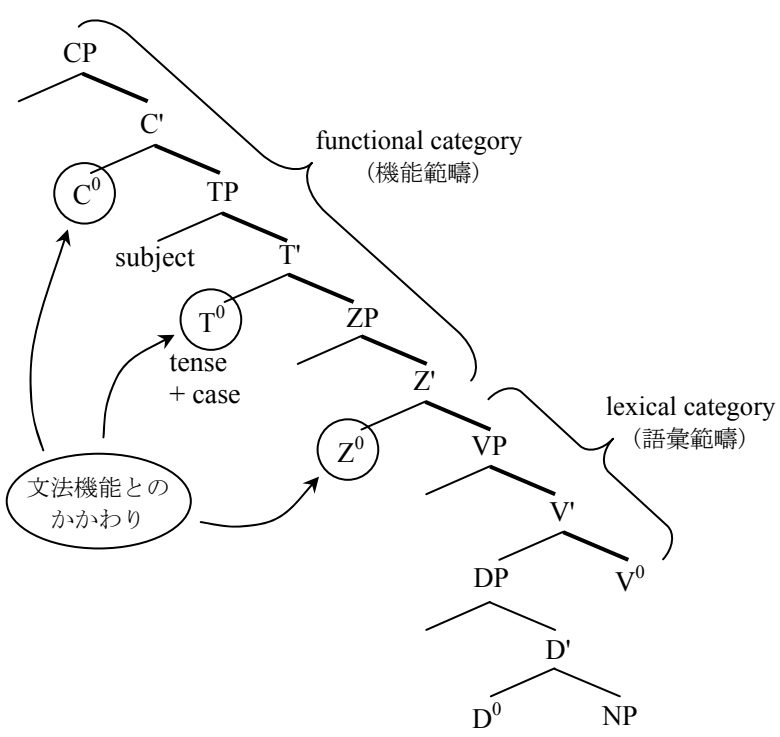
c. *Nur es/sie schmeckt/schmecken mir. (ibid.)

d. A: Was schmeckt dir am besten? B: *Es./*Sie. (ibid.)

この際, (26a) が示すとおり, 弱代名詞は, 主語の場合のみ文頭に置くことができる。つまり指定部 (Spezifikatorposition) を占め, 完全な句 (最大範疇) としてみなされる。このことから, Cardinaletti (2007) では, 弱代名詞を最大範疇の要素でありながら, „‚defiziente' Kategorien" (「不完全な」範疇) であると提案する。というのは, 接語的な要素とは異なり, 確かに句として投射するものの, 通常は語彙範疇と結びつく機能投射に欠けるという点で不完全であるとする。ここで, 説明が必要になるのは, 語彙範疇と機能投射の関係である。まず, Cardinaletti (2007: 96) における機能投射 (die funktionalen Projektionen) とは, 語彙範疇と対をなす概念である機能範疇の投射を指す。簡単な樹形図で示すと (27) のように表わされる。

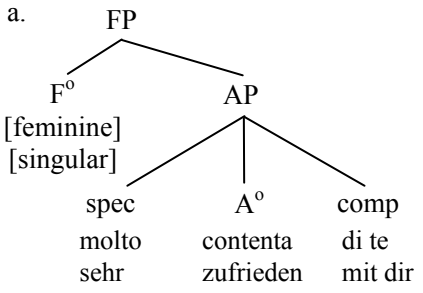
[12] 接語は, 例えばフランス語の *tu* のように, 他の語彙 (動詞) に依存する。

(27)

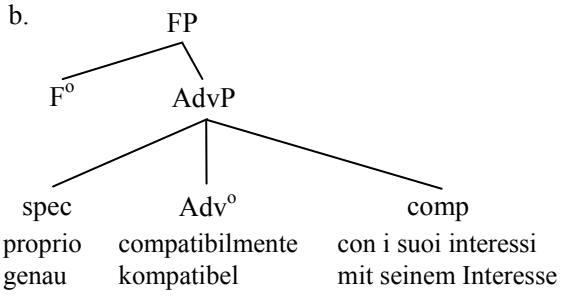


このことをふまえ, Cardinaletti（2007: 92）における説明を引用すると，例えば，イタリア語の形容詞 *contenta ,zufrieden'*（満足している）は，指定部 *molto ,sehr'*（とても）と前置詞補部 *di te ,mit dir'*（君に）と結びつく。さらに，この形容詞は［feminine］素性と［singular］素性によって特徴づけられる（=（28a））。Cardinaletti（2007）は，同様に，この構造は副詞にも当てはまるとする（=（28b））。

(28) a.



b.

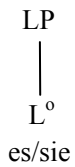


（cf. Cardinaletti 2007: 92（b.の語釈は筒井による））

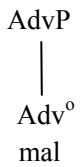
このように捉えたうえで，先の弱代名詞に関する分析をふまえた場合，ドイツ語の弱代名詞 *es*/*sie* は，（29a）のような構造として仮定され，この際，弱代名詞は，語彙的な範疇として

句を形成するものの，本来，語彙範疇と密接に結びつくはずの機能投射には欠けるという点で，„defiziente‘ Kategorien“（「不完全な」範疇）とみなされる（cf. Cardinaletti 2007）。

(29) a



b.



そして，Cardinaletti（2007）は，弱代名詞に関するこの分析を心態詞に応用する。つまり，心態詞も「不完全な最大範疇」として扱い，機能投射を欠く非常に特殊な句として投射する要素であり，範疇としては，先に述べたいわば「弱い副詞」ということになる（= (29b)）。

「ゼロ範疇」とみなすか「最大範疇」とみなすか，さらに„functional“という用語を「完全な句を投射する」という意味で使うか，語彙範疇と対をなす「機能範疇」の意味で使用するかには違いがあるものの，Brandt et al.（1999）と Cardinaletti（2007）の共通点は，心態詞の性質に「不完全な」という制限を加えることに見られる。他，このような分析は，心態詞 *denn/dn*（colloquial Viennese German, which is assumed to be a reduced version of Standard German *denn*）（cf. Grosz 2005: 12）について記述した Grosz（2005）でも提案されるものであるが，「弱い副詞」という範疇を挙げたとして，当然，独立した「品詞」として定めることには抵抗があり，心態詞の統語的な分析として完全に受け入れるのは早計であると思われる。類似した構造を提案する Coniglio（2005: 109）でも，「弱い要素」として扱うべきか否かは問題視されている（cf. Cardinaletti 2007: Fn. 12）。しかし，「機能投射の欠如」という捉え方は非常に興味深い。Cardinaletti（2007）が述べるとおり，機能投射の欠如によって，心態詞は統語的に独立することができず，文の機能的な主要部に依存しなければならないことにつながる。さらに，Cardinaletti（2007: 97）は，このような分析が，心態詞と，他の範疇（特に副詞）に属するその同音異義語（Homophon）との意味的な関係をも説明しうることを示唆している（Weydt（1969）の考察に起因する）。そこでは，„[...] kann die Abwesenheit der funktionalen Struktur in [(29)] als Auswirkung einer Regel angesehen werden, die funktionale Projektionen tilgt (Minimise structure = Erase structure) und in der Syntax operiert.“（［(29)］に見られる機能的な構造の欠如はある規則の効果であるとみなされ，その規則とは，機能投射を削除し（最小構造 = 削除構造），統語論で扱うものである）（ibid.）と述べられる。例えば副詞としての *ruhig* は，心態詞としての *ruhig* と根本的に同じ語彙的要素として扱ったうえで，後者は前者から機能

投射の削除によって導かれるものであるとする。この考察は，仮説の域を出ないものの，例えば(30)に示すとおり，通例，語彙的要素を担う同音異義の副詞と，そこから派生した心態詞が共起しないという事実によって裏付けられうるものである。

(30) (Mach dir keine Sorgen.) *Er hat es ihm schon schon gesagt.（Cardinaletti 2007: 98）

心態詞の統語的な分析として，ここでは以上の紹介に留める。そして，先に述べたとおり，本研究では，心態詞を最大範疇として扱ったうえで，心態詞 *mal* の統語的な分析として，第5章で筆者なりの見解を示すこととする。その際, Cardinaletti（2007）における先の仮説は，筆者による仮説と類似したものであり（4.5.2.1.の脚注80および5.2.2.を参照），心態詞 *mal* に限らず，今後の心態詞研究における有力な展望を提供するものである。

さて, „Erststellenfähigkeit“（文頭配置可能性）に基づく Helbig（1994[3]: 36）の見解に従えば，心態詞（Abtönungspartikeln）は２つのグループに大別される:

1. 中心的な下位クラス（solche, die im Zentrum der Subklasse stehen）:
   文頭に生起せず（nicht erststellenfähig）（文頭に置かれる場合は他の品詞である），大抵一音節で，他の品詞では同音異義語として現れる。「狭義における心態詞」あるいは「純粋な心態詞」（echte Abtönungspartikeln）とも呼ばれる。
   例: *aber*, *auch*, *bloß*, *denn*, *doch*, *eben*, *einfach*, *etwa*, *halt*, *ja*, *mal*, *nur*, *schon*, *vielleicht*
2. 周辺的な下位クラス（solche, die an der Peripherie der Subklasse stehen）:
   文頭にも生起し（erststellenfähig）（その際，他の品詞としてではなく，心態詞として同じ機能を持つ），大抵一音節ではなく，他の品詞で同音異義語として現れることもない。「広義における心態詞」あるいは「濃淡をつけることのできる不変化詞」（abtönungsfähige Partikeln）とも呼ばれる。
   例: *schließlich*, *immerhin*, *jedenfalls*, *überhaupt*, *allerdings*, *eigentlich*

本研究で扱う *mal* は文頭に生起しない。従って，上記の例にも挙げられているとおり，前者のクラスに属する。そして，前者のクラスには，もう１つ重要な基準がある。「他の品詞では同音異義語として現れる」という点である。Hentschel/Weydt（2003: 311）でも, „Die Abtönungspartikeln sind stets – und das unterscheidet diese Klasse von anderen Wortarten – Sonderverwendungen von Wörtern, die primär andere Funktionen haben.“（心態詞は常に，心態詞としての機能以外の機能を第一義的に持つ語の特別な用法のことであり，このことによって，心態詞というクラス

は他の品詞から区別される）(Hentschel/Weydt 2003 の邦訳: 293ff.) と述べられている。**「(17c) 心態詞には，別にアクセントを置く音形，あるいは異なる統語構造において，少なくとももう１つ別の意味を表す音形があり，その音形は異なる機能をもったクラスに属する」**という必要条件は，この流れで導かれたものである。この特徴に関しては, 1.5.2.の（19）に列挙した用例で，詳細な記述に代える。

次に，**「(17d) 心態詞は，質問の応答にならない」**という特徴を検討する。この特徴は，「心態詞は応答詞でない」，つまり「文性をもたない」ということを意味する。ここで，「応答詞」という品詞に関して少しだけ述べておく。例えば井口 (2000: 146) では，「応答詞（Antwortpartikel）とはそれ一語で文となる副詞である。[…]『文相当詞』(Satzäquivalent) と呼ぶ文法もあるが，それにはふつう『間投詞』(Interjektion) や『感嘆詞』(Ausrufewort) と呼ばれる ah, pfui, pst なども含まれることになる。ここではそれらは除外するために応答詞と呼ぶ」とある。井口（2000）によると，疑問，申し出，陳述，命令，呼びかけに対する答えとして, *ja*, *nein*, *doch*, *vielleicht*, *wahrscheinlich*, *leider*, *bitte*, *danke*, *wirklich?*, *eben*, *jawohl*, *okay*, *wie bitte?*などが応答詞に数えられる。また, Thurmair（1989: 147）では，„'Antwortpartikel' bezeichnet eine spezielle Gruppe der Gliederungspartikeln, nämlich *ja*, *nein*, *doch*.“（「応答詞」とは，談話分節としての不変化詞の特殊なグループを指す。すなわち, *ja*, *nein*, *doch* である）と述べられている。Meibauer（1994: 42ff.）では, Thurmair（1989）と異なり，応答詞と談話分節詞（Gliederungspartikel）は区別される。応答詞として考察されるものには, (a)（文に依存せず）孤立して（isoliert）現れ，(b) 発話に対する応答として理解されうる語が相当する。その結果, *ja*, *nein*, *doch*, *eben*, *genau*, *schon* が応答詞として挙げられ，このうち, *ja*, *doch*, *eben*, *schon* は心態詞と対をなすもの（Gegenstücke）とされる[13]。それに対し，談話分節詞は，文の前（前域の前），文の後（後域の後），あるいは文中における挿入句として現れる不変化詞と解され，それらは統語的かつイントネーションの観点において文の中域には生起しない。そのうえで，応答詞と異なり孤立して現れることもないとされる。

さらに，この（17d）の特徴は，„Modalpartikeln sind nicht erfragbar.“（心態詞は，質問の対象にならない）(Meibauer 1994: 29) (cf. also Werner 2002: 70) という特徴と密接に関係する。という

[13] この立場では，下記の例文におけるような *schon* の用法は，それが応答文の「省略」(elliptisch) と解される限りにおいて問題である。
A: Hilft er dir nicht im Haushalt?（彼は家事の手伝いをしてくれないの？）
B: *Schon*. Aber mit was für einem Gesicht.（してくれるよ。でも嫌そうにだけど）
とりわけ上記 (a), (b) いずれの観点にも該当する *sicherlich*（必ず），*vermutlich*（たぶん）などの文副詞（Satzadverbien）との区別において困難をきたすためである（cf. Meibauer 1994: 42ff.）。

のは，心態詞が応答詞として機能しない点は，下記(31)が示すような，決定疑問文(Entscheidungsfragen)(*yes/no*-questions)(=(31a))のみならず，補足疑問文(W-Fragen)(=(31b))に対する答えとしても成立しないことを含んでいる。

(31) Fritz hat halt keine Antwort gewußt.

（ともかく Fritz は答えを知らなかったのだから仕方がない）

a. A: Hat Fritz eine Antwort gewußt? B: *Halt.

（Fritz は答えを知らなかったのですか）

b. A: Wie hat Fritz keine Antwort gewußt? B: *Halt.

（どのように Fritz は答えを知らなかったのですか） (Meibauer 1994: 30)

このことは，同じく不変化詞の下位クラスである話法詞(Modalwörter)にも類似した観点で，話法詞も補足疑問文に対する応答として機能せず，また，決定疑問文と共起して現れることもほとんどない(=(32a, b))(cf. 井口 2000: 93ff.)。

(32) a. A: Wie ist er gekommen?（彼はどういうふうに来たの？）

B: **Wahrscheinlich*.［話法詞］

b. *Kommt er *wahrscheinlich*/ *leider*?

しかし，決定疑問文に対する応答であれば，話法詞は問題がない(=(33))。この点は，心態詞と明確に区別されるものであり，井口(2000: 92)によれば，「話法詞は文性をもつ」ことを意味する[14]。

(33) A: Kommt er morgen?

B: *Vielleicht* / *Leider*.［話法詞］(ひょっとしたらね／残念ながらね)(井口 2000: 92)

続いて，(15c)で挙げた「心態詞は，統語的に随意的であり，削除しても文の文法性に支障をきたさない」という特徴にも触れておく。本研究では，この特徴も必要条件とみなさない。

[14] とはいえ，あらゆる話法詞が文性をもつわけではなく，Engel(1988: 763)によれば，次のような語は，単独で決定疑問文の応答にならないとされる：*bedauerlicherweise*, *glücklicherweise*, *gottlob*, *eigentlich*, *erstaunlicherweise*, *schätzungsweise*, *wohl* usw.

というのも，この「削除可能性」(Weglassbarkeit)あるいは「随意性」(Fakultativität)(Meibauer 1994: 31)に関しては，研究者の間で異なる見解が見られるためである。例えば，Thurmair (1989: 24)によれば，文形式(Satztypen)によっては，統語的な理由から，心態詞が義務的である(obligatorisch)とされ，(34a)のような動詞第一位平叙文(V-1-Aussagesätzen)における *doch* が削除された場合，その文は非文であるとする(31a')。従って, Thurmair(1989: 25)では，「心態詞は，決して完全に随意的な要素ではない」ことが示唆されている。

(34) a. *Dann kam der Ölschock. Die Krise traf Marseille extrem schmerzhaft, ist* <u>*doch*</u> *der riesige Hafen zu achtzig Prozent vom Ölgeschäft abhängig.* (ZEIT)
(その後オイルショックが起こった。その危機はマルセイユを壊滅的に直撃した。<u>なんといっても</u>, 80 パーセントに及ぶ巨大な港がオイルビジネスに左右されているのだから)
a'. *... traf schmerzhaft. *Ist der riesige Hafen zu achtzig Prozent vom Ölgeschäft abhängig.* (Thurmair 1989: 24)

また, Kwon (2005)でも，例えば(35)のような *wo*-動詞後置平叙文(*wo*-V-L-Aussagesätzen)に関して同様の指摘がなされる。

(35) Ich war richtig eifersüchtig; immer brachte er ihr etwas mit. Wo ich <u>doch</u> immer so sparen *mußte.* (TAZ, 30.11.1991, 44) (Kwon 2005: 20)
(私は本当に嫉妬した; いつも，彼は彼女に何かを買ってあげた。私はいつも節約しなければいけなかった<u>というのに</u>)

他，下記(36a, b)のような動詞第一位願望文(V-1-Wünschsätze)，(36c)のような *w*-動詞後置願望文(*w*-V-L-Wunschsätze)，(36d)のような *ob*-動詞後置文(ob-V-L-Sätze)，(36e)のような *dass*-動詞後置文(*dass*-V-L-Sätze)において，それぞれの心態詞がほぼ義務的である(nahezu/fast obligatorisch)，あるいは前提とされる(cf. Thurmair 1989: 24ff., Kwon 2005: 20)。Kwon(2005: 20)は，これらの文に心態詞がない場合，発話として独立的に用いることはできないと指摘し，これらの文タイプにとって，心態詞は文の構成要素の 1 つ(ein konstitutives Element)であるとみなす。

(36) a. *Wären Sie sich nur/bloß/doch nicht begegnet!*（Thurmair 1989: 24）

（あなた方が出会いさえしなければ！）

b. *Hättest du nur/bloß deinen Mund gehalten!*（ibid.）（お前が黙ってさえいたら!）

c. *Wenn er doch bloß gefragt hätte!*（TAZ, 18.06.1997, 15）（Kwon 2005: 20）

（もし彼が尋ねてさえいたら!）

d. Ob das *wohl* gut geht?（TAZ, 18.06.1997, 25）（ibid.）（うまくいくだろうか）

e. *Und sein Eheweib Nechama stöhnt: „Daß du doch nie das Licht der Welt erblickt hättest, Peiniger!"*（TAZ, 30.11.1993, 18）（ibid.）

（そして，彼の妻 Nechama はうめき声をあげた:「あんたが生まれてきさえしなければ，この拷問者め」）

それに対し, Meibauer（1994: 31）は，（37a）や（37b）の例を挙げて，「決定補足文（E-Komplementierersätze）や疑問補足文（W-Komplementierersätze）では，心態詞が義務的である」という主張は維持されないことを示している。また，願望文（Optativsätze）でも,（37c）のように，文頭に間投詞 *ach* を置くことで，心態詞は削除可能であるとする。

(37) a. Ob er jetzt durchdreht?（彼は今，怒っているのだろうか）

b. Wozu er das macht?（何のために，彼はそれをするのか）

c. Ach, wäre ich Millionär!/Ach, wenn ich Millionär wäre!（cf. Wäre ich doch/nur Millionär!）

（ああ,（もし）私が富豪であればなあ）　　（cf. 私が富豪でさえあれば）

本節の最後として，心態詞の意味論的特徴の説明に移る。まず，**「(17e) 心態詞は，文全体を作用域にとる」**。Helbig（1994[3]: 34）で，„Die Abtönungspartikeln beziehen sich nicht auf einzelne Satzglieder, sondern auf das Prädikat und damit auf den ganzen Satz."（心態詞は，個々の文成分ではなく，述語さらには文全体を作用域にとる）と述べられるとおり，心態詞は文全体の修飾要素であるため，文の個別の修飾要素にはなりえない。例えば,（38a-d）において，*doch* は，いずれも同じ作用域をもつ（=（39））。

(38) a. Der Vater hat *doch* seinem Sohn das Fahrrad zu Weihnachten geschenkt.

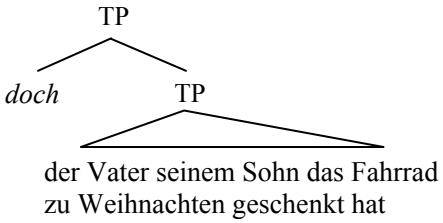
（父親は息子に自転車をクリスマスプレゼントとして贈った）

b. Der Vater hat seinem Sohn *doch* das Fahrrad zu Weihnachten geschenkt.

c. Der Vater hat seinem Sohn das Fahrrad *doch* zu Weihnachten geschenkt.

d. Der Vater hat seinem Sohn das Fahrrad zu Weihnachten *doch* geschenkt.

(39)



しかし，(38a-d)において「焦点」(Fokus)は異なる。つまり，話し手が聞き手の注意を引きつけ，伝達したい内容に違いが生まれる。(38a)では，「(例えば)[彼の娘ではなく]彼の息子に」ということが伝達の中心となり，(38b)では，「(例えば)[バイクではなく]その自転車を」，(38c)では，「(例えば)[誕生日にではなく]クリスマスに」，(38d)では，「(例えば)[貸したのではなく]贈った」といったことが，それぞれに含意される。また，(40a)のように，例えば *Fahrrad*(自転車)が不定冠詞で現れている場合，*ein Fahrrad* が聞き手にとって未知の情報(= Rhema)であることから，表層で心態詞 *doch* が不定名詞の後ろに置かれることはない。無冠詞の名詞 *Geld*(お金)に関しても同様の指摘がなされている(=(40b))(cf. 井口 2000: 124)。

(40) a. *Der Vater hat seinem Sohn ein Fahrrad *doch* geschenkt.

b. *Der Vater hat seinem Sohn Geld *doch* geschenkt.

作用域に関して，心態詞と話法詞との区別(Abgrenzung)は困難である。上記で挙げた(39)の統語構造は，あくまで「文全体を作用域にとる」ことを簡単に示したものにすぎず，同じく，文全体を作用域にとる話法詞も，時制句TPの付加位置に生起すると考えられる(後述するが，心態詞は話法詞よりもさらに広いスコープをとる)。心態詞 *mal* の構造に関しては，意

味論的な考察との関連から第 4 章と第 5 章で詳しく扱う。

また，心態詞の生成位置に関して，(15h) では，「心態詞はテーマ (Thema) とレーマ (Rhema) の境界に現れる」ことが言及されていた[15]。確かに，大抵心態詞は文の中域に生起し，表層で常にレーマの前に置かれると考えられている (cf. Thurmair 1989: 29ff.; Helbig 1994[3]: 33; Meibauer 1994: 32)。Hentschel (1983: 46) では，(41) の例が挙げられ，例えば *ja* や *doch* のような心態詞は，[ ] で示された全ての箇所に生起可能であるとされる (上記 (38) も参照)。

(41) *Frau Neumann hat [ ] gestern [ ] ihrer Tochter [ ] das versprochene Fahrrad [ ] geschenkt.*

しかし，下記 (42a, b) に示すとおり，表層でレーマを担う要素が前域にある場合や定動詞がレーマでありうる場合には，心態詞はレーマの後に置かれなければならないことも指摘されている (cf. Meibauer 1994: 32)。このことから，この特徴に関しても，本研究における必要条件から除外した。

(42) a. A: Wer hat sich einen Schlitten gekauft? (そりを買ったのは誰？)
B: EGON hat sich doch einen Schlitten gekauft. (Egon が，そりを買ったんだよ)
b. A: Nastassja will einen Walkman. (Nastassja はウォークマンが欲しい)
B: Und was macht ihre Mutter? (それで彼女のお母さんはどうするの？)
A: Sie KAUFT eben den Walkman. (ibid.)
(だからこそ，彼女はウォークマンを買うんだよ)

さらに，(15i) や (16d) で，「心態詞は否定の対象にならない」ことも挙げられていた。つまり，(43a-d) に示すとおり，心態詞は否定辞 *nicht* の後に置かれない (= *nicht* の前に置かれる)。

[15] „Mit Thema und Rhema sollen hier bekannte vs. neue Elemente bezeichnet werden.“ (ここでは，テーマとレーマは，既知の要素 vs. 新規の要素を表すものとする) (Thurmair 1989: 29)。

(43) a. *Das ist *nicht* doch Schaumschlägerei.（Gornik-Gerhardt 1981: 34）

b. *Das ist *nicht* doch wahr.（Helbig 1994[3]: 34）

c. *Fritz hat *nicht* die Antwort halt gewußt.

d. *Fritz hat die Antwort *nicht* halt gewußt.（Meibauer 1994: 30）

（斜体および下線は筒井による）

他にも，*keineswegs*，*kaum* といった否定語／否定詞（Negationspartikel），あるいは *möglicherweise* や *wahrscheinlich* などの話法詞と共起する場合には，心態詞は必ずそれらの語の前に置かれるという制限もある（話法詞との共起では例外も見られる）（cf. Bublitz 1978: 36ff.; Franck 1980: 20）[16]。後者の制限に関しては，Grosz（2005）や Coniglio（2007）でも考察される対象である。「心態詞は否定の対象にならない」というこの特徴は，心態詞が否定の作用域に入らないことを指している。というのも，否定が文の真理条件に関わる命題のウチの要素であり，心態詞は，命題全体に対してそのソトから係るものだからである。従って本研究では，この特徴が，「心態詞は文全体を作用域にとる」という必要条件に含まれるものとみなす。ちなみに，この「否定の対象にならない」という特徴は，通説として，話法詞にも当てはまる特徴であるとされる。話法詞が否定の対象になるとすれば，(44) のような引用されたケースであるが，このようなケースは，本来例外として扱われる（cf. 井口 2000: 93）。ただし，心態詞の場合には，このような例外すら許容されないという違いがある。

(44) Frau Fischer und Herr Blunck haben vermutlich ein Verhältnis. ― Die haben nicht *vermutlich* ein Verhältnis, sondern ganz *sicher*. Sie hat [es] mir nämlich erzählt.

（Fischer さんと Blunck 氏はたぶん関係があるわ。―「たぶん」じゃなくて「かなり確実に」だね。だって彼女が僕にそう言ったんだから）（井口 2000: 93）

[16] 井口（2000: 126）では，„Du rauchst doch nicht *etwa*? “（君はまさかたばこは吸わないよね）といった，心態詞が否定語の後に置かれる例を示しているが，「ここでの nicht は否定機能ではなく，心態機能を持っている」（ibid.）としている。Thurmair（1989:282）でも，*doch nicht etwa* という心態詞としての結合が挙げられている。

2.3. 意味論的・語用論的特徴

1.6.で述べたとおり，**「(17f) 心態詞は，文の真理条件に関与しない」**という必要条件は，本研究では，**「(17h) 心態詞は，命題に対する話し手の心的態度を含意する」**という必要条件との関連において次章で詳しく扱う。この際，(17h) の特徴は，**「(17g) 心態詞は，発話行為タイプと文タイプに関して特定の制限がある」**という特徴と密接に関係する。そのため，ここではまず，この (17g) について述べる。

心態詞が，特定の文タイプや発話行為タイプと結びつくか否かは，今日の心態詞研究において，最も重要な議論の１つに数えられる。Helbig（1994[3]: 34ff.）によると，特定の文タイプにおける現れ方，ないしは特定の発話行為表現に対する現れに従って，心態詞は，機能に基づく分類がなされる。Hartmann（1975: 235ff.）によって試みられたその分類の基準は，„Es ist PARTIKEL der Fall, daß SATZ“という書き換えが可能か否かにある（cf. Helbig 1994[3]: 34ff.）。この基準を満たすものに，例えば *doch*, *eben*, *halt*, *ja*, *immerhin*, *schon*, *wohl* などがあり，満たさないものに，例えば *aber*, *bloß*, *denn*, *etwa*, *mal*, *nur* などがあるとされる。また，この２つのグループは，他の特性（Eigenschaft）によっても互いに区別される。前者は，主に平叙文において現れ，主張の発話行為で用いられる。その際，大抵は話し手の交替をともなわない。それに対し，後者は，主に疑問文や命令文で現れ，相応の発話行為を実行する。そのうち，一部は，話者交替をともなう。しかし，この分類は排他的なものではなく，例えば，*doch* の場合，異なる機能を担うことで，平叙文，疑問文，命令文の３つの文タイプに現れる（cf. Helbig 1994[3]: 35）。そして，ここで問題となるのは，「文タイプ／文形式」（Satztyp/Satzform）および「発話行為タイプ」（Illokutionstyp）という概念自体である。従って，次節でこの概念について検討する。

2.3.1. 文の叙法（Satzmodus）と心態詞の生起制限

本節では，上述した「文タイプ／文形式」および「発話行為タイプ」という概念について詳しく考察する。Bublitz（1978: 43）では，形式的・文法的な文タイプ（Satztyp）は平叙文（Aussagesatz），要求文（Aufforderungssatz），決定疑問文（Entscheidungsfragesatz），補足疑問文（Ergänzungsfragesatz）の４つの基本タイプ（Grundtypen）に分けられる。また，例えば Meibauer

(2002: 238ff.)は, Altmann(1987; 1993)に依拠して，ドイツ語の文タイプ(Satztyp)を５つに大別している: 平叙文(Aussagesätze/Deklarativsätze)，疑問文(Fragesätze/Interrogativsätze)，命令文(Imperativsätze)，願望文(Wunschsätze)，感嘆文(Exklamativsätze)。このうち，平叙文，疑問文，命令文が基本タイプとして認められる。

「文タイプ」(Satztyp)という概念は，しばしば文の叙法／話法(Satzmodus: 伝統的な文法では Satzart とも呼ばれる)との関連で扱われる。伝統的な文法に従えば，文の叙法には，平叙文(Aussagesatz)，疑問文(Fragesatz)，要求文(Aufforderungssatz)，感嘆文(Ausrufesatz)が挙げられる(cf. Grewendorf/Zaefferer 1991: 274)[17]。そして，文の叙法という概念は，統語的な叙法(syntaktischer Modus)である「形式タイプ」(Formtyp)と，意味的な叙法(semantischer Modus)である「機能タイプ」(Funktionstyp)の相関を表すもので，上記で述べた「文タイプ」というのは「形式タイプ」を指す。それに対して，「機能タイプ」は，おおよそ「発話行為タイプ」(Illokutionstyp)に相当する。標準的な発話行為タイプには，「主張」(Behauptung)，「質問」(Frage)，「依頼」(Bitte)などがあり，これらは，文の叙法と１対１の関係にあるようにも見えるが，発話行為タイプには，他にも「約束」(Versprechen)，「脅迫」(Drohung)，「警告」(Warnung)など文の叙法と直接対応しないものが属する。

文タイプにおける心態詞の生起制限(Ditribution)に関しては，ここでは, Thurmair (1989)による分類を挙げておく。Thurmair (1989: 42)も，文の叙法の２つのタイプに言及し，これら２つのタイプの区別が不透明であると指摘する。そのうえで，平叙文(Aussagesatz)，疑問文(Fragesatz)，要求文(Aufforderungssatz)を基本タイプとし，最終的に７つの文タイプ(Formtyp)(平叙文(Aussagesatz)，決定疑問文(Entscheidungsfragesatz)，補足疑問文(*W*-Fragesatz)，命令文(Imperativsatz)，願望文(Wunschsatz)，(文-)感嘆文((Satz-)Exklamativsatz)[18]，補足感嘆文(*W*-Exklamativsatz))を設定して，これらの文タイプにおける心態詞の生起制限を(45)の表でま

[17] 文献によっては，文の叙法に願望文(Wunschsatz/Desiderativ)を加えるものもある(cf. Duden 2006[7]: 902)。Scholz (1991)では，動詞第一位願望文(Verberst-Wunschsatz)，*wenn*-動詞後置願望文(*wenn*-Verbletzt-Wunschsatz)，*daß*-動詞後置願望文(*daß*-Verbletzt-Wunschsatz)を，'Wunsch-satzmodus'(願望の文の叙法)という１つの範疇にまとめ，これらの文によって表された機能(Funktion)あるいは態度(Einstellung)を，'Wunsch'(願望)あるいは'Wunscheinstellung'(願望の態度)とする考察が詳細に展開されている。

[18] 「(文-)感嘆文」とは, „(Satz-)Exklamativsatz“を直訳したものである。„Du hast (vielleicht) einen tollen Pelzmantel!“ (君は(なんて)素敵な皮のコートを持っているんだ！)のような文を指す。„Wie SCHNELL vergeht doch die Zeit!“(時が過ぎるのはなんて早いんだ！)のような„*W*-Exklamativsatz“(補足感歎文)と対比した名称である。

とめている。

(45)　文タイプにおける心態詞の生起制限（Distribution）（Thurmair 1989: 49）

	Aussage-satz	Entschei-dungs-fragesatz	*w*-Frage-satz	Impera-tivsatz	Wunsch-satz	(Satz-)Ex-klamativ-satz	*w*-Exklama-tivsatz
aber						+	*[1]
auch	+	+	+	+			+
bloß			+	+	+		+
denn		+	+				
doch	+		+	+	+		+
eben	+			+			
eigentlich		+	+				
einfach	+	+		+			
etwa		+					
halt	+			+			
ja	+						
JA[19]				+			
mal	+	+		+			
mir	+			+		+	
nur			+	+	+		+
ruhig	+			+			
schon	+		+	+			
sowieso/eh	+	*[2]					
vielleicht		+				+	
wohl	+	+	+				

*[1] Heute kaum mehr gebräuchlich.（今日，もはや使われない）

*[2] Seltene Variante; wird hier nicht weiter betrachtet.（稀；考察を控える）

「文の叙法」（Satzmodus）という概念は，多くの問題を抱えている。詳述は控えるが，例えば Grewendorf/Zaefferer（1991: 274ff.）では，(a) *Die Vermischung von Form und Funktion*（形式と機能の混同），(b) *Die unscharfen Grenzen des Formtypbegriffs*（形式タイプという概念の不明瞭な境界），(c) *Die Unklarheit des Funktionstypbegriffs*（機能タイプという概念の曖昧性），(d) *Mehrdeutigkeit in beiden Richtungen*（双方向（文の叙法と発話行為タイプ）における多義性）といった問題が挙げられている。このような文タイプ，文の叙法，発話行為の相関に関わる

[19] 大文字表記は，強勢が置かれた形を指す。

考察は, Brandt/Reis/Rosengren/Zimmermann（1992）で詳細に行われており，彼女らは，(46)のような文の叙法のモデルを呈している。このモデルの本質は，文の叙法という概念を，文と発話行為の仲介役（Vermittlungsinstanz）として捉えることにある（cf. ibid.: 2)。

(46) - Es gibt drei grundlegende Satztypen.（３つの基本的な文タイプがある）
- Jeder Satz hat einen Satzmodus.（全ての文に，文の叙法が割り当てられる）
- Der Satzmodus ist einstellungsfrei und die Sprechereinstellung tritt－wenn überhaupt－erst auf der illokutiven Ebene auf.
（文の叙法には，話し手の態度は反映されず，話し手の態度があるとすれば，それは発話行為のレベルで初めて現れる）

2.3.2. 心態詞の機能

2.3.1.をふまえて，心態詞と文の叙法あるいは発話行為との関連をみていく。Weydt（1969）は，言語を„Darstellungsebene“（記述的なレベル）と„Intentionsebene“（意図的なレベル）に大別し，心態詞は，後者のレベルで扱われるとしている。このことは，心態詞が非命題的なレベル，あるいはコミュニケーションのレベルで扱われ，それによって，心態詞の意味ないしは機能が，文の意味に属さないことを示唆している（cf. Kwon 2005: 22)。しかし，そのレベルで，心態詞が実際にどのような役割を担っているか，という疑問に関しては，これまで異なる見解が示されている。Kwon（2005: 22）によれば，心態詞の機能に関する議論は，おおよそ３つの異なる方向に分かれる:（1）Illokutionstypindikator oder -modifikator（発話行為タイプ標識あるいは修飾語としての機能），（2）metapragmatische Instruktion（メタ語用論的指令としての機能），（3）Einstellungsausdrücke（心的態度表明としての機能）。次に，これら３つの機能について見ていくことにする。

2.3.2.1. 発話行為タイプ指標／発話行為タイプ修飾語としての機能

Austin（1962）によって提唱され，後に Searle（1969）でさらに発展した発話行為理論（Speech Act Theory）では，主に３つの基本行為が導入される: 発語行為（locutionary act）（独: Äußerungsakt），命題行為（propositional act）（独: Propositionaler Akt），発語内行為（illocutionary act）（独: Illokutionsakt）。発語行為は，意味を持つ単語や文を音声として口から発することと

解釈される。命題行為は指示（Referenz）と述定（Prädikation）から成り，その命題の発語が，相互行為機能として，話し手の発語内的意図をもつとき，その行為は，発語内行為としてみなされる。Austin（1962）では，他に発語媒介行為（perlocutionary act）という行為も考慮され，これは，遂行動詞によって表される行為およびその結果を指す。発話行為理論の１つの特徴として，Searle（1969）が発語内行為の論理形式を *F* (p)（発語内の力（illocutionary force）が命題に対して作用する働きを表した関数）と示すとおり，命題を発語内行為から切り離して捉える点が挙げられる。「文はその意味内容を示す『命題』（proposition）部分と，遂行動詞，イントネーション，強制，文形式，語順，動詞の法性（modality）等によって表わされる発語内力指標（[illocutionary force indicating device] IFID）からなる」（高原 他 2002: 54）。

Wunderlich（1975[2]: 18）は，不変化詞を„illokutive Indikatoren“（発話行為標識）と呼び，その機能を「通常は伝達的な使用可能性の点で多義的である文を一義化する」ことに求めた。後に，Wunderlich（1976: 137）は，„sie [= die Partikelwörter] entfalten ihre Funktionen immer nur zusammen mit anderen Teilen oder formalen Eigenschaften des Satzes.“（不変化詞は文の他の部分あるいは形式的特性と結びついた場合に限り機能を発揮する）ことに基づき，„illokutive Indikatoren“と呼ぶことを放棄した。確かに，発話行為標識は，例えば遂行動詞 *versprechen*（約束する）のように，独自で発語内行為を示す手段であるが，心態詞自体にこの機能があるというわけではない。しかしながら，„[...], obwohl es richtig ist, daß sie [= die Partikelwörter] bei einem undifferenzierten oder mehrdeutigen grammatischen Modus zur Vereindeutigung des ausgedrückten illokutiven Typs beitragen“（[...]不変化詞が，細分化されていないあるいは多義的な文法上の叙法において，発話された発語内行為タイプの一義化に貢献する点は正しいにもかかわらず）（ibid.）と「多義的な文／発話行為の一義化」に関しては強調している。

(47) a. Kannst du *mal* die Dose öffnen?（Wunderlich 1976）（その缶を開けてくれる？）
b. Kannst du *wirklich* die Dose öffnen?（ibid.）（その缶を本当に開けられるの？）
c. Kannst du *mal* den Tresor öffnen?（Franck 1980）（その金庫を開けてくれる？）
d. Kannst du *eigentlich* den Tresor öffnen?（ibid.）（その金庫を本当に開けられるの？）
e. Hast du *mal* 'n Stift?（Hentschel 1991）（ペンを貸してくれる？）

Wunderlich（1976: 137）によれば，例えば心態詞 *mal* を伴った（47a）の発話は，缶を開けるこ

とができるか否かを尋ねているのではない。それに対し,(47b)では,聞き手の能力そのものに対する疑問を投げかけている。Franck(1980: 249)でも,(47c)と(47d)を比較した場合,やはり同じ決定疑問文であっても,*mal* を付与した(47c)は,それが「要求」であるということを明示しているのに対し,心態詞 *eigentlich* が付与された(47d)では,それが純粋な質問であり,「要求」の読みは遮断されると述べられている。近年では,Hentschel(1991: 143ff.)の(47e)が好例である。「この場合,*mal* の使用は,疑問を紛れもなく要求(request)に変え,この不変化詞がない場合,その文は,率直に質問と解釈されうる」(ibid.)とされる。また,*mal* がない場合の(47e)の文„Hast du 'n Stift?"に関して,その顕著な状況に電話での会話が挙げられる。その場合,話し手は,聞き手に何かメモできるものを持っているかどうかを質問しているのであり,裏を返せば,電話での会話において,(47e)の発話は不適切になることを意味している。Wunderlich(1975)を踏襲する Helbig(1977)でも,心態詞を„illokutive Indikatoren"(発話行為標識)としたうえで,心態詞の意味論的な意味は薄く,心態詞には意図された話し手の心的態度をより明確にする機能があるとされる。例えば,(48a)の陳述は,聞き手に対する主張(Feststellung),助言(Ratschlag),許可(Erlaubnis)でありうるのに対して,(48b)では,弱い要求(schwache Aufforderung),(48c)では助言,(48d)では助言あるいは聞き手の願望に対する賛同(Zustimmug zu einem Wunsch des Sprechpartners)を表明する。

(48) a. Du kannst das Fenster schließen.(Helbig 1977: 34)
(直訳: 君はその窓を閉めることができる)
b. Du kannst *mal* das Fenster schließen.(ibid.)(窓を閉めて)
c. Du kannst *ja* das Fenster schließen.(ibid.)(窓を閉めればいいよ)
d. Du kannst *doch* das Fenster schließen.(ibid.)(窓を閉めればいいよ)

しかし,Kwon(2005: 23)は,心態詞と発話行為タイプが1対1の関係にない点に注目して,心態詞の「発話行為タイプ標識」(Illokutionstypindikatoren)としての機能に疑問を投げかけている。Helbig 自身も述べているとおり,(48d)の例において,*doch* は,助言あるいは賛同といった異なる発話行為タイプを示すとされ,さらに,場合によっては非難(Vorwurf)として解釈される可能性もあることが指摘される。例えば,「確認」を表すと考えられる心態詞 *doch* の用法„Er arbeitet doch fleißig. *(nicht wahr?)*"(彼は勤勉に働いているね。(そうじゃない?))も,後続する文脈を変えることによって,「想起」を表す *doch* として解釈されうる:

„Er arbeitet doch fleißig. *(Ich habe es ganz vergessen.)*“（彼は勤勉に働いているんだった。（私は，そのことをすっかり忘れてしまっていた））（cf. 吉田 1987: 194）。ただし, *mal* の場合，心態詞として使用されている限り，潜在的に「要求」を表す発話を，「要求」の解釈に一義化する点で疑いの余地はない。

また, Gornik-Gerhardt（1981）, Jacobs（1991）, Lindner（1991）, Ickler（1994）では，心態詞は，「発話行為タイプを修飾する語」（Illokutionstypmodifikatoren）として定義される（Kwon 2005）。彼らの見解は，心態詞は，それ自体で独自に文の発話行為を定めることはなく，主に文の叙法に依存しつつ，発話行為タイプを修飾する働きをもつという点でおおよそ一致する。しかし，この点に関しても，例えば，「なぜ心態詞が副文においても現れることがあるのかという疑問が残る。通常，副文は発話行為タイプを表さないためである」（cf. Kwon 2005）。また, König（1997: 59）も指摘するとおり, „Der illokutive Charakter einer Äußerung ist das Ergebnis einer Interaktion zwischen vielen Aspekten der Satzbedeutung und auch kontextuellen Faktoren.“（ある発話の発語内的な性格は，文の意味における多くの観点とコンテクスト要因の相互作用が生み出す結果である）。発話行為タイプ指標／修飾語としての心態詞を論ずるには，「発話行為タイプ」（Illokutionstyp）という概念を明確に定義する必要がある。例えば，発話行為の分類に関しては, Searle（1969; 1983）をはじめ, Searle/Vanderveken（1985）や Vanderveken（1990）に代表される研究がなされてきたが，今日なお，この課題が議論の的になり続けているのも事実である。しかし，心態詞の発話行為タイプ指標／修飾語としての機能を紹介する本節の目的としては，これ以上，発話行為の意義について深入りすることは控える。

2.3.2.2. メタ語用論的指令としての機能

心態詞を，メタ語用論的指令（metapragmatische Instruktionen）として捉えるというのは，意味最大限主義的な考え方である。なぜなら，この見解に従えば，心態詞の意味はコンテクストと結びつくことで初めて付与されることになるためである。Hentschel/Weydt（2003: 313）では，心態詞の意味に関して, „Man kann ihre Bedeutung in Form eines Metakommentars, eines Kommentars über die Äußerung, paraphrasieren.“（その意味は，メタ注釈，つまり発話に関するコメントという形で言い表すことが可能である）と述べており，「メタ語用論的な指令」とは，この点に依拠しているものと思われる。Kemme（1979: 7）では，心態詞には „meta-kommunikativ“（メタコミュニケーション的な）機能があるとされ，心態詞は，文に含まれた情報をどのように受け取るべきか，あるいはその情報に対してどのように反応すべきかを

聞き手に暗示する。さらに, Hinrichts（1983: 281）でも, „Sie [= Modalpartikeln] vertreten eine metakommunikative Verbalisierungsstufe, die syntaktisch und morphologisch hochreduziert und intersubjektiv hochspezialisiert ist.“（心態詞は, メタコミュニケーション的な言語表現化の段階であり, この段階は, 統語的・形態的に極めて限定されており, 主観的な相互レベルにおいて非常に特殊化されている）とされる。心態詞をメタ語用論的指令とみなす立場の代表的な研究者には, とりわけ Franck（1979）が挙げられる。Franck（1979: 4）によると, „Sie [= Modalpartikeln] dienen dazu, die Äußerung im konversationellen oder argumentativen Kontext zu verankern und verleihen auch der emotiven Seite des Beziehungsstandes zwischen den Interaktanten Ausdruck.“（心態詞は, 発話を, 談話のコンテクストあるいは論述的なコンテクストに固定するために用いられ, 会話参加者間における感情的な側面を表現する）。

このような意味最大限主義的な考え方は, 語用論的アプローチにおいて, 意味論的な意味とコンテクストに依存する／制限された機能との間に明確な境界が引かれていないため, 大抵の場合, 個々の心態詞に対し, 複数の意味を当てがうことで成り立つ。しかし, 状況に応じて心態詞の意味を定めるというのは, 心態詞の変種を増やす危険性を回避できないだけでなく, 心態詞研究というよりも, むしろ談話分析に焦点が移行する恐れもある。従って, 意味最小限主義に従う本研究は, この立場とは相容れない。

2.3.2.3. 心的態度表明としての機能

意味最小限主義的な立場では, 心態詞は, 心的態度表明の機能を担う。心的態度とは, 言われた内容（命題）に対する話し手の感情や態度のことであり, 心態詞の意味あるいは機能は, この話し手の心的態度との関わりにおいて見い出される。このような心態詞の分析は, Weydt（1969）, Bublitz（1978）, Doherty（1985）, Wolski（1986）, Thurmair（1989）, Authenrieth（2002）などに代表される（cf. Kwon 2005: 27）。Weydt（1969）は,「心態詞の機能は, 言われたことに対する話し手の態度を明示し, 文に特定の色彩（Färbung）を与えること」とする。また, Bublitz（1978）によると, 心態詞は, 感情のモダリティを表現する手段であり, この手段を通じて, 話し手は, 自らの想定や態度を反映させ, 会話参加者と共有していると仮定される知識, あるいは相手の期待, 感情, 社会的地位などを関連づける（cf. Kwon 2005: 27）。

Doherty（1985）は, 心態詞に属する一部の語を„Einstellungspartikel“（態度詞）と名付け, 文の意味（Satzbedeutung）と発話の意味（Äußerungsbedeutung）を切り離して, 文の意味の記述を試みている。その主な関心は, 心態詞の解釈に際して, 言語的・非言語的な貢献度を厳密に

区別することにある。「なぜなら，言語的要素の特性を適切に記述し，説明しようとする場合，言語的要素の特徴に対する言語行為のタイプではなく，言語的要素の特徴自体を出発点としなければならないと考えられるためである」（cf. Doherty 1985: 25）。この立場から，Doherty（1985）は *doch*, *etwa*, *denn*, *ja*, *wohl* を態度詞とみなし，これらの態度詞によって，話し手は，事態のあり方に関係する認識的な態度（epistemische Einstellung）を表現するとしている。この際，命題 p の外側の階層は，事態に対する態度の範疇 E（= Einstellung）と，*E* に対する判断の範疇 EM（= Einstellungsmodus）に細分化され，これらの範疇と，心態詞が特定の文の法と共起することに基づいて，複数の心態詞が結合して現れた場合の語順の規則も説明される。そのようにして，体系的に制限された，つまりコンテクストや非言語的状況によるものではない使用条件が明示され，態度詞の基本的意味は不変であると捉えられる。

しかし，一方で，例えば Kwon（2005: 28）は，心態詞の分析が，コンテクスト（Kontext）や発話状況（Äußerungssituation）を考慮せずに有益であるかどうかは問題であると指摘する。意味の定義を，文の意味のレベルから，発話の意味のレベルにまで拡張するには，コテクスト（Kotext）やコンテクストを算入しないわけにはいかないからである。さらに, Kwon（2005）によれば，心態詞を態度詞として分析し定義する際の問題は，そもそも„Einstellung“という概念が，いまだ不明瞭な点にあるとされる。確かに，心態詞を扱う文献では，とりわけ„Einstellung“（態度）という用語は頻繁に用いられるが，そもそも話し手の態度は，心態詞以外の手段によっても表されるものである。文副詞や間投詞，否定詞，応答詞，あるいは話法助動詞，遂行動詞などはその典型である。そこで本研究では，意味最小限主義の立場に基づき，心態詞の機能は心的態度の表明であるという考え方を採用したうえで，**「（17h）心態詞は，命題に対する話し手の心的態度を含意する」**という必要条件を導く。ここで最も重要なことは, Kemme（1979: 6），岩崎（1988; 1998）, Helbig（1994[3]: 35）などがすでに示唆するとおり，心態詞による„Sprechereinstellung“（話し手の態度）という概念を„implicature/ Implikatur“（含意）と結びつけ，文副詞（話法詞）や話法助動詞などが表す語彙的な態度表現と明確に区別する点にある（「含意」に関する詳述は 3.5.4.を参照）。さらに，本研究では，このような心的態度表明としての機能と並行して，心態詞の機能を「発話行為タイプ修飾語」とする先行文献の考察も視野に入れる。第 5 章で論述する「心態詞の結合」との関わりで，この機能が重要な役割を果たすと考えられるためである。そこから，心態詞 *mal* の統語的・意味的な振舞いの関連性が見えてくる。

2.3.3. 心態詞の結合可能性

本節では，上述した「心態詞の結合」という現象について，簡単に触れておく。(14)，(15)，(16)で挙げた先行文献における心態詞の特徴では言及されていないが，例えば，Meibauer（1994: 29）や Werner（2002: 70）において，„Modalpartikeln sind untereinander/miteinander kombinierbar.“（心態詞は，他の心態詞と互いに結合可能である）という点が，心態詞の特徴として挙げられる。この特徴は，「結合が可能である」と述べているのであり，「心態詞であれば必ず結合する」わけではない。そこで，本研究における心態詞の必要条件には属さないこととした。当然，「心態詞であれば，常に結合する可能性を秘めている」という解釈もあり，この意味では必要条件であるとも考えられるかもしれないが，あくまでも，それが「可能性」に言及している限りにおいて，やはり必要条件とみなすことを避ける。

心態詞は，（先述の「文タイプにおける生起制限（(45)参照）」があるものの）１つの文のなかで，２つ以上が結合して（kombinieren/kollokieren）現れる場合がある（=（49a, b））。

(49) a. Die müssen **ja erst mal** lernen stillzusitzen ...（Bublitz 2003: 189）
（彼らは，何よりまず静かにしていることを学ばばいといけないよ）
b. Nun mach **doch schon endlich**!（Rug/Tomaszewski 2001: 203）
（さあ，もういい加減やりなさい）

心態詞の結合は，とりわけ Thurmair（1989）の研究対象である。Thurmair（1989: 282）によれば，例えば平叙文（Aussagesatz）では，(50)に挙げるような結合が可能であるとされる。

(50) denn auch, denn wohl, doch einfach, eben einfach, halt eben, halt einfach, doch schon, *doch mal*, *einfach mal*, *doch ruhig*, *ruhig mal*, ja auch, ja eben, ja einfach, ja mal, ja schon, ja sowieso, ja wohl, doch sowieso, wohl auch, wohl sowieso, denn doch, doch wohl, doch nicht etwa
（斜体で示した結合は，他の手段，とりわけ話法の助動詞によって，要求の性質が与えられた場合に限られる）（ibid.）

また，心態詞の結合は，ある特定の語順に従って並べられる。この語順制限に関しては，いまだ完全には研究されていないが（Helbig 1994[3]: 75），例えば，*ja*, *doch*, *wohl* のそれぞれの結合の場合，下記（51a-f）のような制限が報告されている（cf. Doherty 1985: 83）。

(51) a. Konrad ist *ja doch* verreist.（Konrad は旅行に出たよね）

b. *Konrad ist *doch ja* verreist.

c. Konrad ist *ja wohl* verreist.（Konrad は旅行に出たのだろうね）

d. *Konrad ist *wohl ja* verreist.

e. Konrad ist *doch wohl* verreist.（Konrad は旅行に出たのだろうよ）

f. *Konrad ist *wohl doch* verreist.（ibid.）[20]

Doherty（1985）によれば，*ja*，*doch*，*wohl* によって，それぞれ（52）のような話し手の態度（Sprecherhaltung）が示されるため，上記のような語順制限が課せられる。

(52) Mit „ja“ ist der Sprecher auf eine assertive Haltung zu der im Skopus der Partikel stehenden Einstellung festgelegt; mit „doch“ ist der Sprecher aber nur auf die im Skopus der Partikel stehende Einstellung festgelegt; mit „wohl“ ist der Sprecher sogar nur noch auf eine opaque Einstellung zu der im Skopus der Partikel stehenden Einstellung festgelegt.

［「ja」によって，話し手は，この不変化詞の作用域にある心的態度に対して，断定的な態度を確定する；しかし，「doch」によっては，この不変化詞の作用域にある心的態度しか確定しない；さらに，「wohl」によっては，この不変化詞の作用域にある態度に対して，曖昧な心的態度を確定するにすぎない］

先に述べたとおり，このような心態詞の結合に関しては，主に心態詞 *mal* の結合を例に，第 5 章で詳しい分析を試みる。

2.4. 第 2 章のまとめ

本章では，第 1 章でまとめた心態詞の個々の必要条件を，形態論的・音声学的特徴，統語論的・意味論的特徴，意味論的・語用論的特徴に大別して，具体的な説明を行った。

[20] この例に関して，Doherty（1985: 83）では„„Doch‘ kann nur vor ‚wohl‘ stehen, da die assertive Stärke von ‚doch‘ stärker ist als die von ‚wohl‘.“（「doch」は，その主張の強さが「wohl」よりも強いため，「wohl」の前にしか現れない）とされるが，この際の *doch* に対照アクセント（Kontrastakzent）が置かれた場合，例えば，「『Konrad は旅に出ていない』という聞き手の想定をくつがえしたうえで，それでもその主張に対して推測の域を出ない」といった話し手の態度が反映され，この意味では，(51f) は容認可能であると考えられる。

まず，形態論的・音声学的特徴では，**「心態詞は，語形変化しない」**という特徴について述べた。「心態詞は，短い語，通常は一音節の語である」や「心態詞には，大抵強勢が置かれない」という特徴に関しては，それぞれ該当しない語が存在することに基づき，本研究における心態詞の必要条件としなかった。

統語論的・意味論的特徴では，まず**「心態詞は，単独で文頭に生起せず，文肢（文成分）でも継合部でもない」**という特徴を挙げた。その際，先行文献として Brandt et al.（1999）と Cardinaletti（2007）の考察を紹介したうえで，本研究では，心態詞を最大範疇として扱うことを示唆した。詳述は第 5 章で行う（5.2.2.を参照）。また，文頭配置可能性に基づくと，心態詞は２つのグループに大別された：中心的な下位クラスと周辺的な下位クラス。本研究で扱う心態詞 *mal* は中心的な下位クラスに属し，このクラスに属する心態詞には「他の品詞では同音異義語として現れる」という基準が適用された。従って，**「心態詞には，別にアクセントを置く音形，あるいは異なる統語構造において，少なくとももう１つ別の意味を表す音形があり，その音形は異なる機能をもったクラスに属する」**という特徴を必要条件とみなした。さらに，**「心態詞は，質問の応答にならない」**という特徴も必要条件の１つであるとした。その際，決定疑問文に対する応答という点で，心態詞と話法詞の違いを挙げ，話法詞には文性があることを示した。また，「心態詞は，統語的に随意的であり，削除しても文の文法性に支障をきたさない」という特徴に関しては，研究者間の異なる見解に言及して，必要条件から除外することを記した。

続いて，心態詞の意味論的特徴として**「心態詞は，文全体を作用域にとる」**を挙げた。ここでは，心態詞 *doch* を例にその作用域と焦点について述べ，心態詞が時制句 TP の付加位置に置かれることを簡単に示唆した。生成位置に関しては，「心態詞はテーマとレーマの境界に現れる」ことにも触れた。しかし，いくつかの例外を挙げることで，この特徴を必要条件とみなさないとした。さらに，「心態詞は否定の対象にならない」という特徴も必要条件から除外した。上の「心態詞は文全体を作用域にとる」という必要条件に含まれるものとみなすためである。

最後に，意味論的・語用論的特徴においては，**「心態詞は，文の真理条件に関与しない」**，**「心態詞は，命題に対する話し手の心的態度を含意する」**，**「心態詞は，発話行為タイプと文タイプに関して特定の制限がある」**という３つの必要条件的特徴に言及した。このうち，最初の特徴に関しては，本研究では特に詳細な考察が必要であったため，第3章で詳述することとした。「心態詞の心的態度」を述べるにあたっては，その関連として，まず上記３つ目の特

徴である「文タイプおよび発話行為タイプとの共起制限」に触れた。その際，「文タイプおよび発話行為タイプ」という概念の理解が必要であったため，それぞれについて簡単な説明を加えた。さらに，心態詞の機能として，(1) 発話行為タイプ標識あるいは修飾語としての機能，(2) メタ語用論的指令としての機能，(3) 心的態度表明としての機能の３つの異なる方向性を挙げた。ここで重要なことは，意味最大限主義と意味最小限主義のどちらの立場をとるかにある。本研究では，後者の立場をとることから，心態詞の機能を「心的態度の表明」とみなし，厳密には「心的態度の含意」であるという見解を示唆した（詳しくは 3.5.4.を参照）。本章の最後は，必要条件ではないものの，心態詞研究における重要なテーマである「心態詞の結合可能性」に当てた。結合においては，心態詞の意味と語順の関係が問われる。本章では，先行文献における分析を簡単に紹介するに留め，本研究における試論的分析は第 5 章で行うとした。

3. 心態詞と話法詞の境界

第 2 章で,（17a-h）に挙げた本研究における心態詞の個々の必要条件に関して, 具体的な説明を行ったが, そのうち, **「(17f) 心態詞は, 文の真理条件に関与しない」**という特徴に関しては詳細を避けた。そこで, 本章では,（17f）の必要条件について詳しく考察し, 本研究における「命題」を定義した上で（3.4.および 3.6.を参照）, 心態詞を非命題的であり, 話法詞を命題的であると捉える立場をとる。これにより, 本研究における「心態詞の見方」を明確にする。Bublitz （1978: 38）, Franck（1980: 21）, Helbig（1994[3]: 23）などに従うと, 心態詞は, 「文の真理条件に関与しない」。このことは, 文の命題を変えないという観点と等しく, Kwon（2005: 21）が述べるとおり, „In diesem Punkt unterscheiden sie [= Modalpartikeln] sich von den sonstigen syntaktischen Funktionen der Partikeln, z. B. Satzadverbialen, Grad- und Negationspartikeln.“（この点において, 心態詞は, 不変化詞の他の統語的機能, 例えば, 文副詞, とりたて詞, 否定詞と区別される）。

2.2.で触れた「心態詞の削除可能性」（Weglassbarkeit）との関連において, Kwon（2005: 21）は, 下記（53）のように記している。

(53) [...] die Bedeutung der Modalpartikel liegt nicht auf der propositionalen Bedeutungsebene. Das heißt, sie sind ohne irgendeinen Einfluß auf die Satzbedeutung weglassbar. Diese Ansicht beruht auf der Annahme, dass Modalpartikeln „keine lexikalische Bedeutung“ (König 1997: 58) haben und daher keinen Beitrag zur Proposition oder zum Satzradikal leisten. Modalpartikeln leisten unstrittig keinen Beitrag zur Proposition eines Satzes, d. h. sie sind nicht-propositional. In diesem Punkt unterscheiden sie sich von den sonstigen syntaktischen Funktionen der Partikeln, z. B. Satzadverbialen, Grad- und Negationspartikeln.

［心態詞の意味は, 命題的な意味レベルには置かれない。すなわち, 心態詞を削除しても, 文の意味に全く影響を与えない。この観点は, 心態詞には「語彙的な意味がない」（König 1997: 58）という仮定に基づいており, それゆえ, 心態詞は命題あるいは文基に関与しない。心態詞が, 文の命題に関与しないということに議論の余地はない。つまり, 心態詞は非命題的である。この点において, 心態詞は, 不変化詞の他の統語的機能, 例えば, 文副詞, とりたて詞, 否定詞と区別される］

（53）の記述では, 「命題的な意味レベル」（propositionale Bedeutungsebene）, 「文の意味」

（Satzbedeutung），「語彙的な意味」（lexikalische Bedeutung），「命題あるいは文基」（Proposition oder Satzradikal）（「文基」に関しては 3.1.3.を参照），「文の命題」（Proposition eines Satzes）といった語が用いられ，結論として，心態詞は「非命題的」（nicht-propositional）であることから，他の不変化詞と区別されると述べられている。

この記述に基づき，本研究でも，心態詞は「非命題的」（nicht-propositional）であると捉える。この点に関しては，多くの文献をふまえても議論の余地はないと思われるためである。そして，この点において，他の不変化詞，とりわけ話法詞と厳密に区別することが可能であれば，（17f）で挙げた必要条件（**心態詞は文の真理条件に関与しない**）が心態詞のみに該当する特徴として裏付けられることになる。例えば，Bublitz（1978: 34）では，Spranger（1972: 291）に従って，（54a-c）のような話法詞の分類が挙げられ，„Eine semantische Ähnlichkeit zwischen den "einschätzenden MW [= Modalwörter]", die zu (b) [...] gehören, und den MPn [= Modalpartikeln] ist unverkennbar.“（[...]（b）に属す「評価の話法詞」と心態詞の意味的な類似性は明白である）としながらも，„Ich stelle sie [= MW, die zu (b) gehören] dennoch neben die MW (a) [...]“（それにもかかわらず，私はそれらの語（=（b）に属する語）を（a）の話法詞と同等に扱う[...]）（ibid.: 34ff.）として，話法詞と心態詞の特徴的な区別を文法的（統語的）な観点から導き出そうとする。

(54) a. MW, die das Verhältnis des Sprechers zur Realität der Aussage ausdrücken.
［陳述の現実性に対する話し手の関わり方を表す話法詞］
（*möglicherweise*, *vermutlich*, *vielleicht*, *wahrscheinlich*, etc.）

b. MW, die ein emotionales Verhältnis des Sprechers zur Aussage ausdrücken.
［陳述に対する話し手の感情的な関わり方を表す話法詞］
（*glücklicherweise*, *gottlob*, *hoffentlich*, *leider*, etc.）

c. MW, die das Verhältnis des Sprechers zur Form der Aussage ausdrücken.
［陳述の形式に対する話し手の関わり方を表す話法詞］
（*jedenfalls*, *übrigens*, *folglich*, *nämlich*, etc.）

さらに Bublitz（1978: 38）では，„MPn haben keinen Einfluß auf die Wahrheitsbedingungen des Satzes, [...] beeinflussen aber gelegentlich dessen wörtliche Bedeutung dadurch, daß ihr Gebrauch konvent. IMPLen [= konventionelle Implikaturen] nach sich zieht. MPn können daher ohne weiteres weggelassen werden, ohne daß sich der Wahrheitswert des Satzes änderte. Dies ist bei den MW der

Gruppe (a) nicht der Fall.“（心態詞は，文の真理条件に影響を与えないが，[...]その使用が，結果として慣習的含意を招くことで，時折，その文の字義的な意味に干渉する。それゆえ心態詞は，文の真理値が変わることなく容易に削除される。このことは，(a)のグループに属する話法詞には当てはまらない）とあり，意味的な観点からも明確な区別を提供しているかに見えるが，この際，(a)のグループに属する話法詞には，先の記述にあるように，(b)に属する話法詞も加えられた上での記述か否かが不明である。もし，「心態詞は真理条件に関与せず，(a)グループに属する話法詞と区別される」というこの記述が，(b)に属する話法詞を含まないのであれば，やはり(b)グループの話法詞と心態詞との類似性が前面に押し出され，両者の区別が困難であることになる。また，(b)グループと(a)グループの話法詞を一括しているのであれば，そもそも(54)のような分類自体があまり意味をなさないと同時に，下記のEngel（1988）による記述とも合致しえない。Engel（1988: 763）では，(b)に属する話法詞（*glücklicherweise*や*bedauerlicherweise*（*leider*の同義語）など）は„Rangierpartikel“（ランク詞）と名付けられ，„die Rangierpartikeln tragen nichts zur Beschreibung eines Sachverhaltes bei, sondern sagen etwas über die Einstellung des Sprechers zum Sachverhalt aus:“（ランク詞は，事態の記述には貢献せず，事態に対する話し手の態度に関して何らかのことを述べる:）とされる。この記述における„Sachverhalt“（事態）というのが，おそらく一般的な「命題」を指すと捉えると，(b)グループの話法詞は，やはり心態詞と非常に類似したものとみなされるため，心態詞との区別が不明瞭になるからである。また，(c)に属する話法詞に関しては，「例えば，文成分として，あるいは決定疑問文に対する応答として，単独で生起しえない点で(a)に属する話法詞と区別される」（cf. Bublitz 1978: 34）と述べられるが，この点だけを見る限り，今度は，統語的な観点において，(c)グループの話法詞と心態詞との区別が不明瞭になってしまう。つまり，(a)グループの話法詞と心態詞を意味論的に区別し，(a)グループと(c)グループの話法詞を統語論的に区別する分類が，(c)グループの話法詞と心態詞との区別に対して齟齬をきたすのである。

以上の点から，話法詞と心態詞の違いを意味論的に考察するには，やはり「命題」という概念を正確に定義づけておく必要性が出てくる。Kwon（2005）には，上述した「文の意味」や「命題」といったそれぞれの語の正確な定義は見当たらず，なぜ，心態詞のみが非命題的であるかということに対する説得力のある説明が求められよう。そこで，本章では，「命題」，「文の意味」，「発話の意味」といった概念を扱ううえで，まず「文の真理条件」という概念に触れ，真理条件意味論における「命題の定義」を取り上げる。続いて，「モダリティ」

という概念との関連で，先行文献に基づく文の意味のあり方をふまえ，モダリティを表す手段の１つである話法詞を，文の真理条件に関与するもの，つまり「命題的」であるとして扱う。それにより，ともに話し手の心的態度を表す（モダリティとして機能する[21]）と考えられる心態詞と話法詞の違いを明確にする。このようなアプローチは，単に，筆者自らが定めた心態詞の必要条件を裏付けるためだけのものではない。これまで心態詞と話法詞の基準に左右されてきた語（例えば *wohl*）に対して，心態詞／話法詞でありうる根拠と，その意味的な変遷を明示する可能性を提供するものでもある。

3.1. 真理条件意味論

「文の真理条件」とは，意味論で扱われるテーマである。本研究では，ひとまず，「文（Satz）の成立条件」を統語的な観点における形式として，「動詞を少なくとも１つ含む言語形式（同じく言語形式である単語や句のまとまり）」と定義する。中右（1994: 34）では，「文は典型的に，①明示的な主語を含むこと，②定形動詞を含むこと，③独立節として生じうること，この３つの性質を兼ね備えたもの」とされる。この定義は，非典型例である命令文も含むものであり，典型・非典型という区別をしなければ，本研究における文の定義も，この記述に従うものとする。また，「発話としての文は談話の世界を前提とする」（ibid.）とあり，発話は，発話場面，言語外的コンテクスト（語用論的知識）との関連で定義されるものであるが，ここでは，さしあたり「発話」（Äußerung）とは「文が発語（Lokution）されたもの」とだけ述べておくことにする。

(55)　Thomas trinkt Wein.（トーマスはワインを飲んでいる）（吉田 他 2001: 70）

ここで，(55) の文（発話）は，音の刺激としてコード化された「言語的意味／字義的意味／語彙的意味」（linguistische Bedeutung/wörtliche Bedeutung/lexikalische Bedeutung）をもつと考えられる。これらの意味は，主に統語的な結合（syntaktische Verknüpfung）に基づいて分析される。例えば，動詞 *trinken* は，その行為を起こす動作主（agent）と，その行為の対象（theme）を必要とする二項述語であるとして，動作主と対象の間に「飲む」という関係を表す。このような

[21] ドイツ語話法詞のモダリティ表現を考察した神（1999: 2）では，「モダリティ（modality/Modalität）は，『発話時点における話し手の心的態度』（中右 1994: 20）のことを指し，モダリティ表現は，法（Modus），話法の助動詞（Modalverb），話法詞（Modalwort），心態詞（Abtönungspartikel/Modalpartikel），さらにはイントネーションなどを介して実現される」とある。

語彙的な意味は，主に，文の「慣用的な意味」（idiomatische Bedeutung）との区別において考察の対象となる[22]。

以下，先の（55）の例文をはじめ，とりわけ吉田 他（2001: 69ff.）を参照して説明する。まず，（55）の文における„Thomas“と„Wein“は，ある特定の個体を表し，„trinken“は「飲む」という特定の行為を意味するが，（55）の文の意味を考えた場合，この文が意味する状況は決して１つであるとは限らないことがわかる。例えば，①Thomas という人物が，友人たちと一緒に，レストランで赤ワインを飲んでいる状況，②Thomas という人物が，一人で赤ワインを飲んでいる状況，③Thomas という人物が，部屋で白ワインを飲んでいる状況などを思い浮かべた場合，（55）の文が意味するところは，これら①②③のいずれの文でも当てはまることがわかるだろう。従って，（55）の文の意味は，このような考えられうる状況の集まりであると捉えられる。

真理条件意味論（truth conditional semantics/Wahrheitsfunktionale Semantik）では，上記のような「意味」は「文の内包」（Intension/Konnotation eines Satzes/Sinn eines Satzes）と呼ばれる。そして，ある文の内包を満たす状況・世界の集合が「命題」（Proposition）とされる。Meibauer（2002: 352）でも，„In der wahrheitsfunktionalen Semantik entspricht die Proposition eines Satzes der Menge aller Situationen, die diesen Satz wahr machen.“（真理条件意味論においては，文の命題は，その文を真たらしめるあらゆる状況の集合である）と述べられている。

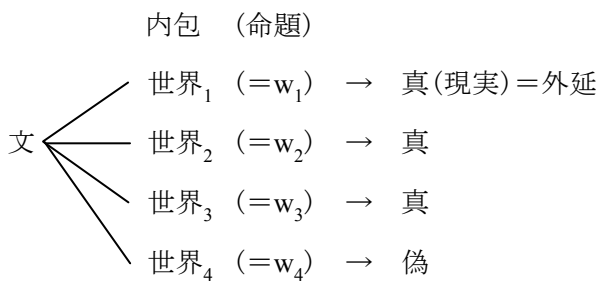
命題とは，特定の状況に基づいて真か偽かという真理値を指示するもので，例えば，「（55）は，『トーマスとワインの間に「飲む」の関係がある』場合に限って真になる。これを，（55）の真理条件（truth condition）と呼ぶ。このように，文の意味をその真理条件との関連で分析する意味論を真理条件意味論と呼ぶ」（吉田 他 2001: 70）。さらに，この意味論では，可能世界の集合の中で，現実世界と照らし合わせて真か偽か判断できる文の意味は「文の外延」（Extension/Denotation eines Satzes/Bedeutung eines Satzes）と呼ばれ，（55）の文では，現実世界において「トーマスがワインを飲んでいる」場合，この世界で„Thomas trinkt Wein“という文は真であると判断される。つまり，文の外延を理解するとは，可能世界の中の特定の状況において，その真理値を判断することである。このことは，その文の内包を満たす状況・世界の集合の中の１つを指示（reference/denotation）することを表している。こうした「内包」

[22] Levinson（1983: 17）では，Gazdar（1979）や Searle（1979）に従い，文の意味（sentence-meaning）と字義的意味（literal-meaning）の違いを，慣用句（*kicked the bucket*）を例に挙げて説明し，文の意味は慣用的な意味（idiomatic）と構成的な意味（compositional）をもつが，字義的意味には，慣用的な読み（non-idiomatic reading）はなく，構成的なものしかないとする。

（intension）や「外延」（extension）といった観点は，論理学的意味論の創始者として知られる，ドイツの数学者・哲学者 Gottlob Frege が提起したもので，これらの概念に基づき，Frege は „Sinn“（意義）と „Bedeutung“（意味）という言語の意味の区別を導いた[23]。

以上の記述を，吉田 他（2001: 71）に倣って（56）のように示す。

(56)



3.1.1. 文の内包と命題

ここでは，上述した「文の内包」という概念と「命題」との関わりを，もう少し詳しく見ていくことにしたい。まず，「文の命題」（Proposition des Satzes）との関連において，「文の意味」（Satzbedeutung/Bedeutung des Satzes）という語が頻繁に用いられる。Meibauer（2002: 352）では，„Satzbedeutung: Wörtliche Bedeutung eines Satzes, die sich aus den wörtlichen Bedeutungen seiner Teile und der Art ihrer syntaktischen Verknüpfung ergibt.“（文の意味: 文の字義的な意味のことであり，その文のそれぞれの語句が持つ字義的な意味と，その文の統語的な結合が示す性質に基づいて生まれる意味）とあるが，例えば Wittgenstein（1921）では，文の意味は文の内包と同定される。下記（57）は，Bußmann（2002）からの引用で，Wittgenstein（1921）に従った文の意味の記述である。

(57) Die Bedeutung eines Satzes zu kennen heißt demnach, zu wissen, wie die Welt beschaffen sein muss, damit der Satz wahr ist.（Bußmann 2002: 743）

［文の意味を知るということは，その文が真であるために世界がどう在るべきかを知ることである］

[23] Frege が，„Über Sinn und Bedeutung“（意義と意味について）で挙げた下記の例は顕著である。解説は，黒田/野本（2006[2]: 71ff.）や吉田 他（2001: 64ff.）を参照。
例: 宵の明星が明けの明星であることを古代ギリシア人は知らなかった。

ここで述べられている„Bedeutung eines Satzes“（文の意味）とは，明らかに文の内包のことである。Meibauer（2002: 352）でも，同文献における先の記述に引き続く形で，„In der wahrheitsfunktionalen Semantik entspricht die Satzbedeutung den Wahrheitsbedingungen eines Satzes.“（真理条件意味論においては，文の意味は文の真理条件のことである）と追記される。さらに，Meibauer（ibid: 354）では „Wahrheitsbedingungen: Die Bedingungen, die in Situationen gelten müssen, damit ein Satz in diesen Situationen wahr ist.“（真理条件: 当該の状況において，ある文が真であるとみなされなければならない条件）としたうえで，先に挙げたとおり，„In der wahrheitsfunktionalen Semantik entspricht die Proposition eines Satzes der Menge aller Situationen, die diesen Satz wahr machen.“（真理条件意味論においては，文の命題は，その文を真たらしめるあらゆる状況の集合である）（ibid.: 352）とされる。これらの記述から，「文の意味」とは「文の内包」のことであり，換言すれば，「文の真理条件」のことであるとわかる。真理条件意味論では，「命題は，その文が真となる可能世界の集合である」と捉えられることから，「文の真理条件」は「文の命題」のことを指すというのが通説である。このことを，形式的にいえば，「形式意味論の伝統のなかでは，内包とは可能世界とその世界における外延を一義的に結びつける仕組み，すなわち関数（function）として捉えられる」（郡司 他 2004: 13）。金水/今仁（2002[2]: 112）でも，「世界 w が決まると言語表現 E にその世界での外延 a を与える関数，それが内包と呼ばれるものである」と記されている。つまり，「文の内包」を「文の命題」と同定する立場にたてば，「命題」とは，それぞれの世界に対して，ある文の真理値を指示（reference）する関数と定義され，「命題 p は，[（58）]のように図示される関数 *f* として規定される（ここで，1, 0 は，それぞれ，真，偽を示す）」（郡司 他 2004: 46）。

(58)

$$f\colon \begin{pmatrix} w_0 \rightarrow 1 \\ w_1 \rightarrow 1 \\ w_2 \rightarrow 0 \\ w_3 \rightarrow 1 \\ \vdots \end{pmatrix}$$

そこで，<u>現段階では</u>，「文の内包」を「文の命題」と同定し，「命題」とは，「ある文の真理値を指示する関数である。集合論的に言い換えれば，その文が真となる可能世界の集合である」と定義する。（59a, b）は，以上をふまえた文の内包と外延（上記（56）を参照）を記号で表したものである（w は世界（状況），t は時間を表す（下付き文字は指標を表す））。

(59) a. 文の内包（命題）: $p_{(w, t)}$ （p = Proposition, w = world, t = time）

b. 文の外延: $p_{(w_1, t_1)}$

3.1.2. 文の外延と直示

ここでは, (59b) で挙げた「文の外延」について, 下記の例 (60) のようなダイクシス／直示表現 (Deixis) との関連を簡単に述べる。

(60) 昨日, 君は私を殴った。

(60) の文では, THOMAS や WEIN のような個体ではなく, 「君」や「私」といった不特定の対象（直示 (Deixis) 表現）が用いられている。これらは, それぞれ「聞き手」と「話し手」という意味を表し, 「昨日」という語にも, 「発話日の前日」という内在的な意味があると考えられる。従って, (60) の文は, ＜発話日の前日, 聞き手が話し手に対して, 殴るという行為をした＞という意味（内包）を表す。この「文の意味（内包）」が (60) の「文の命題」である。しかし, このような直示表現を伴う文は, このままでは, その文の真偽を判断することができない。なぜなら, 「君」や「私」が誰のことを指すのか, 「昨日」を確定するための「発話日」がいつのことなのかが不明であるため, 現実世界と照合することができないからである。逆に言えば, 現実世界と照合することによって, はじめてこれらの表現が確定し, 同時に, この文が真であるか偽であるかが判断可能となる。このことからも, 文の外延が, 文の内包に包含される関係にあるとわかる。そもそも, (60) のような直示表現を伴う文を, 意味論で扱うのか, 語用論で扱うのかという議論には長い歴史があり, 直示表現は, 意味論と語用論の接点（インターフェース）であるといえる。

3.1.3. 文基と命題内容

本節では, 本章の冒頭で挙げた (53) の記述に見られる„Satzradikal“という概念について触れる。Stenius (1967: 254) は, Wittgenstein（Philosophical Investigations）の用語である„Satzradikal“に倣って„sentence-radical“と呼び, これを話法的な要素（modal element）と区別して (61) のように述べる。

(61) The sentence-radical signifies the *descriptive content* of the sentence, the modal element signifies its *mood*.（Stenius 1967: 254）

Krifka（2004）では, „Satzradikal (vgl. Radikal in Chemie)“（Satzradikal（化学における基を参照せよ））とあることから，本研究では, „Satzradikal/sentence-radical“を「文基」と訳すことにする。（53）で挙げた Kwon（2005: 21）では，„Proposition“（命題）と„Satzradikal“（文基）の記述は接続詞„oder“（あるいは）でつながれ，全く等しい概念を表すのか否かは判断しかねるが，いずれにせよ，心態詞が文基に関与しないとされていることは明確である。Krifka（2004）は, Stenius（1967: 259, 267）に基づき, „Satzradikal: Der wahrheitsfunktionale Inhalt, die Proposition“（文基: 真理条件的な内容，命題）あるいは„Satzradikale sind im Rahmen der wahrheitsfunktionalen Semantik beschreibbar“（文基は真理条件意味論の枠内で記述できる）として，（62）のような例を挙げる。

(62) dass du dieses Buch liest:
die Menge der Situationen, in denen du dieses Buch liest.
［君がこの本を読むこと:
君がこの本を読むという状況の集合］

（62）から，文基が文の内包を指していることがわかる。また, Wunderlich（1976: 89）では, „Das Satz-Radikal ist der sprachliche Ausdruck für den propositionalen Gehalt“（文基は命題内容が言語的に表わされたものである）とあり，命題内容が意味的なものであるのに対し，文基が形式的なものとして扱われることが示唆されている。以上から，文基と文の内包／命題は, おおよそ等しい概念を指すものと考えて問題ないと思われる。

「命題」という概念を扱うにあたっては，さらに，上記の Wunderlich（1976: 89）に現れている「命題内容」（propositional content/propositionaler Gehalt）という用語にも触れておく必要がある。一般に，真理条件意味論では，下記（63a-c）のような疑問文（Interrogativsätze）や命令文（Imperativsätze），願望文（Optativsätze）に対して，真偽を判断することができない。

(63) a. Schläft Hans? (Hans は寝ているの？)

b. Hans, schlaf schon! (Hans, もう寝なさい！)

c. Wenn Hans nur schliefe! (Hans が寝ていさえすればなあ)

(63a-c) の文の内包は，実際の世界と照らし合わせることができないため，これらの文の外延を定めることは不可能である。そこで，伝統的な真理条件意味論では，基本的には，„Hans schläft.“ (Hans は寝ている) のような平叙文 (Deklarativsätze) に対して，真か偽かという真理値を指示するものを「命題」と呼ぶ。この際，まず„Hans schläft.“ (Hans は寝ている) にせよ，(63a) の疑問文にせよ，いずれも部分的に同一の内容が内在している点に注目する。この点に関して，例えば Meibauer (2002: 352) には (64) のような記述がある。

(64) Proposition: [Auch: Sachverhalt] Der wahrheitsbewertungsfähige Inhalt einer Äußerung. So ist z. B. der propositionale Gehalt der beiden Sätze *Hans schläft* und *Schläft Hans?* gleich, nämlich >dass Hans schläft<.

[命題: [あるいは: 事態] 発話における真偽判断可能な内容。従って，例えば，Hans は寝ていると Hans は寝ているか？という２つの文の命題内容は同じである。すなわち，>ハンスが寝ていること<である]

本来，「命題」と「命題内容」(propositionaler Gehalt) は異なる概念であるが，文献によっては，両者は基本的に同じ意味で扱われる。例えば，(65) は，Levinson (1983: 245) における一節である。

(65) Thus the following sentences, when uttered felicitously, would all share the same propositional content, namely the proposition that the addressee will go home. （下線は筒井による）

Wunderlich (1976: 69ff.) によると，命題内容は４つのタイプに区別され，いずれも同一の述部 (Prädikation) が扱われる点で共通するとされる。下記 (66a-d) に挙げた４つのタイプからうかがえるとおり，Wunderlich (1976: 69ff.) によれば，命題は命題内容の下位分類ということになる。

(66) a. Propositionen, z. B. bei Behauptungen und bei den meisten Positionstypen.

［命題，例えば主張の場合や，大抵の態度タイプを表す場合］

b. Offene Propositionen, z. B. bei Aufforderungen.

［開放命題，例えば要求の場合］

c. Prädikatsbegriffe, z. B. bei W-Fragen bzw. Ergänzungsfragen.

［述語概念，例えば W-疑問ないしは補足疑問の場合］

d. Propositionsbegriffe, z. B. bei Entscheidungs- und Alternativfragen.

［命題概念，例えば決定疑問や代替疑問の場合］

しかし,「命題の概念」（Begriffe der Proposition）（ibid.）に関する„Propositionen/eine Proposition“（複数形）／（単数形）[24]の考察をみると，Wunderlich 自身，命題と命題内容を厳格に区別しているわけではないように思われる。そこで，本研究でも「命題」と「命題内容」を決定的に異なる概念とはみなさない。そのうえで，最後に，上記（66b）の「開放命題」（Offene Proposition）という概念にも説明を加えておく。（67）は, Wunderlich（1976: 70）における開放命題の説明である。

(67) Die offene Proposition enthält mindestens eine Leerstelle, die durch ein Individuum des Verwendungskontextes zu ersetzen ist, damit eine Proposition entsteht (im Falle der Aufforderung durch den Adressaten).

［開放命題には，少なくとも１つの空所があり，そこは，発話のコンテクストに従った個体によって埋められる（要求の場合には，聞き手によって）。それにより，１つの命題が生まれる］

（67）から，命題は名詞的要素（nominale Elemente）と述部（Prädikation）から成り[25]，命令文のような要求では，命題が形成されていないことが読み取れる。また，この関連で，下記（68）

[24] Wunderlich（1976）は，„Proposition“という語に対して，複数形と単数形を使い分けており，おそらく複数形の場合は「内包」を，単数形の場合は「外延」を意図しているものと思われる。

[25] このことは, Searle（1969: 29ff.）で述べられる„propositional act“（命題行為）の概念と一致する。Searle（1969）によれば，命題行為は，指示（reference）行為と述定（predication）行為から成る命題を表現（express）する行為のことを指す。

に挙げるとおり, Wunderlich (1976: 72) の記述でも, 先の Meibauer (2002) における (64) の記述同様, 命題は dass-文で表すことができるとある。つまり, 命題は, 時制を含みこんだものであると定義していることになる[26]。従って, 命題を形成していない命令文の場合には時制が問われない。

(68) Eine Proposition kann durch ≫daß≪-Sätze und durch Satznominalisierungen bezeichnet werden. So sind ≫daß Peter kommt≪ und ≫das Kommen von Peter≪ gleichberechtigte Namen für die Proposition, daß Peter kommt.
[１つの命題は, ≫daß≪-文および文の名詞化によって表されうる。すなわち, ≫Peter が来ること≪と≫Peter の到来≪は, Peter が来ることという同じ命題を表す][27]

これらの記述は, 次節で紹介する中右 (1994) の「階層意味論モデル ((70) 参照)」で明確に表される。Wunderlich (1976) が「開放命題」と定めているのは, 中右 (1994) では, 述語と項から成る中核命題 (PROP[1]) のことであり, 「名詞的要素と述部から成る dass-節」は中立命題 (PROP[3]) のことを指す。開放命題, つまり時制やアスペクトを含まず[28], 中立命題の作用域に置かれる中核命題は, コンテクストに従って指示対象の補足を求める命題の一部 (ein Teil einer Proposition) であり, このような命題の核 (中核命題) に言及することで, 時制を問う命題 (中立命題) を形成しない命令文における命題を説明することができる。

また, この命題の核を, 仮に「命題事象: p (e)」(propositionales Ereignis) と呼ぶとすると, この命題事象により, 下記 (69a) のような文における話法の助動詞 *können* が表す二種類のモダリティの違いを, 構造的に説明しうる。(69a) の *können* は, いずれも形容詞 *möglich* によって述語的な言換えが可能であるが, (69b) のようなドイツ語の zu-不定詞句で表される場合

---

[26] この点において, (68) の記述には矛盾が見られる。≫das Kommen von Peter≪という文の名詞化では時制が含まれていないため, ≫dass Peter kommt≪とは区別されるべきである。例えば, 時制を変数とみた場合, 文の名詞化は厳密には開放命題に属すると考えられ, 命題と開放命題を区別しないという仮定のもとでのみ, 「≫Peter が来ること≪と≫Peter の到来≪は, Peter が来ることという同じ命題を表す」といえる。

[27] 同じような見方で, 益岡 他 (2001[2]: 18) は, 命題が連体修飾節への移行を可能にする点を挙げ, 命題は単語相当に近づいた存在であると述べる (例: 雨が降る日は天気が悪い)。従って, 命題は文以下の存在であるとする。

[28] 例えば, „Zurückbleiben bitte!“ (下がってください) や „Stehen bleiben!“ (止まれ!), „Nicht eintreten!“ (入るな!) といった不定形動詞による命令は, アスペクトの観点から説明されると考えられることから, この場合の命題は, 拡大命題 PROP[2] を指すものと思われる。

には，「(彼は)明日来る」という部分は時制が有標化されない[29]。このことから，(69b)における„möglich“は「事象的」であるとわかり，この読みの場合の話法助動詞 *können* は「事象的モダリティ」(event modality)(Palmer 2001[2]: 7)を表す。それに対して，dass-節を補部にとる(69c)の„möglich“の読みでは，*können* は「命題的モダリティ」(propositional modality)(ibid.)として用いられていることになる(cf. 澤田 2006: 37ff.)。

(69) a. Er kann morgen kommen.
he can tomorrow come
b. Es ist ihm möglich, morgen zu kommen.(彼は明日来ることができる)
c. Es ist möglich, dass er morgen kommt.(彼が明日くることはありうる)

モダリティと命題の関係については，3.5.以降で詳しく論じる。

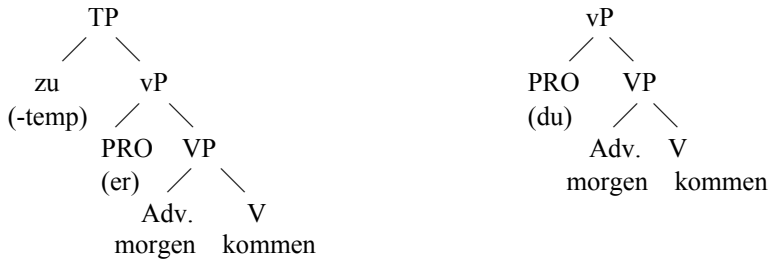
3.2. 認知言語学における「文の意味」

これまで，主に真理条件意味論の観点における「命題」あるいは「文の意味」の記述を見てきた。しかし，例えば認知意味論の分野では，真理条件意味論とは異なる視点が取られる。認知意味論の観点では，文の意味は，「『自然を映し出す鏡』(a mirror of nature)を超えたもの(G. Lakoff(1987: xiii))」(澤田 2006: 29)であると言われ，「認知言語学的観点からすれば，ある表現の意味はその客観的内容のみならず，『背景』や『スコープ』，あるいは『視点』などを取り込んで，はじめて完全なものとなる(Langacker(2002[2]a: 35, 56, 315))」(ibid.: 28)。

---

[29] 正確には，zu-不定詞(句)扱われる中核命題と，命令文におけるそれは，その素性(feature)を異にする。zu-不定詞(句)は，主語として機能することからも，時制素性を含むものであるため，統語的に時制句(TP)の指定部(spec)に生起したうえで，その時制が有標化されないという意味で，<ー時制>の素性を示す(i)。それに対し，命令文における命題の核とは，時制の素性自体を持たず，動詞句(vP)内に生成すると考えられる(ii)。

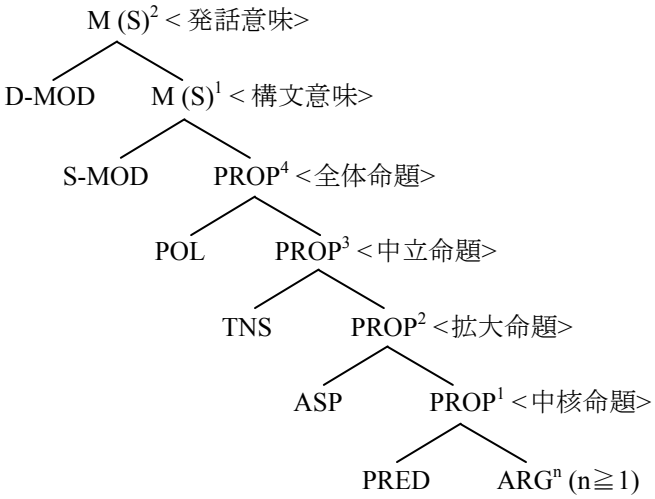
(i) zu-不定詞(句)における中核命題　　(ii) 命令文における中核命題



澤田 (2006) によれば，ここでの「意味」とは，さらに概念化主体（基本的には話し手と聞き手を指す）の心的態度 (mental attitudes)，直示 (deixis)，前提 (presupposition)，言語行為 (speech act)，推意 (implicature) といった「語用論的意味」も含むことになる。

同じく認知意味論の立場から，中右 (1994: 15) は，文の意味構造の基本骨格を樹系図で表し，(70) のような「階層意味論モデル」(Hierarchical Semantics Model) と呼ばれるスキーマを展開している。

(70) 階層意味論モデル



M (S) ＝ Meaning of Sentence　文の意味
D-MOD ＝ Discourse-Modality　談話モダリティ
S-MOD ＝ Sentence-Modality　文内モダリティ
PROP ＝ Proposition　命題
POL ＝ Polarity　極性，ポラリティ
TNS ＝ Tense　時制，テンス
ASP ＝ Aspect　相，アスペクト
PRED ＝ Predicate　述語
ARG ＝ Argument　項

(70) が示すとおり，文の意味の基本骨格は階層構造をなすと考えられており，「文の意味 M (S) と命題内容 PROP とは大きく区別される。また文の意味には２つのタイプがあり，命題内容には４つのタイプがある」(ibid.: 16)。中核命題を除き，以上は全て共通して，少なくとも命題内容を作用域としていることから，まとめて一応は＜命題演算子＞と呼ばれる。このうち，S モダリティと D モダリティは，特に他の命題演算子と区別され＜文演算子＞とされる。

文の意味 M (S)と命題内容 PROP が区別される理由は，モダリティが主観的な意味成分であるのに対し，命題内容は客観的な意味成分といえることに求められる。このことから，「文の意味は，なによりもまず，モダリティと命題内容との二極構造からなる，と仮定される」（ibid.: 41）。このような文の意味の二極構造は，例えば，寺門（1979: 39）では，「発言というものは，判断という平面と，判断されるもの（観念内容）という平面との異なった二平面から成り立っていることになる。[…]これを話法の二平面構造と名付けよう」と述べられている。このように，階層意味論モデルでは，命題と文の意味が明確に区別されるものの，文の意味は発話意味も含みこんだ概念として考えられている。しかし，本研究では，「文の意味」は，あくまでも真理条件意味論に従った概念，つまり「文の命題」を指すものと捉える。そのうえで, 3.5.以降に述べる「モダリティ」との関連において，先の（70）で示した「階層意味論モデル」の考え方やその構造を再び取り上げることとする。

3.3. 語用論の観点

続いて，語用論的な観点にも触れておくことにする。真理条件意味論では，文は，特定の状況で実際に用いられる「発話」（Äußerung）と区別される。端的に言えば，文は字義的（wörtlich）あるいは静的（statisch）であり，発話は状況的（kontextabhängig）あるいは動的（dynamisch）であると考えられ，この点で，文と発話は明確に区別される[30]。3.1.2.で挙げた（60）のような直示表現を伴う文の説明で，すでに「発話」ということばを使用していたとおり，発話では，実際に発話された状況（時間や場所）が，その文に真理値を付与するための条件になる。直示表現が，語用論で扱われる理由（の１つ）もこの点に言及される。先に，「発話とは文が発語されたもの」と定めていたが，当然，これだけでは発話を定義したことにはならない。発話は「コンテクスト」を加味したものであり，真理条件意味論における文の意味よりもより具体的な意味を表す。

「言外の意味」を初めて本格的に解明した Grice（1967: 1975, 1989 で刊行）に従えば，発話は，「言われていること」（what is said）と「含意されていること」（what is implicated）に大別され，「『言われていること』は，基本的に，コード化された意味（単語の意味）の解読と

[30] 文と発話の違いは，一般に，文ータイプ（sentence-type）と文ートークン（sentence-token）の違いとしても説明される（cf. 田窪 他 2001[2]: 7ff.）。Vanderveken（1990 の邦訳: 3）には，「私は，一つの使用の文脈における，一つの文の**一つの（可能な）発話の意味**，言い換えると，一つの文の一つの**トークン（token）**の意味と，一つの**タイプ（type）**と見なされるその文の**言語的意味（linguistic meaning）**とを区別する」とある。

それに伴う指示付与（reference assignment）と一義化（disambiguation）をすることによって得られるもので，真理値（世界に照らして真か偽か）を付与できるところまで最小限の語用論的貢献を許した，最小命題（minimal proposition）に相当する」（東森・吉村 2003: 27）。最小命題とは，発話自体ではなく，「発話の意味」（Äußerungsbedeutung）にあたる。Meibauer（2002: 346）では，„Äußerungsbedeutung: Ebene der Bedeutung, auf der unter Rückgriff auf den Äußerungskontext u. a. deiktische Variablen gefüllt werden.“（発話の意味: 発話のコンテクスト，とりわけ直示表現を再構築することによって満たされる意味のレベル）と説明される。この点に基づくと，発話の意味が，真理条件意味論における文の外延の構築過程と一致することがうかがえる。しかし，「文の外延」と「発話の意味」は，それぞれ意味論と語用論という異なる言語学的分野で扱われるため，当然，両者を全く同じ概念として解釈することは望まれない。発話の意味を扱うということは，最終的には発話が及ぼす影響にも注目するということである。つまり，Griceによる「含意されていること」まで考察の対象に入れるということにつながる。これまで述べてきたような，文の内包や外延といった，意味論における「文の意味」とは，真理条件に基づいて決定できるような文の意味であった。言語学一般において，このような文の意味は，「記述的意味」（deskriptive Bedeutung）と呼ばれる。それに対し，例えば「『なんてこった』のような感嘆文の場合，この文が表しているのは話し手の感情であり，それを記述的な意味で解釈することはできない」（佐久間 他 2004: 114）。そこで，この文がもつ意味は，「表現的（感情的）意味」（expressive Bedeutung）と呼ばれる。この関連で，下記（71）の例を見てみる。

(71) Es zieht.（隙間風が吹いている）

（71）のような文が発話された場合，文脈（Kontext）を加味することで，文字通りには事態についての主張を表し，もし窓が開いていて部屋が寒い状況では，「窓を閉めてください」という，聞き手に対する依頼を表す（cf. 吉田 他 2001: 63）。この文の記述的意味は，この発話が「主張」を意味しうるという点と無関係ではないが，記述的意味は，決して「話し手の（意図する）意味」（Sprecherbedeutung）を表すことはできない[31]。また，先に述べたとおり，文の

[31] „Sprecherbedeutung: [Auch: kommunikativer Sinn] Die Bedeutung eines Sprechaktes, die sich in einer spezifischen Interaktionssituation ergibt.“（話し手の意味:［あるいは: コミュニケーションの意義］特殊な相互行為状況で生じる発話行為の意味）（Meibauer 2002: 353）

外延は，発話とのつながりで形成される場合もあり（直示表現），記述的意味を文脈と完全に切り離して捉えることもできない（意味論と語用論のインターフェース）。しかし，曖昧性が除去され，直示表現が指示されることで真理値が付与された外延が，そのまま話し手の意図を表すわけではない。文の記述的意味，つまり，文の内包と外延は，「話し手の意図する意味」と直接結びつくことはなく，従って，「命題は，言明（statement）とか断定（assertion）といった発語の力（illoctionary force）とは結びついていない」（田窪 他 2001[2]: 11）ことになる。ここから先は，語用論（Pragmatik）で扱われるのである。

3.3.1. 関連性理論における命題

先に，発話の意味に相当する「最小命題」という用語を挙げたが，この際，「最小」という語が用いられる理由は，主に関連性理論における「命題」の概念が，「真・偽を帰すことができる対象」よりも，さらに限定的である（cf. 田窪 他（2001[2]: 12）ことに起因する。Sperber/Wilson（1995[2]）が提唱した「関連性理論」（Relevance Theory）では，「命題」は「発話の表出命題」（proposition expressed by the utterance）のことを指し，Grice の“what is said”（言われていること）よりも，さらに限定的な明示的意味を表す。Sperber/Wilson（1995[2]）では，Grice の造語である“implicature”（含意）に対して，「表出命題（『表意』や『明意』とも訳される）」を“explicature”という用語で表す。関連性理論では，表意は（72）のように定義され，「表意の形成には，言語的意味の解読だけでなく，『一義化』（disambiguation），『飽和』（saturation），『自由拡充』（free enrichment），『アドホック概念形成』（ad hoc concept construction）という４つの語用論的プロセスが関わる」（東森・吉村 2003: 32）。

(72) 発話Ｕによって伝達（communicate）される想定は，それがＵによってコード化された論理形式の発展（development）であるならば，そしてそのときに限り，明示的（explicit［すなわち表意（explicature）］）である。（東森・吉森 2003: 31）

Carston（1988: 155）の例で示すと，下記（73B）の発話は，（74a）のような論理形式（logical form）が付与されたあと，先に挙げた（全ての／いくつかの）語用論的プロセスを経て，最終的に（74b）のような命題形式（propositional form）まで発展する（cf. 東森・吉村 2003: 32ff.）。

(73) A: How is Mary feeling after her first year at university?

B: She didn't get enough units and can't continue.

(74) a. X (she) didn't get enough units and can't continue.（発話の論理形式）

b. Mary Jones didn't get enough university course units to qualify for second year study and, as a result, Mary cannot continue with university study.（表意）

東森・吉村 (2003) によれば, (74a) の論理形式の段階では, 「X (she) が誰のことを指すのか未決定で, 何を continue するのかも明示されていないなど, まだ十分な命題形式をもたず, 真理値を付与できるレベルではない」とされる。こうした記述から, 関連性理論における命題とは, 真理条件意味論における内包や外延といった区別に重きを置くものではないことがうかがえる。関連性理論は, むしろ, そのような区別を行わないことで, 意味論と語用論のインターフェースにおける議論に対して, 1 つの解決策を提起したものと捉えることもできよう。また, 関連性理論における表意の概念は,「基本表意」(base-level explicature/lower-level explicature) と「高次表意」(higher-level explicature) と呼ばれるものに区別される。下記 (75) の Bill の質問に対する Mary の発話は, (76a) の基本表意と, (76b-d) ような高次表意をもつを考えられる。基本表意とは, 上記で述べた命題形式 (表出命題) のことである。「(76b) の高次表意では, Mary says that _____ という発話行為を表す想定スキーマに, 基本表意が埋め込まれ, (76c, d) では, それぞれ Mary believes that _____, Mary is happy that _____ という命題態度を表す想定スキーマにそれぞれ基本表意が埋め込まれている」(東森・吉村 2003: 47)。

(75) Bill: Did your son visit you at the weekend?

Mary (happily): He did.

(76) a. Mary's son visited her at the weekend.

b. <u>Mary says that</u> her son visited her at the weekend.

c. <u>Mary believes that</u> her son visited her at the weekend.

d. <u>Mary is happy that</u> her son visited her at the weekend.（Carston 2000: 10）

関連性理論では，この高次表意という概念の設定により，モダリティ表現とその真理条件への貢献度が説明される。結論からいえば，高次表意は，一般にその発話の真理条件には貢献しないと考えられており，従って，高次表意に貢献する（77a-d）の発語内行為副詞（illocutionary adverbial）（frankly, confidentially）や態度副詞（attitudinal adverbial）（happily, unfortunately）は，真理条件に貢献しないとされる。

(77) a. Frankly, I'm unimpressed.

b. Confidentially, she won't pass the exam.

c. Happily, Mary's son visited her this weekend.

d. Unfortunately, I missed the train.（Carston 2000: 11）

しかし，本研究では，この立場とも相容れない。ドイツ語の文副詞／話法詞を含む高次表意という概念を非命題的とみなす場合，（後述するが）真理条件意味論に従って，心態詞を非命題的と捉える本研究の考察に齟齬をきたすためである。これまで，等しく非命題的とみなされてきた話法詞と心態詞を区別することが本章の目的であり，それによって，本研究における「心態詞の捉え方」を明確にするには，語用論的な（関連性理論における）命題の捉え方からは導かれえない。そこで，次節において，最初のアプローチとしての本研究における「命題」をまとめる（最終的な定義は 3.6.を参照）。

3.4. 本研究における「命題」－first approximation－

以上，（53）の記述において述べられた，「命題的な意味レベル」（propositionale Bedeutungsebene），「文の意味」（Satzbedeutung），「語彙的な意味」（lexikalische Bedeutung），「命題あるいは文基」（Proposition oder Satzradikal），「文の命題」（Proposition eines Satzes）といった一連の用語について，先行文献に倣いながら説明を試みた。

本研究では，まず「文の内包」を「命題」と同定し，「命題」とは，「ある文の真理値を指示する関数であり，その文が真となる可能世界の集合である」と定義する。また，Wunderlich（1976）や中右（1994）において，命題は命題内容全体／その部分を指すものとして扱われている点をふまえたうえで，本研究では，命題は，文基あるいは命題内容とほぼ同一の概念であるとみなし，とりわけ命題内容は意味的なものであるのに対して，文基は命題の言表として形式的な観点で捉える。さらに，「文の真理条件」とは「命題」を指すこと

に基づき，「真理条件に関与しない」とは，「文の命題に関与しない」ということに等しいものとする。

次節以降では，以上の点に基づき，心態詞が「非命題的」（nicht-propositional）であるという立場にたって，心態詞と話法詞の境界づけを試みる。その際，その区別を形式化するためには，「モダリティ」（modality/Modalität）という概念に言及した上で，話法詞に関する分析が必要となるため，次節で「モダリティ」に関する説明を施す。

3.5. モダリティ

本来，例えば英語学でのモダリティは，言語哲学で扱う論理と関係していると考えられ，主に「認識に関するモダリティ」（epistemic modality）と「義務に関するモダリティ」（deontic modality）の区別が問題となる（cf. Lyons 1968）。「つまり，命題の真理の『可能性や必然性』を話し手がどう認識しているか，あるいは『許可や義務』に関する人間の道徳性に関する話し手の心的態度の区別」（井出 2006: 35ff.）が中心的に扱われる。こうした概念は，「主として may, might, must, should などの法助動詞で表わされるものである」（ibid.: 36）。また，この関連で，英語のムードとは，「『話し手が文の内容に対して持つ心的態度の表現』であり，それは動詞の形態で明示される直説法，仮定法などで知られるものである」（ibid.）。

モダリティの定義には諸説ある。例えば，近藤（2000: 440）によると，「『モダリティ（法性）』（modality）は，[...]話者の心的態度を示す全ての表現に該当する。もっとも広くモダリティを定義したものとしては，C・フィルモアの『格文法』における，文を，『命題』（proposition）と『モダリティ』（modality）とに分ける分析があげられる」。また，定義というわけではないが，井出（2006: 28）では，「命題に話し手の判断や配慮で色付けをする言語的要素」や「話し手が話をする時，命題をコンテクストと結びつける接着剤のような存在」（ibid.: 35）がモダリティであるとされる。

狭義におけるモダリティの定義として，「言語表現に現れた発話時における話し手の心的態度（Sprechereinstellung）」（岩崎・池上・Hundsnurscher 1994: 603）を指す場合もある。この場合の話し手の心的態度とは，「1）命題に対する話し手の心的態度のみを指す場合と，2）聞き手に対する話し手の働きかけまでを含める場合とがある」（ibid.）。1）には，真偽判断にかかわるもの，価値判断にかかわるもの，発話行為にかかわるものがあるされ，2）には，日本語の終助詞や，ドイツ語の心態詞の一部にその働きがあると考えられる（cf. ibid.）。Ikoma（2007: 47）でも，話法助動詞 *können* や話法詞 *bestimmt* など，話し手の判断・評価（Beurteilung）

を表すものは「命題志向のモダリティ」(propositionale Modalität)として扱われ，それに対し，ドイツ語の心態詞や日本語の終助詞は「聞き手志向のモダリティ」(hörerorientierte Modalität)に属するとされる。

本研究でも，Ikoma（2007)の捉え方を採用し，モダリティには「命題志向と聞き手志向の二種類ある」という立場をとる[32]。そして，下記(78)の記述を参照して，モダリティを意味論的なカテゴリーで捉え，以下，ドイツ語の心態詞と話法詞のモダリティの違いを比較・考察していく。

(78) モダリティとは，事柄(すなわち，状況・世界)に関して，たんにそれがある(もしくは真である)と述べるのではなく，どのようにあるのか，あるいは，あるべきなのかということを表したり，その事柄に対する知覚や感情を表したりする意味論的なカテゴリーである。(澤田 2006: 2)　　(下線は筒井による)

3.5.1. 命題とモダリティの関係

3.1.3.で，dass-節で表される命題(dass-p)が，名詞的要素と述部から成り，時制を含む点において，中右 (1994)における中立命題(PROP[3])であることを述べたが，この点に基づくと，(79a-c)における中立命題は，„dass es regnete“(雨が降ったこと)となる。

(79) a. Es regnete gestern.（昨日雨が降った）

b. *Wahrscheinlich* regnete es gestern.（おそらく昨日雨が降ったのだろう）

c. *Bedauerlicherweise* regnete es gestern.（残念ながら昨日雨が降った）

このことから，理論上は，時間副詞 *gestern* も中立命題に対するオペレータ(Operator)として機能することになり(命題演算子)，*gestern* (t_e, dass-p)という視点(Es geschah *gestern*, dass es regnete.)を取るとも考えられる。

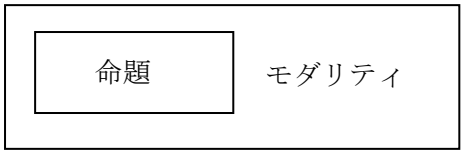
(79b)では，*wahrscheinlich*(英: probably)という話法詞が，命題に対する話者の認識のあり方を反映している。このようなモダリティを，Palmer (2001[2]: 7)は„propositional modality“と

[32] 「モダリティの定義で，話し手の心的態度を発話時に限った場合，過去形で用いられた主観的用法の話法の助動詞の説明が問題となる」(岩崎・池上・Hundsnurscher 1994: 604)。しかし，本節では，心態詞と話法詞の比較が目的であるため，この問題に関しては言及しない。

名付けている。日本語の文献では 益岡 他（2001[2]: 12）が「命題めあてのモダリティ」と呼ぶ。（79c）における話法詞 *bedauerlicherweise*（英: regrettably, unfortunately）も，命題に対する話し手の心情を表しており，益岡 他（2001[2]: 12）で挙げられる「困ッタコトニ」と同じく，やはり「命題めあてのモダリティ」ということになる。Helbig/Helbig（1993[2]: 26）では, Lang（1979）を 参照して，„MW [= Modalwörter] sind [...] Einstellungsoperatoren, die Propositionen in bewertete Äußerungen überführen.“（話法詞は，[...]命題を話者によって評価された発話へと移行する態度オペレータである）とされる。

ここで，中右（1994）の記述を再び取り上げる。（70）で挙げた階層意味論モデルで示されているとおり，「文の意味の基本骨格は，モダリティと命題内容の二極構造を形づくっている」（ibid.: 33）。益岡 他（2001[2]: 11）でも，「文の基本的な意味－統語構造は，少なくとも，命題（proposition，言表事態）とモダリティ（modality，言表態度）といった質的に異なった２つの層から成り立つ」と述べられる。また，二極構造や二層構造といった述べ方はしていないまでも，Helbig（1984: 112）は, „Bei den Sätzen mit Modalwort sind Modalwörter (als Einstellungsoperatoren) nicht Teile der propositionalen Bedeutung (sie dürfen nicht auf gleicher semantischer Ebene interpretiert werden wie die Proposition p selbst), [...]“（話法詞を伴う文では，（態度オペレータとしての）話法詞は，命題意味を表す部分ではない（話法詞は，命題 p 自体と同じ意味的レベルで解釈されえない）[...]）と述べ，岩崎（1998: xv）は，「＜話法詞＞は，本来の副詞のように主語と述語からなる文の根幹の部分，いわゆる命題（Proposition）の一部をなしているのではなく，その外側にあって，それに対する話し手の態度を示すいわゆる話法ないしは叙法（Modus）の働きを担っている」としている。ドイツ語の副詞を「命題内副詞」と「命題外副詞」に区別する井口（2000）では，（80）のような図でその構造が明示され，「モダリティは命題に対する話し手の態度であるという点において，モダリティは命題を包み込むような構造」（井口 1995）と考えられている[33]。

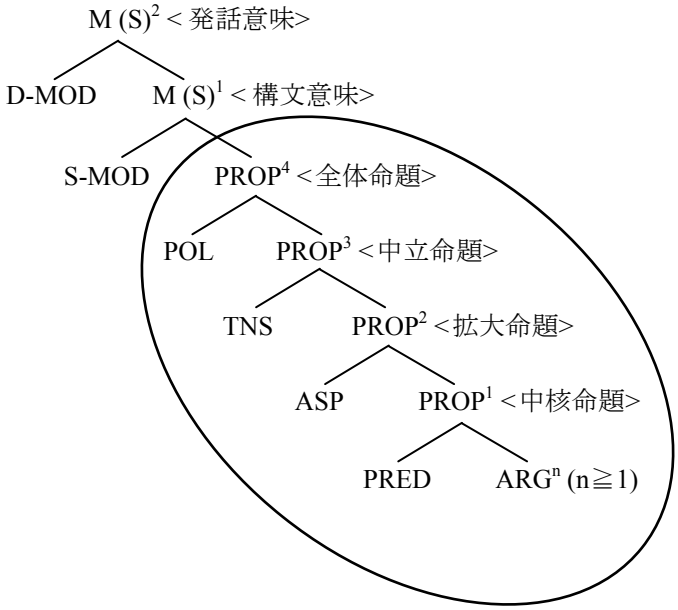
(80)



[33] 井口（1986: 57ff.）では，「命題構造が樹系図のような構造で表わされるようなものであるとすると，それは 2 次元的な構造である。Modalwort はいわば 3 次元的な位置にあり，表層上命題構造に埋めこまれている場合もあるが，意味構造上は命題構造の外にある」とされる。

下記(81)に再掲した階層意味論モデルにおいても，談話モダリティ(D-MOD)(Discourse-Modality)にせよ，文内モダリティ(S-MOD)(Sentence-Modality)にせよ，いずれも命題(PROP)の外側(楕円の外側)に位置していると捉えられよう。

(81) 階層意味論モデル(中右 1994)



(81)の表示スキーマは，統語論の句構造規則にあたる「意味展開規則」(Semantic Expansion Rules)(中右 1994: 14ff.)に基づいて形成されており，モダリティと命題の二極構造は，統語論のみならず，意味論の観点においても当てはまるものであるとされる。中右(1994)では，一貫して主観性と客観性の観点に言及し，「モダリティは，発話時点(瞬間的現在時)における話し手の心的態度として定義され，瞬間的現在時を境として情報は主観的磁場と客観的磁場に振り分けられる。主観的磁場を形づくるのがモダリティであり，客観的内容を形づくるのが命題内容である」(ibid.: 33)。従って，モダリティは，「その主観性のゆえに，命題というふうにはいわない。仮にもこれを命題扱いすれば，命題内容の客観性という根本的性質はないがいしろにされるばかりでなく，概念的に異質な性質をもつモダリティとの区別づけが帳消しにされてしまうからである」(ibid.: 18)。その結果，たとえ「発話意味(M $(S)^2$，構文意味 M $(S)^1$)」と「全体命題($PROP^4$)の階下層($PROP^1$ を除く)」が，等しく命題内容を作用域としても，前者は文演算子，後者は命題演算子と呼ばれることになる。そのうえで，命題演算子には二重機能があり，命題演算子であると同時に，命題成分としても機能するの

に対し，モダリティにはこの二重機能がないとする（cf. ibid.: 17）。要するに，中右（1994）に従うならば，モダリティは，S モダリティか D モダリティかに関わらず「非命題的なるもの」（ibid.: 36ff.）として扱われるのである。下記（82）は，中右（1994）による S モダリティと D モダリティの判別基準である。

(82) ①S モダリティは命題内容を限定するのに対し，D モダリティは談話要因を基に発話のありかた，ひいては伝達様式を限定する。

②S モダリティは命題態度であるのに対し，D モダリティは発話態度である。

③S モダリティは構文に内在的な義務的意味成分であるのに対し，D モダリティは構文に外在的な随意的意味成分である。

④S モダリティは全体命題 PROP[4] を作用域とするのに対し，D モダリティは構文意味の全体，つまり S モダリティ＋全体命題を作用域とする。

3.5.2. 本研究における話法詞の解釈

上述の中右（1994）に従うと，（79b, c）で挙げた *wahrscheinlich*（英：probably）や *bedauerlicherweise*（英: regrettably, unfortunately）といった話法詞は，共に S モダリティに属し，それぞれ「真偽判断のモダリティ」（modality of truth judgment）と「価値判断のモダリティ」（modality of value judgment）という S モダリティの下位類型に分類されることになる[34]。下記（83）は，中右（1994）における S モダリティの定義である。

(83) S モダリティ S-MOD とは，話し手が発話時点において全体命題 PROP[4]（の真偽いずれかの値）に対してとる信任態度（コミットメント）のことをいう。（中右 1994: 54）

しかし，話法詞を「非命題的なるもの」として扱うこのような見解は，本章の冒頭で挙げた（53）の記述と合致しない。従って，「心態詞は，非命題的（nicht-propositional）である点で，他の不変化詞，とりわけ話法詞と区別することができる」とする本研究の立場とも相容れない。そこで，本研究では，先（82）の②にある「命題態度」というのが，「命題内容の真理値（真か偽の値）について話し手がくだす査定判断のことである」（中右 1994: 41）点や，上記（83）に

[34] 中右（1994: 54）では，S モダリティの下位類型として，他に，判断留保のモダリティ（modality of judgment withholding），是非判断のモダリティ（modality of (dis)approval），拘束判断のモダリティ（modality of deontic judgment）が挙げられる。

おける「全体命題に対する信任態度」という点をふまえたうえで，本研究における「命題」の定義との関連から，S モダリティに属するとされる語群も，「命題的」（propositional）であり，「文の真理条件に関与する」という分析を試みる。

3.5.2.1. S モダリティの客観性

3.4.で，最初のアプローチとして，本研究では，文の意味を文の内包と同定し，文の内包が文の命題であると定義づけた。この際の問題は，S モダリティとされる概念が，「どのような形で命題的である」と説明するかにある。

（82）の記述④のとおり，S モダリティは全体命題 PROP[4] を作用域とする。それゆえ，（79b, c）=（84a, b）の文意は，それぞれ（84a', b'）のように，「主観的な話し手の態度を，客観的な命題内容の一部分をなす」（中右 1994: 38）dass-節を用いて言換えることが可能である[35]。統語的・意味的な観点において，*wahrscheinlich* と *bedauerlicherweise*（= *bedauerlich*）は，命題（dass-節）を補部に取る点で共通する。

(84) a. *Wahrscheinlich* regnete es gestern.（おそらく昨日雨が降ったのだろう）

a'. Es ist *wahrscheinlich*, dass es gestern regnete.[36]

（昨日雨が降ったことはありうることである）

b. *Bedauerlicherweise* regnete es gestern.（残念ながら昨日雨が降った）

---

[35] Bußmann（2002: 542）では，„Propositionen werden meistens durch Ausdrücke der Form ≫*p*≪ oder ≫*dass p*≪ bezeichnet.“（命題は，大抵≫*p*≪あるいは≫*dass p*≪という形式で表される）とある。このことからも，≫p≪は，dass-節として文中に埋め込まれる（eingebettet）対象であることがわかる。

[36] この際の *wahrscheinlich* は述語的用法であり，„Ist es *wahrscheinlich*, dass es gestern regnete?“や„Es ist *nicht wahrscheinlich*, dass es gestern regnete.“のように疑問・否定の対象になる。井口（1986: 53）では，「これはモダリテート表現ではない」とされる。このことは，（84b'）の„bedauerlich“による書換えでも同様である。また，Helbig（1984: 110ff.）では，話法詞を主文（Matrixsätze）に還元する，このような意味的な態度述語（Einstellungsprädikate）としての言換えに対して，少なくとも２つの問題点があるとされる。第一に，例えば話法詞 *vermutlich*（たぶん）の場合，„Ich vermute, dass ...“や„Es wird vermutet, dass ...“といった言換えが可能あるいは必要であるのに対し，話法詞 *wahrscheinlich* では，このような相応の動詞による言換えができない。裏を返せば，*vermutlich* には，相応の形容詞（の述語的用法）がない（*„Es ist vermutlich, dass ...“）。そのため，このような言換えによる話法詞の説明は妥当な統一性に欠ける。第二に，*vermutlich* のような，動詞による言換えが可能である話法詞の場合，「否定の対象にならない」という話法詞の特徴の１つに沿わない否定文が許されてしまう（„Ich vermute nicht, dass ...“, „Es wird nicht vermutet, dass ...“）。そこで，Bartsch（1972: 52ff.）では，話法詞の遂行性仮説（Performativitätsthese）が検証されるが，そのような話法詞の遂行的解釈も，Lang/Steinitz（1977: 51ff.）によって，根本的かつ正当に批判される。

b'. Es ist *bedauerlich*, dass es gestern regnete.（昨日雨が降ったことは残念である）

それに対し，(85a-c)に挙げる *ja*, *etwa*, *bloß* などの心態詞は，(85a'-c')のように，dass-節を補部にとって言い換えることはできない。この点においては，「モダリティには二重機能がない」とする中右（1994: 17)の見解と一致する。つまり，心態詞は純粋に文演算子としての機能しかもたず，命題に直接作用することで，主観的な態度を客観的に表すことはできない。このことは，心態詞が，(中右（1994)の用語を借りれば)「D モダリティ」に相当しうることを示唆している。

(85) a. Es regnete *ja* gestern.（昨日雨が降ったじゃないか）

a'. *Es ist *ja*, dass es gestern regnete.

b. Regnete es *etwa* gestern?（まさか昨日雨が降ったの？）

b'. *Ist es *etwa*, dass es gestern regnete?

c. Wenn es *bloß* gestern geregnet hätte!（昨日雨さえ降っていればなあ）

c'. *Es ist *bloß*, wenn es gestern geregnet hätte!

3.5.2.2. S モダリティの内在性

次に，S モダリティが，「構文に内在的な義務的意味成分」である点を考えてみる。ここでは, Zaefferer（2001)の考察に注目したい。Zaefferer（2001)は，„illocutionary modalities“と„propositional modalities“の関係を指摘している。Krifka（2004)によれば，後者のモダリティは„Modus innerhalb des Satzes“(文に内在する法)と訳され，„Modus innerhalb eines Satzes bezieht sich auf die Proposition und liefert wiederum eine Proposition.“(文に内在する法は，命題に作用して，再び命題を産出する)と解釈される。下記(86)は，このことを説明するための Krifka（2004)による例で，認識的モダリティを表す話法助動詞 *können*(英: can)の意味解釈である。

(86) a. ‘Es regnet’(雨が降る)

= die Menge aller möglichen Welten (Situationen), in denen es regnet.

［雨が降るというあらゆる可能世界(状況)の集合］

= {w | es regnet in w}｛w の集合 | w において雨が降る｝

b. ‘Es kann regnen’（雨が降るだろう）

= die Menge aller möglichen Welten, in denen es mit dem Wissen verträglich ist, dass es regnet.

［雨が降るという知識と両立するあらゆる可能世界の集合］

= {w | es gibt eine Welt w', die mit dem Wissen in w verträglich ist, so dass gilt: w'∈‘es regnet’}

{w の集合| 世界 w'があり，その世界は世界 w における知識と両立する。従って，次のことが成り立つ: w' ∈ ‘雨が降る’}

Krifka（2004）によれば，„Wir können einen Modaloperator M definieren, der, auf eine Proposition angewendet, wieder eine Proposition liefert:“（１つの命題に適用されて，再び１つの命題を産出する話法のオペレータ M は，次のように定義される：）。

(87) M(Φ) = {w | es gibt eine Welt w', die mit dem Wissen in w verträglich ist, so dass gilt: w'∈Φ}

（*Φ = der propositionale Inhalt*（命題内容））

［M(Φ) = {w | 世界 w'があり，その世界は世界 w における知識と両立する。従って，次のことが成り立つ: w'∈Φ}］

このような立場をとれば，中右（1994）における S モダリティは，純粋な命題演算子としても機能し，意味的に命題の内部で二重機能を果たすと捉えられる。当然，命題成分としても機能するとなれば，その客観性が問題視されることになるが，ここでは，決して S モダリティの主観性をないがしろにしているのではない。（84）で示したように，*wahrscheinlich* と *bedauerlicherweise* といった話法詞が，dass-節を用いて言換えることが可能である点，つまり，主観的な話し手の態度を，客観的な命題内容の一部分をなすものとして捉えることができる点に基づき，主観性と並行する形で，その客観性も認めるのである。そうすると，純粋に文演算子としてしか機能しない，つまり主観性しか果たしえない心態詞との明確な区別が見えてくる。

3.5.2.3. 話法詞 *wahrscheinlich* と *bedauerlicherweise* の真理条件

S モダリティの内在性を上述のとおり解釈することで，本研究では，「文に内在的である」という捉え方を，中右（1994）のそれとは少し異なって明記した。この際，最も肝心な点は，本研究では文の内包を命題と同定したことにより，「文に内在的である」を「命題的である」

(propositional)ないしは「文の真理条件に関与する」という意味で捉え直すことにある。このことは, (88)と(89)のような意味記述で明示されよう[37]。

(88) a. *Wahrscheinlich* regnete es gestern. (おそらく昨日雨が降ったのだろう)

b. Es ist *wahrscheinlich*, dass es gestern regnete.

it is probable, that it yesterday rained

c. [*wahrscheinlich* $(p_{(w, t_1)}) = 1$]:

$\exists w' [\text{Glauben}(Sp, p_{(w', t_1)}) = 1)] \wedge \left[\frac{3}{5} \leqq \frac{|w'|}{|w''|} \leqq \frac{9}{10}\right]$,

wo w'' alle möglichen Welten bedeutet. (Sp = Sprecher = 話し手)

wahrscheinlich $_{(p)}$が真である解釈は, 話し手が, 命題 p を世界 w'に対して, 瞬間的現在時 t_1 において真であると信じている世界 w'が存在し, 世界 w'は, あらゆる可能世界 w''のうち(仮に)6 割から 9 割(100%でないという意味)を占めている場合である。このような形で, 話法詞 *wahrscheinlich* は文の内包に関わり, 「真理条件的」(propositional)であると捉えられる。

(89) a. *Bedauerlicherweise* regnete es gestern. (残念ながら昨日雨が降った)

b. Es ist *bedauerlich*, dass es gestern regnete.

it is regrettable/unfortunate that it yesterday rained

c. [bedauerlicherweise $(p_{(w, t)}) = 1$]:

$\exists w' [\text{Bedauern}(Sp, p_{(w', t_1)})] \wedge \forall w'' [p_{(w'', t_1)} = 1]$,

wo w'' alle möglichen Welten bedeutet.

bedauerlicherweise $_{(p)}$が真である解釈は, 話し手が, 命題 p を世界 w'に対して, 瞬間的現在時 t_1 において「残念である」とみなしている世界 w'が存在し, かつ命題 p が, あらゆる可能世界 w''に対して, 瞬間的現在時 t_1 において真である場合である。「昨日雨が降った」という

[37] ここでは, 話法詞の焦点に関しては詳しく述べない。(88a)の文は, „Es regnete wahrscheinlich gestern.“(雨が降ったのはおそらく昨日だろう)と語順を変えて表現することで, „Es regnete.“(雨が降った)の部分は前提とされ, 特に„gestern“(昨日)が„wahrscheinlich“であると述べられることになる(cf. 井口 2000: 89ff.)とも考えられる。しかし, この場合にも, *gestern* が中立命題に対する命題演算子(中右 1994; propositionale Operatoren(Helbig/Helbig 1993[2]: 29))であると考えられる点, および *wahrscheinlich* は, その *gestern* (t_e, dass-p)を含みこんだ命題を作用域にとることに違いはない。従って, (88a)の発話も, 語順を変えた上記の言換えも, 共に(88b)のように記述され, (88c)のように形式化できるものとみなす。

あらゆる可能世界の集合が真であり，その可能世界の集合に対して，話し手が，「残念ながら／あいにくなことに／気の毒にも」という語彙的な意味を表す„bedauerlicherweise“という語を誠実に（aufrichtig）使用した場合に限り，(89a)の文は真であるとみなされる。このようにして，話法詞 *bedauerlicherweise* は，命題に作用して１つの命題を産出するのであり，文に内在的な法であると捉えられる。従って，*bedauerlicherweise* も命題的（propositional），真理条件的（wahrheitsfunktional）であると結論づけられる。

以上，例として，話法詞 *wahrscheinlich* と *bedauerlicherweise* が，統語的な観点において，共に命題（dass-節）を補部に取る点，ならびに意味的な観点から共通して命題的であり，文の真理条件に関与することを述べた。しかし，中右（1994）でも前者は真偽判断のモダリティ，後者は価値判断のモダリティという下位類型に分類されることからうかがえるように，これらは，決して全く同質のモダリティではない。このことは，(88c)と(89c)の意味記述で明示されている。*bedauerlicherweise* (p)が真である場合の記述では，全体命題［dass es gestern regnete］の真実性が前提とされる。つまり，ここでの命題内容は「叙実的」（factive）である。*wahrscheinlich* は，「全体命題に対する話者の認識のあり方」を表すのに対し，*bedauerlicherweise* は，「全体命題のあり方に対する話者の認識」を表す。このことは，外延レベルで考えればより明示的である。(88a)の発話は，話し手が「雨が降ったことはありうると信じていること」が真でありさえすれば，実際に雨が降らなかった場合でも問題にならない。なぜなら，(88a)では，全体命題の真偽判断に対する話し手の評価の真実性が問題になっているからである。それに対し，(89a)では，事実雨が降った場合に限り，その発話の真実性が問われるのであり，もし雨が降らなかった場合には，発話の真偽を問うこと自体が無意味である。つまり，*bedauerlicherweise* は，dass-節で表された全体命題が真であると判断された上で，その前提的な事態に対する話者の感情を反映させる。この関連で，Bartsch（1972: 22ff., 43ff.）による「事実性に関するテスト」（Tests des Tatsache-Seins/der Faktizität）に従うと，*bedauerlicherweise* と *wahrscheinlich* との違いは，(90a, b)によって示される（cf. Helbig/Helbig 1993[2]: 44）。

(90) a. Er lügt *bedauerlicherweise*.（残念ながら彼は嘘をついている）

→ Die Tatsache, dass er lügt, ist bedauerlich.

（彼が嘘をついている，という事実は残念である）

b. Er lügt *wahrscheinlich*.（おそらく彼は嘘をついているだろう）

→ *Die Tatsache, dass er lügt, ist wahrscheinlich.

（彼が嘘をついている，という事実はありうることである）

このことから，過去の出来事に関する記述として，(91)のように *bedauerlicherweise* と *wahrscheinlich* が共起すると非文になることも説明がつく。

(91) **Bedauerlicherweise* regnete es gestern *wahrscheinlich*. [38]

ただし，未来を表す助動詞 *werden* が用いられることで，全体命題が，例えば„dass es morgen regnen wird“(明日雨が降る(であろう)こと)となると，両者の共起可能性は高くなる。

(92) ?*Bedauerlicherweise* wird es morgen *wahrscheinlich* regnen.
(残念ながらおそらく明日雨が降るだろう)　　(? = 意味的な容認度が低い)

しかし，この場合にも，*wahrscheinlich* が表す蓋然性が非常に高い場合に限られる。このように，等しくドイツ語の話法詞として分類される *wahrscheinlich* と *bedauerlicherweise* であっても，両者には違いが見られ，その分類には詳細な分析が求められる。

本研究では，このような話法詞内の区別に関するこれ以上の詳細は控え，上述のような分析によって，話法詞が，全般的に「命題的・真理条件的」であることを明示するに留める。そのうえで，次節以降で，心態詞が非真理条件的である点を述べ，その根拠を心態詞の心的態度が含意である点に求める。

3.5.3. 文演算子としての心態詞

3.5.2.1.で述べたとおり，中右 (1994)の用語を借りれば，ドイツ語の心態詞は「D モダリティ」に属すると考えられる。前節(82)で挙げた中右(1994)による S モダリティと D モダリティの判別基準に従うと，「D モダリティは談話要因を基に発話のありかた，ひいては伝達様式を限定する」。益岡 他 (2001[2]: 12)でも，「モダリティは，大きく命題めあてのモダリテ

[38] 日本語の「残念ながら昨日雨が降ったのだろう」という文は，例えば，„Gestern hat es ja wahrscheinlich geregnet, und das wäre sehr bedauerlich.“や„Wenn es gestern, was wahrscheinlich ist, wirklich geregnet hat, würde ich es bedauern.“など，事態が„wahrscheinlich“(蓋然的)であることから，「残念である」(bedauerlich, bedauern)という話し手の認識表現に対して接続法Ⅱ式が用いられる。また，„Gestern soll es ja wohl geregnet haben. Das ist wirklich schade.“や„Bedauerlicherweise soll es ja wohl gestern geregnet haben.“など他にも可能性があると思われる。ただし，これらの例で興味深いのは，蓋然性の表現として，認識的用法の話法助動詞 *sollen*，ならびに，„wahrscheinlich“ではなく„wohl“が用いられる点にある。

ィと発話・伝達のモダリティの 2 種に分けられる。[...]発話・伝達のモダリティとは，文をめぐっての発話時における話し手の発話・伝達的態度のあり方，つまり言語活動の基本的単位である文が，どのようなタイプの発話－伝達的役割・機能を担っているかを表したものである」と説明される。(82)の②で「D モダリティは発話態度である」とされ，「発話態度とは，一定の談話コンテクストのもと話し手がみずからの発話行為についていだく何らかの意識(意図，姿勢)のことである」(中右 1994: 41)という点に基づくと，D モダリティが，発話行為レベル(命題に対して話者が意図する意味(Sprecherbedeutung)のレベル)と関係するモダリティであり，Zaefferer (2001)の用語では，„illocutionary modalities“のことを指すものと考えられる。このようなモダリティは，「命題めあてのモダリティ」や「命題態度」などと対置して区別される点からわかるとおり，命題に対して直接作用しない。この関連を示唆したのが先の(85)である。しかし，(82)の④で「D モダリティは構文意味の全体，つまり S モダリティ＋全体命題を作用域とする」という点，また，例えば発話行為を形成する３つの行為のうちの１つが「命題行為」(propositional act)(Searle 1969)である点，あるいは発話行為の適切性条件(felicity conditions)(Searle 1979)のなかに「命題内容条件」(propositional content conditions)が組み込まれているといった点をふまえても，発話行為レベルのモダリティが，「命題」と全く無関係であるとは言えないであろう。では，心態詞と命題の関係はいかに捉えられるであろうか。

ドイツ語の心態詞と話法詞は，少なくとも，命題に対する話者の心的評価を表すという点では共通している。例えば，下記(93a)では，「雨が降ったことはあなたも知っているはずである」という聞き手に対する話し手の心的な働きかけが読み取れ，(93b)では，「もし雨が降ったことが真であるなら，それは想定外の事態である」といった話し手の判断，(93c)では，「もし雨が降ったことが真であるなら，それは好ましい事態である」といった話し手の評価が表される。このような働きかけや判断，評価などを，まとめて「話し手の心的態度」(Sprechereinstellung)と称する場合，「態度オペレータ」(Einstellungsoperator)(Helbig 1984: 112)として機能する話法詞との違いは，それほど明確であるように思えない。

(93) a. Es regnete *ja* gestern. (昨日雨が降ったじゃないか)

b. Regnete es *etwa* gestern? (まさか昨日雨が降ったの？)

c. Wenn es *bloß* gestern geregnet hätte! (昨日雨さえ降っていたらなあ)

先に，(85)で挙げた例に基づき，心態詞は dass-節を補部にとることはなく，命題に直接作用することで，主観的な態度を客観的に表すことができず，心態詞は純粋に文演算子としての機能しかもたないとした。例えば，(85)のような dass-節を伴う言換えとして，(93a-c)を下記(94a-c)のように表したとしても，本来，語彙的意味をもたない心態詞の意味を，たとえ近似的であるとはいえ語彙的な表現で言い換えることは，循環論であるばかりか，当然，心態詞と話法詞の明確な区別を提供するには不十分であろう。

(94) a. Dass Sie wissen, dass es gestern regnete, ist mir bekannt.

（昨日，雨が降ったことをあなたが知っていることを私は知っている）

b. Wenn es wahr ist, dass es gestern regnete, dann hatte ich das nicht erwartet.

（昨日，雨が降ったことが真であるならば，そのことは私には想定外である）

c. Wenn es wahr ist, dass es gestern regnete, dann ist das mir sehr recht.

（昨日，雨が降ったことが真であるならば，そのことは私には好ましい）

そこで，まず心態詞と話法詞の作用域の違いを考えてみる。„Abtönungspartikeln beziehen sich auf den ganzen Satz.“（心態詞は，文全体を作用域にとる）ということを，本研究では心態詞の必要条件としたが，この点をふまえると，屈折句(IP)ないしは時制句(TP)を命題とみなす伝統的な統語論的観点にたてば，（後述するが）その領域に命題(TP)が含まれることになる。そのうえで，先述したとおり，話法詞が命題に作用して同時に１つの命題を産出することを考慮すると，心態詞は，話法詞によって産出された命題(TP)を作用域にとりうることになる。事実, Bublitz（1978: 38）では，„Da die MPn [= Modalpartikeln] sich auf den gesamten Satz beziehen, ‘modifizieren’ sie auch die darin stehenden MW [= Modalwörter] (*Er hat ja möglicherweise Gelbsucht gehabt*.).“（心態詞は文全体を作用域にとるため，その文の中に現われている話法詞をも‘修飾する’（彼はひょっとしたら黄疸にかかってしまったんじゃないか））とある。例えば，下記(95)では，（*bedauerlicherweise* を挿入要素(Parenthese)とみなさない限りにおいて[39]）「『昨日雨が降った』という事態に対して，聞き手も『残念である』と思っている」と話し手がみなしている。

[39] 挿入要素とすると，「聞き手も残念であると思っている」という読みが排除され，聞き手との共有知識が，「昨日雨が降った(こと)」に限定されてしまう。

(95) *Bedauerlicherweise* regnete es *ja* gestern.（= Es regnete *ja bedauerlicherweise* gestern.）

（残念ながら昨日雨が降ったね）

この際，聞き手は「昨日雨が降った」という事実を認めつつ，その事態を「残念であるとはみなさない」と否定することができる（cf. Zwar regnete es gestern, aber das ist für mich nicht bedauerlich.（確かに昨日雨が降ったが，私にとってそれは残念なことではない））。ここでの話法詞の否定は，2.2.の（44）に挙げた引用のケースとしてであるが，重要なことは，この場合でも心態詞は否定の作用域に入らないということであり，この点で，話法詞と心態詞の相違が明らかになる。

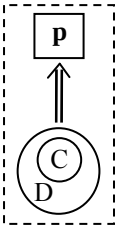
しかし，このような作用域の違いを論じたとして，「なぜ心態詞のみが非命題的であるか」という問いに答えるものではなく，心態詞の心的態度のみが非真理条件的である根拠を述べてはいない。そこで次節では，「なぜ心態詞のみが非命題的であるか」という説明によって，話法詞と心態詞の区別を試みる。

3.5.4.「含意」としての心的態度

本節では，心態詞が命題に対して反映させる態度が，話法詞や話法助動詞が表す態度と異なり「含意」（implicature/Implikatur）である点に求めることで，心態詞が「非命題的」（nicht-propositional）であると説明づける。その際，まず「心的態度」という概念について簡単に説明する。

例えば, Langacker（2004）によれば，（96）に示す二重矢印が心的態度を表すとされる。（96）におけるアルファベットの意味は右に記したとおりである。そのうち, C で表す概念化の主体とは，「その対象物・客体を捉えて概念化しようとする意識のありか（＝視点の位置）である」（澤田 2006: 98）。そして，その C から p への矢印が，「主体から客体に対する心的態度（＝力）（＝主体的モダリティ）」（ibid.）を表す。

(96)



p = 客体的な事柄（命題）
C = （概念化の）主体
D = 話し手の認識領域
C ⇒ **p** = 主体から客体に対する心的態度
（cf. Langacker 2004: 545; 澤田 2006: 99）

ここで，その主体的モダリティという観点からみてみると，例えば, Meibauer (2001[2]) によれば，(97) の表のように，モダリティのタイプは３つに大別される。このうち，ドイツ語で „Sprechereinstellung“（話者的態度）と呼ばれるものが「心的態度」を意味し，この分類に従う限りでは，心態詞，話法詞，話法助動詞（認識的解釈）のいずれもが，「非真理条件的」（nicht-propositional）という点で共通することになる。つまり，これらの品詞に属する語の表す心的態度には区別がなされないということである。しかし，これまで見てきたとおり，筆者は，心態詞と話法詞（話法助動詞の認識的解釈を含む）の間は，真理条件的か否かという点で明確に区別できると考え，その理由を「含意」という概念に求める。

(97)

Modalitätstypen（モダリティタイプ）		
Typ（タイプ）	Beispiel（例）	Propositionalität（真理条件的か否か）
Möglichkeit/Notwendigkeit （可能性／必然性）	X soll$_1$ kommen [deontisch] （X は来るべきだ [義務的]）	+ propositional （真理条件的）
Propositionale Einstellung （命題的態度）	X weiß, daß p （X は p であることを知っている）	+ propositional （真理条件的）
Sprechereinstellung **（話者的態度）**	**X kommt halt/hoffentlich** **（X はともかく／望むらくは来る）** **X soll$_2$ kommen [subjektiv-epistemisch]** **（X は来るそうだ [主観的-認識的]）**	**- propositional** **（非真理条件的）**

（Meibauer 2001[2]: 77）

例えば，心態詞を„Verknüpfungspartikel“（連結詞）と名付ける Becker（1976: 11）では，同じく連結機能をもつ„Konjunktion“（接続詞）との違いを，„Konjunktionen verknüpfen zwei ausdrücklich angeführte Äußerungen, während die Verknüpfungspartikel eine ausdrückliche Äußerung mit einer nichtausdrücklichen Äußerung vebinden.“（接続詞が明示的な発話間を結ぶのに対し，連結詞は明示的な発話と非明示的な発話を結ぶ）ことにあるとする。「非明示的な発話」として述べられているのが「含意」であることは明白であろう。

岩崎（1988: 12）では，「一般に話法詞には話し手が陳述内容をどのように判定評価しているかを表わす実質的な意味がそなわっているのに反して，心態詞の場合にはその意味がおおむね極度に稀薄化して，単に話し手のさまざまの心の動きを聞き手に伝えるシグナルのはたらきしかもたない」とある。このことは，岩崎（1998: xix）でさらに強調される：「＜話法詞＞の場合ならば，[...] まがりなりにもこれを日本語に訳すことができるが，＜心態詞＞

の場合には，これを翻訳することができないし，またむりにそうすべきでもない。そしてこの点こそが，＜話法詞＞と＜心態詞＞の最大の違いと言ってもいいだろう。訳語を与えることができないということは，＜心態詞＞には意味の実体がないということで，それがいわば＜心態詞＞の最大の特徴であり，別の言い方をすれば，＜心態詞＞は，単に話し手のそのときどきの心の動きを聞き手に伝えるいわばシグナルにすぎない」。ここでの「意味の稀薄化」や「意味の実体がない」といった記述は，「心態詞には語彙的な意味がないという想定」（König 1997: 58）に合致する（Iwasaki 1977: 66 も参照）。

本章の冒頭で挙げた（53）の記述では，心態詞が「非命題的である」ことを述べていたが，この結論は，「文の意味」という概念を「文の内包」と同定する立場にたつ場合にしか導かれない。なぜなら，「語彙的意味」のない対象は，内包レベルで扱うことができないからである。3.5.2.3.で扱った話法詞 *wahrscheinlich* や *bedauerlicherweise* などは，たとえ心態詞同様，話し手の評価や判断であっても，岩崎（1998）が指摘するとおり，少なくとも「おそらく～だろう，たぶん，どうも～らしい」や「残念ながら，あいにくなことに，気の毒にも」といった訳語を当てがうことが可能である。心態詞でも，例えば辞書を引くと，*ja* は「だって～ではないか」，*etwa* は「まさかと思うが」，*bloß* は「ただ，せめて」といった具合に記述されるが，これらの意味は，本来語彙化されるべきものではない。岩崎（1986: 35; 1988: 13; 1998: xixff.）において幾度も強調されることであるが，本来ドイツ語の心態詞に訳語を当てることは断念すべきなのである。先の（94a-c）で示した心態詞の表す話し手の態度（＝発話の意味）は，話法詞と異なり言語化されて明示されるものではない。そのため，Weydt（1969: 68）で挙げられた„Abtönungspartikel dienen dazu, die Stellung des Sprechers zum Gesagten auszudrücken.“（心態詞は，発話内容に対する話し手の態度を表明する）（= 14b）や，Helbig（1994[3]: 35）による „Sie [= Modalpartikeln] [...] drücken Einstellungen des Sprechers zur Proposition aus, [...]“（心態詞は，[...]命題に対する話し手の態度を表す）といった記述（Bublitz 1978; Doherty 1985: 15 も参照）は，厳密にいえば混乱を招く。本来，心態詞が示す態度は，„ausdrücken“（英: express, state（表明する，表現する））[40]という語で扱われる対象ではないからである。むしろ，Kemme（1979: 6），岩崎（1988; 1998）における„Signal“（シグナル），また Helbig（1994[3]: 35）における „signalisieren“（合図する）という語が最適である。従って，本研究では（17h）において，意図的

[40] 中條（2006）によれば，動詞 *ausdrücken* の意味は次のように述べられる：表現する，一定のやり方で言葉に出して言う，しかもひとりでに口をついて出るというニュアンスをもっている（ibid.: 105）。もとは，押し出す意味であった。一定の言葉で，また一定の方法で定義づける，表現する，考えや感情を言葉ではっきり悟らせる，言い表す（ibid.: 150）。（下線は筒井による）

に„signalisieren/implizieren“という語を用い，訳語を「含意する」とした。さらに，この語用論的特徴を，心態詞の必要条件の１つとみなした。なぜなら，「含意」はその真偽を問われることがありえないため，この特徴こそが，「心態詞は，文の真理条件に関与しない（17f）」という必要条件を裏付ける根拠となるからである。心態詞をともなう発話によって，話し手が聞き手に働きかける態度とは，意味最小限主義に則った本研究の立場では，当該の心態詞の基本的意味から導出される含意である。それゆえ，その意図の根底にある基本的意味も，当然，表層において意味的に明示される対象ではない。この点において，心態詞は非命題的であり，このことが，同じく話し手の心的評価を表す話法詞と，完全に区別される明確な基準となる。

では，ここで，「含意」という概念について述べる。3.4.において，「文の内包」を「命題」と同定し，「命題」とは，「ある文の真理値を指示する関数であり，その文が真となる可能世界の集合である」と定義した。つまり，真理値を担っているのは「文」そのものではなく「命題」ということになる。これをふまえて，命題と命題の関係を考えてみたい。例えば，下記（98a）の表す命題は，（98b）の表す命題を論理的に含意する。

(98) a. 広島大学がベルリンにあり，かつ，小泉純一郎はドイツ人である。
b. 小泉純一郎はドイツ人である。

もちろん，（98a, b）は事実に反しており真理値は偽である。しかし，両命題間の論理的な含意関係には齟齬をきたさない。このような命題間の関係を表す意味を「含意」（implication）という。ただ，一口に「含意」といっても，少なくとも３つの種類に大別される。論理的含意（logical implication），意味論的含意（entailment），語用論的含意（pragmatic implication）である。（98）を例に挙げた含意は，このうちの論理的含意に相当する。論理的含意は，論理語（「P かつ Q」や「もし P ならば Q」など）に関係する演繹規則だけに依存する。つまり，（98a）が真であれば，（98b）も真であるという関係が成り立つ。

では，意味論的含意と語用論的含意はどのようなものか。まず，意味論的含意に関して，下記（99）を見てみる。

(99) a. 友子は一人っ子である。
b. 友子には兄弟姉妹がいない。

(99a)が真であれば，(99b)も必ず真である／偽でありえない。この時点では，論理的含意と同じであるかに見える。しかし，ここで重要なことは，(99a)が(99b)の含意を導く理由が，「一人っ子」という日本語の表現の意味に依拠している点である。先の(98)では，それぞれの命題の真偽を問わず，(98a)は(98b)を必ず含意するのであったが，(99)では，語彙的意味に従って初めて命題間の含意関係が成立する。このように，真理条件的な語の意味に関係する演繹規則から導かれる含意を「意味論的含意」と呼ぶ。

続いて，語用論的含意を説明する。語用論的含意には，いくつかのアプローチがあり，意味論的含意との境界が明確でないようなものもある。しかし，そのうち「文脈的含意／コンテクスト的含意」(contextual implication)と呼ばれる含意は，語用論的含意の典型であり，非常に重要な概念であるといえる。この含意は，命題間の関係をコンテクストに依存して決定づけるものである。例えば，下記(100)の対話例において，太郎は友子の発話を受け，通常は(101)のように解釈すると考えられる。

(100) 太郎: 明日，一緒に映画に行かない？
友子: 明後日，ドイツ語のテストなの。

(101) 友子は，明日，太郎と一緒に映画に行かない。

ここで肝心なのは，実際に太郎が(101)の解釈を行ったと仮定した場合，その際，太郎の念頭には(102a-e)のようなコンテクスト情報があったと仮定される点にある(cf. 田窪 他 2001[2]: 16)。

(102) a. 友子は，テストで良い点を取りたいと思っている。
b. テストで良い点を取るには，相応の勉強をしておかなければならない。
c. テストの前日も，そのための準備に当てるべきである。
d. 映画に行くことは，相当の時間を要する。
e. テストの前日に映画に行けば，テスト準備の時間が失われる。

この際,（100）の友子の発話から,「明後日, 友子はドイツ語のテストを受ける」ということを導いたうえで, この命題が,（101）の命題を論理的あるいは意味論的に含意することはない。あくまでも,（102）のようなコンテクストと結びついて, 初めて（101）が導かれる。このことは,（102）の代わりに, 例えば,「友子は, テストの前日はいつも遊びに出かけることで, 心身をリラックスさせて良い点を取る」というコンテクストを仮定すると,（100）の友子の発話が, 肯定の応答として解釈される蓋然性を高める点からもうかがえよう。このように, コンテクストと関係する演繹規則から生み出される含意が「文脈的含意」である。語用論モデルの先駆者である H. P. Grice（1967: 1975, 1989 で刊行）は, この文脈的含意の原理を,「推論モデル」（inferential model）[41]として捉え, 1 つのコミュニケーション理論を提唱した。そこで, 次節では, この Grice による理論を紹介する。心態詞の心的態度として本研究で扱う「含意」が, この理論における含意のうちの 1 つと関係するからである。

3.5.4.1. Grice の理論

„implicature“は Grice による造語である。おそらく動詞 *implicate* から作られた語で,「im-『中に』＋plicate『折る, 曲げる』からできており,『（意味を）折り込む』が原義である」（小泉 2001: 36）。先に論理的含意（logical implication）を紹介したが, 語用論的含意（pragmatic implication）という場合でも, „implication“という語に違いは見られない。そこで, この „implication“との区別を図る意味でも, „implicature“という術語をあてがう利点がある。この „implicature“の日本語訳に関しては,「含意」の他に「推意」という訳語が定着しつつある[42]。その最大の理由は, 意味論的含意（entailment）も語用論的含意も, ともに推論（inference）に違いないが, 前者は語の意味から導かれるのに対し, 後者はコンテクストと照らした聞き手

[41] このモデルは,「コミュニケーション理論は, 話し手の伝達意図の推測を聞き手側で可能にさせる原理を探究するものである」（田窪 他 2001[2]: 19）という考えに依るもので, Grice 以前の考えであった「コードモデル」（code model）と区別される。コードモデルとは,「話し手が, 自らの思考を発話としてコード化し, 聞き手は, そのコードを解読して話し手の思考内容を復元する」というものである。

[42] 関連性理論では, Grice における„implicature“の訳を「含意」, 関連性理論におけるそれを「推意」とすることで区別する場合が多い。また, 同理論では, „implicature“に対して, „explicature“という用語を産出し, こちらを「明意」と訳すことに準じて, „implicature“に「暗意」という訳語をあてる場合もある。

による推論の過程を経て導かれる点にある。また，このような弁別理由の他にも，例えばThomas（1995 の邦訳: 64ff.）が指摘するように，「本来，『含みをもたせること』と『推論を行うこと』は似て非なるものである」という見方もある。「『含意する』というのは，示唆する，ほのめかす，あるいは言語を使ってある意味を間接的に伝えること」（Thomas 1995 の邦訳: 65）で，「『推論する』というのは，証拠[…]から何かを推理によって導き出すことである」（ibid.）。つまり，前者は話し手側の作業であり，後者は聞き手側で産出されるものである。これらの点をふまえ，本研究では，「心態詞の心的態度を『含意』とみなす」というとき，それは，各心態詞を使用することによって，話し手が意図する態度であることを指すものとする。そして，以下 Grice の理論を紹介するにあたり，便宜上，„implicature“を「含意」と訳し， 後述する関連性理論で用いられる„implicature“には, Grice のそれと意を異にするため，「推意」という訳語をあてる。

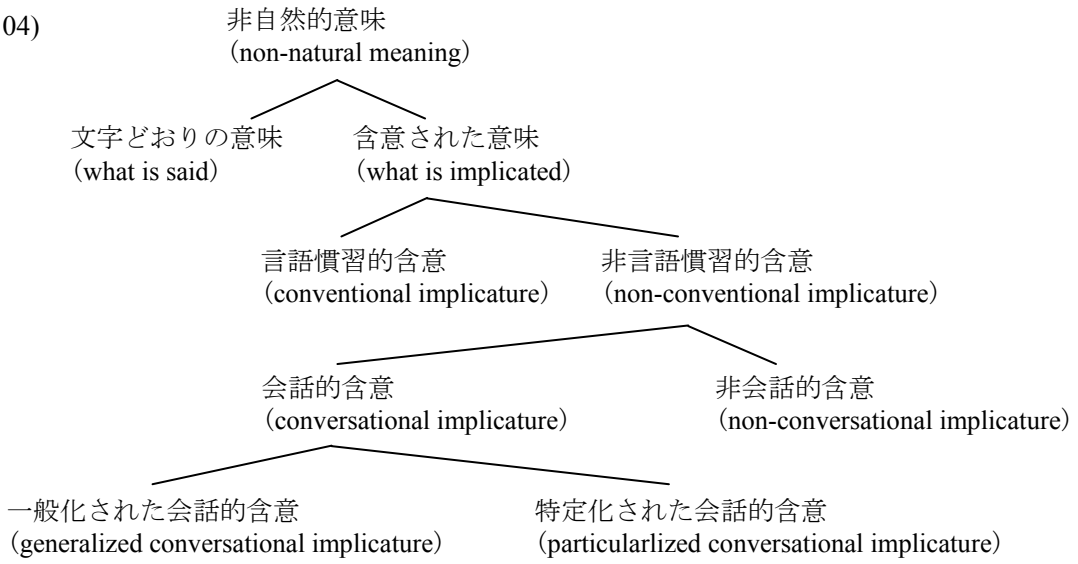
Grice は，言語の意味を，まず「自然的意味」（natural meaning）と「非自然的意味」（non-natural meaning）に分け，（103）の *mean* が表す意味が前者を指し，後者は，発話によって話し手が意味した意味を指すとした。

(103) Those spots *mean* measles.（高原 他 2002: 62）

そのうえで，発話によって表される非自然的意味には，「文字どおりの意味」（what is said）と「含意された意味」（what is implicated）があると指摘する。さらに，この「含意された意味」は, Grice によって「言語慣習的含意／規約的含意」（conventional implicature）と「非言語慣習的含意／非規約的含意」（non-conventional implicature）に区別される。そして，非言語慣習的含意は,「会話的含意」（conversational implicature）と,「非会話的含意」（non-conversational implicature）[43]に分けられ，最後に，会話的含意には，「一般化された会話的含意」（generalized conversational implicature）と「特定化された会話的含意」（particularlized conversational implicature）があるとされる。以上を,（104）の図にまとめる。

[43] 「非会話的含意は『審美的，社会的，道徳的性格を持つもの』（Grice 1957: 47）である非会話的公準に照らし合わせて生まれるものであり，その一つが Be polite.という公準である」（高原 他 2002: 74，注釈 21）。

(104)



（高原 他 2002 から修正引用）

Grice の理論では，この中で特に会話的含意の解明が論点となる。前節（100）を例に述べた文脈的含意も，会話的含意の下位類である「特定化された会話的含意」を指す。本研究では，この「特定化された会話的含意」に注目するわけではないが, Grice 理論に触れるうえで，必ず押さえておくべき１つの原則と４つの格率のみ簡単に記しておく。Grice は，会話による含意が解釈される原理を説明するために，「協調の原則」（Cooperative Principle）と呼ばれる（105）のような基本原則／一般原則を導入した。

(105) Cooperative Principle（協調の原則）

Make your contribution such as is required, at the stage at which it occurs, by the accepted purpose or direction of the talk exchange in which you are engaged.

［会話における自分の貢献を，それが生じる時点において，自分が参加している話のやりとりの中で含意されている目的や方向性から要求されるようなものにせよ］

（訳は今井（2001: 190）を引用）

ここで，「貢献」（contribution）とされているのは「発話」のことを指す。さらに, Grice は,（カントによる判断の４つのカテゴリーにならい）（105）の原則に適うような結果を得るための４つの格率[44]（maxims）を提案した。

[44] 文献によっては，「公理」，「公準」,「行動原理／行動指針」と訳される場合もある。

(106) **量の格率（Maxim of Quantity）**

(i) Make your contribution as informative as is required for the current purposes of the exchange.

［あなたの貢献を，当のやりとりのその場の目的のために必要なだけの情報を与えるようなものにせよ］

(ii) Do not make your contribution more informative than is required.

［あなたの貢献を余分な情報を与えるようなものにするな］

質の格率（Maxim of Quality）

Try to make your contribution one that is true, specifically:

［あなたの貢献を真であるものにすべく努めよ，とりわけ］:

(i) do not say what you believe to be false.［偽りであると思っていることを言うな］

(ii) do not say that for which you lack adequate evidence.

［十分な証拠のないことを言うな］

関係の格率（Maxim of Relation）

Make your contribution relevant.［あなたの貢献を関連のあるものにせよ］

様態の格率（Maxim of Manner）

Be perspicuous:［明快な言い方をせよ］:

(i) avoid obscurity.［不明遼な言い方を避けよ］

(ii) avoid ambiguity.［あいまいな言い方を避けよ］

(iii) be brief.［簡潔な言い方をせよ］

(iv) be orderly.［順序だった言い方をせよ］　　（訳は小泉（2001: 39ff.）を引用）

先の協調の原則も，これらの４つの格率も，ともに「命令文」で記されているが，決して「これらの格率に従った話し方をせよ」と述べているのではなく，「人と人との間の会話は，一定の規則性が（特にそれに反することが示されない限り）維持されているという了解のもとに行われる」（Thomas 1995 の邦訳: 68）というのが Grice の意図である。そして，「発話を解釈する際，聞き手は，＜話し手が協調の原則および格率を順守しているはずだ＞と仮定することによって，この仮定と矛盾しない解釈を選択できる」（田窪 他 20012: 22）と考えられ，「そのような解釈を選択する過程で，聞き手は，＜話し手は，文字通り言われていることと

は別の情報を伝達しようとしている＞と想定せざるをえないばあいが生じる」(ibid.)。この場合の, 話し手による別の情報というのが「会話的含意」に相当する。

さて, 本節で注目するのは, 上記(104)の図における「言語慣習的含意」(conventional implicature)と呼ばれる含意である。図からわかるとおり, この含意は, 等しく「含意」ではあっても, 会話的含意とは異なるものである。「言語慣習的含意」は, 「単語の意味としてコード化されているが, 真理条件に関与しないもの」(東森・吉村 2003: 27)を指す。例えば, 下記(107)の例を見てみる。

(107) a. It's Christmas Eve but the shops are empty.

b. The two states of affairs described in (a) are contrasted in some way.(田窪 他 2001[2]: 32)

この際, (107a)と(107b)の関係は, 先に示した会話的含意ではない。なぜなら, 「(a)から(b)の導出にあたって, Grice の協調の原則や格率はいっさい効いてこないからである」(田窪 他 2001[2]: 33)。むしろ, ここでは *but* の表す言語的意味／語彙的意味が関与している。だからといって, 「意味論的含意」でもない。「よく知られているように, S_1 but S_2 の真理条件は, S_1 and S_2 と同じであって, *but* 自体が担っている言語的意味[(107b)]は, [(107a)]の真理条件にはいっさい寄与しない」(ibid.)。従って, *but* は非真理条件的意味を担うのである。このように, 語彙的な意味が関与しているにも関わらず, 非真理条件的な意味を担う語には, 他に, *therefore*[45], *even*, *yet*, *so* などが属すると考えられ, これらの語を伴う文から導かれる含意が「言語慣習的含意」と呼ばれる。つまり, 言語慣習的含意は, 「非真理条件的意味でありながら, Grice の格率によっては算定できず, 言語的にコード化された意味のある側面を指すのである」(田窪 他 2001[2]: 34)。さらに, Grice (1989) では, 「高次発話行為」(higher-order speech acts)という概念によって, 下記(108)における *so* の表す意味を説明する。

(108) The sun is shining, so Bill is happy.

---

[45] *therefore* の例文:
a. He is an Englishman; he is, therefore, brave.
b. His being brave is a consequence of his being an Englishman.
この際, 「a と b との関係については, 真理条件的ではないか, というデータ面での Grice 批判もある」(田窪 2001[2]: 33)。

Grice は，(108)における中心的な発話行為と副次的な発話行為を二段階に分け，„The sun is shining.“と„Bill is happy.“という「陳述」を表す２つの中心的な発話行為（第 1 段階）の関係を，もう一つの段階で，*so* が「説明」していると捉える。つまり，この副次的な発話行為の情報を担うのが *so* であり，この点から，言語慣習的含意が非真理条件的であることを裏づける（cf. 田窪 他 2001[2]: 34）。

本研究では，心態詞の心的態度を導出する前段階として，まず，心態詞とその同音異義語に共通する意味，つまり基本的意味（Grundbedeutung）を，例えば心態詞 *aber* の場合には，以上述べた言語慣習的含意の捉え方に求める。ここで注意を要するのは，本研究では，基本的意味と心的態度を同一の概念として扱わない点にある。例えば，心態詞 *aber* の基本的意味を，上記（107b）を参照して，「２つの命題間における何らかの矛盾または不一致を含意すること」あるいは「その後に続く命題内容が，その前の命題内容からして予想外のことである」（cf. Thomas 1995 の邦訳: 63ff.）[46]という意味として抽出し，この意味を，意味最小限主義の立場から，心態詞 *aber* と接続詞 *aber* に共通する基本的意味に適用したとする。ここで基本的意味というのは，心態詞としての *aber* にも，接続詞としての *aber* にも共通するいわば「核」となる意味を指す。そのうえで，この意味を心態詞 *aber* の心的態度として捉えたとすると，接続詞 *aber* にも，共通する意味的核として「心的態度」が付随することになる。つまり，心態詞の機能を「心的態度表明」に見い出す意味最小限主義的な本研究の立場において，本来，心態詞にのみ観察されるべき話し手の心的態度が，その同音異義語（接続詞（*aber*, *denn*）や，応答詞（*ja*, *doch*, *eben*）など）にまで付随してしまうことになる。そこで，心態詞とその同音異義語に共通する含意を，両者の基本的意味／抽象的意味として求めるまでは良いが，心態詞では，その基本的意味から，さらに「機能的な意味」としての心的態度が派生すると考える。

では，例えば心態詞 *aber* の心的態度は何であろうか。結論からいえば，「当該の語を伴う命題内容と，その命題に対する話し手の想定が矛盾するもの（その想定の範囲を超えたもの）であるとして，前者の話し手の想定を削除して解釈せよ」という認知効果に対する制約（既存想定の取り消し）ということになる。ここで，「～解釈せよ」としているのは，そのような「要求」をしているという意味ではない。筆者は，心態詞がとりわけ対話（Dialog）で用いられる点に注目し，心態詞の表す心的態度が，主に聞き手に対する「働きかけ」であると

[46] 岡本（1983: 57）では，「期待の否定」の含意として扱われる。

みなし，この点で，いわば静的な意味である「基本的意味」と区別する。

上に挙げた心態詞 *aber* の心的態度は，Grice の理論を発展させた語用論的アプローチである関連性理論における分析を応用したものである。Grice による言語慣習的含意の見方は，「基本的に *but*, *therefore*, *even*, *yet*, *so* などの語の意味を概念的（conceptual）にとらえるアプローチ」（田窪 2001[2]: 34）であるが，関連性理論では，これらの語の意味を手続き的（procedural）に捉えるアプローチに見い出される。そこで，次節では，この関連性理論の立場から，Grice において言語慣習的含意とみなされた語群に関する新たな見解を紹介する。ここで話題となるのは，「概念的コード化」と「手続き的コード化」という観点である。

3.5.4.2.「手続き的コード化」としての心的態度

3.3.1.で紹介したとおり，関連性理論における「命題」の概念は「表出命題（表意）」と呼ばれ，「表意の形成には，言語的意味の解読だけでなく，『一義化』（disambiguation），『飽和』（saturation），『自由拡充』（free enrichment），『アドホック概念形成』（ad hoc concept construction）という４つの語用論的プロセスが関わる」（東森・吉村 2003: 32）のであった。ここでは，それらの操作に関する詳述は控えるが，重要なのは，同理論における表意の形成には，Grice の理論で「含意」とみなされる作業が関わっていることである[47]。同理論において，表意は「基本表意」（base-level explicature/lower-level explicature）と「高次表意」（higher-level explicature）に区別され，例えば，仮に（109）の Mary の発話の表出命題（基本表意）が（110a）だとした場合に，そこから導かれうる（110b-d）のような高次表意をも含まれるものである。

(109) Peter: Can you help me?

Mary: (Sadly) I can't.（Wilson/Sperber 1993: 5）

(110) a. Mary can't help Peter to find a job.

b. Mary says she can't help Peter to find a job.

c. Mary believes she can't help Peter to find a job.

d. Mary regrets that she can't help Peter to find a job.（ibid.）

[47] 従って，関連性理論における「推意」（implicature）も，Grice 理論における「含意」（implicature）と完全に重なる概念ではない。関連性理論における「推意」は，Grice の「特定化された会話的含意」のみに相当する。

「このとき，メアリーの発話の言語的特性が復元の助けになっているので，(110a)の表出命題だけでなく，(110b-d)の高次表意も言語的に伝達されていると見なされる」(東森･吉村 2003: 73)。そして，一般に基本表意だけが真理条件に貢献し，高次表意は非真理条件的であると考えられている。従って，3.3.1.で述べたとおり，高次表意に貢献する(111a-d)の発語内行為副詞(illocutionary adverbial)(frankly, confidentially)や態度副詞(attitudinal adverbial)(happily, unfortunately)は，真理条件に貢献しないとされる。

(111) = (77) a. Frankly, I'm unimpressed.

b. Confidentially, she won't pass the exam.

c. Happily, Mary's son visited her this weekend.

d. Unfortunately, I missed the train.(Carston 2000: 11)

しかし，ここで「注意すべきことは，これらの表現は，当の発話の真理条件には寄与しないものの，それ自体では世界の事実・状態を特徴づける概念的情報を表示し，他の命題と含意関係・矛盾関係といった論理的関係をもちうる，という点である。したがって，この種の表現は，非真理条件的であっても，概念的意味(conceptual meaning)をコード化しており，高次表意の一部を構築している，とされる」(田窪 他 2001[2]: 51)[48]。

一方, Balkemore (1987)以降に代表される，「手続き的意味」(procedural meaning)に関する一連の研究は，概念的意味と異なる意味を担う言語表現の存在を明示した。「手続き的意味とは，概念表示をいかに操作し，処理するかについての指令である」(田窪 2001[2]: 51)。つまり，言語構造は基本的に，２つのタイプの情報をコード化していると予測される。１つは概念(または概念表示)であり，もう１つは，それらを操作する手続きである」(東森・吉村 2003: 76)。「Blakemore によれば，手続き的意味を有する典型的な表現は, *after all*, *moreover*, *but*, *so*, *therefore*, *now*, *well*, *however* などの談話連結詞(discourse connectives)である」(ibid.)。前節で, Grice の理論における *so* の解釈を紹介した。その際, Grice 理論では, *so* は二つの命題間に「説明」という副次的な発話行為を与えると説明したうえで, *so* のほか *but*, *therefore*, *even*, *yet* などの言語慣習的含意を表す語の意味を概念的に捉えるアプローチであると述べた。確かに，下記(112)におけるような *so* は，「話し手が『説明という発話行為を遂行している』ことを示し, (112a)は(112b)の説明として提示されている」(東森・吉村 2003: 84)。

[48] この点に関する詳細は，東森・吉村 (2003: 78ff.)を参照。

(112) a. It's raining.

b. So the grass is wet.（東森・吉村 2003: 84）

しかし，この分析は，例えば(113)のような例を取り上げただけでも問題をきたす。なぜなら，(113)のように，説明の対象となる前半の節が存在しない場合には適用できないからである。(113)は，妻が山ほどの買い物包みをもって帰宅したのを見た夫の発話である。

(113) So you've spent all your money.（Blakemore 1988: 189）

「この例では，妻がお金を使い切ってしまったという事実を，夫が『説明』しているのではなく，『山ほどの買い物包みをもって妻が帰宅した』という観察から，夫は『妻がお金を使い切ってしまった』という帰結を引き出しているのである」（東森・吉村 2003: 84）。「Blakemore (2000: 478) によれば，*so* は，*so* の後に続く発話が，(先行発話やその場の状況などの) 相互に顕在的だと仮定される情報によってアクセス可能になった想定から引き出される帰結になるような，そんな推論を，聞き手は遂行するべきだという情報をコード化している」（東森・吉村 2003: 89ff.）と分析される。同様に，*so* と同じく非真理条件的意味を担う *but* は，「その後続節によって(明示的または非明示的に)伝達される命題と，先行節(または先行状況)から派生される命題(推意)が矛盾し，先行節の推意が削除されるように後続節を処理せよという指示を聞き手に与える語である」（ibid.: 92）とされる。例えば，「[(114a)]の聞き手は，but に先行する she is a linguist を，[(114b)]のような文脈想定とともに推論の前提として，[(114c)]のような文脈含意を引き出す。そして，それが but に後続する she is quite intelligent という発話の表出命題と矛盾することによって，この第 1 節によって引き出された命題[(114c)]を削除するような処理(推論)の仕方をする。この処理の仕方が，but にコード化された手続き的情報であると考えられる」（東森・吉村 2003: 91）。

(114) a. She is a linguist, but she is quite intelligent.

b. All linguists are unintelligent.

c. She is not intelligent.（Blakemore 2000: 479）

このようにして，手続き的コード化は，聞き手が行う推論処理の仕方に制約を課し，「このような情報が話し手によって与えられることで，聞き手がとるべき推論の方法が指示され，無駄な労力を使わず効率よく意図された効果を得る助けになる。そういう意味で，発話の関連性に貢献するのである」（東森・吉村 2003: 85）[49]。

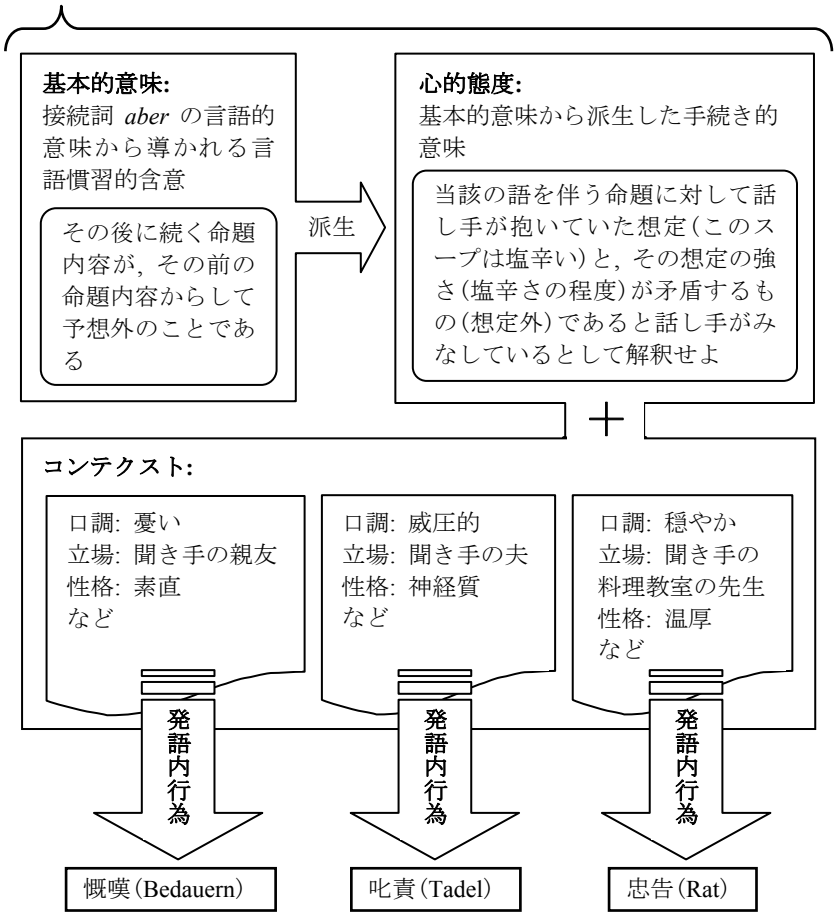
本研究では，Grice による言語慣習的含意の捉え方から移行して，心態詞の心的態度を，この「手続き的コード化」の考え方に求める。再度ここで強調しておくが，筆者は，心態詞およびその同音異義語に共通する基本的意味と，心態詞のみが表す心的態度を区別する。そして，例えば心態詞 *aber* の場合には，その基本的意味を Grice の言語慣習的含意に言及し，その基本的意味から派生する機能的意味としての心的態度を，関連性理論の分析法に求める。つまり，意味最小限主義的な立場から出発したうえで，意味最大限主義的な捉え方を応用する。このような考え方が，心態詞全般に通用するか否かは現段階では不明であり，その裏づけは今後の課題とせざるをえない。しかし，心態詞の基本的意味とその意味に依存するとみなす心的態度を区別し，ある 1 つの語に内在する概念的情報と手続き的情報の両方のコード化を仮定するこのような見方は，今後の心態詞研究に一石を投じるものとなりうる。このことは，後述する心態詞 *mal* の分析における重要な論点である。

さらに，ここではもう一つ留意すべき補足がある。先に，「本研究では，心態詞の心的態度を『含意』とみなし，その態度とは，各心態詞を使用することによって話し手が意図する態度である」としたが，筆者は，心態詞によるその態度を，文の叙法（Saztmodus）と制限的に結びついて文の命題に作用する発話行為的な関数として捉える。そして，最終的に，修辞表現やパラ言語といった言語的コンテクスト，あるいは文化的・社会的な変数，話し手の性格までをも含む状況的コンテクストとの関連で，一義的な発語内行為を決定する手がかりであるとみなす（第 5 章も参照）。以上をふまえ，心態詞 *aber* を例に，その全容を（115）でまとめる。

---

[49] この際，1 つ興味深い点を述べておく。以上のような概念的コード化と手続き的コード化という捉え方は，「＜概念的意味と手続き的意味＞の区別を，＜真理条件的意味と非真理条件的意味＞の区別と同一視すべきではない」（田窪 他 2001[2]: 53）ということをうかがわせる。先に，関連性理論で高次表意とみなされるような表現（ドイツ語の「話法詞」に相当）は，「非真理条件的であっても，概念的意味をコード化しており，高次表意の一部を構築している」と述べた。このことは，心態詞の心的態度を「手続き的コード化」に求めることで，同じく非真理条件的である話法詞との厳密な相違を見い出す結果をももたらす。本研究では，3.3.1.で述べたとおり，命題を真理条件意味論に従って導くことで，「命題＝真理条件的」という分析に則り，高次表意をも命題とみなす（話法詞を非真理条件的であるとする）関連性理論の立場とは相容れないとしたが，今述べたような観点において話法詞と心態詞の区別が可能になるのであれば，今後の心態詞研究において有意義な分析となりうる。

(115) ［ ***aber*** ＋感嘆文（(Satz-)Exklamativsatz）［p(Die Suppe ist salzig)（このスープは塩辛い）］］



以上の観点をふまえて，本研究では，心態詞 *mal* の心的態度の導出を試みるが，その具体的な考察は 4.5.2.で行うこととする。というのも，心態詞 *mal* の心的態度を導くには，その同音異義語を含めた，意味論的・語用論的な分析を経ることが不可欠だからである。

本章では，その前に解決しておくべきことが１つ残されている。本章で一貫して取り組んできた，心態詞と話法詞の区別という観点において，心態詞の心的態度を「含意」とみなし，「命題＝真理条件的」である点で両者を区別するとしたアプローチが，「命題」という概念との関わりにおいてもたらすさらなる問題である。

3.6. 本研究における「命題」の再考 －second approximation－

3.5.2.3.において，話法詞 *wahrscheinlich* と *bedauerlicherweise* の真理条件について言及し，これらの話法詞が「命題的，真理条件的」であることを説明した。その際，「認識的モダリティは，命題に作用して１つの命題を産出する」（cf. Krifka 1994）という観点に基づき，話法詞全般を命題成分の一部をなすものであると分析したが，このような考察は，ひとつ大き

な問題を抱えている。話法詞を命題的であると考えるのであれば，話法詞を含みこんだ「命題」は，それが「命題」である限りにおいて，理論上は疑問や否定の対象になると考えるのが当然である。しかし, 2.2.でも述べたとおり，一般に話法詞は疑問文と共起することもなければ，否定の対象になることもありえない。

(116) *Kommt er *vermutlich*/*leider*?（Helbig 1984: 108）

*Er kommt nicht *wahrscheinlich*/*leider*/*dummerweise*.（井口 1986: 52）

そこで，本節では「命題」の定義をより厳密に捉え直し，本研究における命題の概念を改めて提示する。これまでは，ひとまず命題を文の内包と同定し，文の内包が文の意味であることから，命題自体が文の意味であるとしてきた。

しかし，次節以降では，「思想」という概念に基づき，「命題」を「その文が真であるとみなされるあらゆる可能世界の集合」ではなく，「それぞれ真偽が問われうる可能世界の集合」と改める。その結果として，「話法詞を含みこんだ命題は真でも偽でもありえる概念であり，ゆえに疑問や否定のオペレータを許す」という説明を試みる。

3.6.1.「思想」の概念

3.1.1.において，「命題とは，ある文の真理値を指示する関数と定義され，命題 p は，［(117)］のように図示される関数 f として規定される」（郡司 他 2004: 46）ことを述べた。（(117)は(= (58)の再録)。

(117)

$$f\colon \begin{pmatrix} w_0 \rightarrow 1 \\ w_1 \rightarrow 1 \\ w_2 \rightarrow 0 \\ w_3 \rightarrow 1 \\ \vdots \end{pmatrix}$$

(117)に従えば，命題 p は，可能世界 w_0, w_1, w_3 に対しては必ず真を返すのであり，例えば同時点 t_1 において，可能世界 w_2 が真である可能性は排除されている。このことから，真理条件意味論や形式意味論においては，「命題は，当該の文が真となる可能世界の集合である」

として捉えられる。

しかし，例えば Lohnstein（2007）による指摘によれば，Searle（1969）が提示した発語内行為の論理形式 *F* (p)における命題 p は不変（invarient）ではなく，「文の効力」（sentencial force）としての「疑問」（y/n-interrogatives）や「断定」（declaratives）では，常に„p ¬p“が仮定される（cf. Lohnstein 2007: 75）。疑問文で考えれば明確であるが，本来，疑問文における命題は真でも偽でもありえず，その命題が真か偽かということ自体が問われている。そのため，命題は„p ¬p“で表され，論理記号でいえば，「真か偽か」を表す「∨」を，トリガーとしての疑問オペレータが担うことになる。このことは「断定」（ASSERT）においても同様で，「雨が降った」という断定は，「雨が降った（p）　雨が降らなかった（¬p）」という„p ¬p“に作用して，「雨が降った（p）」という *p* を真とする断定オペレータとして解釈される。この際，„p ¬p“とは，真理値を返す前段階である「思想」（Gedanke）を指し，「断定」はその「分別」（judgement）を意味すると考えられる（cf. 黒田・野本 2006[2]: 199, 209; Lohnstein 2007: 75）。

ここでは, Lohnstein（2007）の分析の詳細な引用は控えるが，この「命題の二裂性」（bipartition）に従えば，「命題」は，常に「真でも偽でもありえる」のであり，「文の内包を満たす世界の集合」（吉田 他 2001）であったり，「その文を真たらしめるあらゆる状況の集合」（Meibauer 2002），あるいは「その文が真であるための世界」（Wittgenstein 1921）であったりする必要はないことになる。例えば，（118）で示すように，„Peter kommt.“（Peter は来る）という命題は，あらゆる可能世界において真でも偽でもありえる。

(118)　kommen (Peter)　　¬kommen (Peter)[50]

　　p　　¬p

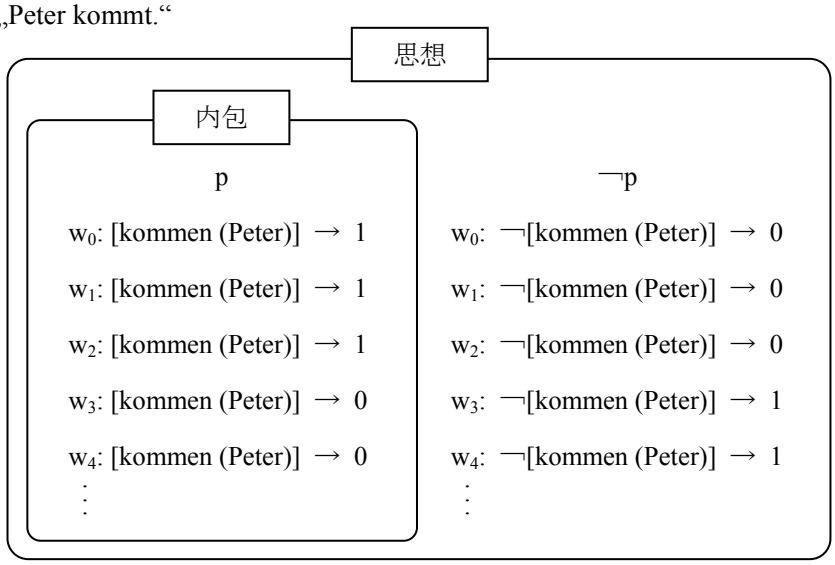
このような命題の捉え方は, Frege による「思想」（Gedanke）（黒田/野本 2006[2]: 199, 208ff）の概念に相当するものである。下記（119）は，「思想」に関する Frege の説明である。

[50] ここでは，命令文をふまえて，意図的に時制を含まない表記としたが，平叙文や疑問文における命題は，時制を含むものとして捉えた上で，その真偽判断がなされていない上に，断定や疑問のオペレータが係る前の段階である。ちなみに，命令文における命題は，次のような意味表示によって解釈されると考えられる: λt [[p ¬p] at t]

(119) そもそも真理が問題になりうるあるものを，私は思想（Gedanke）と称する。だから偽であるものも真であるものと同様に，私は思想とみなす。従って私は，思想が文の意義であると言いうる。ただし，そのことによって，どの文の意義も思想であると主張しようというのではない。それ自体は非感性的な思想が，文という感性的な衣装を纏い，そのことによって我々に一層理解しやすくなる。文は１つの思想を表現する，と我々は言う。（黒田/野本 2006[2]: 199, 207）　（下線は筒井による）

（119）に従うと，先に挙げた„Peter kommt.“（Peter は来る）という文は，（120）のような思想の１つを表現したものと解釈される。

(120) „Peter kommt.“



3.6.2.「命題」の再定義

本研究では，「命題」を上記で述べた「思想」の概念と同定し，(121)のように再定義する。

(121) 文の命題は，あらゆる時点において，同一の可能世界に対して，それぞれ真偽が問われうる可能世界の集合である。

[Die Proposition eines Satzes ist die Menge aller möglichen Welten, die zu allen Zeitpunkten zu derselben möglichen Welt jeweilig wahrheitsfunktional sein kann.]

そのうえで，「文（平叙文）の意味」に関しては，これまで述べてきたとおり「文の内包」であるとして，(122)のように定義する。（123a, b）は，本研究における「文の命題」と「文の意

味」の表記である。

(122) 文の意味は，あらゆる時点において，その文を真たらしめるあらゆる可能世界の集合である。

[Die Bedeutung eines Satzes entspricht der Menge aller möglichen Welten, die zu allen Zeitpunkten diesen Satz wahr machen.]

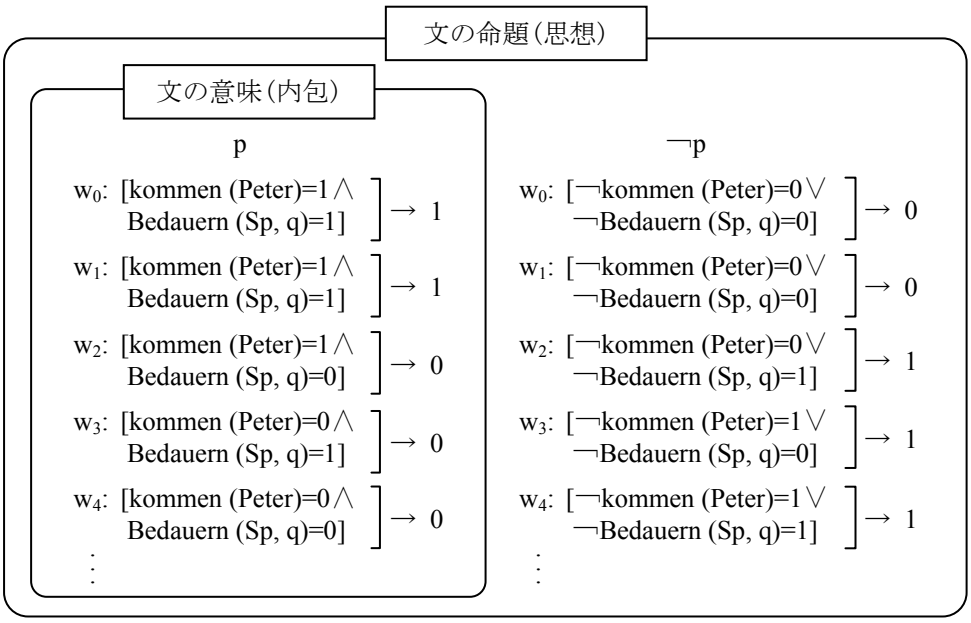
(123) a. 文の命題: $p_{(w, t)}$ $\neg p_{(w, t)}$

b. 文の意味（内包）: $p_{(w, t)}$

c. 文の外延: $p_{(w_1, t_1)}$ （p = Proposition, w = world, t = time）

上記（121）における命題の定義に基づくことで，例えば„*Leider* kommt Peter.“（残念ながら Peter は来る）という話法詞を含みこんだ命題が，否定の対象になりうることも説明がつく。下記（124）で示されているのは，例えば，可能世界（w_0, w_1）において，「話し手が, Peter が来ることを残念であるとみなしている」ことが真でありうる場合，同時に，「話し手が, Peter が来ることを残念であるとみなしていることはない」世界（w_3）も真でありうるということである。

(124) „Leider kommt Peter“の文の命題（= 外枠）と文の意味（= 内枠）:



（Sp = Sprecher, q = kommen (Peter)）

同様に，この„p ¬p“が疑問の対象になりうることも，命題の二裂性を認めることで説明できよう。(124)に従えば，„Kommt Peter leider?“という疑問文も，„Nicht leider kommt Peter.“という否定文も，実際の発話としては本来使用されないものの，意味論的には問題がない。話法詞が疑問文と共起しえないという考察は，命題とモダリティを二極構造として捉え，命題を内包と同定する場合に導かれる結論である。しかし，「思想」を「命題」として扱うことで，[kommen (Peter)]に対しても，[leider (Sp, (kommen (Peter))]に対しても„p ¬p“が想定される。従って，„Kommt Peter leider?“という発話は意味的には成り立つことになる。「Peterが来ること(q)」に対して，話し手が「残念であると思っている(p)　残念であると思っていない(¬p)」という思想があり，そのいずれかを質問する場合である。とはいえ，当然ここで問題になるのは，第一に，それが聞き手に対する質問であれば，他人が話し手本人の感情に対して返答することはできないという点，第二に，たとえそれが自問であったとしても，その場合には，話し手が自らの感情について，自身が返答できない可能性があるという非常識的な点である。しかし，例えばゲームやクイズなどで，自己判別のできる人間が「私は誰でしょう」と問うことは可能であり，このことは，「私は筒井友弥である(p)　私は筒井友弥でない(¬p)」という命題(思想)が成り立っていることを示している。そのため，„Kommt Peter leider?“といった自己矛盾をきたしうる発話が，実際のコミュニケーションの場で遂行されないのは，単に，そのコンテクストが，ゲームやクイズといった特殊な場ではないためにすぎない。

また，[leider (Sp, (kommen (Peter))]の真偽を問うことが，意味的に可能であるということは，否定文„Nicht leider kommt Peter.“で考えてみるとより明白である。事実，話し手は，思想段階で¬[Leider kommt Peter]と思考しながらも，„Leider kommt Peter.“という発話を選択することは日常的である。そのうえで，実際に陳述発話が遂行された場合，そのとき初めて断定オペレータが作用した段階であるとみなされる。それゆえ，意味的には„Nicht leider kommt Peter.“という否定文は構築されうる。しかし，「『残念ながらPeterが来る』ということはない」と思考している話し手が，このこと自体を発話することは，2.2.の(44)で挙げた引用のケースでない限り[51]，本来意味をなさない。「Peterが来ることは残念である」という聞き手との共通の前提もなしに，話し手自身にしかわかりえない思考過程に基づき，「『残念ながらPeterが来る』という評価を聞き手に伝えずして，『残念ながらPeterが来る』という評価は否である」という評価を伝えられても，その発話を解釈することはでき

[51] 例えば，「Peterが来ることは『残念』ではなく『悲惨』である」のような場合。

ない。

以上，話法詞を「命題的，真理条件的」とみなす本研究の立場から，これまで，「疑問や否定の対象にならない」と考えられてきた話法詞の特徴に関して，命題の概念を捉えなおす必要性を述べ，さらに，その問題点を克服するため，「思想」という概念を引き合いにだすことで，その改善案（Alternative）を提示した。

3.7. 第 3 章のまとめ

「心態詞は命題に関与しない」。このことは，心態詞に関するあらゆる文献で述べられることである。しかし，ここで言われる「命題」がどのような概念として扱われているかはほとんど述べられない。言語学の分野において，もはや逐一の説明が必要ないということであろうか。しかし，本章で取り挙げたとおり，等しく「命題」と呼んでいても，真理条件意味論，認知意味論，語用論といった異なる研究分野によって，その概念の捉え方に微妙な相違がある。この際，例えば語用論（関連性理論）の立場をとり，高次表意を非命題的とみなす場合，真理条件的か否かという点で話法詞と心態詞を区別する本研究の立場とは相容れないことになる。また，認知意味論（中右 1994）の立場から，S モダリティと D モダリティを区別せず，等しく文演算子として扱うとした場合も，やはり話法詞と心態詞は区別されない。そこで，本研究では，真理条件意味論の捉え方を採用して「命題」を定義づけ，等しく「モダリティ」表現として扱われる話法詞と心態詞の明確な区別を考案した。

その際，心態詞の心的態度を「含意」とみなすことが大きな論点になり，この「含意」という概念に関しても説明が必要であった。そこで，論理的含意（logical implication），意味論的含意（entailment），語用論的含意（pragmatic implication）の別を挙げたうえで，ここで扱われる「含意」が語用論的含意を指すことから，Grice（1967: 1975, 1989 で刊行）が提唱したコミュニケーション理論を紹介した。そして，そこから，心態詞 *aber* を例に，意味最小限主義の立場に従った心態詞の基本的意味（Grundbedeutung）の抽出を試みた。さらに，心態詞の機能的な意味としての心的態度を，その基本的意味からの派生であると捉え，Grice の理論を発展させた関連性理論における談話連結詞（discourse connectives）に関する分析を適用して，「手続き的意味」という概念に言及した（心態詞 *mal* に関する詳述は 4.5.2.を参照）。

また，「命題」の在り方を基準とした心態詞と話法詞の区別で生じうる問題点と，その改善案については，3.6.以降で述べたとおりである。以上のように，「心態詞は命題に関与しない」とされる一般的に周知の特徴を説明し，心態詞が「非命題的，非真理条件的」である理

由を，「含意」としての心的態度に求めるとしたことが，本章で最も述べたおきたかったことである。これにより，第 1 章の（17a-h）で述べた全ての特徴が説明されるとともに，本研究における「心態詞」の捉え方を明示したことになる。そのうえで，次章から，「ドイツ語の心態詞」の具体的な分析を行う。本研究では，その中心として心態詞 *mal* を扱う。

4. 心態詞 *mal* の分析

序論で述べたが, Weydt（1969）以降の心態詞研究において，心態詞としての *mal* に焦点を当てたものはほとんど見当たらない。辞書や辞典における個別の記述を含めても，心態詞 *mal* を研究の中心に据えた文献は非常に少ない。第 5 章で扱う心態詞の結合に関して，例えば Thurmair（1989）や Bublitz（2003）で比較的詳しい分析が見られるが，いずれも *mal* 単独の統語論的・意味論的・語用論的記述を行っているわけではない。こうした現状において，なぜ心態詞 *mal* を扱うかに関しても序論で述べたとおりである。捉えどころのない研究対象に対する筆者の好奇心と挑戦心，ならびに，それに見合うだけの問題を抱えうる心態詞であることから，ドイツ語によるコミュニケーションの向上を目指すうえで，その解決が不可欠であると判断したためである。

心態詞*(ein)mal*[52]は，ドイツ語の日常会話において頻繁に使用される（cf. Wagner 1974; Stolt 1979; Bublitz 2003）。とりわけ，「命令」や「依頼」といった「行為指示型」（Direktive）の発話で用いられ，いわゆる„hedge“（垣根表現）としての役目を果たすことで，その要求（Aufforderung）の強制力の度合いを緩和する機能を持つ不変化詞と考えられてきた（Franck 1980; Thurmair 1989; Helbig 1994[3]; Zifonun et al. 1997; 岩崎 1998; 井口 2000; Bublitz 2003）。本章では，心態詞 *mal* のこの機能を特に語用論の見地から分析し，同時に「緩和」という概念を見直すことで，この心態詞の使用意義を改めて探る。それにより，心態詞 *mal* の将来的な扱いに新たな展望を提供するとともに，日本におけるドイツ語教育の一端として，‘生きた’コミュニケーション能力の向上を図る。Bublitz（2003: 184）が指摘するとおり，「非母語話者が，人間関係を維持するために，心態詞を不可欠な手段として学ぶことは必須である」と思われ，「心態詞を学ぶことは，常に，ドイツ人との社交という形での学習でもある」（Busse 1992: 54）。従って，－序論を繰り返すが－心態詞 *mal* を，円滑なコミュニケーション表現の観点から捉え返し，その意味および用法の分析，さらにそれによる可能な修正を行うことは，ドイツ語による言語コミュニケーションの実態を見直す手がかりを提供するとともに，日本におけるドイツ語教育の現場で，実際のコミュニケーション能力の向上，ならびにその使用に際しての人間関係の構築・維持に貢献するはずである。

---

[52] 脚注 1 を参照。

4.1. 心態詞 *mal* の使用環境と機能

まず，下記（125a-k）に，心態詞 *mal* の用例を挙げる。

(125) a. Komm *mal* her!（Weydt/Hentschel 1983: 14）
（ちょっとこっちにおいで）（井口 2000: 138）

b. Reich mir *mal* das Brot!（Helbig 1994: 175）
（ちょっとパンを取ってくれないか）（井口 2000: 138）

c. Mach *mal* die Weinflasche auf!（岩崎 1998: 762）
（このワインの栓を，抜いてくれないかな）（ibid.）

d. Machen Sie mir *mal* einen Kaffee!（Helbig 1994: 175）
（コーヒーを 1 杯，お願いしますよ）（岩崎 1998: 762）

e. Hältst du mir *mal* die Tasche?（Helbig 1994: 176; 岩崎 1998; 764）
（かばんをちょっと持っていて）（井口 2000: 133）

f. Öffnest du *mal* das Fenster?（Werner 1998: 99）
（窓を開けてくれる？）

g. Kannst du *mal* das Fenster aufmachen?（ibid.）
（窓を開けてくれる？）

h. Kannst du *[ein]mal* sagen, wie spät es ist?（井口 2000: 133）
（何時か教えてくれないか？）（ibid.）

i. Können Sie mir *mal* sagen, wie spät es ist?（岩崎 1998: 764）
（いま何時か，教えていただけませんか？）（ibid.）

j. Können Sie mir *mal* Feuer geben?（Thurmair 1989: 185）
（火を貸していただけますか？）

k. Kann ich *mal* das Buch haben?（Helbig 1994: 176）
（本を貸してくれる？）

（125a-d）は要求文（Aufforderungssätze），（125e-k）は決定疑問文（Entscheidungsfragesätze）（英: *yes/no*-interrogatives）における心態詞 *mal* の使用例である。また，（125g-k）では，いずれも話法助動詞 *können*（英: can）を伴う決定疑問文で *mal* が現れている。これらの例に共通しているのは，いずれも潜在的に「要求」の発語内行為が遂行される点であろう。Thurmair（1989: 91）

では，„Die Modalpartikel *mal* tritt in drei Satzmodi auf, wobei es sich vom Illokutionstyp her bei Äußerungen mit *mal* immer um Aufforderungen handelt.“（心態詞 *mal* は３つの文タイプで現れ，その際，発話行為タイプの観点から，*mal* を伴う発話は常に要求と関わる）と述べられる。„Du kannst *mal* das Fenster aufmachen.“（直訳：君は窓を開けることができる）のように，平叙文（Aussagesätze）で使用される場合も，一般的に話法助動詞 *können*（～できる），*müssen*（～しなければならない），*dürfen*（～してかまわない），*sollen*（～すべきである）（およびこれらの接続法Ⅱ式）と共起し，命題の内容が「未来」に関係づけられると共に，やはり発語内行為「要求」が遂行される発話とむすびつく（cf. Thurmair 1989: 185）[53]。

発語内行為「要求」は，話し手が，その行為の遂行によって，命題内容に含まれる事態が聞き手によって実現されることを目指す行為である。行為指示型（Direktive）の発話行為タイプには，„order“（命令する），„ask/solicit“（頼む／依頼する），„advise“（助言する），„allow“（許可する）の他に，„pray“（祈願する），„encourage“（励ます），„convene“（召集する）といった，心態詞 *mal* の使用と直接関係のない行為，少なくとも本研究では全く扱わない発話行為も属する（cf. Vanderveken 1990: 189ff.（邦訳: 194ff.）; 久保 2002: 97ff.）。とりわけ，„ask“の質問用法である„question“（質問する），„inquire“（尋ねる），„interrogate“（尋問する）も，相手に情報の提供を求めるという意味で行為指示の発話行為として扱われるが，2.3.2.1.で述べたとおり，心態詞 *mal* は，純粋な質問行為を要求行為に限定する／多義的な発話行為から要求行為に一義化する。換言すれば，心態詞 *mal* が„ask“（問う）の発語内行為で現れることはない。そこで，本研究では，心態詞 *mal* が頻用される„order/befehlen“（命令する），„ask/bitten“（頼む），„advise/raten“（助言する），„allow/erlauben“（許可する）の４つの行為を，まとめて„request/auffordern“（要請する／要求する）と呼び表すこととし，行為指示型の発話行為タイプの下位分類の１つとして扱う。発話内行為としての「要求」（Aufforderung）という用語は，先行文献においても頻繁に用いられるものである。

また，心態詞 *mal* は，「要求」の強制力の比重を軽減させるとともに，その「要求」に丁寧な性格を与えるとも考えられている（cf. Franck 1980: 249; Thurmair 1989: 185; Weinrich 1993: 855; Helbig 1994: 175ff.; Werner 2000: 47; Bublitz 2003: 198; 岩崎 1998: 764）。しかし，筆

[53] Bublitz（2003）では，„Natürlich gibt es Unterschiede, ich nenne **mal** ein Reizthema: …“といった平叙文における *mal* も「心態詞」として扱い，この際の *mal* の用法は，「陳述の重要性や関連性を比較的小さいものであると特徴づけ，かつ真理判断の断定を相対化する」としている。本研究では，「要求」を表す発話における *mal* の記述に限定し，現段階では，上のような *mal* を「心態詞」とはみなさないが，後述の時間副詞 *einmal*，および頻度副詞としての *einmal* の意味的な考察と密接に関連しており，非常に興味深い考察である。

者は，話法助動詞 *können* を伴う決定疑問文に注目して，この発話形式における *mal* の使用では，単純に„höflich“（丁寧な）という効果が反映されるわけではないと考える（cf. 筒井 2005b; Tsutsui 2006b）。この点に関しては, 4.4.と 4.5.で詳しく論じる。

4.2. 心態詞 *mal* の形態

1.5.の（13）の表で示したとおり，言語史の観点から見て，心態詞としての *einmal* が発生したのは 17 世紀である（Burkhard 2001: 56）。心態詞 *einmal* は，時間副詞 *einmal*（いつか，かつて）から派生したと考えられるため，もともとは *einmal* という形で用いられていたが，今日では，*einmal* ではなく *mal* という短縮形で使用される場合がほとんどである（cf. Thurmair 1989: 184）。また，北ドイツ方言では, *mal* は„man“という形で使用され，この点をふまえるならば，すでに 16 世紀において，心態詞 *man* が発生していたようである（cf. Burkhard 2001: 56）[54]。さらに，時間副詞 *einmal* は，「回／度」を表す名詞 *Mal* と，「一」を表す数詞 *ein* が結びついたものと考えられている（cf. Bublitz 1978; 2003; Thurmair 1989）。従って，心態詞 *mal* を扱う場合,「一回／一度」（英: once, one time）を意味する副詞 *einmal*（以下，頻度副詞 *einmal* と呼ぶこととし，いわゆる数量詞 *ein Mal* も含む），ならびに時間副詞 *einmal* の意味を度外視することはできない。心態詞 *mal* の意味最小限主義的な意味を抽出する上で，頻度副詞 *einmal*，あるいはそこから派生した時間副詞 *einmal* の意味を分析することは不可欠であり，前節で触れた心態詞 *mal* の緩和機能も，本来，これらの語が表す意味に依拠すると考えるためである。この点に関する分析は 4.4.で行う。

4.3. 心態詞 *mal* の意味論的考察

上で述べたとおり，心態詞 *mal* の意味を考察するにあたって，時間副詞 *einmal* および頻度副詞 *einmal* の意味論的意味の分析を避けて通ることはできない。下記（126）に再録する本研究における心態詞の必要条件（17c）の記述は，心態詞 *mal* に関しては，時間副詞 *einmal* と頻度副詞 *einmal* のことを指すからである。

---

[54] „man“という形は，例えば「ベルリン方言を多用したデープリンの『ベルリン・アレクサンダー広場』には頻繁に現れる」（鈴木 2007: 98）。また，„Hey kannst du mol nen Link machen??“（http://www.urferschmer-junga.de/gbuch.php）や„Kannst Du mol mein Orm aus der Sonn geleg.“（http://www.roomer.de/magazin/ausgaben/ausgabe4-web.pdf）におけるように，南部ドイツの方言では, „mol“という形で用いられる場合がある。

(126) Abtönungspartikeln haben einen Lautkörper, der anders akzentuiert ist oder in anderer syntaktischer Stellung mindestens noch eine andere Bedeutung hat und dann einer anderen Funktionsklasse angehört.（Weydt 1969: 68, 1977: 218）

［心態詞には，別にアクセントを置く音形，あるいは異なる統語構造において，少なくともう１つ別の意味を表す音形があり，その音形は異なる機能をもったクラスに属する］

また，先に述べたとおり，時間副詞 *einmal* が，もともと「回／度」を表す名詞 *Mal* と，「一」を表す数詞 *ein* が結びついたものと考えられていることから，時間副詞 *einmal* と頻度副詞 *einmal* の関連も，心態詞 *mal* の抽象的意味を導出するうえで，主要な分析対象であると考えられる。そこで，次節では，まず時間副詞 *einmal* の意味を考察する。

4.3.1. 時間副詞 *einmal* の考察

心態詞 *ja*, *denn, doch, nur, bloß, wohl* などと異なり，心態詞 *mal* に強勢が置かれることはない。時間副詞 *einmal* も，とりわけ話しことばにおいて，心態詞 *mal* 同様，頻繁に *mal* という短縮形で現れ，この時間副詞としての *mal* が文中に現れる際には，文アクセントが置かれない場合もある(= (127))。

(127) Ich habe *mal* in Berlin gewohnt.（私はかつてベルリンに住んでいた）

この場合，形態および音声的な観点からは，心態詞と時間副詞の区別はできない。しかし，4.1.で述べたとおり，心態詞 *mal* の使用環境は，発語内行為「要求」が遂行されうる発話に限られるため，(127)のような文における *mal* は心態詞でないと判断される。また，心態詞 *(ein)mal* と時間副詞 *einmal* の決定的な違いは，文成分であるか否かにも見い出される。文肢性を持たない心態詞 *mal* に対し，時間副詞 *einmal* は，「いつか／かつて」という語彙的意味を表して，(128a-c)に示すとおり，文頭に置かれる場合がある(*mal* という形で文頭に置かれる場合は稀)。

(128) a. *Einmal* kam eine 38-jährige Frau aus Wien zu mir.

（MK.[55], St. Galler Tagblatt, 03. 01. 2001）

（昔, 38 歳のある女性が，ウィーンから私を訪ねてきた）

b. *Einmal* wird es so sein.（新アポロン独和辞典 2007[8]）

（いつかそうなるでしょう）(ibid.)

c. *Mal* sagt er dies, *mal* das.（クラウン独和辞典 2003[3]）

（彼はああ言ったりこう言ったりする）(ibid.)

（cf. ?*Mal* habe ich in Berlin gewohnt.）

4.2.で述べたとおり，心態詞としての*(ein)mal* は 17 世紀に発生したと考えられ，この点と下記（129）の記述を照合することにより，心態詞 *mal* の語彙形成過程は，時間副詞 *einmal* からの派生であると推定される。

(129) Zugleich ist an der Übersicht abzulesen, daß sich die geläufigsten der heutigen Abtönungspartikeln bereits vor dem 17. Jahrhundert ausgebildet haben und aus Konjunktionen und Temporaladverbien entstanden sind.（Burkhardt 2001: 57）

［加えて，今日の心態詞のなかで最も頻出しているものは，すでに 17 世紀以前に発生し，それらは接続詞や時間副詞から派生したことが読み取れる］

時間副詞 *einmal* は，「いつか」（eines Tages），「いずれ」（später）といった未来を表す副詞としても，「かつて」（einst），「以前」（früher）のように過去を表す副詞としても現れるのであるが，いずれにせよ，時間副詞というのが「いつ」という時を表す語を指し，明確な語彙的意味を示す点で，時間副詞 *einmal* は命題の真理条件に関与する。

ベルガー 他（1990: 6）によれば，この意味における *einmal* は平板アクセント（schwebende Betonung）を持つ。すなわち，両方の音節に等しくアクセントが置かれる（einmal）。換言すれば，二音節のうちどちらかに際立った強勢が置かれないことを意味する。また，「einmal が他の副詞と結びついているときは，文中でアクセントを持たないこともある」（ベルガー 他 1990）が，

[55] Mannheimer Korpus. COSMAS II: Korpus des *Instituts für Deutsche Sprache*, Mannheim.

辞書では，一般的に［ainmá:l］と„mal“に強勢が置かれている。（130a-g）に，時間副詞 *einmal* の用例を挙げる。

(130) a. Es war *einmal* ein König ...（ベルガー 他 1990: 6）

（昔ある王様が ありました...（おとぎ話の冒頭））（ibid.）

b. Ich bin auch *einmal* jung gewesen.（岩崎 1998: 367）

（私も，かつては若かったことがある）（ibid.）

c. Ich möchte *einmal* nach Italien fahren.（岩崎 1998: 367）

（私は，いつかイタリアへ行ってみたい）（ibid.）

d. *Einmal* kam eine 38-jährige Frau aus Wien zu mir.

（MK., St. Galler Tagblatt, 03. 01. 2001）（=（128a））

e. *Einmal* wird es so sein.（新アポロン独和辞典 2007[8]）（=（128b））

f. Der Sportler siegte *mal* ständig.（Werner 1984: 83）

（その選手は，かつて常に勝利していた）

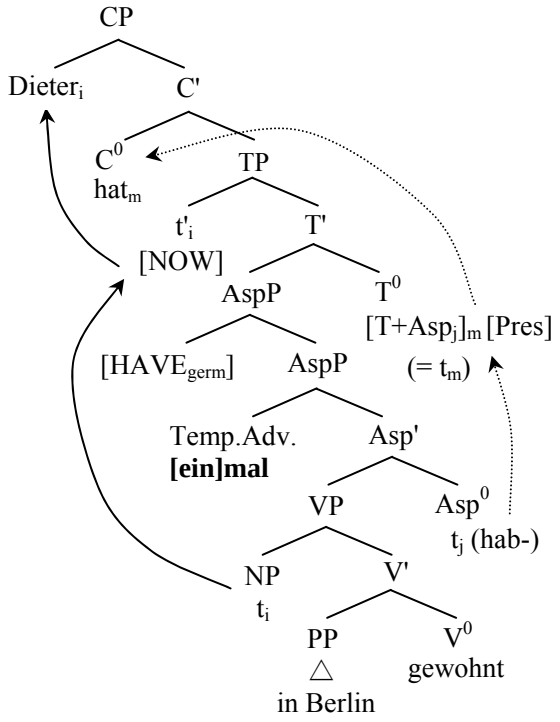
g. Er schrieb mir *mal* täglich einen Brief.（Werner 1984: 82）

（彼は昔，毎日私に手紙を書いてくれた）

先に述べたとおり，時間副詞 *einmal* は短縮形 *mal* で使用される場合もある（cf. Thurmair 1989: 184）（=（130f），（130g））。また，（130d）や（130e）のように，単独で文頭に置かれることもある。これは，話題化の操作，あるいは文全体が新情報である場合の焦点化によるものと考えられる。

時間副詞 *einmal* の統語的な考察として，例えば，„Dieter hat mal in Berlin gewohnt.“という文を，後述の Stechow（2002: 403）らによる時制意味論の記述に従って統語構造で表すと，下記（131）に示すとおり，*einmal* は基底構造でアスペクト句（AspP）の指定部（spec）に生成され，c-統御（c-command）の関係によって，Asp'を作用域にとると考えられる。そして，この派生段階では，意味的時制（＝現在）はまだ導入されていない（後述参照）。（131）では，時間副詞 *einmal* が，心態詞 *mal* と異なり，時制句の内部にあるという点で命題の真理条件に関わるとともに，文（TP）全体を作用域にとらないことが示されている。

(131) Dieter hat mal in Berlin gewohnt.（Dieter はかつてベルリンに住んでいた（ことがある））



次に，時間副詞 *einmal* の意味を検討する。下記（132a）の例文は, *wohnen*（英: live）という状態･継続相を表す動詞を伴う現在完了文である。（132b）は，仮に PRESENT PERFECT 分析（現在時の前に事象が完結したという意味）を採用した場合の論理形式（logical form）であり，（132c）はその意味表示である。そして，（132a）の意味を図で表すと，（133）のようになると考えられる。

(132) a. Dieter hat in Berlin gewohnt.（ディーターはベルリンに住んでいた）

b. [$_{TP}$ NOW Pres [$_{AspP}$ PERF [$_{PartP}$ Dieter in Berlin wohn-] hab-]]

c. ∃t [t < NOW & Dieter lives in Berlin at t]（Stechow 2002）

（発話時 NOW より以前に, Dieter が Berlin に住んでいた事象の時間幅 t が存在し，その事象は既に終了している）

(133)

ドイツ語の完了は多義的である。現在完了の場合も，上記(132)の例のように,「現在＋事象完結」の意味や, „Peter hat *gestern* viel getrunken.“(Peter は昨日たくさん飲んだ)のように, 現在との関係を直接もたない単純過去の意味もある([$PAST_j$ ⊆ yesterday & Peter drinks much at ($PAST_j$)])。Stechow(2002: 405)は，さらに，ドイツ語の現在完了には XN(＝Extended Now: 拡大された現在時での事象)解釈もあると主張している。これは, „Seit einer Woche ist Maria krank gewesen.“(ここ一週間，マリアは病気である)のように，過去の時間に生じた事象が発話時直前まで続いているという解釈である。

ここで，先の(131)の例(= (134)に再録)，つまり(132a)に時間副詞 *einmal* が付与された例文と，その論理形式(134b)を見てみたい(ここでは，Stechow(2002)の議論に基づき，現在完了を XN 解釈として把握する)。

(134) a. Dieter hat mal in Berlin gewohnt.

b. [$_{TP}$ NOW Pres [$_{AspP}$ HAVE$_{Germ}$ mal [$_{PartP}$ Dieter in Berlin wohn-] hab-]],

where *mal* = λPλt∃t'[t' ⊆ t & P(t')] (Stechow 2002)

Stechow は，アスペクトに対応する AspP が，時制句 TP と事象を表す分詞句 PartP(動詞句 VP に対応)の間に存在する構造を仮定している。さらに，時制句 TP の指定部には，時制の解釈を意味する意味的時制(semantic tense)が生じるとする。Stechow (2002: 400ff.)は，この意味的時制として「現在」(PRESENT),「過去」(PAST),「未来」(FUTURE)を挙げ，Reichenbach(1947)の術語を借りて，これらの意味的時制を *reference time*(参照時間: Betrachtzeit(Bäuerle 1979; 46))という時間幅で扱う[56]。下記(135)は，(134b)の全体の意味表示である(Stechow 2002 に基づく)。

(135) ∃t [XN (t, NOW) & ∃t'[t' ⊆ t & Dieter lives in Berlin (t')]]

この中で，∃t[XN (t, NOW)]の部分は，XN 解釈の *haben*(現在)に対応するものであり，それは，*reference time*(ここでは NOW が最後の下位幅(final subinterval)となるような時間幅 t が存在することを表している(XN＝Extended Now は, *reference time* が過去や未来を示す場合

[56] Stechow (2002)は，時制意味論の祖といえる Reichenbach (1947)の記述のように，時制の意味を時点として捉えるのではなく，幅のある時間(インターバル)として捉える。

のいわば XP や XF も含んだものである))。このことをふまえ,(134b)の統語分析によると,アスペクト句 AspP の主要部に生じる完了助動詞 *hab-*は,まず分詞句 PartP と結びつき, PartP にアスペクトを導入する。それから,この AspP の主要部は,指定部に *mal* を導入し AspP まで投射する。この AspP が指示する時間幅の集合を表すと(136)のようになると考えられる。

(136) λt''∃t [XN (t, t'') & ∃t' [t' ⊆ t & Dieter in Berlin wohn- (t')]]

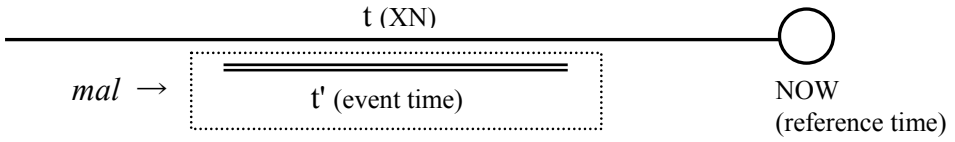
次に,先の(134b)における *mal* の意味表示から, *mal* が, t'において生じる事象 P と, t'を含みこむ時間幅 t を要求することが読み取れる。*mal* を VP と結びつけた意味表示は下記(137)のようになる。

(137) λPλt∃t'[t' ⊆ t & P(t')] (Dieter in Berlin wohn-)
→ λt∃t'[t' ⊆ t & Dieter lives in Berlin at t']

重要なことは,この段階では,まだ意味的時制が関与していない点である。Dieter が Berlin に住んでいる時間幅 t'を部分として含む時間幅 t の集合が得られるだけで,過去か未来かの時制解釈は行われていないことに注意したい。そこで,(134b)における *mal* の意味表示に, Rathert (1999)(s. Stechow 2002: 403)が提起するドイツ語の XN-PERFECT の意味表示を合わせたものを(138)に記し,それを筆者が図式化したものを(139)に示す。

(138) ∃t [t >< NOW & ∃t' ⊆ t & Dieter lives in Berlin at t'], where >< is the abutting relation.
(発話時 NOW と隣接して過去に広がる時間幅 t があり,その t の内部で Dieter が Berlin に住んでいた事象がある。"><"は時間的な隣接関係を示す)

(139)



※白丸は, t が NOW を含まないことを意味する

Stechow（2002: 401）における„|| IMPERFECTIVE||= λP λ t∃e.t ⊆ τ(e) & P (e)“（e can be an event or a state. τ (e) is the time of e, i.e. the interval from the beginning of e till the end of e.）（ibid.）という記述からうかがえるとおり，*wohnen* のような未完了相（IMPERFECTIVE）の動詞では, *reference time* と *event time* の関係が, *reference time*（= t） が *event time*（= τ(e)） に 含 まれる関係にある。つまり，XN 解釈では，*einmal* のない現在完了文„Dieter hat in Berlin gewohnt.“は,「ディーターがベルリンに住む（P）」という状態が，NOW より先行するある時点から, NOW の直前までインターバルいっぱいに継続することを意味する。このように，未完了相の動詞では，状態は時間的に最大化する（maximize）ため，（139）における時間幅 t'（二重線）と t（一重線）は，ほぼ等しくなると考えられる。この際，時間副詞 *einmal* は，その t'（event time）に作用し，不特定の（任意の）時間幅を設定する。換言すると，（139）で示したとおり，*mal* によって表される時間幅（点線の枠で表示）は，XN の内部で，状態の継続である t' の幅を制限する（Stechow 2002: 403）[57]。また, *einmal* によって表されるその時間幅 t'は，言及された時間幅 t（ここでは XN）の部分として限定され，さらに，その時間幅 t の内部で不特定の（任意の）位置を指示する。

時間副詞 *einmal* の意味に関するこのような記述には，まだ議論の余地が残されていると思われるが，筆者がここで述べておきたいことは，「時間副詞 *einmal* は，言及された時間幅の部分として限定された『不特定の時間幅』を設定する」という点である。このような見方を支持する例として，下記（140c）のような文が考えられる。*letztes Jahr*（去年）によって時間が具体的に修飾されている場合，不特定の時間幅を示す *einmal* での修飾は冗長で容認不可能となる。

(140) a. Dieter hat *letztes Jahr* in Berlin gewohnt.

（Dieter は去年ベルリンに住んでいた）

b. Dieter hat *mal* in Berlin gewohnt.

（Dieter は昔ベルリンに住んでいた）

---

[57] この点に関しては, Hentschel（1991）でも指摘される。Hentschel は，時間副詞の *mal* を „Perfectivizing element“（完了化要素）と捉え，下記の対比例を挙げて，継続的な（durative）命題を表す文における *mal* の非共起性を説明する: Ich hab' mir mal ein paar Gedanken darüber gemacht.（私は, *mal* それについて，少し（の間）頭を悩ませた） vs. *Ich hab' mir mal viele Gedanken darüber gemacht.（私は, *mal* それについて，非常に（長い間）頭を悩ませた）; Ich hab' mir das mal aufgeschrieben.（私はそれを *mal* メモした） vs. *Ich hab' mal Gedichte geschrieben.（私は *mal* 詩をいくつも書いていた）

c. *Dieter hat *mal letztes Jahr* in Berlin gewohnt.[58]

（Dieter は昔，去年ベルリンに住んでいた）

4.3.2. 頻度副詞 *einmal* の考察

前節では，時間副詞 *einmal* の意味論的な意味を考察した。心態詞 *mal* が，時間副詞 *einmal* から派生したことに基づき，心態詞 *mal* の抽象的意味／基本的意味を導く上で，その考察が不可欠であると考えられたためである。本節では，さらに時間副詞 *einmal* の派生元とみなされる頻度副詞 *einmal* の考察を行う。

まず，語としての„einmal“に関する Bublitz（1978: 73）からの引用（141）を見てみる。

(141) […] gibt es auch sprachgeschichtlich enge Bindungen zwischen *ein*, *mal (Mal)* und *einmal*; vgl. die Bedeutung von *Mal* als *Zeitpunkt* und die Verwandtschaft mit *Maß*, das ja auch *zeitliches Maß* heißen kann; ebenso die Verbindungen *niemals*, *manchmal*, die wie *einmal* = *ein Mal* (Akk.) auf die temporale Bedeutung von *Mal* hinweisen.

［[...]*ein*，*mal*（*Mal*）と *einmal* には，言語史の観点からみても密接なつながりがある；時点としての *Mal* の意味と，時間的な尺度をも意味する *Maß* との類似性を参照せよ；また，*einmal* = *ein Mal*（対格）であるのと同様に，*Mal* の時間的な意味を示す *niemals*（決して＜一度も＞～ない）や *manchmal*（ときどき）といった結合形も参照されたい］

（141）のとおり，„einmal“という語は，数詞 *ein*（一）と名詞 *Mal*（回／度）が結合した形と密接に関係しており，さらに，時点あるいは時間的尺度を示す *Mal* の意味に基づいて，時間副詞 *einmal* と頻度副詞 *einmal* の間に，語彙形成過程において明示的な関連があると推定される。

仁田（2002: 263ff.）によれば，「頻度の副詞」には，主に「いつも」や「常に」のほか，「絶えず」「始終」のような高頻度を表す語，「しばしば」「時折」のような中頻度を表す語，「時たま」「めったに」といった低頻度を表す語がある。また，頻度の副詞の周辺として，仁田（2002: 277ff.）は「度数の副詞（仮称）」を提示し，これを「事態の生起・存在の回数を表した

[58] 母語話者によると，この際の„mal“を「短期間」を意味する„kurz“として捉える場合，「去年」（letztes Jahr）という時間幅の中における「少しの間」という意味で許容される可能性もある。しかし，ここでの論点は，「かつて，昔」を表す時間副詞としての *mal* との共起が容認されないということであり，さらに，4.4.3.1.で触れるが，上のような„mal“の捉え方は，時間副詞というより，むしろ（„ein“が省略されているにも関わらず）後述の頻度副詞が表す語彙的な意味（一回／一度）から派生した含意であることに注意されたい。

副詞」と規定する。具体例として，「何度も」「二三度」「二回」「三たび」「一度」などが挙げられ，これらの副詞では，事態生起の回数の全体量や絶対数が語られており，この点で，上記で挙げた頻度の副詞とは異なるとされる。「頻度の副詞は，ある間隔を置いて生起する事態の生起回数の多寡性を語るのみで，事態生起の回数を具体的に述べているわけではない」（ibid.）。このように，頻度の副詞と度数の副詞には，その性格に明確な異なりが見られるようであるが，例えば Bäuerle（1979: 46）では，*immer*（いつも），*zweimal*（二回），*oft*（しばしば），*überhaupt nicht*（全く～ない）を，まとめて„Frequenzadverbien“（頻度副詞）として挙げており，先の Reichenbach（1947）の術語を借りていえば，頻度副詞は，*event time* を量化する演算子（Operator）であると考えられる。例えば，„Gestern spielte Hans *immer* Tennis.“の場合，過去（PAST）の意味的時制（reference time）において，［Hans spielt Tennis］（厳密には［Hans Tennis spiel-］）という事象（event）が［immer］で表される時間幅（event time）において生じたことを意味する。この点をふまえ，本研究においても，「一回／一度」を意味する„einmal“を，„immer“と同様に「頻度副詞」として扱い，この用語によって，とりわけ時間副詞 *einmal* と明確に区別する。そして，„einmal“という語の„ein“に強勢が置かれると，「一回／一度」を意味する頻度副詞としての機能が発揮されることに基づき，以下，必要に応じて *EINmal* と綴る。

下記（142a-f）に，頻度副詞 *einmal* の用例を挙げる。

(142) a. Ich habe ihn nur *EINmal* gesehen.（ベルガー 他1990: 6）

（私は，一度だけ彼を見たことがある）

b. Meine Erfahrungen während der Schwangerschaft lassen mich sagen: *EINmal* und nie wieder.（Werner 1984: 83）

（妊娠中の私の体験は，私にこう言わしめる: 一度だけ，もう二度と）

c. Der Sportler siegte in seinem ganzen Leben *EINmal*.（Werner 1984: 83）

（その選手は，彼の生涯において一度だけ勝利した）

d. *EINmal* im Monat stiftet die Metzgerei Hauk das Fleisch.

（MK., Mannheimer Morgen, 30.04.2004）

（月に一度，肉屋の Hauk はただで肉を提供する）

e. *EINmal* Bonn, bitte.（新アポロン独和辞典 2007[8]）

（（駅の切符売場で）ボンまで一枚ください）

f. *EINmal* ist keinmal.（ベルガー 他 1990: 7）

（一度は数のうちにはいらない（ことわざ））

(142d, e, f)からうかがえるとおり，頻度副詞 *einmal* は，単独で文頭位置に現れる場合がある。このことは，時間副詞としての場合同様，焦点化，あるいは話題化の操作によると考えられる。

(142a-f)で，„einmal“を頻度副詞とみなす理由，つまり「一回／一度」を意味すると判断する要因として，(142a)の *nur*(～だけ)(とりたて詞)，(142b)の *nie wieder*(決して二度と～ない)(否定副詞)，(142c)の *in seinem ganzen Leben*(彼の生涯において)や(140d)の *im Monat*(月に)といった時を表す前置詞句などとの共起が挙げられる。また，(142e)や(142f)のように，特定の言い回しにおいて„einmal“が現れると，必然的にそれが頻度副詞 *einmal* であると判断される。

時間副詞 *einmal* と頻度副詞 *einmal* の外延的な意味の違いは，ベルガー 他 (1990: 7) における下記(143a)と(143b)の例から読み取れる。

(143) a. Ich bin nicht einmal zu spät gekommen (= kein einziges Mal).（下線は強勢の意）
(私は一度も(＝ただの一度も)遅刻したことはない)

b. Ich bin nicht einmal zu spät gekommen (= Ich kam rechtzeitig, obwohl die Zeit knapp war).
(私は遅刻などしませんでしたよ。(＝時間はぎりぎりでしたが，ちゃんと間に合いました))

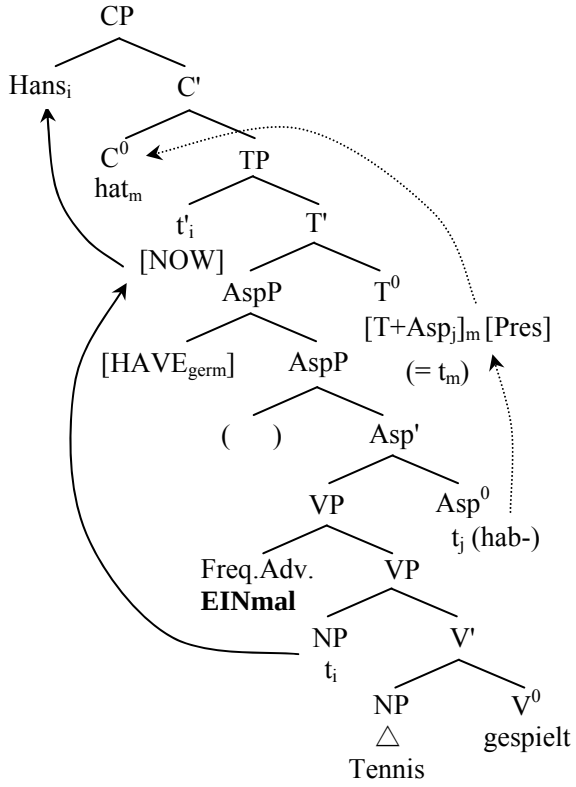
この比較例から，頻度副詞 *einmal* と時間副詞 *einmal* の場合で，否定詞 *nicht*(英: not)の焦点(focus)が異なることがわかる。頻度副詞 *einmal* の場合，「遅刻の回数が一度ではない」ことに焦点が置かれるのに対し，時間副詞 *einmal* では，「遅刻という行為をしていない」ことに焦点がある。つまり，頻度副詞 *einmal* は常に回数を関係づける。また，この例は，(143a)では *nicht* の対象が[einmal]であるのに対し，(143b)では，*nicht einmal*(*nicht mal*)という形で，[zu spät kommen]を否定していることを示唆している。

次に，作用域について検討する。頻度副詞 *einmal* の作用域は，時間副詞 *einmal* より狭いと予測される。なぜなら，„Hans hat *mal einmal* Tennis gespielt.“[59](Hans はかつて一度テニスをし

[59] 本来，この文は，„Hans hat *früher mal einmal* Tennis gespielt.“とするのが自然である。しかし，ここで重要なことは，„Hans hat *mal einmal* Tennis gespielt.“という文が非文ではなく，ゆえに時間副詞としての *mal* が，頻度副詞 *einmal* を作用域にとることを示す点にある。また，„Hans hat *früher mal einmal* Tennis gespielt.“という文で興味深いのは，時間副詞 *früher*(以前，かつて)が，過去の具体的な時間幅を示していることから，この際の時間副詞 *mal* が *früher* と合成的に

たことがある）という文が容認可能であることからもわかるように, AspP の指定部に生成される時間副詞 *einmal* は，頻度副詞 *einmal* を包含する関係にあると考えられるためである。同じく, „Das habe ich *mal immer* gesagt.“[60]（私はそれを昔いつも言っていた）という文からも，時間副詞 *einmal* が頻度副詞（ここでは *immer*）を包含する関係が読み取れよう。そこで，頻度副詞 *einmal* は，下記（144）で示すように, VP の付加位置に生じて, VP 全体を作用域にとると考えられる。

(144) Hans hat EINmal Tennis gespielt.（Hans は一度テニスをした（ことがある））



樹形図が示すとおり，頻度副詞 *einmal* は，時間副詞 *einmal* と異なり, AspP より下位に生起する。そして，両者は，命題 TP の内側に生起するという点で共通するが，命題の真理条件への貢献度は異なる。頻度副詞 *einmal* は「回数表現」（井口 2000: 41）であり，時間副詞との共起において，同じく頻度副詞である *immer* や *oft* と相容れない。例えば„*Hans spielte früher *immer EINmal* Tennis.“（Hans は以前いつも一回テニスをした）は容認されない（日本語の語感

（kompositionell）結合していると考えられる点である。この点に関する詳細は今後の課題としたい。

[60] 脚注 59 を参照。

とは異なる)。また, 同じ回数表現の *zweimal*(二回)や *hundertmal*(百回)とも異なり, *einmal* は一回だけという意味を持つ。従って, „EINmal spielte Hans Tennis.“が当てはまる状況／世界(一回だけハンスがテニスをした状況)で, „Zweimal spielte Hans Tennis.“と発話すれば, その命題は偽となる。また逆に, „Zweimal spielte Hans Tennis.“が当てはまる状況に言及して, „EINmal spielte Hans Tennis.“と発話すれば, やはりその命題は偽となる。つまり, 頻度副詞 *n-mal* は, *n-mal* をともなって表された命題が, 実際の状況では *n-mal* より少なくあるいは多く生じた場合, その命題は偽となる。

一方, „EINmal spielte Hans Tennis.“において, たとえハンスが複数回テニスをしていたという状況があっても, 「少なくとも一度」はテニスをした事象があったという意味で, その命題は真であると考えられるかもしれない($\exists$t [Hans spielt Tennis at t])。この場合, 頻度副詞 *einmal* と時間副詞 *einmal* の命題の真理条件への貢献度は等しいことになる。しかし, 先に述べた例文(143a)における *nicht einmal* = *kein einziges Mal*(ただの一度も)や, *noch einmal* = *ein letztes Mal*(もう一度だけ)というベルガー 他(1990: 7)の記述に基づき, 本研究では, 頻度副詞 *einmal* は, 「(ゼロ回でも複数回でもない)一回／一度」を意味するという点で命題の真理条件に関与すると捉える。従って, „EINmal spielte Hans Tennis.“という命題は, 過去のある時点において, ハンスが「一度だけ」テニスをしていれば真となる。そこで, 頻度副詞 *einmal* は(145)のように定義されよう。

(145) $\lambda P \lambda t \exists! t'[t' \subseteq t \,\&\, P(t')]$

($\exists$!t' Q(t')は, Qt'を満たすような t'が 1 つだけ存在することを意味する)

このように定義した場合, 頻度副詞 *einmal* と時間副詞 *einmal* を伴う下記(146a)と(146b)のような文は, 共に事象が「ゼロ回」あるいは「一回」起こった場合には同一の真理値をとる。

(146) a. Thomas sang *EINmal* in Japan.

(Thomas は一度(だけ)日本で歌った［一度も日本で歌わなかった場合は偽］)

b. Thomas sang(*ein*)*mal* in Japan.

(Thomas はかつて(少なくとも一度)日本で歌った［一度も日本で歌わなかった場合は偽］)

しかし，(146b)に示唆されるとおり，時間副詞 *einmal* の場合，*einmal* を含まない事象の頻度については一回以上であれば真である。Bäuerle (1979: 47) の記述においても，例えば „Gestern spielte Hans Tennis.“という文は，[Gestern spielte Hans (mindestens) einmal Tennis.] と分析される。この時，あえて頻度副詞 *einmal* を挿入した場合，事象の回数を「１」に限定する働きがあると分析できる。そのため，事象が「複数回」生じる状況では，両者の真理値は異なる。„Einmal spielte Hans Tennis.“では，過去の意味的時制において，「かつて」で表されるある時間幅の中で，ハンスが(少なくとも)一度テニスをしていれば，その命題は真である(二回でも百回でもよい)。要するに，時間副詞 *einmal* は，事象の頻度(一回か二回かそれ以上か)については考慮しない。以上を(147)の表にまとめる。

(147)

	事象がゼロ回の状況	事象が一回の状況	事象が複数回の状況
頻度副詞 *einmal*	偽	真	**偽**
時間副詞 *einmal*	偽	真	**真**

このような頻度副詞 *einmal* の意味的な定義に関しても，時間副詞 *einmal* の考察と同じく，まだ検討すべき問題が残されていよう。以上述べたような考察は，さしあたり筆者が独自に試みたものにすぎず，頻度副詞 *einmal* を，通常の存在量化子∃と同じように，「少なくとも１つ」と解釈する可能性を排除する論拠については十分に示していない。しかし，筆者がここで強調したいことは，頻度副詞 *einmal*，時間副詞 *einmal* のいずれも，心態詞 *mal* とは異なり，「命題の真理条件に関与する」という点で共通していることである。

4.3.3. 心態詞 *mal*，時間副詞 *einmal*，頻度副詞 *einmal* の区別とその関連

以上，時間副詞 *einmal* と頻度副詞 *einaml* に関する意味論的な考察を見た。本節では，表(148)に，心態詞 *mal*，時間副詞 *einmal*，頻度副詞 *einmal* それぞれの特徴をまとめ，これらの特徴に基づいて，三者の明確な区別を試みる。

(148)

	文頭配置可能性 （統語論的要素）	命題の真理条件への関与 （意味論的・語用論的要素）	作用域 （統語論・意味論的要素）	強勢 （音韻的要素）
心態詞 *mal*	無	無	TP	無
時間副詞 *(ein)mal*	有	有（事象が複数回でも真）	Asp'	無 / 有
頻度副詞 *einmal*	有	有（事象が複数回では偽）	VP	有

表(148)から推測できることは，主に下記の２点である。

(149) a. 時間副詞 *einmal* と頻度副詞 *einmal* との間に密接な関係がある。
（cf.「文頭配置可能性」と「命題の真理条件への関与」）

b. 時間副詞 *einmal* は，心態詞 *mal* と頻度副詞 *einmal* の関係に対して，いわば橋渡しの役割を果たす。（cf.「作用域」と「強勢」）

とりわけ(149a)に関しては，先行文献の記述を顕著に裏付けたといえよう。ここでは，特に(149b)の点に注目したい。いわゆる「橋渡し」の要因となるのは，「作用域」と「強勢」の観点においてである。前節で，統語的・意味的な観点から，時間副詞 *einmal* が頻度副詞 *einmal* より広い作用域をもつことを明示した。時間副詞 *einmal* は，頻度副詞 *einmal* の作用域(VP)と，心態詞 *mal* の作用域(TP)の間(AspP)に基底生成され，c-統御の関係により Asp' を作用域にもつ。このような作用域の相違に基づき，頻度副詞 *einmal* から心態詞 *mal* への派生過程において，時間副詞 *einmal* が仲介を果たすと仮定するのは妥当であろう。

また，「強勢」の観点では，時間副詞 *einmal* が，本来，平板アクセントを持つことから「強勢がない」というのは言いすぎである。むしろ，強勢があるからこそ，単独で文頭に置かれることがある。しかし，確かなことは，時間副詞 *einmal* が，*einMAL*［アインマール］と発音されることはあっても(ベルガー 他 1990: 6)，*EINmal*［アインマール］と発音されることはない。なぜなら，*EINmal*［アインマール］であれば，それは頻度副詞以外の解釈を得ないからである。先に述べたとおり，頻度副詞の場合は，「複数回でない」ということを意味(Grice の一般化された会話的含意に相当; Grice（1989）などを参照）するために„ein“が必要不可欠で

あるが，そのような意味をもたない時間副詞では省略することが可能である。そして，この時間副詞 *einmal* の省略形 *mal* が，心態詞 *mal* の形態と重なり，最終的には完全に強勢を失ったものと考えられる（文法化（Grammatikalisierung）の過程）。

さらに，心態詞 *mal* が特に行為指示型（Direktive）において使用されることをふまえると，時間副詞 *einmal* との密接なつながりが見えてくる。なぜなら，行為指示の発語内目的（illocutionary point）を持つ発語内行為の成功条件（felicity conditions）の１つに，「命題内容は，聞き手が実行可能なこれから先の事柄（命題内容条件）」（久保 2002: 6）という項目があるためである。Thurmair（1989: 185）でも，心態詞 *mal* が使用される場合には，発話の内容が未来と関係していなければいけないことが示唆されている。これらの点は，「いつか」という未来の時を表す場合の時間副詞 *einmal* との関係を強く想起させ，時間副詞 *einmal* の解釈が，心態詞 *mal* の用法に寄与すると考えるのも妥当であろう。つまり，時間副詞 *einmal* が設定する「不特定の時間幅」という捉え方に基づき，話し手は，聞き手による要求の実行に対して，「いつでも良い」といった話し手の意図を表面上（scheinbar）示すことが可能なのではないか。さらに，4.3.1.で述べたように，この「いつでも良い」という態度は，「未来」の意味からの導出に限ったことではない点に注意されたい。この態度を導く「不特定の時間幅」とは，「かつて」という過去の時を意味する *einmal* からも読み取れる。そして，そのような時間幅を意味することによって，要求実行の時点をぼかし（Nuancierung des Zeitpunkts），言い換えれば，要求の実行時点を明確に指示せず，表面上，聞き手に実行時点の選択権を与えることで，聞き手に対する心理的負担の軽減を図るというのが，心態詞 *mal* を使用する目的の１つであると考えられる。

しかし，このような観点や，上述した語彙形成過程に関する考察をふまえたとして，頻度副詞 *einmal* が表す「一回／一度」の意味が，心態詞 *mal* に全く付随していないと考えるのは早計である。例えば，Grimm, J. & Grimm, W.（1862: 233）や Weydt et al.（1983: 167）のように，心態詞 *mal* と頻度副詞 *einmal* との直接的な関係を記述した文献も存在し，後述するが，筆者自身，心態詞 *mal* の基本的意味を「非多発性」（Nicht-Repetitionalität）の含意に求める。さらに，「要求の強制力緩和」という機能を導く意味的特性には，先行文献に従えば，„einmalig“（一回限りの）（cf. Weydt/Hentschel 1983: 14; Bublitz 2003: 186），„nicht dauernd“（永続的でない）（cf. Becker 1976: 8; Weydt/Hentschel 1983: 14; Bublitz 2003: 185），„irgendwann“（いつかあるとき）（cf. Thurmair 1989: 185; Helbig 1994: 175ff.; Bublitz 2003: 185）といった３つの性

質が挙げられ, Weydt/Hentschel（1983）や Bublitz（2003）が示唆するとおり，心態詞 *mal* に「一回／一度」といった意味が付随していると考えて然るべきであろう（4.4.3.5.3.も参照）。Helbig（1994[3]: 177）でも，下記（150）のように明示される。

(150) Der Gesamtbedeutung liegt offenbar die Bedeutung des Zahladverbs zugrunde, die sich bei der Partikel auswirkt in der Aufforderung zu einer einmaligen (nicht dauernden) Handlung, die folglich als leichter erfüllbar erscheint, die den Wunsch des Sprechers erkennen läßt.

［（心態詞 *mal* の）全体的意味は，明らかに数の副詞の意味にある。その意味は，一回限りの（継続しない）行為を要求するという形でこの不変化詞（= *mal*）に作用し，結果として，その行為は比較的容易に実現しうるとみなす話し手の願望を認識させる］

（括弧は筒井による）

従って，筆者は，「心態詞 *mal* には，頻度副詞 *einmal* の意味はない」と考えるのではなく，むしろ, 4.5.2.で（5.2.1.も参照），この頻度副詞 *einmal* の意味論的意味を，不変化詞*(ein)mal* の基本的意味（Grundbedeutung）に関連づける分析を行う。その際，4.5.2.では，基本的意味の抽出とともに，そこから派生する心態詞 *mal* の心的態度（Sprechereinstellung）の導出も試みるため，その心的態度との関連から，次節以降で心態詞 *mal* の語用論的な考察を述べる。

4.4. 心態詞 *mal* の語用論的考察

ここでは，心態詞 *mal* の機能に関して語用論的な考察を行い，最終的に，心態詞 *mal* の使用意義の見直しを図る。その結果として，実際のドイツ語コミュニケーションの場における非母語話者による心態詞 *mal* の使用に対し，１つの助言を呈示する。そのために，まず 4.4.1.で先行文献における心態詞 *mal* の機能を紹介し, 4.4.2.以降で，心態詞 *mal* の機能に関する問題点を指摘する。その際，アンケート調査とその統計処理が分析の中心となる。続く 4.4.3.以降では，心態詞 *mal* の使用意義をあらためて捉え直す。ここでは，日本語の程度副詞「ちょっと」との比較分析を行い，結論として，「連帯性の指標」という捉え方を打ち出す。この際，「丁寧さ」という概念が論点となり, 4.5.1.で心態詞 *mal* による「丁寧さ」の意義を見直す。最後に，心態詞 *mal* が含意する心的態度をまとめる。

4.4.1. 先行研究

序論で述べたとおり，心態詞 *mal* を，研究の中心に据えた文献は少ない。その中で，例えば，Stolt（1979）は，*eben*, *auch*, *doch* の考察と並んで，心態詞 *mal* を比較的詳細に扱っている。この際，心態詞 *mal* には，発話における命令の性格を，丁寧な要求に緩和する働きがあるとされ，この記述は，Weydt（1969）の *mal* に関する示唆を踏襲するものである。また，その後の他の研究者による文献（*mal* を主要テーマにはしていない）においても，概ね同様の記述がうかがえる。比較的新しいものでいえば，心態詞 *mal* の結合形（Partikelkollokation）をテーマとした Bublitz（2003）が挙げられるが，ここでも，心態詞 *mal* は„Intensivierung der Abschwächung“（緩和の最大化）（ibid.: 196）を導く „Katalysator“（媒体）として扱われ，やはり „Höflichkeitsindikatoren“（丁寧さを表す標識）（ibid.: 198）という捉え方に集約される。以下，心態詞 *mal* に関する先行文献の記述をいくつか抜粋する。（以下，（151）から（157）における訳は筒井による）

(151) In unserer Systematisierung stellt *mal* den ersten Schritt auf der „Höflichkeits-leiter“ überhaupt dar, indem es, zusammen mit der Intonationsführung, den Charakter des Imperativs vom Befehl zur Aufforderung hin mildert.（Stolt 1979: 481）

［我々の体系化では，*mal* は，総じて「丁寧さの梯子」の第一段目である。というのも，*mal* は，イントネーションと共に作用して，命令の性格を命令から要求へと和らげるからである］

(152) Die mangelnde Präzisierung des Ausführungszeitpunkts, d.h. dass MAL statt beispielsweise SOFORT gebraucht wird, hat vor allem die Funktion, die Aufforderungslesart abzuschwächen, höflicher zu machen, dadurch dass man dem Hörer scheinbar die Wahl des Ausführungs-zeitpunkts überlässt.（Franck 1980: 249）

［行為をいつ実行するかに対して正確な時点が指定されないこと，すなわち，例えば SOFORT の代わりに MAL が使用されることには，いつ実行するかの選択権が聞き手に委ねられているように見せかけることで，要求の読みを和らげ，比較的丁寧にする機能がある］

(153) *mal*

Vorkommen als Abtönungspartikel

- Entscheidungsfragen: [...] Die Funktion von *mal* in Entscheidungsfragen ist eng verwandt mit der in Imperativsätzen, zumal solche Fragesätze meist Aufforderungscharakter haben.
- Imperativsätze: [...] In umgangssprachlichen Aufforderungen ist *mal* ein hochgradig konventionalisierter Bestandteil des Satzes.
- Übergreifende Bedeutung: [...] In Verbindung mit Aufforderungen gewinnt die Partikel eine perfektivierende Wirkung, die zugleich als 'freundlich' empfunden wird, da damit nicht eine Forderung nach einer dauernden Handlung, sondern nach einer einmaligen, zeitlich begrenzten erhoben wird. Die Bitte erscheint dadurch kleiner und leichter zu erfüllen.（Weydt/Hentschel 1983: 14）

［*mal*

心態詞として現れた場合

- 決定疑問文: [...] 決定疑問文における *mal* の機能は，命令文におけるそれと近似している。とりわけ，そのような疑問文には，大抵要求の性格がある。
- 命令文:[...] 話しことばによる要求では, *mal* は大抵慣習的に文の構成要素を担う。
- 包括的な意味: [...] 要求と結びついて，この不変化詞には，その要求に'親しみ'を感じさせる効果がある。この効果に欠けると，その要求の文は不自然なものになり，その効果によって，要求が永続的な行為のものではなく，一度限りで，時間的に制限されたものとして強調される。それにより，その依頼が，比較的些細で容易く実現するかに思われる］

(154) Es wird dem Angesprochenen (zumindest formal) Spielraum gegeben bezüglich des Zeitpunkts der Ausführung der gewünschten Handlung. Deshalb wirken Aufforderungen mit *mal* beiläufiger, abgeschwächter und meist auch höflicher als solche ohne *mal*.（Thurmair 1989: 185）

［望まれた行為の実行時点に対して，（少なくとも形式上は）聞き手に猶予が与えられる。従って, *mal* を伴う要求は, *mal* を伴わない要求よりも手間がかからず，比較的緩和されたものとして作用する。また，大抵その要求には比較的丁寧な効果がある］

(155) *mal*

1. in Aufforderungssätzen;

   - Gestaltet die Aufforderung zwanglos, unverbindlich und höflich, mindert ihr Gewicht (sie scheint leichter erfüllbar), modifiziert die Illokution vom Befehl zur höflichen Aufforderung und Bitte.

2. in Entscheidungsfragen (Erststellung des finiten Verbs), die den illokutiven Charakter von Aufforderungen haben;

   - Indiziert den Aufforderungscharakter des (formalen) Fragesatzes, verleiht der Frage Aufforderungscharakter, signalisiert etwas Zwangloses, Höfliches und Unverbindliches, mindert das Gewicht der Aufforderung, läßt zusätzlich zur Frage und Aufforderung die Wunsch-Einstellung des Sprechers erkennen (der eine positive Antwort bzw. Reaktion bevorzugen würde).（Helbig 1994[3]: 175ff.）

［*mal* は

1. 要求文において;

   - 要求を拘束力のないもの，義務的でないもの，丁寧なものとし，その比重を和らげる（要求は，比較的簡単に実現されうると考えられる）。命令の発語内行為を丁寧な要求や依頼に修正する。

2. 要求の発語内的な性格をもつ決定疑問文（定動詞第一位）において;

   - （形式上の）疑問文がもつ要求の特徴を指定し，その質問に要求の性格を付与する。強制的でなく，丁寧であり，義務的でないものを含意し，その要求の比重を和らげる。さらに，質問や要求に対して話し手が望む心的態度を認識させる（話し手は，肯定的な返答ないしは反応を期待しうる）］

(156) *mal*

1. 要求文に用いられ，その要求の口調をやわらげる働きをして。

   ＊1 命令文に限らず，多少とも＜要求＞を示す発話には，好んで mal が用いられる。

   ＊2 要求を示す命令文には心態詞の mal がほとんど不可欠な要素になっているので，mal が欠けると，かえって不自然な，もしくはきわめてとげとげしい感じを与えることがある。

2. 決定疑問文に用いられ，その疑問文に丁重な＜勧誘＞＜依頼＞の性格を付与して。

（岩崎 1998: 762ff.）

(157) Mit *mal* tut der Sprecher zweierlei: Er signalisiert, dass er in einem über das Normale hinausgehenden Maße von der Eignung und Befähigung des Hörers überzeugt ist, und er reduziert das Gewicht der Verpflichtung, auf die er den Hörer festlegen will. Auf diese Weise bewirkt *mal* eine Minimierung des Stellenwerts des Geforderten, das als etwas Kleines, Einmaliges, Leichtes, einfach und beiläufig zu Erbringendes hingestellt wird.（Bublitz 2003: 186）

［*mal* の使用によって，話し手は２つのことを行う: 話し手は，*mal* を使用しない場合よりも高い程度で，聞き手による実行の適性と能力を見込む。そして，話し手は聞き手に引き受けさせようとする義務の比重を軽減する。このようにして，*mal* は要求された事柄の価値を最小限に抑える働きをする。つまり，その要求の事柄が，些細で一度限りであるもの，容易く，単純かつ手間をかけずに片付けられうるものとしてみなされるように働きかける］

これらの文献およびその他（Weinrich 1993: 855; Zifonun et al. 1997; Werner 2000: 47; 井口 2000, etc.）に基づいて，下記（158）と（159）に，心態詞 *mal* の使用環境とその機能をまとめる。

(158) 心態詞 *mal* の使用環境:

a. 行為指示の発話行為タイプの１つである発語内行為「要求（本研究では，命令，依頼，助言，許可の４つを含む）」が遂行されうる発話で使用される。

b. 命令文では，ほぼ慣習的に使用される。

(159) 心態詞 *mal* の機能:

a. 発語内行為「要求」の強制力を緩和／強制力の比重を軽減する。

b.「要求」に丁寧な（höflich）性格を与える。

（158a）に関しては，これまで何度も述べてきたことである。また，（158b）で述べられている「命令文」の中には，とりわけ，„Hör mal!“（まあお聞きよ），„Sag mal!“[61]（で，どうなんだ），

[61] この表現は，*Sie* の間柄の人に対しては„Sagen Sie mal!“というのが本来の用法であるが，方言に

„Schau mal!/Guck mal!“[62]（見てごらん）といった，聞き手の注意を促す一種の慣用表現も含まれる。この場合の *mal* の役目は，要求の強制力の緩和というより，むしろ口調上のものであると考えられる。

ここで注目したいのは，（159）で示した心態詞 *mal* の機能である。先行文献に従えば，（159a）の機能は，結果として（159b）の機能を（派生的に）生み出すことになる。しかし，この機能は，実際の文脈・状況において異なる蓋然性が高い。発語内行為「要求」を示す文形式（Formtyp）は命令文に限らず，決定疑問文や平叙文を用いて，相手に「依頼」を行う場合は多く，なかでも，下記（160a-e）に挙げる話法助動詞 *können*（英: can）を伴う「依頼」は日常的な発話方略である。しかし，筆者は，とりわけこの *können* を伴う決定疑問文に注目し，この発話形式における *mal* の使用が「丁寧な要求」（höfliche Aufforderung/höfliche Bitte）として扱われる点を見直す必要性があると考える。

(160) = (125) a. Kannst du *mal* das Fenster aufmachen?（Werner 1998: 99）
（窓を開けてくれる？）

b. Kannst du *[ein]mal* sagen, wie spät es ist?（井口 2000: 133）
（何時か教えてくれないか？）（ibid.）

c. Können Sie mir *mal* sagen, wie spät es ist?（岩崎 1998: 764）
（いま何時か，教えていただけませんか？）（ibid.）

d. Können Sie mir *mal* Feuer geben?（Thurmair 1989: 185）
（火を貸していただけますか？）

e. Kann ich *mal* das Buch haben?（Helbig 1994: 176）
（本を貸してくれる？）

よっては二人称親称複数の *ihr* を用いて，„Sagt mal!“となるところがある。また，現代では，動詞 *sagen* と一人称単数 *ich* の組み合わせで，„Ich sag' mal, [...]“（= „Meiner Meinung nach [...]“）（私の意見では[...]）という言い回しが一種の流行文句となっている。Bublitz（2003）に従えば，この際の *mal* の用法は，「陳述の重要性や関連性を比較的小さいものであると特徴づけ，かつ真理判断の断定を相対化する」と考えられる。このような *mal* の機能は比較的新しく，この機能を果たす *mal* の最も顕著な使用例としては，インタビューやトーク番組での政治家の話し方などが挙げられよう（脚注 53 も参照）。

[62] *gucken* は，*sehen*（見る）や *schauen*（見る［特に南部・オーストリア・スイス］）の類義語で，話しことばで用いられる。発音は「クッケン」に近く，北部ドイツの方言では，発音だけでなく，書く場合も *kucken* と記述する: „Kuck mal!“

4.4.2. *können* と *mal* の共起性の問題

心態詞 *mal* の使用における問題点は，主に，上の（160）で挙げた話法助動詞 *können* と共起した依頼を表す文で見受けられる。「依頼／頼み」は，話し手が，相手による行為の実行（事柄の実現）が自分自身にとって必要である，あるいは望ましいと信じている行為である。従って，多くの場合聞き手には利益が伴わない。そのため，話し手は聞き手の負担を軽減しようと，通常，命令形ではなく疑問形で依頼を遂行する。後述のアンケート調査でも問題になったことであるが，命令文（Imperativsätze）という発話形式が，「依頼」が意図された行為で使用される可能性は非常に低いことが確認されている。さらに，平叙文（Deklarativsätze）の場合，例えば„Sie können das Fenster öffnen.“（直訳: あなたは窓を開けることができます; 意訳: 窓を開けて構いませんよ）という発話からもうかがえるとおり，相手に対する「許可」を表すという点で，特に「疎遠な相手」や「目上の相手」に対して「許可」を与えることは非常に不自然かつ不丁寧であるとされる。そのため，日常的に使用されにくい発話文に対して *mal* の有無を論じてもあまり有意義ではない。一方，疑問形の発話による依頼の遂行（間接発話行為）では，Leach（1983）や武田（1994）でも指摘されるように，主に話法助動詞 *können* によって相手に行為の可能性を問う方略を用いる場合が多い[63]。（160a-e）で挙げた代表的な例からもうかがえるが，事実，ドイツ語の会話において，疑問文による「依頼」は日常的に使用される発話方略であり，とりわけ *können* を伴う依頼は，実際の発話で耳にする機会が非常に多いといえる。そこで，本研究でも，主に *können* を伴う決定疑問文に的を絞り，ドイツの日常会話における依頼の発話を考察する。

なお，本研究では，「疎遠な相手」，「目上の相手」，「親しい相手」という語を，それぞれ，後述のアンケート調査における「見知らぬ人」，「教授」，「友人」と対応させて使用する。当然，一般的に疎遠であることと見知らぬことは１対１の関係になく，疎遠でありかつ目上である場合や，目上でありかつ親しい場合なども考えられる。ここで「疎遠」という語を用いるのは「親疎」の対比関係に依存し，「目上」はその中間的立場としての関係を指す語とする。これらの人間関係は，三宅（1994b）の「ヨソ」，「ソト」，「ウチ」の概念[64]に

---

[63] 日本語では，「～してくれますか／～してもらえますか」やその謙譲語，およびそれらの否定形に相当すると考えられる。

[64] これら３つの概念は，日本人の自己をとりまく人間層として，主に英米人との比較という観点から三宅（1994b）が提唱するものである。三宅（1994b）でも述べられるが，これら３つの意識の仕方には，日本人と英米人で違いが見られ，英米人におけるソトとヨソの境界は，それほど明確なものではない。そして，このことは，おそらくドイツ人に関しても当てはまるものと考えられる。しかし，本研究で特に論点となるのは，「ウチ vs. ソト，ヨソ」の関係であり，

基づき，三宅（1994b: 31）では，「ウチの人間は自己のまわりの家族やごく親しい人々，ソトの人間はごく親しくはないが自己やウチと関連のある人々，ヨソの人間は自己やウチとは関係がないがなにかのきっかけで関係をもちる人々（例: 通行人，電車などでまわりにいる人，サービス業の人など）」とされる（中山 1985; 平林・浜 1988; 三宅 1994a, b も参照）。

4.4.2.1. *mal* の使用に関する条件

具体的な考察に移る前に，ここで心態詞 *mal* の使用条件に関して特記しておくべきことがある。まず次の例文を見てみたい。

(161) a. Kannst du mir die Tasche halten?（かばんを持っていてくれる？）

b. Kannst du mir *mal* die Tasche halten?（ちょっとかばんを持っていてくれる？）

この例文の比較からうかがえることは，(161a）に比して（161b）では，その遂行された「要求」が「永続的でなく，一度限りで時間的に制限された」（Weydt/Hentschel 1983）ものであることが強調される点にある。それにより，その「要求」が「強制的でなく，丁寧であり，義務的ではないこと」（Helbig 1994[3]）が含意され，従って聞き手に与える心理的負担の比重が軽くなると考えられている。

しかし，下記（162a, b）の例では，たとえ心態詞 *mal* が用いられても，その望まれた効果を発揮しえない。

(162) a. Kannst du mir 100 Euro leihen?（100 ユーロ貸してくれる？）

b. Kannst du mir *mal* 100 Euro leihen?[65]（ちょっと 100 ユーロ貸してくれる？）

（162a, b）は，先の（161a, b）と同じく，ともに間接的な依頼の発話であり，どちらも話し手は聞き手に対し，「話し手に 100 ユーロを貸す」ことを要求している。そこで（162b）では，そ

この点で，３つの分類が，後述のアンケート結果に否定的な影響を与えるものではない。むしろ, 4.4.3.以降における日本語の「ちょっと」との比較を行ううえで，詳細さを図る理由から，これら３つの概念に基づくこととした。

[65] この例は筆者によるもので，筆者がテュービンゲン大学に留学中（2003-2004），WG（ここでは学生寮）の母語話者数人に尋ね，そのニュアンスを考察した。その際，必要最低限の先行発話として，「友人による発言」と定めた上で，„Ich muss meine Diplomarbeit abgeben. Ich habe aber jetzt keinen Drucker und muss sofort einen kaufen. Doch habe ich momentan nicht genug Geld. Also:“に続く発話とした。

の「要求」の強制力を軽減するために心態詞 *mal* が使用されている。しかし，この場合は *mal* の使用如何に関わらず，聞き手には「不丁寧である」と判断・評価される。当然，問題はその命題内容にある。つまり，「100 ユーロという比較的高い金額を貸す」という要求内容自体，その絶対的な負担が重い。そのため，*mal* の有無を問わず，この依頼では（162a）の発話がすでに「不丁寧である」と判断される。まして（162b）のように *mal* を使用すると，その不丁寧の度合いはさらに増大する。なぜなら，命題内容の絶対的な負担が重いために，この際の *mal* の使用は，かえって聞き手の印象を悪くする蓋然性が高いためである。「かばんをちょっと持っていてくれる？」といった遂行内容の負担が比較的軽い命題には通用しうる *mal* の機能が，（162）のように金銭の絡む命題では，むしろ「生意気な」（frech）あるいは「厚かましい」（unverschämt）印象を与えかねない。まして，*mal* の使用により，「その要求が強制的でも義務的でもないこと」（Helbig 1994[3]; 176）が含意されるのであれば，かえって，「義務的でないのは当然だ！」と聞き手に余計な反感を与えてしまうであろう。「金銭」という利害関係が絡む「依頼」では，言語形式の問題よりもむしろ心理的な方略が重要視されやすい。つまり，その「依頼」の必要性を十分に説明し，聞き手を納得させるような方略が望まれる。このような方略は，絶対的な負担（ここでは金額）が重く（高く）なればなるほどその重要度を増す。以上のことから，心態詞 *mal* の使用条件の１つとして（163）が導かれる。

(163) 心態詞 *mal* は，聞き手によって実行されるべき行為の心理的・実際的（物理的）負担が軽い場合にのみ適切に機能しうる。

4.4.2.2. *mal* の使用に関するアンケート調査

上で示した使用条件をふまえたうえで，本節から，心態詞 *mal* の実際の使用状況を仮定し，その使用に関する具体的な分析を行う。その際，筆者が実施したアンケート調査およびその統計的な分析結果に基づき，心態詞 *mal* が持つとされる「要求に丁寧さを付与する」という機能の見直しの必要性を指摘する。結果を先に述べると，本調査では，少なくとも話法助動詞 *können* を伴う依頼発話において，会話参加者の区別（見知らぬ人／教授／友人）に関わらず，„höflich“（丁寧な）という性格は関与せず，会話の相手（疎遠／目上）によっては，むしろ比較的不自然な発話として捉えられ，厚かましい（押し付けがましい）態度を示してしまうことがわかった。そこから，„höflich“という概念と *mal* の使用意義とのつながりが最終的な見直しの焦点となる。

心態詞 *mal* は，使用される状況によって，その機能が果たす効力に違いがある。同じ要求であっても，「疎遠な相手」や「目上の相手」に対する場合より，とりわけ「親しい相手（家族，友人，同僚など）」に対して使用される傾向が強い。このことは，板山（1988: 76）や Werner（2002: 148）でも示唆されているが，これまで，その要因は述べられてこなかった。そこで，筆者は，まず使用状況の違いにおける *mal* の役割を観察するため，次のような内容で調査を行った。

(164) a. 発話状況は計６つを設定する（下記に内容を挙げる）。

b. 会話の相手は，「見知らぬ人／教授／友人」とする。

c. 文形式は，話法助動詞 *können* を伴う決定疑問文によるものを標準とする。
※命令文における *mal* の使用に関しては考察しない。[66]

d. 被験者には，上記 a, b, c に従って作成した文を提示し，各々の文で３つの次元／要素に対するスケール値（-3～3）を記入してもらう（評定尺度得点形式）。３つの次元とは「丁寧な」（höflich），「自然な」（natürlich），「厚かましい／図々しい」（unverschämt）とする。

e. 被験者は全 92 名（女性 65 名，男性 27 名）の母語話者の学生（Tübingen 大学: 言語学の学習経験なし）で，平均年齢は 23.3 歳である。

f. 被験者には，話し手（尋ねる側）として被験してもらう。　（2005 年 3 月～4 月実施）

発話状況 1:「路上で道を教える」

Sie sind gerade allein in der Stadt. Sie wollen ein neu erbautes Städtisches Museum besuchen. Aber Sie wissen nicht genau, wo es ist. Da kommt entweder ein Fremder, zufällig ein Professor oder ein Freund an Ihnen vorbei. Sie sprechen die Person an und fragen nach dem Weg.

［あなたは今，一人町にいて，新しくできた市立博物館に行きたいと思っています。しかし，その正確な場所を知りません。そこへ，道行く人，あるいは偶然にもあなたの知っている先生，またはあなたの友人が通りがかりました。あなたは，その人に話しかけ，道を尋ねます］

[66] パイロットスタディの段階で，（少なくとも今回の調査で設定した発話状況において）命令文はほぼ確実に使用されないという結果を得たためである。命令文による依頼発話は，調査結果における平均値に注目した時点で，丁寧でもなければ自然でもなく，かつ厚かましい感じを与える表現として判断された。従って，本調査では考察の対象としない。日常で使用されないと判断される発話に対し，心態詞 *mal* の有無の効果を問うことは有意義であるとは思えないためである。

発話形式 1: Entschuldigung[67], können Sie (Kannst du) mir sagen, wo das Städtische Museum ist?

［すみません，市立博物館がどこか教えていただけますか（教えてくれる）？］

発話形式 2: Entschuldigung, können Sie (Kannst du) mir mal sagen, wo das Städtische Museum ist?

［すみません, mal 市立博物館がどこか教えていただけますか（教えてくれる）？］

発話状況 2:「図書館で静かにする」

Sie sind gerade in der Universitätsbibliothek. In der Nähe unterhalten sich entweder Fremde oder Freunde von Ihnen laut. Sie sprechen die Personen an und wollen sie auffordern, leiser zu sprechen.

［あなたは今，大学の図書館にいます。近くの席で見知らぬ人，あるいはあなたの友人が大きな声で話しています。あなたは，その人物たちに話しかけ，小声で話すよう求めます］

発話形式 1: Entschuldigung, können Sie (könnt ihr) etwas leiser sprechen?

［すみません，少し静かに話していただけますか（話してくれる？）］

発話形式 2: Entschuldigung, können Sie (könnt ihr) mal etwas leiser sprechen?

［すみません, mal 少し静かに話していただけますか（話してくれる？）］

発話状況 3:「列車内でトランクを持ち上げる」

Sie befinden sich allein auf einer Reise. Sie sind in den Nachtzug eingestiegen und in Ihr Abteil gegangen. Sie haben einen Koffer und noch einige andere Gepäckstücke. Sie wollen Ihren Koffer auf das Regal stellen, aber es fällt Ihnen allein schwer. Deshalb bitten Sie einen fremden Fahrgast, Ihnen zu helfen.

［あなたは一人旅をしていて，夜行列車に乗り込み自分のコンパートメント（電車内の仕切られた車室）につきました。あなたは，１つのスーツケースといくつかの荷物を持っていて，棚の上にスーツケースを乗せようとしましたが，重くて一人では困難です。そこで，その場の乗客に手伝ってもらおうと頼みます］

Oder: Sie befinden sich auf einer Reise mit einem Professor oder einem Freund in der gleichen Situation.

［**あるいは:** 同じ状況で，教授あるいは友人に頼みます］

発話形式 1: Entschuldigung, können Sie (Kannst du) mir helfen, den Koffer hochzuheben?

［すみません，トランクを持ち上げるのを手伝っていただけますか（手伝ってくれる？）］

---

[67] 友人に対しての„Anredepartikel“（呼びかけ詞）に関しては，「それぞれの状況に適したものを使用して良い」とした。状況によっては，友人同士の対話で，“Entschuldigung”（すみません）が使用されることは稀だからである。

発話形式 2: Entschuldigung, können Sie (Kannst du) mir mal helfen, den Koffer hochzuheben?

［すみません，mal トランクを持ち上げるのを手伝っていただけますか(手伝ってくれる？)］

発話状況 4:「教室の窓を開ける」

Sie befinden sich mit einem Professor und Freunden in einem Seminarraum der Universität. Im Zimmer ist es sehr schwül. Am Fenster sitzt entweder der Professor oder ein Freund von Ihnen. Sie bitten die Person, das Fenster aufzumachen.

［あなたは，大学のゼミに出ています。その教室は大変蒸し暑く，窓のそばに先生あるいは友人が座っています。そこで，相手に窓を開けてもらえるよう頼みます］

発話形式 1: Entschuldigung, können Sie (Kannst du) das Fenster aufmachen?

［すみません，窓を開けていただけますか(開けてくれる？)］

発話形式 2: Entschuldigung, können Sie (Kannst du) mal das Fenster aufmachen?

［すみません, mal 窓を開けていただけますか(開けてくれる？)］

発話状況 5:「(良い写真を撮るために)少し右に動く」

Sie befinden sich allein an einem Touristenort. Da kommt ein Fremder und bittet Sie, ihn vor einer Sehenswürdigkeit zu fotografieren. Sie nehmen seine Kamera und visieren die Objekte an. Aber der Winkel ist ein bisschen ungünstig. Es wäre besser, wenn er noch ein bisschen weiter rechts stünde. Deshalb sagen Sie zu ihm:

［あなたは，一人で観光地にいます。そこへ観光客が写真を撮って欲しいと頼んできました。あなたは，その人のカメラを受け取って構えましたが，構図があまり良くありません。相手が，もう少し右に動くとうまく写せそうです。そこで，その人に言います］

Oder: Sie befinden sich an einem Touristenort mit einem Professor oder einem Freund in der gleichen Situation.

［**あるいは:** 同じ状況で，教授あるいは友人に言います］

発話形式 1: Können Sie (Kannst du) ein bisschen weiter nach rechts gehen?

［少し右の方に行っていただけますか(行ってくれる？)］

発話形式 2: Können Sie (Kannst du) mal ein bisschen weiter nach rechts gehen?

［mal 少し右の方に行っていただけますか(行ってくれる？)］

発話状況 6:「アイコンをクリックする」

Sie befinden sich im Zimmer eines Professors mit einem Freund. Sie beschäftigen sich zusammen mit einem Computerprogramm. Im Moment bedient entweder der Professor oder der Freund den Computer. Aber er sagt, dass er nicht weiß, was er als nächstes machen soll. Da Sie es wissen, sagen Sie zu ihm:

［あなたは，友人と教授の研究室にいます。あるコンピュータのソフトを立ち上げて，共に作業をしています。今，教授あるいは友人がコンピュータを使っているのですが，次の操作がわからないと言ってきました。そこで，相手に言います］

<u>発話形式 1</u>: Können Sie (Kannst du) das blaue Icon da oben anklicken?

［その上にある青いアイコンをクリックしていただけますか(クリックしてくれる？)］

<u>発話形式 2</u>: Können Sie (Kannst du) mal das blaue Icon da oben anklicken?

［mal その上にある青いアイコンをクリックしていただけますか(クリックしてくれる？)］

それぞれの発話形式における括弧は，「対友人」の場合の発話形式を示しており，「『T/V システム』を持つ言語－つまり二人称代名詞に，いわゆる親称と敬称を区別する tu/vous, du/Sie, ты/вы のような選択肢のある［...］言語－」（Thomas 1995 の邦訳: 164）であるドイツ語の場合，同等とみなされる相手に対しては„Duz-Verhältnis“（主語を *du* で呼び合う関係）が選択される。また，これらの発話状況に絞ったのは，①被験者（学生）にとって状況を把握しやすい，②要求の命題内容の重みが比較的軽いという２つの理由からである。

本調査で扱う「依頼」の発話行為では，疑問文などによる間接的な表現や „Entschuldigung“（すみません）のような「呼びかけ詞」（Anredepartikel）が頻繁に用いられ，Brown/Levinson（1987）に従うと，これらの表現手段は，ネガティブ・ポライトネスに相当する。ここで，重要なテーマの１つとなる「ポライトネス理論」について，簡単にまとめておく。

Brown/Levinson（1987）が提唱した„Politeness Theory“（ポライトネス理論）では，その根幹をなす概念として„face“（フェイス）が掲げられる。「フェイス」は，「人間の基本的欲求」

と解され，２つの面—„negative“と„positive“—を持つとされる。「ネガティブフェイス(「消極的フェイス」とも呼ばれる)」とは，相手から自由でありたいと願う防御的な願望，つまり自己の存続欲求であり，「ポジティブフェイス(「積極的フェイス」とも呼ばれる)」とは，自己を他者に認めさせたいと願う連帯的な願望，つまり社会の一員としての存続欲求であると考えられる。そして，発話行為の規則は，この自己と他者のフェイスを守るという視点から行われるとされる。Brown/Levinson（1987)によれば，依頼は，相手の„face“を脅かしうる行為(Face Threatening Act: FTA(フェイス侵害行為))として捉えられ，FTA の行使が決定された場合，そのフェイス侵害度(FT 度)を軽減するために，４つの「ポライトネス・ストラテジー」が導入される: *Bald on record*(矯正策を講じない直接的なストラテジー)，*positive politeness*(ポジティブ・ポライトネス(・ストラテジー))，*negative politeness*(ネガティブ・ポライトネス(・ストラテジー))，*off record*(FTA を表に出さないストラテジー)。このうち，「ポジティブ・ポライトネス」は，聞き手が「認められた」あるいは「仲間とみなされた」と感じるのを増やすコミュニケーション手段であり，それに対して「ネガティブ・ポライトネス」は，聞き手が「行動の自由を束縛された」と感じるのを減らすコミュニケーション手段を指す。

上記(164d)で，「丁寧な」(höflich)，「自然な」(natürlich)，「厚かましい／図々しい」(unverschämt)という３つの次元／要素の設定を挙げたが，この中の„Unverschämtheit“(厚かましさ／図々しさ)という次元は，間接性や呼びかけ詞が担うネガティブ・ポライトネスの意味での„Höflichkeit“(丁寧さ)に対する反意語として導入した。ある発話に対して，もし「丁寧でない」という評価がなされた場合に，その裏付けとして機能させるためである。さらに，たとえ「丁寧である」という判断がなされても，例えば「すみません，もしあなた様にとって不都合でなければ，どうか私に今何時であるかをお教えいただくことはできませんでしょうか」といった極端な例からうかがえるとおり，いたって不自然で，慇懃無礼でありうる発話の場合も考えられる。そこで，この可能性を排除するために，„Natürlichkeit“(自然さ)の次元を加えることにした。

以上をふまえ，本調査で最も注目するのは，「個々の発話形式において，*mal* の有無が，発話にどのような影響を及ぼしうるか」という点である。そこで，本調査の仮説は次のとおり

である:「対見知らぬ人」および「対教授」において，丁寧さと自然さの度合いが減少する蓋然性が高く（有意水準: 1%/5%），あるいは（少なくとも）増大せず（有意でない），厚かましさの度合いが増大する蓋然性が高い（有意水準: 1%/5%），あるいは（少なくとも）減少しない（有意でない）。「対友人」において，丁寧さと自然さの度合いが増大する蓋然性が高く（有意水準: 1%/5%），あるいは（少なくとも）減少せず（有意でない），厚かましさの度合いが減少する蓋然性が高い（有意水準: 1%/5%），あるいは（少なくとも）増大しない（有意でない）。この仮説の検証によって，まず，心態詞 *mal* が，とりわけ「親しい相手（家族，友人，同僚など）」に対して使用される傾向が強い点を裏づけ，続いて，*mal* が使用される際の（観察しうる）不適格性に理論的な説明を与えることが目的である。

ドイツ語で依頼文を発話する場合，本来はまず，*mal* よりもむしろ接続法Ⅱ式や副詞 *bitte*（英: please），あるいはそれらと *mal* が共起した形（*könnten* + *mal*, *würden* + *mal*, *bitte* + *mal* など）が優先的に用いられると考えられよう。これらの手段を伴う発話は，発話に丁寧な性格を付与することが意図された場合の典型であると考えられるためである。しかし，本調査で求めるのは，‘純粋な’*mal* の効果であり，Bublitz（2003: 198）には，„*Mal*, obgleich auch alleinstehend ein unverzichtbarer Indikator für Höflichkeit im Deutschen, [...]“（たとえ単独で用いられても，ドイツ語における丁寧さの標識として不可欠である *mal* は，[...]）とあることから，話法助動詞 *können* も直説法で統一したうえで，*mal* の有無のみに差異のある発話を設定した。

4.4.2.2.1. 統計処理に関して

本調査では，*mal* の有無に対する判断値の差を「サイン検定」（sign-test）（cf. 田中・山際 2004[16]: 286ff.）に基づいて分析した。サイン検定とは，二種のデータにおける数値の差を符号化（例: ＋と－）して，その符号の数の出現確率が 50%・50%であると仮定した場合の偏りを分析するという統計手法である。つまり，本調査に関していえば，全被験者数 92 人において，*mal* を伴わない発話からみて，*mal* を伴う発話に対しプラスの判断をする者が 46 人，マイナスの判断をする者が 46 人であるという仮説を立て，その期待値からの偏り（例: 74 対 18, 20 対 50 など）が出現する確率を導出する。この際，*mal* の有無がプラスにもマイナスにも傾かない，つまりいずれも同一の判断値が与えられたもの（20 対 50 の場合は 22）は考察対象に入れない。そして，例えば，*mal* を伴う発話が，*mal* を伴わない発話よりもネガティブ（-）であ

ると判断した被験者が過半数を占める場合, *mal* の使用は, 「丁寧さ」ならびに「自然さ」の度合いを減少させ, 同時に「厚かましさ」の度合いを増加させる蓋然性が高いことを意味する。また, サイン検定では, ある事象が肯定的に判断されるか, 否定的に判断されるかに注目し, スケール値がどれほどの幅で変動したかは問題としない。例えば, 被験者 A が, *mal* を伴わない発話に対する値として-2, *mal* を伴う発話に対する値として 2(値の差＝4)という判断をくだし, 他方, 同じ発話に対して, 被験者 B がそれぞれを 0 と 3(値の差＝3), あるいは被験者 C が 1 と 2(値の差＝1)という値で判断した場合, それぞれ 4, 3, 1 という値の差, つまりその分だけ判断としての幅があったことになる。しかし, サイン検定において問題となるのは, こうした値の差ではなく, いずれも *mal* を伴わない発話から *mal* を伴う発話へと肯定的に判断されているという点である。逆に, 否定的な値が与えられた場合も同様で, いずれも *mal* を伴わない発話から *mal* を伴う発話へと否定的に判断されたことが重要視される。そして, その現象が, 本来は 1%(ないしは 5%)の確率でしか起こりえない状況で, それでも事実起こった場合, それ以上の被験者の増加に関わらず, その現象は, 偶然ではなく必然的に起こりえたものであると解釈される。

4.4.2.2.2. 分析結果

統計処理の結果を表(165)に示す。ここでは, さしあたり「丁寧さ」の次元にのみ注目し, それぞれのコンテクストにおいて, 心態詞 *mal* の使用が,「丁寧さ」の次元で発話にどのような影響を与えるかを見ていく。

表(165)からうかがえる心態詞 *mal* の及ぼす主な影響として, いずれの状況においても, 心態詞 *mal* を付与すると, 相手の立場を問わず, 丁寧さの度合いが減少する蓋然性が非常に高いことが挙げられる(どの場合も, 形式 2－形式 1 がマイナスの値を示している。有意水準: 1%/5%)。このことから, 話法助動詞 *können* を伴う決定疑問文では, (少なくとも今回の発話状況における)要求の命題内容および相手の立場を問わず, 心態詞 *mal* は「要求に丁寧な性格を付与する」という機能を発揮し難いことが予測される。つまり, 仮説に反して,「対友人」においても, *mal* の使用が, 先行文献で言われてきたような「丁寧さの付与」という機能を満たすとは考えにくいということである。

(165) 発話における丁寧さの度合いの分析（サイン検定）

丁寧さ（Höflichkeit）の次元			有意差の分析		平均値		
			出現確率	有意水準	発話形式1（*mal*なし）	発話形式2（*mal*あり）	形式2－形式1*
依頼	状況1：路上で道を教える	見知らぬ人	両側: p < .01	1%	1.99	0.00	-1.99
		教授	両側: p < .01	1%	1.14	-0.47	-1.61
		友人	両側: p < .01	1%	1.59	0.84	-0.75
	状況2：図書館で静かにする	見知らぬ人	両側: p < .01	1%	1.70	-0.28	-1.98
		友人	両側: p < .01	1%	1.11	0.22	-0.89
	状況3：列車内でトランクを持ち上げる	見知らぬ人	両側: p < .01	1%	2.01	1.09	-0.92
		教授	両側: p < .01	1%	1.73	0.74	-0.99
		友人	両側: p < .01	1%	1.65	1.28	-0.37
	状況4：教室の窓を開ける	教授	両側: p < .01	1%	1.52	0.33	-1.19
		友人	両側: p < .05	5%	1.36	1.18	-0.18
助言	状況5：（良い写真を撮るために）少し右に動く	見知らぬ人	両側: p < .01	1%	1.76	0.73	-1.03
		教授	両側: p < .01	1%	1.60	0.41	-1.19
		友人	両側: p < .01	1%	1.61	1.32	-0.29
	状況6：アイコンをクリックする	教授	両側: p < .01	1%	1.41	0.54	-0.87
		友人	両側: p < .05	5%	1.46	1.21	-0.25

※評定尺度の間隔は等しいものと仮定する。

* 形式2－形式1:「発話形式2（*mal*を伴う発話）の値から，発話形式1（*mal*を伴わない発話）の値を引く」の意

本来，*mal* の使用は，下記（166）の図で示すとおり，その意味的な特性から「要求の強制力を緩和する」という機能が導かれ，その効果が発揮されることによって，結果的に，その「要求に丁寧な性格を付与する」と考えられる。

(166) **心態詞 *mal* の使用**

非多発的かつ／あるいは非持続的かつ／あるいは非即時的特性

↓ 段階 1

機能：「要求」の強制力の緩和

↓ 段階 2

機能：「要求」に丁寧な性格を付与

筆者は，心態詞 *mal* の意味的特性に基づき，*mal* が「要求の強制力を緩和する」目的で使用される点に異論はない。もし，この機能すら仮定しない場合，そもそも心態詞 *mal* が「要求（主に依頼）」の発話で頻用される理由も説明がつかない。しかし，本調査の結果が示すと

おり，最終的に「丁寧な性格を付与するか否か」には疑問の余地がある。図(167)が示すように，心態詞 *mal* の使用は，少なくとも *können* を伴う発話では，丁寧な性格を付与するか否かの段階で，何らかの制限が加わり，実際の使用場面で支障を来たす場合があると考えられる。

(167) **心態詞 *mal* の使用**

非多発的かつ／あるいは非持続的かつ／あるいは非即時的特性

↓ 段階 1

機能：「要求」の強制力の緩和

↓ 段階 2 ｛[+ *können* ; +*決定疑問文*]

← 制 限

~~機能：「要求」に丁寧な性格を付与~~

そこで，まず 1 つ目の疑問(168)が生まれる。

(168) 話法助動詞 *können* を用いた決定疑問文に心態詞 *mal* を付与すると，相手の立場を問わず丁寧度が減少するのはなぜか。

また，たとえ本調査のような結果が得られたとして，ドイツ語の日常会話では，とりわけ学生同士の会話で„Kannst du mal 〜“といった発話を多く耳にする。そこで，表(165)をさらに詳しく見てみると，平均値の欄に注目した場合，相手の立場によって減少の度合いに違いが見受けられる。なかでも塗潰し箇所で示すとおり，「対友人」における数値は，常に他二種の相手に対する数値よりも小さい。

それゆえ，急遽，各状況における「丁寧度の減少度合いの差」を検定(t 検定)することとした。下記の表(169)は，その結果である。この際，「対見知らぬ人」と「対教授」を 1 つのグループとして捉え，そのうちいくつかは，数値の低い方と「対友人」の値を比較した(塗潰し箇所)。例えば，状況 1 では，「対教授」における値(-1.61)と「対友人」における値(-0.75)の有意差を検定し，もし有意であることが判かれば，必然的に「対見知らぬ人」の値(-1.99)とも有意に差があるということを意味する。その結果，いずれの状況においても，それぞれの数値の差は有意であることがわかった。つまり，一方で，先のサイン検定による結果から，

話法助動詞 *können* を用いた決定疑問文に心態詞 *mal* が付与されると，相手の立場を問わず丁寧度が減少するということが判明し，他方，「対見知らぬ人」や「対教授」と比較して，「対友人」における減少の度合いは常に小さいことが必然であると判別された。

(169) 丁寧度の減少度合いの差（t 検定）

丁寧さ（Höflichkeit）の次元			形式2（*mal* あり）－形式1（*mal* なし）の値 *			有意差の分析	
			見知らぬ	教授	友人	出現確率	有意水準
依頼	状況1	平均	-1.99	-1.61	-0.75	両側: p < .01	1%
		標準偏差	1.31	1.31	0.92		
	状況2	平均値	-1.98	-	-0.89	両側: p < .01	1%
		標準偏差	1.33	-	1.09		
	状況3	平均値	-0.92	-0.99	-0.37	両側: p < .01	1%
		標準偏差	1.08	1.23	0.80		
	状況4	平均値	-	-1.19	-0.18	両側: p < .01	1%
		標準偏差	-	1.26	0.83		
助言	状況5	平均値	-1.03	-1.19	-0.29	両側: p < .01	1%
		標準偏差	1.06	1.08	0.75		
	状況6	平均値	-	-0.87	-0.25	両側: p < .01	1%
		標準偏差	-	1.56	1.07		

※評定尺度の間隔は等しいものと仮定する。

* 形式2－形式1:「発話形式2（*mal* を伴う発話）の値から，発話形式1（*mal* を伴わない発話）の値を引く」の意

このことから，２つ目の疑問（170）が導かれる。次節では，先の（168）の疑問とこの（170）の疑問に対し理論的な説明を試みる。

(170) いずれの状況でも，「対友人」では，「対見知らぬ人」と「対教授」との比較において，常に減少の度合いが小さいのはなぜか。

4.4.2.2.3. *mal* の不適格性の考察

2.3.2.1.で述べたとおり，心態詞 *mal* を伴う発話は，常に発話行為「要求」の読みが喚起される場合に用いられる（cf. Wunderlich 1976; Helbig 1977; Franck 1980; Hentschel 1991）。下記（171a, b）（= (48) の再録）の比較において，「依頼」であれ「助言」であれ，とにかく「窓を閉める」という行為を聞き手に求めている点で，*mal* が付与された（171b）が「要求」と結び

ついているのは明白である。少なくとも,(171b)では,(171a)と異なり,聞き手の能力に関する「陳述」や「主張」といった読みは排除されよう。

(171) a. Du kannst das Fenster schließen.

b. Du kannst *mal* das Fenster schließen.（Helbig 1977: 34）

つまり,「陳述」や「主張」などとならび,潜在的に「要求」をも表す発話で心態詞 *mal* が用いられることによって,その文が「要求」であるということが明示される,あるいは,発話が「要求」に限定されることを意味する。そのため,心態詞 *mal* のこの特性と,話法助動詞 *können* を伴う間接発話の機能が矛盾をきたすと考えられる。(165)の表で挙げたいずれの状況でも,*mal* が付与されていない間接発話の時点では,相手の立場を問わず,平均値が比較的高いプラス値を示している。当然,たとえ間接発話であっても,今回のアンケートで設定した状況では,いずれも「要求」以外に解釈されない蓋然性は高い。しかし,間接発話の本来の意義あるいは最大の利点は,あくまでも表面上聞き手に返答における選択権を与えることで,発話の解釈に幅を持たせることにある。それにも関わらず,そこで *mal* が用いられると,「要求」の性格が明示的に付与されることによって丁寧度が減少する。「要求」以外の解釈可能性が排除され,要求の断りが,直接話し手のフェイス(同時に自らのフェイス)を侵害するためである。すなわち,本来「丁寧さ」が意図された *können* を伴う疑問形による発話方略と,「要求」の解釈を確定する *mal* の機能との間に矛盾が生じる。疑問形の発話は,依頼内容の実行に対して聞き手に肯定ないしは否定の選択の余地を与えるという意味での「丁寧さ」であり,*können* の使用は,表面上その依頼内容の聞き手による実行が可能であるか否か,あるいはそのための能力が備わっているか否かを問うための方略である。例えば上記(171a)を疑問形にして考えてみても明らかであるが,*mal* を伴わない発話では,あくまでもその発話が「要求」であることは明示されない。たとえ,聞き手が妥当な推論によって話し手の発話を「要求」であると解釈したとしても,表面上は,話し手は聞き手の能力あるいは実行の可能性を尋ねているにすぎない場合も残される。そして,このことは聞き手の立場からも同様で,「要求」であると解釈したうえで,話し手のフェイス(同時に自らのフェイス)を侵害せずに,要求の実行を断る可能性が残される。しかし,そこに *mal* が付与されることで「要求」以外の解釈が排除されてしまうのである。この矛盾が,本調査結果に

おける *mal* の不適格性の要因であると捉え，心態詞 *mal* は，少なくとも *können* を伴う決定疑問文では，「要求に丁寧な性格を付与する」という機能を発揮しえないと考える。

また，上記(170)の疑問に対しては，心態詞 *mal* の意味的な特性を引き合いに出す。Weydt/Hentschel (1983: 14)に従えば, *mal* を伴う「要求」では，その「要求」が「暫定的であり拘束力の少ない負担である」といった意味的な特性が含意されていると考えられる。本来，心態詞 *mal* の方略は，このような意味的特性に従って，遂行された「要求」の比重を最小にする(実際にはそのように見せかける)ものであり，これは，聞き手に対する配慮から生まれる「丁寧さ」の方略の１つでありうる。しかし，同時に「話し手は，自らが遂行した依頼に対する聞き手の実行能力を確実に見込む」(cf. Bublitz 2003: 186)。この「実行能力の見込み」は，話し手が，その「要求」を「些細で容易なもの」(etwas Kleines, Leichtes)(ibid.)として捉えるがゆえに，その「要求」の実行に対する負担の比重が，聞き手にとって比較的軽いとみなすことに依る。

しかし，例えば見知らぬ人に対して，「路上で道を尋ねる」という場合，たとえ暫定的であっても拘束性が低いとは判断し難い。また，教授の場合では，そもそも教授に対して要求する資格がない者(例: 学生)が，心態詞 *mal* を使用し，「暫定的で拘束性の小さい命題内容である」と示すことで，聞き手(教授)による「要求」の実現を迫ることは，相手に「押しつけがましい／厚かましい」印象を与えかねない。つまり，「疎遠な相手」や「目上の相手」に対しては，「要求内容が軽い」ことは「要求可能である」ことの前提条件にならない。たとえ軽いことであっても，「軽いことだ」と示すことで，依頼が実現しやすくなるわけではなく，「丁寧さ」を表す場合には，むしろ相手の好意にすがる方略，つまり「労力(手数)をかけるかもしれないがなんとかしてもらえるとありがたい／大変恐縮だが」といった，いわば相手をたてる方略(ネガティブ・ポライトネス)を用いるべきであろう。それに対して，「対友人」においては，その親密な(freundschaftlich, kollegial, vertraut, familiär)関係により，ある種の「甘え」や「厚かましさ」が許容されると考えられる[68]。つまり，「要求内容が些事であれば，お互い相手に対して要求してよい／相手のために実行してよい」といった一種の連

[68] 先に挙げた Weydt/Hentschel (1983: 14)において，‘freundlich’ という表現あるが，‘freundlich’と‘freundschaftlich’は同義ではない。また, Werner (2000: 47, 51) では，心態詞 *mal* に関して，‘vertraut’や‘familiär’という用語が使用されているが，それによって，*mal* の「丁寧な要求」機能に制限を加える論旨ではなく，„höfliche Abmilderung“の範疇のもとで，日本語との比較を研究対象にしている。

帯性（Solidarität）の基盤が前提となるのではないか。その結果，友人に対してであれば，相手の実行能力を確実に見込んでいても差し支えがないと考えられる。そして，このことは，心態詞 *mal* は，本来相手が「親しい間柄」の場合に限り使用が容認されうるということを示している[69]。

この点の裏付けとして，表（172）を挙げる。これは「自然さ」の次元に注目したものであるが，「丁寧さ」の次元と同様，いずれの状況においても，「対友人」では「対見知らぬ人」と「対教授」との比較において，「自然さ」の減少の度合いが小さいことがうかがえる（塗潰し箇所）。その上，状況 3, 4, 6 においては, *mal* を付与した場合に「自然さ」が増大する蓋然性が高い（有意水準: 1%/5%）。

(172) 発話における自然さの度合いの分析（サイン検定）

自然さ（Natürlichkeit）の次元			有意差の分析		平均値		
			出現確率	有意水準	発話形式1（*mal* なし）	発話形式2（*mal* あり）	形式2－形式1*
依頼	状況1: 路上で道を教える	見知らぬ人	両側: p < .01	1%	2.08	-0.04	-2.12
		教授	両側: p < .01	1%	1.07	-0.40	-1.47
		友人	両側: p < .05	5%	1.90	1.36	-0.54
	状況2: 図書館で静かにする	見知らぬ人	両側: p < .01	1%	1.50	0.55	-0.95
		友人	両側: p < .05	5%	1.67	1.18	-0.49
	状況3: 列車内でトランクを持ち上げる	見知らぬ人	両側: p < .01	1%	1.89	1.42	-0.47
		教授	両側: p < .01	1%	1.55	0.90	-0.65
		友人	両側: p < .05	5%	2.03	2.32	0.29
	状況4: 教室の窓を開ける	教授	両側: p < .01	1%	1.42	0.64	-0.78
		友人	両側: p < .01	1%	1.54	2.01	0.47
助言	状況5: （良い写真を撮るために）少し右に動く	見知らぬ人	両側: p < .01	1%	1.73	0.84	-0.89
		教授	両側: p < .01	1%	1.50	0.53	-0.97
		友人	両側: .05 < p < .10	-	2.00	1.93	-0.07
	状況6: アイコンをクリックする	教授	両側: p < .01	1%	0.65	0.55	-0.10
		友人	両側: p < .05	5%	1.21	1.46	0.25

※評定尺度の間隔は等しいものと仮定する。

* 形式2－形式1:「発話形式2（*mal* を伴う発話）の値から, 発話形式1（*mal* を伴わない発話）の値を引く」の意

[69] このことは, *siezen* では使用されないという意味ではない。例えば，目の前の邪魔な荷物をどけて欲しい場合や,（本研究の調査における）図書館で静かに話してほしい場合などには，批判的態度や注意を促す形で，意図的に *siezen* + *mal* を使用するときがある。また，明らかに年齢差のある関係（老人⇒若者）や立場に差がある関係（教授 ⇒ 学生）であっても，「思いやり／友人らしさ」（freundlich）を示す意図で *siezen* + *mal* が使用される場合もある。

また，表(173)に示した「厚かましさ」の次元を見てみると，確かに，心態詞 *mal* は常に「厚かましい」印象を与える蓋然性が高い(有意水準: 1%)ことがうかがえる一方で，「対友人」では，「厚かましさ」の増大の度合いが小さいままで済んでいる(塗潰し箇所)。

(173) 発話における厚かましさの度合いの分析（サイン検定）

厚かましさ(Unverschämtheit)の次元			有意差の分析		平均値		
			出現確率	有意水準	発話形式1(*mal*なし)	発話形式2(*mal*あり)	形式2－形式1*
依頼	状況1:路上で道を教える	見知らぬ人	両側: p < .01	1%	-2.64	-0.09	2.55
		教授	両側: p < .01	1%	-1.60	0.08	1.68
		友人	両側: p < .01	1%	-2.32	-1.64	0.68
	状況2:図書館で静かにする	見知らぬ人	両側: p < .01	1%	-1.86	-0.01	1.85
		友人	両側: p < .01	1%	-1.66	-1.00	0.66
	状況3:列車内でトランクを持ち上げる	見知らぬ人	両側: p < .01	1%	-2.09	-1.14	0.95
		教授	両側: p < .01	1%	-1.77	-0.76	1.01
		友人	両側: p < .01	1%	-2.26	-2.11	0.15
	状況4:教室の窓を開ける	教授	両側: p < .01	1%	-1.51	-0.55	0.96
		友人	両側: .05 < p < .10	-	-2.08	-1.95	0.13
助言	状況5:(良い写真を撮るために)少し右に動く	見知らぬ人	両側: p < .01	1%	-2.13	-1.22	0.91
		教授	両側: p < .01	1%	-1.69	-0.99	0.70
		友人	両側: p < .01	1%	-2.23	-1.92	0.31
	状況6:アイコンをクリックする	教授	両側: p < .01	1%	-1.61	-0.96	0.65
		友人	両側: p < .01	1%	-1.98	-1.67	0.31

※評定尺度の間隔は等しいものと仮定する。

* 形式2－形式1:「発話形式2(*mal*を伴う発話)の値から，発話形式1(*mal*を伴わない発話)の値を引く」の意

以上，本調査で明らかになったことの１つとして，„Können Sie ～“という文形式において，「疎遠な相手」や「目上の相手」に対して *mal* を使用することは，決して自然な発話とは考えられず，むしろ厚かましい印象を与える点が挙げられる。このことは，「緩和」あるいは「丁寧さ」といった概念との関連で，根本的に *mal* の使用自体が問題である可能性を示唆している。しかし，一方で，「対友人」においては，*mal* を伴う発話が伴わない発話よりもさらに自然さの度合いを増すといった傾向も見受けられた。この点は，相手が親しい間柄であれば，心態詞 *mal* の使用が容認されやすい傾向にあることを示している。実際には，いずれの状況においても，常に「自然さ」の度合いが増大するわけではなく，また，たとえ常にそうであったとしても，発話が自然であることと丁寧であることとは別次元の問題であろう。ただ，少なくとも「相手が親しい間柄である」という観点は，*mal* が適切に，つまり積極的，肯

定的に用いられる主要な条件の１つに数えられるのではないだろうか。

下記(174)に，本調査における心態詞 *mal* の考察をまとめる。

(174) 心態詞 *mal* の使用

非多発的かつ／あるいは非持続的かつ／あるいは非即時的特性

↓ 段階 1

機能：「要求」の強制力の緩和

↓ 段階 2 ｛[+ *können* ; +*決定疑問文*]

文形式による丁寧さの方略

↕ 矛 盾

発語内行為「要求」の限定

~~機能：「要求」に丁寧な性格を付与~~

∴常に丁寧度は減少

疎遠な相手／目上の相手
- 不自然な発話
- 厚かましい印象
= 不適切な使用の可能性

親しい相手
- 自然さの度合いが増大
  ※状況依存
= 積極的な使用の可能性

4.4.3. *mal* の使用意義

前節では, *können* を伴う決定疑問文で *mal* を使用すると,「疎遠な相手」や「目上の相手」に対しては，本来「丁寧さ」を意図して用いられた *mal* が，むしろ発話に不丁寧な性格を付与し，不自然で厚かましい印象を与えてしまう蓋然性が高いことを述べた。さらに筆者は，その要因を *können* を伴う決定疑問文と心態詞 *mal* の特性の矛盾に言及した。無論，先の調査では，話法助動詞 *können* を伴う決定疑問文における発話しか扱っておらず，そこから心態詞 *mal* に関する一般的な結論を導くのは早計であろう。それでもなお，日常会話で頻繁に現れるこの発話形式において，実際には，会話参加者の種類を問わず，常に依頼の丁寧度が減少したことは興味深い。一方，調査ではもう１つ重要な傾向を見い出すことができた。同じく丁寧度が減少したとはいえ，「疎遠な相手」や「目上の相手」に対する場合と異なり，相手が「友人」である場合には，その減少度合いが小さく，それに相応して「自然さ」の度合いが増し，かつ「厚かましさ」の増大の度合いが小さいままで済んでいた。このことは，板山（1988; 1992）や Werner（1998; 2002）における「心態詞 *mal* は，親密な（vertraut/familiär）間柄において適切に機能しうる」という示唆を裏付けるものである。

そこで以下では，心態詞 *mal* の不適切な使用の要因を，さらに言語比較という別の角度からの考察に基づいて追及し，日常会話において，極めて頻繁に用いられる„Kannst du mal ～“と

いう発話の意義（適切性の理由）を探る。その際，心態詞 *mal* の最適な使用の要因を，心態詞 *mal* に内在する機能として，「連帯性の指標」（Solidaritätsindikator）（英: solidarity marker）という観点に求める。

4.4.3.1. 日本語の程度副詞「ちょっと」との比較分析

心態詞 *mal* の機能を再考するにあたり，本節では，日本語との比較を試みる。1.2.1.で述べたとおり，ドイツ語の心態詞は，とりわけ日本語の終助詞との関わりで分析される。Werner（2002）が記すとおり，終助詞と心態詞の特徴に多くの類似点が見受けられるためである。とはいえ，心態詞が，常に終助詞との比較で扱われるわけではない。Werner（2000: 57）は，心態詞 *mal* と日本語の「ちょっと」の類似点に注目して（175）のように述べる。

(175) *Chotto* kann als Modalpartikel in fast allen japanischen Äußerungen der höflichen Bitte stehen, und diese verbindlicher machen. So ausgeprägt kann im Deutschen äußerstenfalls *mal* vorkommen.

［ちょっとは話法に関わる品詞として，丁寧な依頼を表すほぼ全ての発話に現れ，その依頼を比較的和らげる。非常に顕著な現れとして，ドイツ語ではとりわけ *mal* が用いられる］

関口（1961: 106）でも，「mal は，さしずめ我々の„ちょっと“という奴に甚だよく似ている」と述べられるとおり，心態詞 *mal* と程度副詞「ちょっと」は，その機能の面で非常に類似している（cf. 周 1994）。事実, *mal* は「ちょっと」で訳される傾向が強い。そこで，本節では，日本語の程度副詞「ちょっと」との比較対照を行い，心態詞 *mal* との類似点ならびに相違点に基づいて，心態詞 *mal* の機能を見直す。

まず，下記（176a-h）に，心態詞 *mal* の用例とその日本語訳をいくつか挙げる。

(176) a. Hilf mir **mal** bitte!

ちょっと私を手伝ってください。（Hentschel/Weydt 1990 の邦訳: 118）

b. Kopier eben **mal** diesen Brief!

ちょっと，この手紙をコピーしてくれないか。（岩崎 1998: 762）

c. Komm **mal** her!

ちょっとこっちへおいで。（井口 2000: 138）

d. Reich mir **mal** das Brot!

ちょっとパンをとってくれないか。（井口 2000: 138）

e. Kannst du mir **mal** eben helfen?

ちょっと手伝ってくれない。（Hentschel/Weydt 1990 の邦訳: 302）

f. Kann ich **mal** schnell deinen Kuli haben?

ちょっと君のボールペンを借りてもいいかい。（三瓶 1997: 18）

g. Kannst du mir eben **mal** einen Gefallen tun?

ちょっと, 頼まれごとをしてくれないか。（岩崎 1998: 764）

h. Hältst du mir [**ein**]**mal** die Tasche?

かばんを**ちょっと**持っていて。（井口 2000: 133）　　（太字は筒井による）

（176a-h）のとおり, *mal* が「ちょっと」で訳される理由は, *mal* と同じく「ちょっと」も主に命令文や決定疑問文（*yes/no*-interrogatives）で現れ, 命令, 依頼, 助言といった行為指示型（Direktive）の発話行為タイプで用いられる点にある。

彭（1990）によると,「ちょっと」はその特性によって２つのタイプに大別される。ひとつは「単純的修飾」と呼ばれ, 物理的に数量や程度の少ないさまを表すとされる。それに対して, もう１つは「場面的添加」と名付けられ, 心理的・対人的・社交的な特性であり, 場面に応じて文の意味を強めたり弱めたりするとされる。そして, この場合の「ちょっと」は, 会話の潤滑油的役割を果たすと捉えられる（cf. 彭 1990: 16; 川崎 1989: 30）。また,「単純的修飾」が「ちょっと」の本来の意味を指し,「場面的添加」の意味は, その本来の意味から転意したものであると述べられる（cf. 彭 1990: 29）。

この際, 下記（177）の比較例からわかるとおり,「単純的修飾」としての「ちょっと」が *mal* で表わされることはない。このことは,「ちょっと」と *mal* の間に, 基本的な／根幹的な意味においての整合性はないことを示している。

(177) a. 彼は**ちょっと**疲れている。⇒ *Er ist **mal** müde. → Er ist **ein bisschen** müde.

b. 残りはあと**ちょっと**だ。

⇒ *Es ist noch **mal** da. → Es is noch **ein wenig**/**ein bisschen**/**ein Stückchen** da.

c. A: あなたは英語を話せますか。Können Sie Englisch sprechen?

B: はい。**ちょっと**なら[70]。⇒ *Ja, ich kann es **mal**. → Ja, ich kann es **ein bisschen/etwas**.

d_1.（量的に）窓を**ちょっと**（= 全開ではない）開けてくれる？

⇒ ?? Kannst du **mal** das Fenster aufmachen?

→ Kannst du **ein Stückchen** das Fenster aufmachen?

d_2.（時間的に）窓を**ちょっと**（= 少しの間だけ）開けてくれる？

⇒ ?? Kannst du **mal** das Fenster aufmachen?

→ Kannst du **kurz** das Fester aufmachen? （?? = 量的・時間的な意味としては不適切）

しかし，下記（178）に示す岡本・斎藤（2004: 69ff.）による「ちょっと」のコミュニケーション機能（「場面的添加」（彭 1990）の特性に基づく）の分類をふまえると，（178a）の機能（太字）が，まさに心態詞 *mal* の機能（「要求の強制力を緩和する」）に相応することもうかがえる。（179）は，（178a）の機能に関する説明である。

(178) **a. 依頼や，希求，指示行為の負担をやわらげる**

b. 否定的内容の前置き

c. 断りを受けやすくする

d. 呼びかけ

e. とがめ

f. 間つなぎ

(179) 依頼や指示など相手に行為を求めるときに，その行為の負担をやわらげる機能は，［...］聞き手の意思を尋ねる形式に「ちょっと」を用いることで，相手に求める行為を軽くさせ，受入れの寛容さに働きかける。すなわち「ちょっと」のやわらげ効果によって相手がその行為を受入れやすくなるのである。（岡本・斎藤 2004: 70）

この観点から，一方では，「ちょっと」の機能の一部が *mal* の機能と重なり，他の機能は合致しないことがわかる。しかし同時に，少なくとも，この「要求緩和」という両者に共通の特性こそ，*mal* が「ちょっと」で訳される所以であると捉えられる。

[70] 単純的修飾の「ちょっと」は，「ある種『謙遜』の態度を示す」（彭 1990: 17）が，*mal* にそのようなニュアンスはない。

以下，この *mal* と「ちょっと」に共通の機能に注目し，依頼行為に焦点を絞って，4.4.2.2. で行ったものと同様のアンケート調査，およびその分析結果を提示する。

4.4.3.2.「ちょっと」の使用に関するアンケート調査

ここでは，後述の「ちょっと」に関するアンケートにおける被験者数（全 49 名）をふまえ，先の *mal* のアンケート調査における被験者（全 92 名）のデータから無作為に 49 名を抜き出し，下記の内容で比較調査を実施した。また，今回も，会話参加者の種類として，「疎遠な相手」や「目上の相手」を設定しているため，そもそも日常会話において使用されにくい命令文による発話は扱わないこととした。

(180) a. 発話状況は計３つを設定する（下記に内容を挙げる）。

b. 会話の相手は，「見知らぬ人／教授」とする。

c. 文形式は，話法助動詞 *können*（～もらえますか／～いただけますか）を伴う決定疑問文によるものを標準とする。

d. 被験者には，上記 a, b, c に従って作成した文を提示し，各々の文で３つの次元／要素に対するスケール値（-3～3）を記入してもらう（評定尺度得点形式）。３つの次元とは「丁寧な」（höflich），「自然な」（natürlich），「厚かましい／図々しい」（unverschämt）とする。

e. 被験者は全 49 名（女性 32 名，男性 17 名（*mal*）；女性 11 名，男性: 38 名（*ちょっと*））[71] の母語話者の学生（Tübingen 大学（*mal*）；広島大学（*ちょっと*）：共に言語学の学習経験なし）で，平均年齢は 23.0 歳（*mal*）／19.1 歳（*ちょっと*）である。

f. 被験者には，話し手（尋ねる側）として被験してもらう。

（2005 年 3 月～4 月（*mal*）; 2005 年 7 月（*ちょっと*）実施）

発話状況 1:「路上で道を教える」

Sie sind gerade allein in der Stadt. Sie wollen ein neu erbautes Städtisches Museum besuchen. Aber Sie wissen nicht genau, wo es ist. Da kommt entweder ein Fremder oder zufällig ein Professor an Ihnen vorbei. Sie sprechen die Person an und fragen nach dem Weg.

---

[71] Iwasaki（1972: 108）で示唆されるとおり，ドイツ語の心態詞では，性別がその使用に影響を与えないと考えられたため，男女の数の差はあまり重視しなかった。しかし，「ちょっと」に関しては，性別あるいは世代間において，その使用の仕方あるいは頻度に相違が見られる可能性もある。しかし，この点は，調査後に指摘を受けたこともあり，ここでは，本調査では考慮しなかったことを断っておくに留める。

発話形式: Entschuldigung, können Sie mir (mal) sagen, wo das Städtische Museum ist?

あなたは今，一人町にいて，新しくできた市立博物館に行きたいと思っています。しかし，その正確な場所を知りません。そこへ，道行く人あるいは偶然にもあなたの知っている先生が通りがかりました。あなたは，その人に話しかけて道を尋ねます。

発話形式: すみません，市立博物館に行きたいんですが，（ちょっと）道を教えていただけますか。[72]

発話状況 2:「列車内でトランクを持ち上げる」

Sie befinden sich allein auf einer Reise. Sie sind in den Nachtzug eingestiegen und in Ihr Abteil gegangen. Sie haben einen Koffer und noch einige andere Gepäckstücke. Sie wollen Ihren Koffer auf das Regal stellen, aber es fällt Ihnen allein schwer. Deshalb bitten Sie einen fremden Fahrgast, Ihnen zu helfen.

発話形式: Entschuldigung, können Sie mir (mal) helfen, den Koffer hochzuheben?

あなたは一人旅をしていて，夜行列車に乗り込み自分のコンパートメント（電車内の仕切られた車室）につきました。あなたは，１つのスーツケースといくつかの荷物を持っていて，棚の上にスーツケースを乗せようとしましたが，重くて一人では困難です。そこで，その場の乗客に手伝ってもらおうと頼みます。

発話形式: すみません，持ち上げるの，（ちょっと）手伝ってもらえますか。

発話状況 3:「教室の窓を開ける」

Sie befinden sich mit einem Professor in einem Seminarraum der Universität. Im Zimmer ist es sehr schwül. Am Fenster sitzt der Professor. Sie bitten ihn, das Fenster aufzumachen.

発話形式: Entschuldigung, können Sie (mal) das Fenster aufmachen?

あなたは，大学のゼミに出ています。その教室は大変蒸し暑く，窓のそばに先生が座っています。そこで，先生に窓を開けてもらえるよう頼みます。

発話形式: 先生，（ちょっと）窓を開けていただけますか。

それぞれの発話形式における括弧は，*mal* ありと *mal* なしの文，「ちょっと」ありと「ちょっと」なしの文を設定したことを示している。これら３つの状況に絞った理由は，①被験者（学生）にとって状況を把握しやすい，②要求の命題内容の重みが比較的軽い，③対人関

[72] 強調しておかなければならないことは，*mal* に関する調査同様，ここでは「ちょっと」の有無における相違点が問題となるのであり，決して，「ちょっと」が適切な文で使用されているかに焦点が置かれているわけではない。日本語における「丁寧さ」は，とりわけ「～もらう／～いただく」といった表現によってもたらされる点をふまえて，そこに「ちょっと」が現れるか否かが，発話にどのような影響を及ぼしうるかに焦点が置かれている。

係の阻害（例: 図書館で静かにしてもらう状況）を招きにくいの三点である。

4.4.3.3. 分析結果

表（181）に，全ての次元ならびに状況における *mal* の統計結果を提示する。統計処理に関しては, 4.4.2.2.1.で記したとおりである。

(181) 発話における丁寧さ・自然さ・厚かましさの度合いの分析（*mal*）（サイン検定）

丁寧さ（Höflichkeit）の次元		有意差の分析		平均値		
		出現確率	有意水準	発話形式1（*mal* なし）	発話形式2（*mal* あり）	形式2－形式1*
状況1: 路上で道を教える	見知らぬ人	両側: p < .01	**1%**	2.10	0.10	**-2.00**
	教授	両側: p < .01	**1%**	1.16	-0.51	**-1.67**
状況2: 列車内でトランクを持ち上げる	見知らぬ人	両側: p < .01	**1%**	2.02	1.02	**-1.00**
状況3: 教室の窓を開ける	教授	両側: p < .01	**1%**	1.59	0.39	**-1.20**

自然さ（Natürlichkeit）の次元		有意差の分析		平均値		
		出現確率	有意水準	発話形式1（*mal* なし）	発話形式2（*mal* あり）	形式2－形式1
状況1: 路上で道を教える	見知らぬ人	両側: p < .01	**1%**	2.06	0.04	**-2.02**
	教授	両側: p < .01	**1%**	4.02	-0.33	**-4.35**
状況2: 列車内でトランクを持ち上げる	見知らぬ人	両側: p < .05	**5%**	1.88	1.49	**-0.39**
状況3: 教室の窓を開ける	教授	両側: p < .01	**1%**	1.45	0.78	**-0.67**

厚かましさ（Unverschämtheit）の次元		有意差の分析		平均値		
		出現確率	有意水準	発話形式1（*mal* なし）	発話形式2（*mal* あり）	形式2－形式1
状況1: 路上で道を教える	見知らぬ人	両側: p < .01	**1%**	-2.83	-0.31	**2.52**
	教授	両側: p < .01	**1%**	-1.65	0.00	**1.65**
状況2: 列車内でトランクを持ち上げる	見知らぬ人	両側: p < .01	**1%**	-2.04	-0.90	**1.14**
状況3: 教室の窓を開ける	教授	両側: p < .01	**1%**	-1.53	-0.51	**1.02**

※評定尺度の間隔は等しいものと仮定する。

* 形式2－形式1:「発話形式2（*mal* を伴う発話）の値から, 発話形式1（*mal* を伴わない発話）の値を引く」の意

塗潰し箇所が示しているのは，平均値の差が示すプラス／マイナスの傾向に対して有意であると判定されたものである。つまり, *mal* に関しては，いずれの状況においても, *mal* の有無による影響（プラス側／マイナス側への傾き）が有意であったことを示している。

4.4.2.2.1.でも述べたとおり，本調査で採用したサイン検定においては，個々の被験者が示した数値の差（被験者 A = *mal* なし -2; *mal* あり 2／被験者 B = *mal* なし 0; *mal* あり 3 など）は問題ではなく，全体的にどのような傾向があったかのみに焦点を当てる。その結果，例えば状況 1 における「丁寧さ」の次元では，「対見知らぬ人」，「対教授」いずれにおいても，非常に高い蓋然性で，丁寧度が減少する（マイナス傾向）ことがわかる（有意水準: 1%）。「丁寧さ」に関しては，状況 2 も状況 3 も同様である。また，「自然さ」の次元でも，全ての状況においてその度合いが減少する蓋然性が高い（有意水準: 1%/5%）。さらに，これらのことは，「厚かましさ」の次元において，いずれもその度合いが増大する傾向（プラス傾向）にあることによって裏付けられる（有意水準: 1%）。

それに対して，「ちょっと」では異なる結果（表（182））が得られた。

(182) 発話における丁寧さ・自然さ・厚かましさの度合いの分析（*ちょっと*）（サイン検定）

丁寧さ（Höflichkeit）の次元		**有意差の分析**		**平均値**		
		出現確率	有意水準	発話形式1（*ちょっと* なし）	発話形式2（*ちょっと* あり）	形式2－形式1
状況1: 路上で道を教える	見知らぬ人	両側: .05 < p < .10	-	1.76	1.39	**-0.41**
	教授	両側: p < .01	**1%**	1.86	1.22	**-0.66**
状況2: 列車内でトランクを持ち上げる	見知らぬ人	両側: p > .10	-	1.49	1.22	**-0.30**
状況3: 教室の窓を開ける	教授	両側: p < .01	**1%**	1.76	1.12	**-0.66**

自然さ（Natürlichkeit）の次元		**有意差の分析**		**平均値**		
		出現確率	有意水準	発話形式1（*ちょっと* なし）	発話形式2（*ちょっと* あり）	形式2－形式1
状況1: 路上で道を教える	見知らぬ人	両側: p > .10	-	1.47	1.10	**-0.37**
	教授	両側: p > .10	-	1.65	1.20	**-0.45**
状況2: 列車内でトランクを持ち上げる	見知らぬ人	両側: p > .10	-	1.31	1.20	**-0.11**
状況3: 教室の窓を開ける	教授	両側: p > .10	-	1.35	1.14	**-0.21**

厚かましさ（Unverschämtheit）の次元		**有意差の分析**		**平均値**		
		出現確率	有意水準	発話形式1（*ちょっと* なし）	発話形式2（*ちょっと* あり）	形式2－形式1
状況1: 路上で道を教える	見知らぬ人	両側: p > .10	-	-0.76	-0.02	**0.74**
	教授	両側: p > .10	-	-0.45	0.02	**0.47**
状況2: 列車内でトランクを持ち上げる	見知らぬ人	両側: p > .10	-	-0.10	-0.04	**0.06**
状況3: 教室の窓を開ける	教授	両側: p > .10	-	-0.16	0.41	**0.57**

※評定尺度の間隔は等しいものと仮定する。

* 形式2－形式1:「発話形式2（*ちょっと*を伴う発話）の値から，発話形式1（*ちょっと*を伴わない発話）の値を引く」の意

「ちょっと」の使用では, *mal* の場合と異なり, 少なくとも「対教授」においてのみ,「丁寧さ」の度合いが減少する蓋然性が高い(有意水準: 1%)。「自然さ」においては, 会話の相手を問わず, 発話に影響を及ぼしていない(「有意水準」における„-“の記号は,「有意でない」を表している)。また,「ちょっと」を伴う発話では,「厚かましい」印象も与えていない(-)。これらの結果に関連づけて, ここでは(183)を仮定し, 次節でその考察を行う。

(183) 心態詞 *mal* と程度副詞「ちょっと」における相違は, *mal* にはない「ちょっと」の他の機能(178b-f)が関係している。つまり, それらの機能が,「ちょっと」の「要求緩和」に影響しており, そうした機能を持たない *mal* では,「疎遠な相手」や「目上の相手」に対しての使用が不適切となる。

4.4.3.4. *mal* と「ちょっと」の機能に関する相違

本節では, 岡本・斎藤 (2004)による「ちょっと」の「コミュニケーション機能」との関連で, 程度副詞「ちょっと」と心態詞 *mal* の用法を比較する。表(184)(次頁)は, それぞれの機能を表す「ちょっと」の用例とそのドイツ語訳を示している。例えば, 発話文(185a)は, (185b)のように訳されると考えられ, 話法助動詞 *können*, 接続法Ⅱ式 *könnten*, *würden*, 副詞 *bitte* などの違いは別として,「訳」のうえでは, この際の *mal* が「ちょっと」との対応関係に支障をきたすことはないと思われる(実際の使用が, 語用論的に適切か否かについては 4.4.2.を参照)。

(185) a. すみませんが, **ちょっと**消しゴムを貸していただけますか。

b. Entschuldigung, können/könnten/würden Sie mir (bitte) **mal** Ihren Radiergummi leihen/geben?

しかし, (186a)や(187a)のような「ちょっと」を, そのまま *mal* で置き換えることはできない。それぞれの「ちょっと」の意味は, (186b), (187b)のように, 例えば副詞 *leider*(残念ながら)によって明示されよう。

(186) a. 私には**ちょっと**できないんですが・・・。

b. Das kann ich **leider** nicht.

(184)

「ちょっと」の コミュニケーション機能 （岡本・斎藤(2004)）	*ちょっと*	***mal***
(a) 勧誘，依頼希求，指示行為の負担をやわらげる	すみませんが，**ちょっと**消しゴムを貸していただけますか。	Entschuldigung, können/könnten/würden Sie mir (bitte) **mal** Ihren Radiergummi leihen/geben?
(b) 否定内容の前置き	私には**ちょっと**できないんですが・・・。	* Das kann ich mal nicht. Das kann ich **leider** nicht.
	ちょっとお先に失礼します。	* Ich muss mal vor Ihnen gehen. Ich muss mich **leider** schon verabschieden. / Ich muss **leider** vor Ihnen gehen.
	（例: 上司が部下に対して） 君には**ちょっと**難しい。 ↓(含意) 君にはかなり難しい。	(z.B. Vorgesetzte; Untergeordneten gegenüber) * Das ist mal für dich schwer. ? Das ist für dich ein bisschen schwer. ↓ (impliziert nicht) Das ist für dich **ziemlich** schwer.
	A: 彼のことどう思う？ B: 彼は**ちょっと**・・・。	A: Wie findest du ihn? B: *Er gefällt mir mal …　B: Er gefällt mir **leider** (nicht). *od.* Ich finde, er ist **leider** langweilig./Ich finde ihn **leider** langweilig.
(c) 断りを受けやすくする	日曜日は**ちょっと**都合が悪いのですが。	* Der Sonntag passt mir mal nicht gut. Der Sonntag passt mir **leider** nicht gut.
(d) 呼びかけ	**ちょっと**，奥さん，ハンカチを落としましたよ。	* Mal, Sie haben Ihr Taschentuch fallen lassen. # Entschuldigen Sie mal, …(unhöflich) **Entschuldigen Sie**, Sie haben Ihr Taschentuch fallen lassen.
(e) とがめ	**ちょっと**，スープに虫が入ってますよ。	* Mal, da ist ein Insekt in meiner Suppe! **Entschuldigen Sie mal**, da ist ein Insekt in meiner Suppe! (Kritik: *mal* funktioniert als Betonung)
(f) 間つなぎ	あのう，**ちょっと**，ええ・・・	also, *mal, uhm …　z.B. also, wie sagt man, uhm …

* = 非文法的　　? = 訳として正しいが，内容的に誤り　　# = 語用論的に不適切

(187) a. **ちょっと**お先に失礼します。

b. Ich muss mich **leider** schon verabschieden.

例文(188a)も，決して„Das ist mal für dich schwer.“のように訳されることはない。さらに，適訳のように思われる(188b)も，意味的には正確な訳とは考えにくい。なぜなら，この場合の「ちょっと」が，「単純的修飾」として解釈されることはほとんどないからである[73]。

(188) a. 君には**ちょっと**難しい。

b. Das ist für dich **ein bisschen** schwer.

(188a)の文は，一般的に，本来「君にはかなり難しい」ということが意図されている。この場合の「ちょっと」は，ある事態を間接的(含意的)に表現するという点で，命題が表す否定的な内容の程度を弱めていると考えられる。それに対し，ドイツ語では *ziemlich*(かなり)によって表されるこのような「比較的高い程度」を，通例，(188b)の文によって含意することは非常に稀である。

下記(189a)および(190a)の「ちょっと」でも，先の(186)，(187)と同様に，話法詞 *leider* が表す話し手の「遺憾」の態度が反映される。とりわけ(189)では，日本語の場合，「ちょっと」の後にことばを濁すことが多く，その部分をドイツ語で補うとすれば，動詞 *gefallen* の意味を否定する否定辞 *nicht* が最適となる。また，(189b')で示すとおり，対象を描写するような場合でも，「ちょっと」の持つニュアンスは，やはり *leider* によって表され，その後ろには通常否定的な意味を表す形容詞(少なくとも，返答者にとって否定的な意味をもつ描写)が置かれる。このように，日本語の「ちょっと」は，否定内容や断り表現の前置きとして使用され，そこに話し手の「遺憾」の態度を反映させることで，相手の受ける否定的な心理を軽減する。あるいは，(189)では「(本当は)彼を全く気に入らない(Er gefällt mir überhaupt nicht.)」ということを含意しているとも考えられる。そしてこの場合には，(188)で示したように，やはり否定的な命題の直接的な表明を避け，「ちょっと」が示す間接性を利用することで，相手あるいは第三者の受ける心理的な負担を軽減していると推測できる[74]。

---

[73] 仮に「単純的修飾」としての用法の場合には，本来，日本語では「少し」が用いられるか，「ちょっとだけ」と量を限定するいわゆる「とりたて詞」が使われる。

[74] このような「ちょっと」の含意は，コンテクストによっては，その反意性に基づき，ある種聞き手の「不安」を煽る効果をももたらす。なぜなら，例えば，部長が部下に対して，「君，ちょっと・・・」と会議室へ促した場合，本来は緩和が意図された，このいわゆる「命題のぼかし」が，結局は「心理的負担の重い内容」が告げられることを予感させるためである。

(189) a. 彼は**ちょっと**・・・。

b. Er gefällt mir **leider** (nicht).

b'. Ich finde, er ist **leider** langweilig. / Ich finde ihn **leider** langweilig.

(190) a. 日曜日は**ちょっと**都合が悪いのですが。

b. Der Sonntag passt mir **leider** nicht gut.

彭（1990: 22）によれば，「ちょっと」は話し手の「詫びの態度」（entschuldigende Einstellung）を示しうるとされる。そこで，「呼びかけ」あるいは「とがめ」としての「ちょっと」は，それぞれ，例えば„Entschuldigen Sie“と„Entschuldigen Sie mal“によって表すことができよう。この際，心態詞 *mal* が厚かましい態度あるいは不作法（Grobheit）な態度を表しうることが裏付けられる。

(191) a. **ちょっと**，奥さん，ハンカチを落としましたよ。

b. **Entschuldigen Sie**, Sie haben Ihr Taschentuch fallen lassen.

(192) a. **ちょっと**，スープに虫が入ってますよ。

b. **Entschuldigen Sie mal**, da ist ein Insekt in meiner Suppe!

最後に，「間つなぎ」としての「ちょっと」の用法だが，これは「（時間的に）少し」を表す「単純的修飾」の意味が非常に強く，このような場合の「ちょっと」と心態詞 *mal* との間に適切な対応関係がないことは，上記（177）で述べたとおりである。

以上，前節で得たアンケートの分析結果と関連して，これまでに挙げた例に基づき，「ちょっと」と *mal* の用法の差異を（193）にまとめる。

(193) 遺憾や詫びの態度を前景化する「ちょっと」の特性，ならびに間接性を導く「ちょっと」の含意が，「依頼や，希求，指示行為の負担をやわらげる」という機能に影響することで，「疎遠な相手」や「目上の相手」に対する「ちょっと」の使用が許容される。それに対し，そのような態度を表わしえない *mal* では，これらの会話参加者に対する使用が避けられる傾向にある。

4.4.3.5. *mal* の積極的な用法

前節までに見てきた程度副詞「ちょっと」と心態詞 *mal* の相違点とその考察によって,「要求緩和」という機能においてのみ, 両者間に類似性が見受けられるものの, 会話参加者の種類によっては, その使用の許容度に差が生まれることがわかった。また, その際の「ちょっと」の容認性は, *mal* が含まない「ちょっと」の他の機能が関係しうるという推測が述べられた。このことは, 一方で, これまで「甚だ似ている」と考えられていた *mal* と「ちょっと」の間に, むしろ「根本的に異なっている」という問題意識を掲げるきっかけを提供し, 同時に,「親しい相手」に対しては適切な使用が期待されるといった, 心態詞 *mal* の本来の使用意義に対して, さらに疑問視せざるをえない結果を導いている。というのも, なぜ心態詞 *mal* は, そもそも「親しい相手」に対してのみ最適な使用として機能しうるのかという問いである。そこで, 引き続き「ちょっと」との比較対照を行い, 肯定的な面で *mal* にのみ有意であるような「ちょっと」との決定的な相違点を導き, そこから心態詞 *mal* の使用意義を見い出す必要がある。換言すれば, 唯一類似していると考えられた「要求緩和」という機能における両者の相違点の抽出である。そこで以下では, 4.4.3.で示唆した「連帯性」(Solidarität) という観点について述べることとする。

心態詞 *mal* を伴う要求では,「話し手は, 自らが遂行した依頼に対する聞き手の実行能力を確実に見込む」(cf. Bublitz 2003: 186) と考えられている。これは, 心態詞 *mal* が有する意味的な特性(非多発性・非持続性・非即時性)が, その要求の実行に対して肯定的な制限を加え, 結果その要求内容が「些事である／取るに足らない」(beiläufig) と話し手がみなす点に基づく。「要求内容が些事であれば, 相手の実行を前提としてよい」というある種の甘えである。このとき,「疎遠な相手」や「目上の相手」に対する場合と,「親しい相手」に対する場合で, 不適格性の差が生まれる理論的な要因については, 4.4.2.2.3.ですでに述べた。以下では, そのような前提の存在が, *mal* の使用において想定できるか否かを検証する。ここでの前提とは,「相手が親しい間柄であり, かつ命題内容が些事であれば, お互い相手に対して要求してよい／相手のために実行してよい」といった連帯性の基盤を指す[75]。平たくいえば,「持ちつ持たれつの関係」が存在するという前提である。そして, 筆者は, 心態詞 *mal*

[75] このような前提は, Gu (1990: 255) で, „Principle of Balance“(均衡の原理) と呼ばれるものを参照した。Gu (1990: 239, 255) では, この原理に従った中国語におけるポライトネス方略に, „huánlǐ“(還禮) (WT [= word-for-word translation]: to return politeness) が挙げられている。「均衡の原理」とは, 平たくいえば,「ある人から何らかの恩義を得た場合, その相手に何かを返還しなければならない」というもので, この原則の効力は, その場の会話のみに留まらず, その後の両者の会話や交際にも影響を及ぼすとされる。

がこのような連帯性の態度を含意する指標として機能すると捉える。

4.4.3.5.1. アンケート調査

今回の調査では，被験者は, 4.4.3.2.で述べた調査における同学生から，日独それぞれ 33 名ずつ（女性 20 名，男性 13 名; 平均年齢 22.6 歳（*mal*）; 女性 11 名，男性: 22 名; 平均年齢 19.0 歳（*ちょっと*））を無作為に選出し，日本の学生には先の調査の数日後に，ドイツの学生には，2005 年 7 月に改めて調査を依頼した。他，ある発話に対して，それぞれの次元におけるスケール値を与えるという要領は全く同じであるが，これまで＜höflich/丁寧な＞，＜natürlich/自然な＞，＜unverschämt/厚かましい＞と設定していた次元を，＜verpflichtend/強制的な＞，＜natürlich/自然な＞，＜solidarisch/連帯的な＞に変更し，アンケート用紙上に，＜solidarisch/連帯的な＞の定義（194）を記した。

(194) Unter „solidarisch“ versteht man hier eine Vertrauensbasis, d.h. beide Partner sind bereit, sich gegenseitig einen Gefallen zu tun: Wenn jemand eine Bitte mit einem leichten propositionalen Gehalt äußert, rechnet er gleichzeitig damit, dass auch sein Partner irgendwann eine ähnliche Bitte äußern wird/kann.
「連帯性」は，ここでは信頼の基盤と解釈する。つまり，話し手・聞き手の両者が，互いに好意的であるという前提である: 誰かが負担の軽い依頼内容を表明する場合，その者は同時に，その会話の相手もいずれ同程度の負担の依頼を行う／行ってよいと見込む。

今回の調査で注目するのは，とりわけ＜solidarisch/連帯的＞であるか否かであるが，たとえ上記の定義に従ったうえで＜solidarisch/連帯的＞であるとみなされたとしても，＜höflich/丁寧な＞の場合と同様に，その発話が＜unnatürlich/不自然＞であると判断されてしまう可能性もある。また，＜solidarisch/連帯的＞であるからといって，その依頼が，もし＜verpflichtend/強制的＞であると判断されては，「強制力を緩和する」という心態詞 *mal* の基本機能の効力まで疑わざるをえなくなる。最も望ましいのは，*mal* の使用によって，連帯的な態度が含意され，それにより要求の強制の度合いが軽減し，同時に自然な発話であるとみなされることである。そこで，これらの観点をふまえ，＜verpflichtend/強制的＞と＜natürlich/自然な＞の次元も設定した。

対象となる発話形式に関しては，板山（1988; 1992）に倣い，親しい間柄における依頼発話

ということで，「対見知らぬ人」や「対教授」では除外していた命令文も加えることとした。発話状況と発話形式は下記のとおりである。

発話状況:「ボールペンを貸す」

Sie müssen unbedingt etwas aufschreiben, haben aber keinen Kuli dabei. Sie sehen, dass entweder ein guter Freund oder ein Kommilitone einen hat. Sie sprechen die Person an und bitten sie um den Kuli.

あなたは今，どうしてもメモしなければいけないことがあります。しかし，あなたは書くものを持っていません。そこで，「仲の良いクラスメート」あるいは「あまり話さないクラスメート」にボールペンを借ります（相手の性別は問いません）。[76]

発話形式:

Zu einem Freund（友人）:	仲の良いクラスメート:
Imperativsatz（命令文）	命令文（～て／～てくれ）
Gib mir (mal) deinen Kuli!	（*ちょっと*）ボールペンを貸して／貸してくれ。
E-Interrogativsatz（決定疑問文）	決定疑問文（～てくれる）
Gibst du mir (mal) deinen Kuli?	（*ちょっと*）ボールペンを貸してくれる？ ※日本語では，ドイツ語の話法助動詞 *können* の有無は，訳に影響しないと仮定した。
E-Interrogativsatz（+ können）	
Kannst du mir (mal) deinen Kuli geben?	
Zu einem Kommilitonen（クラスメート）:	あまり話さないクラスメート:
E-Interrogativsatz	決定疑問文（～てもらえる）
Gibst du mir (mal) deinen Kuli?	（*ちょっと*）ボールペンを貸してもらえる？ ※日本語では，ドイツ語の話法助動詞 *können* の有無は，訳に影響しないと仮定した。
E-Interrogativsatz（+ können）	
Kannst du mir (mal) deinen Kuli geben?	
E-Interrogativsatz（+ können in Konjunktiv Ⅱ）	決定疑問文（～てもらえる＋ます）
Könntest du mir (mal) deinen Kuli geben?	（*ちょっと*）ボールペンを貸してもらえますか。

4.4.3.5.2. 分析結果

まず，下記（195）に *mal* の結果を示す。とりわけ„natürlich“（自然な）と„solidarisch“（連帯的な）の次元で顕著な現象が見てとれよう。「自然さ」と「連帯性」の次元における平均値の

[76] 日本語の場合，一概に「親しい相手」としても，性別や微妙な親密度の違いによって，ドイツ語では同じ話法助動詞 *können* で表される訳語に，「～くれる」や「～もらえる」といった授受表現，あるいはその語尾（です・ます体）の点で違いがあると考えられた。そこで，あえて「友人」と「クラスメート」の２種を設定し，そのニュアンスを調整することとした。また，念のためドイツ語においても，この２種を反映させることとした。

欄（塗潰し箇所）で示されているとおり，文タイプ（Satzmodi）の違いに関わらず，いずれのコンテクストにおいても，それぞれの値がプラス値に転じている／よりプラスに傾いている。このことは，心態詞 *mal* が伴う発話では，「自然さ」と「連帯性」の度合いが増大する蓋然性が非常に高い（有意水準: 1%）ということを意味する。また，相応して，「強制力」の次元では有意な差が認められなかった。これは，*mal* の有無が，強制力の比重の増減には影響を及しえないことを認めることになるが，ここで重要なことは，少なくとも，強制力の比重が増大する蓋然性が高くなることはないという点である。事実，命令文においては，「強制力」の度合いが減少する蓋然性が極めて高いことが算出された（有意水準: 1%）。つまり，この文タイプでの *mal* の使用は，明確に強制力の比重を軽減すると考えられる。

(195) 発話における強制力・自然さ・連帯性の度合いの分析（*mal*）（サイン検定）

状況:「ボールペンを貸す」

強制力（Verpflichtung）の次元		有意差		平均値		
		出現確率	有意水準	発話形式1（*mal* なし）	発話形式2（*mal* あり）	形式2－形式1
友人	命令文	両側: p < .01	**1%**	2.09	1.67	**-0.42**
	決定疑問文	両側: p > .10	-	0.61	0.55	**-0.06**
	決定疑問文＋*können*	両側: p > .10	-	0.06	-0.06	**-0.12**
クラスメート	決定疑問文	両側: p > .10	-	0.56	0.61	**0.05**
	決定疑問文＋*können*	両側: p > .10	-	0.06	0.00	**-0.06**
	決定疑問文＋*können*（接続法Ⅱ）	両側: p > .10	-	-0.30	-0.18	**0.12**

自然さ（Natürlichkeit）の次元		有意差		平均値		
		出現確率	有意水準	発話形式1（*mal* なし）	発話形式2（*mal* あり）	形式2－形式1
友人	命令文	両側: p < .01	**1%**	-1.42	0.45	**1.87**
	決定疑問文	両側: p < .01	**1%**	0.21	1.55	**1.34**
	決定疑問文＋*können*	両側: p < .01	**1%**	1.18	2.39	**1.21**
クラスメート	決定疑問文	両側: p < .01	**1%**	-0.55	0.94	**1.49**
	決定疑問文＋*können*	両側: p < .01	**1%**	0.18	1.91	**1.73**
	決定疑問文＋*können*（接続法Ⅱ）	両側: p < .01	**1%**	0.61	1.67	**1.06**

連帯性（Solidarität）の次元		有意差		平均値		
		出現確率	有意水準	発話形式1（*mal* なし）	発話形式2（*mal* あり）	形式2－形式1
友人	命令文	両側: p < .01	**1%**	-1.48	-0.12	**1.36**
	決定疑問文	両側: p < .01	**1%**	0.09	0.91	**0.82**
	決定疑問文＋*können*	両側: p < .01	**1%**	0.56	1.48	**0.92**
クラスメート	決定疑問文	両側: p < .01	**1%**	-0.52	0.39	**0.91**
	決定疑問文＋*können*	両側: p < .01	**1%**	0.09	0.88	**0.79**
	決定疑問文＋*können*（接続法Ⅱ）	両側: p < .01	**1%**	0.48	1.06	**0.58**

※評定尺度の間隔は等しいものと仮定する。

* 形式2－形式1:「発話形式2（*mal*を伴う発話）の値から，発話形式1（*mal*を伴わない発話）の値を引く」の意

一方, 表(196)に記した「ちょっと」に関する結果からも, 「ちょっと」が, 部分的に肯定的な役割を果たすことがうかがえる。

(196) 発話における強制力・自然さ・連帯性の度合いの分析(*ちょっと*)(サイン検定)

状況:「ボールペンを貸す」

強制力(Verpflichtung)の次元		有意差		平均値		
		出現確率	有意水準	発話形式1(*ちょっと*なし)	発話形式2(*ちょっと*あり)	形式2－形式1
友人	命令文(～て / ～てくれ)	両側: p > .10	-	0.27	-0.06	**-0.33**
	決定疑問文(～てくれる)	両側: p > .10	-	-0.64	-0.88	**-0.24**
クラスメート	決定疑問文(～てもらえる)	両側: p < .05	**5%**	0.30	-0.15	**-0.45**
	決定疑問文(～もらえる＋ます)	両側: p < .05	**5%**	-0.06	-0.18	**-0.12**

自然さ(Natürlichkeit)の次元		有意差		平均値		
		出現確率	有意水準	発話形式1(*ちょっと*なし)	発話形式2(*ちょっと*あり)	形式2－形式1
友人	命令文(～て / ～てくれ)	両側: p > .10	-	1.39	1.42	**0.03**
	決定疑問文(～てくれる)	両側: p > .10	-	1.06	0.88	**-0.18**
クラスメート	決定疑問文(～てもらえる)	両側: p < .05	**5%**	0.24	0.55	**0.31**
	決定疑問文(～もらえる＋ます)	両側: p > .10	-	0.55	-0.03	**-0.58**

連帯性(Solidarität)の次元		有意差		平均値		
		出現確率	有意水準	発話形式1(*ちょっと*なし)	発話形式2(*ちょっと*あり)	形式2－形式1
友人	命令文(～て / ～てくれ)	両側: p > .10	-	0.94	0.97	**0.03**
	決定疑問文(～てくれる)	両側: p < .05	**5%**	0.58	0.88	**0.30**
クラスメート	決定疑問文(～てもらえる)	両側: p < .05	**5%**	-0.06	0.27	**0.33**
	決定疑問文(～もらえる＋ます)	両側: p > .10	-	0.09	0.15	**0.06**

※評定尺度の間隔は等しいものと仮定する。

* 形式2－形式1:「発話形式2(*ちょっと*を伴う発話)の値から, 発話形式1(*ちょっと*を伴わない発話)の値を引く」の意

例えば, 「強制力」の次元における「対クラスメート」では, 「ちょっと」があると「強制力」の度合いが<u>減少する</u>蓋然性が高いことを示している(有意水準: 5%)。また「連帯性」の次元でも, 「ちょっとボールペンを貸してくれる？」と「ちょっとボールペンを貸してもらえる？」という決定疑問文では, 「ちょっと」を伴わない場合よりも肯定側に傾く点で有意

差が見られた。特に「ちょっとボールペンを貸してもらえる？」という発話では，「自然さ」の度合いが増大する蓋然性も高い（有意水準: 5%）。とはいえ，その他の点では，いずれも有意差が見受けられず(-)，「自然さ」と「連帯性」の次元で常に有意（有意水準: 1%）であった *mal* の場合と比べると，安定性のない結果であったともいえよう。

以上の結果から，心態詞 *mal* の積極的な使用に関して，(197)のような仮定的結論を提示する。

(197) 親しい相手に対して, *mal* が積極的に使用される理由は，「連帯性」の態度を含意することによって，依頼の遂行と聞き手による実行の円滑さを図り，その実行を保証しようと試みる点にある。

4.4.3.5.3.「連帯性の指標」としての *mal*

本研究では，一連の比較調査に基づき，心態詞 *mal* の使用意義を上記(197)にまとめた。しかし，(197)がいまだ仮説の域を出ないことは言うまでもない。「連帯性」という概念自体，(194)で述べたような定義ではおそらく不十分であり，とりわけ，(197)を裏づけるには，さらに厳密な経験的アプローチが必要とされるであろう。しかし，本研究ではこれ以上のアンケート調査等を控え，むしろ，ここでは仮に(197)を肯定的に捉えたうえで，「連帯性の指標」としての機能というのが何を意味しているか，どのような役割として扱われるべきものであるかを理論的に掘り下げてみたい。この際，重要なテーマとして，「緩和」と「丁寧さ」という概念にあらためて立ち入る。

mal と「ちょっと」には，「要求緩和」という唯一共通する機能に関しても，実際は緩和の仕方において違いがあるように思われる。一言で「緩和」(Abschwächung)といっても，その定義に関しては諸説あると思われるが，例えば，言語コーパスに則って，コミュニケーション機能としての緩和を研究する Langner（1994）では，「Goffmann（1975）の 'face'- 構想，Brown/Levinson (1987)のポライトネス理論, Grice (1975)の会話の格率と Lakoff (1973) によるその発展，および Sperber/Wilson (1986)による関連性理論の構想を統括」(ibid.)して，「緩和」の概念を(198)のように述べる。

(198) Abschwächung ist also eine Kommunikationsstrategie, mit der im Kommunikationsprozeß einerseits schwächere Obligationen errichtet werden, andererseits die Bedrohung des 'face' des Kommunikationspartners (und natürlich auch die Bedrohung des eigenen 'face') verringert wird.（Langner 1994: 221）

［緩和とは，コミュニケーション過程において，一方で，比較的弱い義務を構築し，他方で，会話参加者の「フェイス」を（および当然自らの「フェイス」をも）侵害する恐れを軽減するコミュニケーション上の方略である］

Langner（1994）も参照しているとおり，（198）から，「緩和」の概念が 4.4.2.2.で紹介した Brown/Levinson（1987）の「ポライトネス理論」と密接に関係していることが見て取れる。そして，筆者は，4.4.2.2.で述べた４つのポライトネス・ストラテジーのうち，ポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスの区別が，*mal* と「ちょっと」の方略上の違いを明らかにするうえで有効であると考える。

4.4.3.4.で示したように，「ちょっと」は，被依頼者の立場を問わず„hedge“としての機能を発揮すると考えられた。筆者は，その理由を（199）（=（193）の一部再録）に言及することで，*mal* の用法との根本的な違いを推定した。

(199) 遺憾や詫びの態度を前景化する「ちょっと」の特性，ならびに間接性を導く「ちょっと」の含意が，「依頼や，希求，指示行為の負担をやわらげる」という機能に影響することで，「疎遠な相手」や「目上の相手」に対する「ちょっと」の使用が許容される。

（199）で述べている「ちょっと」の特性や含意とは，一言でまとめれば「ネガティブ・ポライトネス」を指す。つまり，聞き手が「行動の自由を束縛された」と感じるのを減らすコミュニケーション手段であり，聞き手の相手から自由でありたいと願う防御的な願望を満たす方略（ネガティブフェイスの配慮）である。彭（1990）が，「単純的修飾」と名付けた「ちょっと」の本来の意味が，「物理的に数量や程度の少ないさま」であることからもわかるとおり，「少し」を表す「ちょっと」の基本的意味は，もともと依頼内容の命題自体に作用し，そこから派生する形で，「場面的添加」の１つである「要求緩和」において，（199）のような効果を生み出していると考えられる。「遺憾」や「詫び」の態度は，ネガティブ・ポライトネ

スの代表格であるが，「間接性の含意」に関しても，同様にネガティブ・ポライトネスとして扱われる。(188a)で「君にはちょっと難しい」という発話を例に挙げ，この発話は，コンテクストに従って，概ね正反対の意味が含意されるとした。つまり，「少し」という語彙的意味の転用によって，間接的に「君にはかなり難しい」という内容を伝えようとしている。この際，直接的に「かなり」と言わず「ちょっと」という間接的な表現を利用するのは，「聞き手には難しい」という命題自体を「ぼかす」ことによって，聞き手の心理的な負担を軽減しようとするためである(ネガティブ・ポライトネス)(cf. also Werner 2002: 141)。このようないわば「ぼかし機能」(Nuancierungsfunktion)は，心態詞 *mal* にも確認できないわけではない。4.3.1.と 4.3.3.で述べたとおり，時間副詞 *einmal* が設定する「不特定の時間幅」という観点は，要求実行の時点をぼかすものであり，筆者自身，このような機能が心態詞 *mal* を使用する理由の 1 つである可能性を示唆した。さらに，行為指示型(Direktive)ではなく，言明型(Repräsentativa)の発話であっても心態詞 *mal* が現れるとする Bublitz (2003: 186)では，*mal* は「陳述の重要性や関連性を比較的小さいものであると特徴づけ，命題の真理判断の断定を相対化する」としており，この際の *mal* の機能は，まさに「命題内容のぼかし」と捉えることができるであろう。しかし，もし実際にこの意味での心態詞 *mal* の機能が，依頼発話においても適切に発揮されているのであれば，「ちょっと」の場合と同様に，「疎遠な相手」や「目上の相手」に対しても適用されて然るべきである。しかし，実際には否であった。

4.4.3.1.で，「単純的修飾」としての「ちょっと」が *mal* で表わされることはなく，「ちょっと」と *mal* の間には，基本的な／根幹的な意味においての整合性がないことを述べた。そこで，「ちょっと」の基本的意味が「少し」であるのに対し，*mal* の基本的意味は，時間副詞 *einmal* の派生元と考えられる頻度副詞 *einmal* の語彙的意味，つまり「一回／一度」に基づく含意であるとすれば，依頼行為における「ぼかし」の有無に関して説明がつくように思われる。「一回」という語彙的意味がシグナルすることは，「ぼかす」というより，むしろ「明確化」していると考えるべきである。というのも，4.3.3.で述べたとおり，頻度副詞 *einmal* は，*zweimal*，*dreimal* といった変異を持つことから，頻度を焦点化しない時間副詞 *einmal* と異なり数詞部分の„ein“を省略することができないため，語用論的推論[Maxim of Quantity(量の公理)](Grice 1975, 1996)によって，「複数回でない」という含意を排他的に導く。つまり，頻度副詞 *einmal* を伴う文を発話するということは，語用論的に「二度や三度ではない」という強い含意を表すと考えられ，このような含意は，「命題内容のぼかし」と関係する非即時性に貢献するというより，非多発的な性質を明示している。このことは，心態詞 *mal* の非即時

的な性質が，「要求緩和」の機能に寄与していないと主張しているわけではない。心態詞 *mal* の意味的特性は排他的な関係にあるのではなく，場合によって，それぞれが共同で「緩和」の効果を生み出していると考えた方が自然であろう。とりわけ命令文で用いられる場合などは，まさにこの段階での緩和機能が明確に発揮されていると考えられる。そして，この段階では，心態詞 *mal* も，「ちょっと」と同じくネガティブ・ポライトネスであると推測できるのである。しかし，依頼を遂行するのに，命令文の発話など本来もってのほかであるような「疎遠な相手」や「目上の相手」に対しては，たとえ *mal* の緩和的な特性が示されたとしても，依頼として最適な発話とは解釈されなかった。この点が，「ちょっと」との明らかな相違であり，心態詞 *mal* の使用意義を見極めるポイントであると考えられる。その結果として導かれたのが，「連帯性の指標」（Solidaritätsindikator）（英: solidarity marker）としての *mal* の機能的な側面である。

聞き手が「認められた」あるいは「仲間とみなされた」と感じるのを増やすコミュニケーション手段であるポジティブ・ポライトネスは，聞き手の自己を他者に認めさせたいと願う連帯的な願望を満たす方略（ポジティブフェイスの配慮）であり，ドイツ語の依頼発話において *mal* を使用するというのは，この方略を選択していると考えられる。ポジティブ・ポライトネスは，例えば相手を褒める，あるいはニックネームで呼ぶといった「仲間意識を高める」方略として捉えられ，このような「連帯性」は，言語コミュニケーションにおいて，ドイツ語ではとりわけ„Duz-Verhältnis“（主語を *du* で呼び合う関係）に反映される。主に，学生同士や同僚，家族，恋人，（年齢差に関係なく）友人といった，一般的に親しい間柄（同等の間柄）とみなされる関係では，ドイツ語では二人称親称の„du“で呼び合うことが通例である。また，たとえ二人称敬称の„Sie“で呼称する関係であっても，互いが「親しい間柄」と認め合っていれば，決して心態詞 *mal* が不適切な使用になることはない。この場合も，やはり「連帯性」という前提が想定されるからである。そして，この連帯性の基盤が確立されていると想定される相互関係において，話し手が聞き手に依頼する状況では，本来，「依頼」という行為が「相手に利益が伴わない」という性質をもつことからも，話し手は，何らかの語彙的な方略によって，相手の心理的負担を軽減する必要性に迫られる。そして，ここで最も肝要なことは，たとえ親密な間柄であっても，あまりに厚かましい／図々しい印象を与えない程度で，緩和を意図した自然な態度を示さなければならないことにある。平たくいえば，「親しき仲にも礼儀あり」である。この点において，「要求内容が些事であれば，お互い相手に対して要求してよい／相手のために実行してよい」といった連帯性の態度を示すこと

で，相手のポジティブフェイスに訴える心態詞 *mal* による緩和策は的を射ているのである。つまり，「連帯性の指標」とは，親密さの前提を態度として示し，互いの利益の均衡を図るものであるといえよう。以上を要約すれば，心態詞 *mal* は，話し手と聞き手の距離を近づけようとする発話方略であり，互いの立場を同等，あるいは上から下に設定する緩和表現であるのに対し，たとえ同じ緩和表現であっても，「ちょっと」は互いに距離を置こうとする発話方略であり，(少なくとも，相手に近づこうとするものではなく)互いの立場を同等とみなすか，自ら卑下することによってあたかも立場が下から上であるように仕向けるものであると捉えられる。いずれの場合も，当然その目的は，文化的変数として捉えられる「適度な距離」を保つことであり，「心理的な距離」が適度に保持されていると判断されれば，その発話は「丁寧かつ自然である」とみなされることになる。

4.4.1.でまとめたとおり，先行文献における心態詞 *mal* の機能には，(200a, b)が挙げられる。

(200) 心態詞 *mal* の機能:

a. 発語内行為「要求」の強制力を緩和／強制力の比重を軽減する。

b.「要求」に丁寧な(höflich)性格を与える。

この際，(200a)の機能を導く含意的な特性として，これまで，„einmalig“(一回限りの)(cf. Weydt/Hentschel 1983: 14; Bublitz 2003: 186)，„nicht dauernd“(永続的でない)(cf. Becker 1976: 8; Weydt/Hentschel 1983: 14; Bublitz 2003: 185)，„irgendwann“(いつかあるとき)(cf. Thurmair 1989: 185; Helbig 1994: 175ff.; Bublitz 2003: 185)の３点が論じられてきた。これらの特性は，頻度副詞 *einmal* と時間副詞 *einmal* の意味論的意味がもたらすものであり，Bublitz(2003)のことばを借りれば，話し手が「その要求内容を些事である」(beiläufig)とみなす点に集約されると思われる。そして，これらの特性が，聞き手の心理的な負担を軽減する緩和策として機能し，結果として「要求」に丁寧な性格を付与するという副次的な機能に結びつくと考えられてきた。

もし，心態詞 *mal* の使用意義が，上記の含意的な特性にのみ言及されるのであれば，会話参加者の立場を問わず，心態詞 *mal* の使用は適切にその効果を発揮すべきである。しかし，*mal* の有無のみに注目した調査結果に従う限り，その効果は，「親しい相手」に対してのみ肯定的に生じうる。ただし，たとえ「親しい相手」であっても，„höflich“という概念とは直接

肯定的な結びつきがあるとは考えにくい。そこで，心態詞 *mal* の心的態度には，親密さを前提とする関係に適用されるような側面が付随していると推定され，それが「連帯性の指標」，つまりポジティブ・ポライトネスを示す態度であると結論づけられる。この結論の妥当性は，まず，命令文における *mal* の使用に見られる。命令文では，発話が要求であると一義化される必要はない。また，「依頼」を行う上で，命令文を使用できる人間関係は，常識として「親密さ」が前提とされる。この場合，その文タイプが，すでに一種の「厚かましい／図々しい」態度を含んでおり，*mal* の使用が，この意味におけるそれ以上の心的負担に加担するとは考えにくい。皮肉としての場面を除き，本来心態詞 *mal* の使用は，相手の心的負担を増大させるためではないからである。では，なぜ心態詞 *mal* が使用されるのか。「要求内容が些事である」ことを明示するためである。とはいえ，語彙的に明示するわけではない。心態詞 *mal* は，「その行為の実行は複数回でなくてよい／長引かせなくてよい／すぐでなくてよい」と含意するに留めることで，「親しい相手」と「命令文」というコンテクストに合致する最も自然な緩和策として機能するのである。

さらに，「疎遠な相手」や「目上の相手」に対して依頼する場合に，*mal* を伴う発話が遂行されることがあるが，この点も同様にーとはいえ命令文とは逆の捉え方によってー説明できる。「疎遠な相手」や「目上の相手」に対する依頼では，通常（201a-d）に示すとおり，副詞 *bitte*（英: please）や話法詞 *vielleicht*（英: possibly），あるいは接続法Ⅱ式（英: 仮定法）といった典型的なネガティブ・ポライトネスが多用され，その際に，（適切な使用として）心態詞 *mal* の共起が可能となる。

(201) a. Können Sie *bitte (mal)* das Fenster öffnen?
（ちょっと窓を開けてくださいますか）

b. Können Sie *vielleicht (mal)* das Fenster öffnen?
（できればちょっと窓を開けてもらえますか）

c. *Könnten* Sie *(mal)* das Fenster öffnen?
（ちょっと窓を開けていただけますか）

d. *Könnten* Sie *bitte vielleicht (mal)* das Fenster öffnen?
（できればちょっと窓を開けてくださいますでしょうか）

この場合，話法助動詞 *können* を伴う決定疑問文という間接性の方略に，典型的なネガティブ・ポライトネスを表す要素が加えられたことで，（命令文の場合とは逆に）相手との間に「親密さ」が前提とされないことがすでに明示されているといえる。そのため，ここでの *mal* も，３つの意味的特性の含意が主な使用意義となり，（命令文の場合とは異なる意味で）「連帯性」の態度は背景化される。また，本章でのアンケートに協力を依頼した被験者の一部に，（201a）と（201c）の発話で *mal* の有無についての評価を尋ねた結果として，「強いて言えば，*mal* の伴わない場合の方が自然である」という意見を得た。口頭による意見交換にすぎず，すでに本調査の被験後であったため，ここでその信憑性を図ることはできないが，*mal* 単独の含意するところが，いかに「親密な」関係を必要としうるかという観点の一助にはなるかと思われる。

4.5. 第 4 章のまとめ

4.4.2.2.で行った *mal* の使用に関するアンケート調査に基づき，筆者は，„höflich“という概念と *mal* の使用意義との関連を見直す必要があるとし，その不適切な使用が顕著に露呈する発話文として，*können* を伴う決定疑問文との共起を扱った。4.4.2.で述べたとおり，本来，この発話形式は，ドイツ語の日常における依頼発話として，最も頻繁に使用されると考えられる。しかし，この場合の *mal* の使用は，単純に„höflich“（丁寧な）という効果を反映するわけではないと述べた。事実，調査結果では，会話参加者の区別（見知らぬ人／教授／友人）に関わらず，*mal* が„höflich“（丁寧な）という性格を付与しない蓋然性が非常に高いと判断された。さらに，「対見知らぬ人」や「対教授」の場合より減少の度合いが小さいとはいえ，たとえ「対友人」であっても，„höflich“（丁寧な）の度合いが増大する蓋然性が高いとは観察されていない。減少することに違いはなかったのである。これまで，心態詞 *mal* には，非多発性，非持続性，非即時性といった３つの含意的な意味的特性が付随していると考えられてきたが，4.4.3.5.3.で指摘したとおり，本来，この含意のみで，要求による聞き手の心理的負担が軽減されるのは，相手が「親密な間柄」である場合に限られる。「疎遠な相手」や「目上の相手」に対して，そのような含意的な態度を示すことだけでは，そもそも「要求してよい」という理由を満たすことにはならない。そのような態度を示す如何を問わず，まずは「申し訳ないのだが」という態度を明示する方が先決である。しかし，相手が友人で，「窓を開ける」といった比較的負担の軽い依頼を行うのに，いちいち「申し訳ないのだが」などとい

う態度を示していては，その不自然さゆえに，かえって話し手は，「自らが遂行した依頼に対する聞き手の実行能力を確実に見込む」（cf. Bublitz 2003: 186）ことはできないであろう。そこで，先の問題点の要因として，「連帯性」という概念を取り上げるに至る。そして，4.4.3.5.1.において，「連帯性」の有無を問うアンケート調査を行った結果，こちらは，その度合いが増大する蓋然性が非常に高いと判明した。このことから，心態詞 *mal* が示す「丁寧さ」とは，これまでの先行研究で述べられてきたような„höflich“（丁寧な）という概念とは結びつかず，相手との連帯性を重んじるポジティブ・ポライトネスを指すものであると捉えられる。ポジティブ・ポライトネスである以上，「心態詞 *mal* の使用は丁寧さの方略ではない」と結論づけることはできないが，先行研究において，心態詞 *mal* をこの意味の「丁寧さ」と関連づけ，その調査・分析・理論的考察を行ったものはない。

4.5.1. *mal* の「丁寧さ」

上で，心態詞 *mal* が示す「丁寧さ」は，相手との連帯性を重んじるポジティブ・ポライトネスであると述べたが，そもそも，今回の調査では，被験者に対して，„höflich“（丁寧な）という概念の定義を与えていないことにも触れておかなければならない。定義づけてしまえば，そのことが調査結果に望まれない影響を与えうる（何らかの偏った結果／操作性のある結果を生じさせる）と考えたからである。しかし，最大の理由は，むしろ„höflich“という概念を，そもそも定義づけることが非常に困難であるために他ならない。例えば，Bublitz（2003: 182）では，„Höflichkeit“（丁寧さ）を生み出す言語的な傾向として，「„präzise“（精密に）よりも„vage“（曖昧に），„endgültig“（最終的に）よりも„vorläufig“（暫定的に），„absolut“（絶対的に）よりも„eingeschränkt“（制限的に），„definitiv“（確定的に）よりも„unverbindlich“（不確実的に），つまり„dogmatisch“（独断的に）であり„apodiktisch“（断定的に）であるよりも，„undogmatisch“（非独断的に）であり„interpretationsoffen“（解釈の余地を残したもの）であるように表現すること」を挙げているが，Bublitz 自身，言語的な手段としての丁寧さ，あるいは心的／認識的な面での丁寧さの問題，または，間接性による丁寧さの文化差などを指摘している。確かに，ここに挙げたような要素は，一般的な傾向として扱うことはできても，コンテクストや文化的な変数を考慮せずに，„höflich“という概念を定義づけることは非常に困難である。この点に関しては，これまで多くの文献で問題視されてきたことであり，その中で，先の Brown/Levinson（1987）は，その議論に１つの結論を与えたものであるといえる。

そのうえで，今回の調査における被験者には，言語学（特に社会言語学／語用論）を学んでいる学生は一人もおらず，おそらく「ポジティブ・ポライトネス」という術語およびその概念の意味を把握していた者は皆無に等しい[77]。しかし，東（2002[7]: 132ff.）や井出（2006: 79ff.）に明記されるとおり，本来，欧米の文化における„polite/höflich“という概念は，例えば日本人にとってのそれとは異なり，„friendly“（親しげな）という態度を示す場合を指すのであり，むしろ言語学を学んでいない母語話者であるからこそ，直観的に自らの文化に従った„höflich“として，発話に *mal* が用いられた場合に，その度合いが増大して然るべきであったはずである。当然，相手が「見知らぬ人」や「教授」であるために，端から„friendly“の意味における„höflich“であるはずもないという見解も成り立つが，今回の調査の手法における最大の留意点は，心態詞 *mal* の有無が„höflich“という概念の値の増減にいかに関わるかであり，結果として，たとえいずれの意味における„höflich“であったとしても，「疎遠な相手」や「目上の相手」に対しては，その度合いが極めて減少するということが導かれた。従って，心態詞 *mal* の使用と„höflich“という「概念」の関与性は薄く，代わりに「親しい相手」との関係を結びつける最も適切な要因として，„solidarisch“（連帯的な）という概念を導き出した。その結果，心態詞 *mal* が，「連帯性の指標」として機能する点に言及することで，その積極的／肯定的な使用意義を見い出すに至った。

心態詞 *mal* の使用が，ネガティブ・ポライトネスに当たる丁寧さの方略に貢献せず，連帯性の態度を示す指標として，ポジティブ・ポライトネスに相当すると捉えたことは，*mal* が「親しい相手」に対して適切に使用されるという示唆に基づいて導かれたものであるが，このような親密さの前提は，他の心態詞においても観察される。高田（2007: 72）では，Adelung（1970[2]: 1507）を引用し，„Folgen Sie mir doch.“（私について来て下さいよ）における心態詞 *doch* に関して，「命令文で doch を用いるには親密さが前提とされ，『畏敬の念をいだくべき人物に対して doch をこの意味で用いてはならない』（第 1 巻, 1507）」とある。さらに，「親密さ」は「同一性」，「礼儀正しさ」は「相違」に重きを置くとするアーデルングの文体論（Adelung 1785）と，Brown/Levinson（1987）のフェイス理論を関連づけて，「話し相手に友好さを示して接近する『ポジティブなポライトネス』はアーデルングの言う『親密さ』に，話し

[77] 可能性として，„höflich“という概念を，その語源である„Hof“（宮廷）に則り，儀礼的・道徳的な礼儀作法としての態度と理解し，この意味で，心態詞 *mal* が„höflich“でないと判断した者もいたかもしれない。しかし，約 100 名に及ぶ被験者の中で，例えば言語史を学んだ上でこのような捉え方をした学生が，統計の有意差をくつがえすほどに存在したとは考えにくい。

相手から距離をとって尊重する『ネガティブなポライトネス』はアーデルングの『礼儀正しさ』に対応することになるであろう」（高田 2007: 72ff.）と述べている。このことから，命令文における心態詞 *doch* も，筆者が捉える心態詞 *mal* の「親密さ」と類似した概念であるように思われる。本節における考察が，今後，実際の言語使用との関連に基づき，さらに経験的な分析を必要とすることは言うまでもないが，以上の点に基づいて，少なくとも心態詞 *mal* をポジティブ・ポライトネスとの関連に言及した本研究のアプローチは，*mal* に限定されてしまうような単発的な／自己完結の考察に留まらないことを強調して述べておきたい。

4.5.2. 心態詞 *mal* の意味と機能

ここでは，心態詞 *mal* の基本的意味（Grundbedeutung）と心的態度（Sprechereinstellung）についてまとめる。3.5.4.で，Grice の理論における言語慣習的含意と関連性理論における手続き的コード化について触れ，本研究における心態詞の心的態度を手続き的コード化の観点から導くと述べた。

まず，関連性理論の見地から心態詞を分析した先行文献として，例えば König（1997）を取り上げる。König（1997）は，心態詞の機能を「メタ語用論的指令」（metapragmatische Instruktionen）とみなし，関連性理論における３つの「認知効果」（cognitive effect）に従って心態詞の分類を試みている。認知効果とは, Sperber と Wilson によって「認知環境」（cognitive environment）と名付けられた，各個人に顕在する（manifest）想定（assumption）の集合が，３つの仕方によって修正されることを指す[78]。それらは，①文脈含意（contextual implication: Steuerung von Kontextauswahl），②既存の想定の強め（strengthening: Stärkeindikatoren），③既存の想定の削除（contradiction: Identifizierung von Widersprüchen）である。①の方法は，「新情報と旧情報を組み合わせたものを前提として推論した結果，引き出された帰結を認知環境に加えることである」（東森・吉村 2003: 15ff.）。②は，「既存の想定に対してさらなる証拠や確信を与えることである」（ibid.）。③による認知環境の修正は，「新情報と旧情報が互いに矛盾するときには，そのうちの弱い方が削除される」（ibid.）ことを指す。König（1997）は,

[78] 「顕在的」（manifest）と「認知環境」（cognitive envirovment）の概念は，次のように定義される。
(i) A fact is *manifest* to an individual at a given time if and only if he is capable at that time of representing it mentally and accepting its representation as true or probably true.
(ii) A *cognitive environment* of an individual is a set of facts that are manifest to him.
（Sperber/Wilson 1995[2]: 39）

「心態詞はコンテクストと個々の新情報を推論的に結びつけるものである」という基盤的な主張に基づき，これら３タイプの認知効果との関連で，(202)のように心態詞を大別する。

(202) a. Identifizierung von Widersprüchen: *doch*, *etwa*

b. Stärkeindikatoren: *aber*, *vielleicht*, *erst*, *schon*, *ja*, *wohl*, *eben*, *nun mal*, *halt*, *bloß*

c. Steuerung von Kontextauswahl: *auch*, *eben*, *nun mal*, *halt*, *schon denn*, *eigentlich*, *einfach*, *nur*, *bloß*, *wohl* （König 1997: 65）[79]

ここで König（1997）を取り上げたのは，上記における分類や，個々の心態詞に関するその分析内容を詳細に検討するためではない。König 自身が示唆していることであるが，(202)の分類において，心態詞 *mal* がどのグループにも属さないという点に言及したかったためである。König（1997）は，(203)のように述べている。

(203) Diese Partikel, die von *einmal*, dem Minimalwert für Häufigkeit, abgeleitet ist und deren Bedeutung zu 'Minimalaufwand' verallgemeinert wurde, scheint bezüglich der Bedeutung in der Tat eine Sonderstellung zu haben und hat m.E. wenig mit den anderen Modalpartikeln gemeinsam.（König 1997: 65）

（最小値の頻度を表す *einmal* から派生し，その意味が「最小の浪費」という点で一般化されたこの不変化詞は，その意味との関連で，実際には特別な地位を占めていると思われ，管見では，あまり他の心態詞と共通しない）

(203)の示唆に注目しただけでも，心態詞 *mal* の機能的意味としての心的態度を導くことは有意義であるといえる。先に，König（1997）が心態詞の機能を「メタ語用論的指令」とみなしていることを述べたが，2.3.2.2.で記したように，心態詞の機能に関するこの捉え方は，意味最大限主義の立場にたったものであり，意味最小限主義の立場をとる本研究とは相容れない捉え方である。従って，筆者は，König（1997）の分析をそのまま踏襲するつもりはない。というより，(203)で示したとおり，König（1997）を踏襲する限りでは，心態詞 *mal* の「意味

[79] (202b)と(202c)で重複する心態詞に関して，König（1997: 65）は，「いくつかの心態詞は，複数の認知効果のために使用されうる」と述べる。

（基本的意味であれ，手続き的意味であれ）」を導くことはできない。そこで，本研究では，3.5.4.以降で述べたように，意味最小限主義の立場から，個々の心態詞の基本的意味を導いたうえで，その基本的意味からの派生という形で，心態詞の心的態度を手続き的コード化の捉え方に求める。このことは，心態詞の機能を「メタ語用論的指令」とみなすわけではない。心態詞の機能は「心的態度表明」であるとしたうえで，その「心的態度」を，いわば「メタ語用論的指令」の考え方を手がかりにして導くのである。この点では，意味最大限主義と意味最小限主義の中間的な立場ともいえるが，「心的態度を基本的意味からの派生である」と捉えることで，意味最小限主義の立場であることに相違ないと考える。以上をふまえ，次節で，心態詞 *mal* の基本的意味と心的態度の導出を試みる。

4.5.2.1. *mal* の基本的意味と心的態度

まず，心態詞 *mal* の基本的意味（Grundbedeutung）を考える。心態詞としての *mal* とその同音異義語（Homonym）である時間副詞 *einmal* に共通する意味の抽出である。4.4.1.で挙げたが，ここで再度，心態詞 *mal* の主な使用環境をまとめる。

(204) a. 行為指示の発話行為タイプの１つである発語内行為「要求（本研究では，命令，依頼，助言，許可の４つを含む）」が遂行されうる発話で使用される。（=（158a））

b. 心態詞 *mal* は，聞き手によって実行されるべき行為の心理的・実際的（物理的）負担が軽い場合にのみ適切に機能しうる。（=（163））

このうち，（204b）は，4.4.2.1.で示した使用条件であるが，これはまだ不十分である。4.4.2.1.では，便宜上，金銭の絡む例での説明に留めたが，実際には，人による負担の比重の評価にはさらなる違いがある。例えば，「インターネットである情報に関する検索」を依頼する場合に，常時コンピュータを使用する環境にいる相手と，全くその扱いに不慣れな相手に対するのでは，依頼の受け手が感じる負担の度合いに差が生まれて当然であろう。このことは金銭的な面でも同様で，ある金額を高いとみなすか安いとみなすかは，貸与する側の人間がどのような社会的立場にあるか，あるいは金銭に対する執着度の違いなどにも依存する。従って，この際「要求（依頼）」の実行に対する負担の比重を決定づけているのは，命題内容の絶対的な負担の比重とは別に，聞き手の環境や立場，あるいは性格までをもふまえた話

し手側の判断ということになる。つまり，(204b)の心態詞 *mal* の使用条件は，下記(205b)のように限定されることになる。ちなみに，(205a)は，(204a)における「発話」を，文タイプという観点から書き換えているだけで，使用環境としては同一内容を表す。

(205) a. 心態詞 *mal* は，潜在的に「要求(命令，依頼，助言，許可)」が遂行される文タイプ(平叙文，決定疑問文，*W*-疑問文，命令文)で現れる。

b. 心態詞 *mal* は，聞き手による「要求」の実行に対する負担の比重が比較的軽いと話し手がみなす場合に適切に使用される。

本節で述べるのは，この(205b)の使用環境についてである。この観点を導く要因として，筆者は，心態詞 *mal* の同音異義語に注目する。4.3.1.および 4.3.2.において，時間副詞 *einmal* と頻度副詞 *einmal* の意味論的意味を考察し，これらの意味に基づき，筆者は，4.3.3.で心態詞 *mal* が表しうる３つの特性に言及した。「性質」という言い方でまとめると，要求の実行に対する①非多発性(Nicht-Repetitionalität)，②非持続性(Nicht-Dauerhaftigkeit)，③非即時性(Nicht-Sofortigkeit)である。これらの特性は，(206a-c)のような例が語用論的に不適切であることからもうかがえよう。

(206) a. # Holst du mich *mal* jeden Tag am Bahnhof ab? (*mal* 毎日私を駅に迎えに来てくれる？)

b. # Lernt *mal* zwei Jahre Deutsch! (*mal* 二年間ドイツ語を学んでみたら)

c. # Komm *mal* sofort her! (*mal* すぐに来なさい)　　(# = 語用論的に不適切)

このうち，(206c)のような例には注意が必要である。例えば，Franck (1980: 249)や Thurmair (1989: 185)によれば，心態詞 *mal* は，語彙的に即時性を表す時間副詞 *sofort*(すぐに，即座に)とは共起しえないとされる。この点は，4.3.1.と 4.3.3.で述べた，時間副詞 *(ein)mal* が設定する「不特定の時間幅」という捉え方と合致するものである。つまり，時間副詞 *(ein)mal* の意味論的意味から派生する形で，心態詞 *mal* が含意しうると考えられた要求実行に対する「いつでも良い」(＝irgendwann)という話し手の意図である。それによって，要求実行の時点をぼかし，表面上，聞き手に実行時点の選択権を与えることで，聞き手に対する心理的負担の軽減を図るのではないか，という仮定的な結論である。しかも，ここで言われる *sofort* との非

共起性は, *(ein)mal* によって限定された不特定の時間幅 t'（言及されたある時間幅 t の部分）が, 時間幅 t の内部で指示されるもう 1 つの任意性と関係する。Stechow（2002）では, この点には触れられていないが, 4.3.1.で示唆したとおり, 例えばその時間幅 t'を発話時の直後にあてがった場合, たとえ要求時点がぼかされたとしても, 要求実行に対する時間的猶予は与えられていないことになる。

そのうえで, 筆者が数名の母語話者に尋ねたところ,（206c）の発話は全く問題ないという意見を得た。彼らに従うならば, *mal* の表す特性が,「聞き手が即座に話し手の側に来る（こと）」という命題内容に支障をきたすことはないと考えられるのである。当然, こうした意見のみに依拠して, 心態詞 *mal* には, 時間副詞*(ein)mal* の意味はないとするのは早計である。4.4.3.5.3.でも述べたとおり, 本来, 心態詞 *mal* の意味的特性は, それぞれが排他的な関係にあるのではなく, 共同で「緩和」の効果を生み出すと考えた方が妥当であるように思われ, 命題内容や文形式によっては, 時間副詞 *einmal* の意味が決定的な効果を発揮する可能性もあると考えられるからである。では,（206c）のような発話が不適切と評価されうる原因は何であろうか。おそらく, 心態詞 *mal* の基本的意味を, 時間副詞*(ein)mal* に依拠して導くか, 頻度副詞 *einmal* に基づいて抽出するかの違いであろう。つまり, 時間副詞*(ein)mal* の語彙的意味である「いつか」に基づいた「いつでも良い」という含意で考えるならば, 確かに「いつでも良い」とみなす話し手の意図と, *sofort*（すぐに）が表す時間的意味の間で不具合が生じるが, 頻度副詞 *einmal* の語彙的意味である「一回／一度」に基づく「複数回でない」という含意で捉えるならば,「聞き手が即座に話し手の側に来る（こと）」に対して,「複数回でない」という意図を示すことは, 十分「緩和」としての機能を果たしうると解釈できる。そこで, 筆者は, 時間副詞*(ein)mal* の語彙形成過程が,「回／度」を表す名詞 *Mal* と,「一」を表す数詞 *ein* が結びついたもの, つまり, いわゆる数量詞 *ein Mal* と同じ意味を表す頻度副詞 *einmal* からの派生である点, ならびに時間副詞*(ein)mal* も頻度副詞 *einmal* も, 少なくとも, 事象が「一回」起こった場合には, ともに真の値を返す点で共通することをふまえ, 意味最小限主義の立場における心態詞 *mal* の基本的意味（Grundbedeutung）を, 頻度副詞 *einmal* の意味から導くこととする。このことは, 当然, 時間副詞*(ein)mal* の意味を考慮しないというわけではない。4.3.3.の（148）の表, および（149b）で示したとおり, 語彙形成過程をふまえた場合, 時間副詞*(ein)mal* は, 頻度副詞 *einmal* と心態詞 *mal* のいわば橋渡しの役割を果たしており, 頻度副詞 *einmal* の意味から生じる含意を心態詞 *mal* の基本的意味とすることは, その基本的意味が,

時間副詞*(ein)mal* にも通用する意味であることを示している（後述の（218）を参照）。

では，頻度副詞 *einmal* の語彙的意味に基づく，「複数回でない」という含意はどのようにして生じるのであろうか。3.5.4.1.では，接続詞 *aber* を例に，Grice の理論における言語慣習的含意に基づいて，心態詞としての *aber* および接続詞としての *aber* の基本的意味を導いた。*but*, *therefore*, *even*, *yet*, *so* といった語群の意味を導くうえで，言語慣習的含意という概念が最適であると考えられるためである。しかし，頻度副詞 *einmal* の意味がもたらす含意は，言語慣習的含意ではなく，Grice の理論における「一般化された会話的含意」（=（104）の図を参照）に相当する。例えば，下記（207）の例を見てみる。

(207) John has three cows.（Levinson 1983: 115）

この文は，まず（208）を意味論的に含意（entailment）する。

(208) John は，乳牛を 1 頭か 2 頭は飼っている。（小泉 2001: 49）

同時に，（207）は，（209）を「一般化された会話的含意」として含意すると考えられる。

(209) John は，乳牛を 4 頭以上は飼っていない。（小泉 2001: 50）

このように，量や程度に関わる語によって生じる一般化された会話的含意の１つは，「尺度的含意」（scalar implicature）（Horn 1972）と呼ばれる（cf. 小泉 2001: 49; Levinson 1983, etc.）。このような含意は，Grice による量の格率（Maxim of Quantity）に依拠して導かれるもので，もし，John が 4 頭以上の乳牛を飼っていた場合，話し手は初めからそう言ったはずであるという解釈の結果生じる。このことを，頻度副詞 *einmal* に当てはめて考えてみると，4.3.2.で述べたとおり，頻度副詞では„ein“に強勢が置かれることで，「一回／一度」の語彙的意味を明示することになり，その結果として，「複数回でない」という一般化された会話的含意を排他的に導く。そこで，筆者は，この「複数回でない」というのを「非多発性」（Nicht-Repetitionalität）という性質的な意味で捉え，これまで，心態詞 *mal* に付随する３つの特性としてきたうちの１つが，

心態詞とその同音異義語に共通する基本的意味であるとみなす。ここで重要なことは，この基本的意味が含意であることによって，頻度副詞 *einmal* が語彙的意味として表わす「一回／一度」という意味の明示と区別される点にある。例えば，下記(210)は，いずれも不適切であると判断されるが，その要因は，意味論レベルと語用論レベルの違いにある。

(210) a. *Halt *EINmal* zehnmal meine Tasche!（一回十回私のかばんを持って）

b. # Halt *mal* zehnmal meine Tasche!（*mal* 十回私のかばんを持って）

c. *Halt *EINmal* immer meine Tasche!（一回常に私のかばんを持って）

d. # Halt *mal* immer meine Tasche!（*mal* 常に私のかばんを持って）

（* = 意味論的に不適切，# = 語用論的に不適切）

(210a)と(210c)が不適切であるのは，頻度副詞 *einmal* の語彙的意味が，同じく頻度副詞である *zehnmal* や *immer* の語彙的意味と共起しえないという点にある。それに対し，(210b)と(210d)の不適切性は，先の(206a)や(206b)で挙げたような，心態詞としての使用が表す非多発性(基本的意味)や非持続性といった意味的特性が，語彙的に多発性を表す頻度副詞 *zehnmal* や，持続性を表す頻度副詞 *immer* に支障をきたす点に見られる。このことは，下記(211a, b)と(211c, d)の比較において，(211a, c)は依然として完全に不適切であるのに対し，(211b, d)は問題なく容認可能になることから裏付けられよう。心態詞としての使用では，何より述語のアスペクト(完了相(perfektiv) vs. 未完了相(imperfektiv)／継続相(durativ))との兼ね合いが関係してくるのであるが，少なくとも(211b)や(211d)では，「十回『Ulm』と発音する(こと)」や「十回家の周りを走る(こと)」という事象の回数に対して，「非多発」という含意的な制限を加えているのであり，「一回」という明示的な制限を与えているのではないことが重要となる[80]。

[80] このことから，筆者は *mal* の場合，例えば，„Kannst du *mal* (= Abtönungspartikel) *éinmal* (= Frequenzadverb) bei mir vorbeikommen?“(一回私のところに立ち寄ってくれる)は統語的にも意味的にも容認可能であるとみなす。しかし，„Kannst du *mal* (= Abtönungspartikel) *mal* (= Temporaladverb) bei mir vorbeikommen?“は統語的に容認されないと考える。この点は，5.2.2.を参照。もちろん，„mal mal“と同音同形の語が重複する点で不自然であるというのも理由の１つである。

(211) a. *Sprich *EINmal* zehnmal "Ulm" aus!（一回十回「Ulm」と発音して）

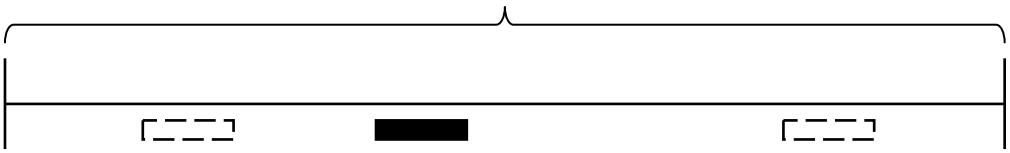
b. Sprich *mal* zehnmal "Ulm" aus!（*mal* 十回「Ulm」と発音して）

c. *Renn *EINmal* zehnmal ums Haus!（一回十回家の周りを走って）

d. Renn *mal* zehnmal ums Haus!（*mal* 十回家の周りを走って）

また，他の特性として考えられてきた，いわゆる「非持続性」（Nicht-Dauerhaftigkeit）や「非即時性」（Nicht-Sofortigkeit）は，基本的意味である「非多発性」からの派生であると考える。このことは，ある時間幅あるいはある回数を設定して考えてみるとわかりやすい。下記（212）の図で示すとおり，心態詞 *mal* の意味するところは，ある命題内容の実行の時間幅（黒塗枠）が，想定されたある持続的な時間幅との比較において，１つの「時点」として捉えられ，さらに，その想定された時間幅の枠内であれば，その「時点」は任意に位置づけられる（点線枠）ことにある。

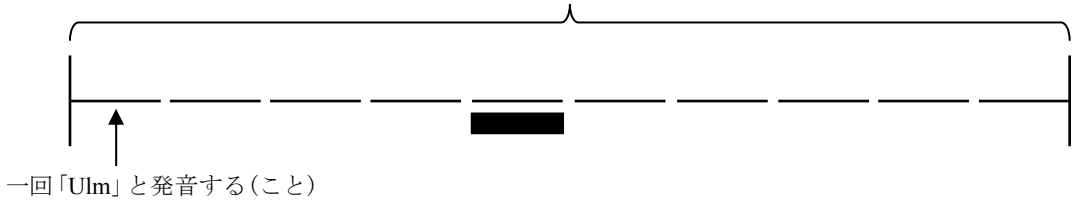
(212) ある要求（依頼）の実行に対して，聞き手が想定すると話し手が想定する時間幅／回数



具体例で述べると，例えば，„Halt meine Tasche!“（私のかばんを持って）では，「聞き手が話し手のかばんを持つ（こと）」という命題（ここでは，厳密には事象）が，聞き手によって，何度も生じうる，あるいは長時間にわたり生じうるものとして想定されると話し手が想定した場合，話し手は心態詞 *mal* を使用して（„Halt mal meine Tasche!“），その「非多発性」を含意し，そこから派生する形で，その持続性を制限すると考えられる。

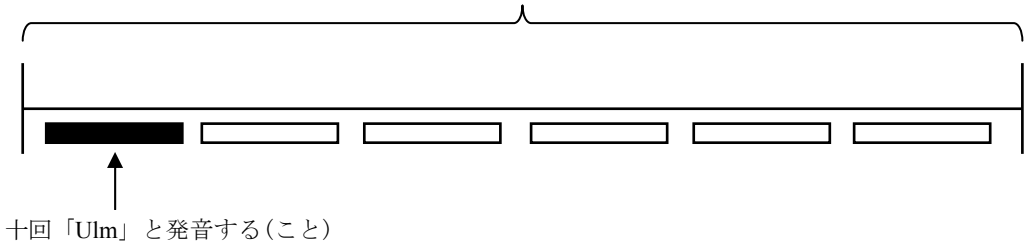
また，„Sprich zehmmal "Ulm" aus!“（十回「Ulm」と発音して）の場合，その要求の実行に対する想定された時間幅が，(213) のように，「一回『Ulm』と発音する（こと）」の集合（十回）として捉えられるのではないことに注意が必要である。

(213) ある要求（依頼）の実行に対して，聞き手が想定すると話し手が想定する時間幅／回数



(213)のような捉え方は頻度副詞 *einmal* の場合であり，先に述べた理由から，その意味解釈が不可能になる。心態詞としての使用では，下記(214)のように，聞き手によって，「十回『Ulm』と発音する(こと)」という作業が，多発しうるものとして想定されると話し手が想定した場合，心態詞 *mal* の使用で，その多発性に制限を加えるのである。

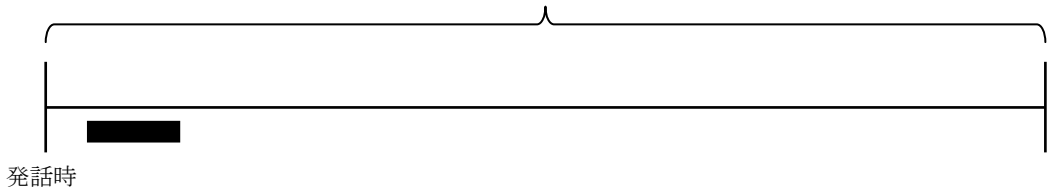
(214)　ある要求(依頼)の実行に対して，聞き手が想定すると話し手が想定する時間幅／回数



このように，上記(211)の例で，(211b, d)が全く問題をきたさないのは，「発音する」や「走る」という動詞のアスペクトが完了相であることに強く依存する。つまり，これらの述語では，その集合的な作業の回数が焦点となり，その多発性に制限をかけることが「緩和」につながる。一方，先の「かばんを持つ」場合には，「十回かばんを持つ(保持する)」という内容自体が状況的に滑稽であり，ゆえに，この際に重要視されるのは，„halten“(保持する／維持する)という動詞のアスペクト(継続相)に制限を与えることにある。そのため，(210b, d)では，内容的に(語用論的に)おかしいものの，分析的には許容可能ということなる。

では，„Komm mal sofort her!“(*mal* すぐに来なさい)に関する解釈の揺れはいかに説明できるだろうか。まず，(215)の図で考えてみる。

(215)　ある要求(依頼)の実行に対して，聞き手が想定すると話し手が想定する時間幅／回数

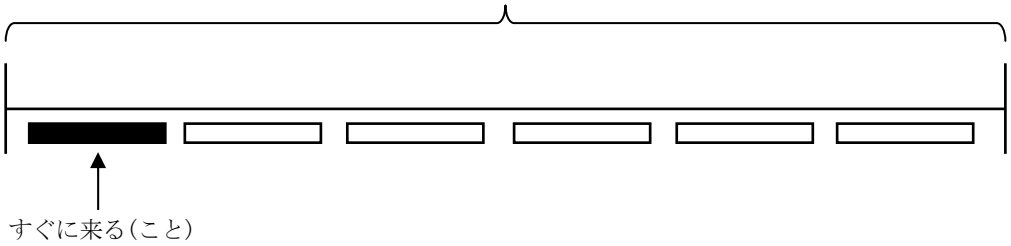


先の(212)で，「ある想定された時間幅の枠内であれば，その時間幅との比較において，ある命題内容の実行の時間幅は任意に位置づけられる」としたが，上図のように，例えばその時間幅

の左端を「発話時」として考えたうえで，たとえ任意であるからといって，要求の実行時点をその直後として捉えるならば，確かに，任意性（非即時性）と，„sofort“（即座に）という語彙的意味の間で矛盾が生じることになる。従って，この意味では，Franck（1980: 249）や Thurmair（1989: 185）の指摘は正しい。

しかし，少なくとも心態詞の研究者でない母語話者の見解としては，„Komm mal sofort her!“（*mal* すぐに来なさい）は，(215) のような解釈が当てはまらない。このことにも，これまでと同じく統一的な説明が可能である。つまり，下記 (216) のような解釈である。「すぐに来る（こと）」という行動が，多発するかもしれないという聞き手の想定を話し手が想定し，その回数を制限するのである。そして，このように考えた場合，心態詞 *mal* の非即時的な特性を仮定することはあまり意義がないように思われ，基本的意味としての「非多発性」と，そこから派生する「非持続性」という２つの特性が，心態詞 *mal* に付随する特性として最も重要な役目を担うと考えられる。

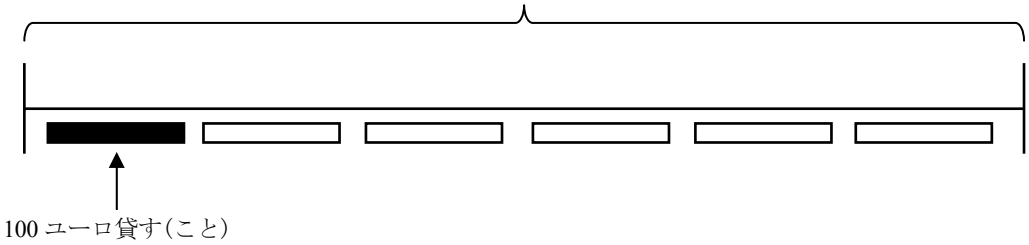
(216)　ある要求（依頼）の実行に対して，聞き手が想定すると話し手が想定する時間幅／回数



しかし，ここで一つ疑問が生まれる。心態詞 *mal* の基本的意味を「非多発性」に求め，動詞のアスペクトに従って，(214) や (216) のような解釈をあてがう場合，4.4.2.1. で見た (217)（= (162b)）のような発話での *mal* の使用も，(218) の解釈によって，本来は「緩和」として機能して然るべきではないかと考えられよう。

(217) Kannst du mir *mal* 100 Euro leihen?（*mal* 100 ユーロ貸してくれる？）

(218)　ある要求（依頼）の実行に対して，聞き手が想定すると話し手が想定する時間幅／回数



この疑問の答えは，まさに(218)の図が明確に示している。4.4.2.1.でも述べたとおり，そもそも「100ユーロといった比較的高い金額を貸す」という金銭的な命題内容自体，一般的にその絶対的な負担が重い。にもかかわらず，そのような命題内容の要求回数を非多発的であると含意することで，聞き手の心理的負担を軽減しようとする試みは，そもそも，そのような要求が多発的でありうると聞き手が想定すると話し手が想定していた段階で不具合が生じて当然である。平たくいえば，「たとえ100ユーロと高い金額であっても，こんな依頼は何度もしない，という態度でいけばきっと貸してくれるだろう」という計算が働いているのである。つまり，話し手は，「聞き手が 100 ユーロを貸すこと」を「些事」(beiläufig)とみなしているのであり，この態度が，ただでさえ絶対的な心理的負担の大きい依頼内容に，さらに否定的な拍車をかける(厚かましい印象を反映させる)― 聞き手が100ユーロという金額をはした金として捉えていない限りにおいて。このことから，心態詞 *mal* の基本的意味である「非多発性」と，その意味からの派生である「非持続性」とは別に，これらの特性からさらに派生する形で，語用論レベルにおける「些事性」(Beiläufigkeit)(cf. Bublitz 2003: 186)の含意をも考慮に入れる必要性が見えてくる。

次に，「非多発性」という基本的意味から転じる含意として，「事象(event)の回数に制限を加える」といった積極的な「態度／働きかけ」の派生を仮定してみる。つまり，「心態詞 *mal* の心的態度」への移行である。心態詞としての *mal* は，「非多発性」という基本的意味を携えて，そこからさらに「機能的な意味」としての心的態度を手続き的にコード化していると考えられる。つまり，不変化詞*(ein)mal* を伴う発話において，それが，心態詞としての使用環境を満たしており，実際に，話し手が心態詞としての使用を意図している場合，その際の *mal* は，聞き手が行う推論処理の仕方に対して，何らかの制約を課すとみなされる。この際，先の(205b)(= (219))に挙げた心態詞 *mal* の使用環境が，*mal* の心的態度と密接に関係する。

(219) = (205b) 心態詞 *mal* は，聞き手による「要求」の実行に対する負担の比重が比較的軽いと話し手がみなす場合に適切に使用される。

この(219)は，まさに「些事性」を指示しており，心態詞 *mal* を使用することは，その基本的意味である「非多発性」と，そこから派生する「非持続性」といった含意に依拠して，要求内容を些事とみなす話し手の態度が反映することを意味する。従って，心態詞 *mal* の心的態

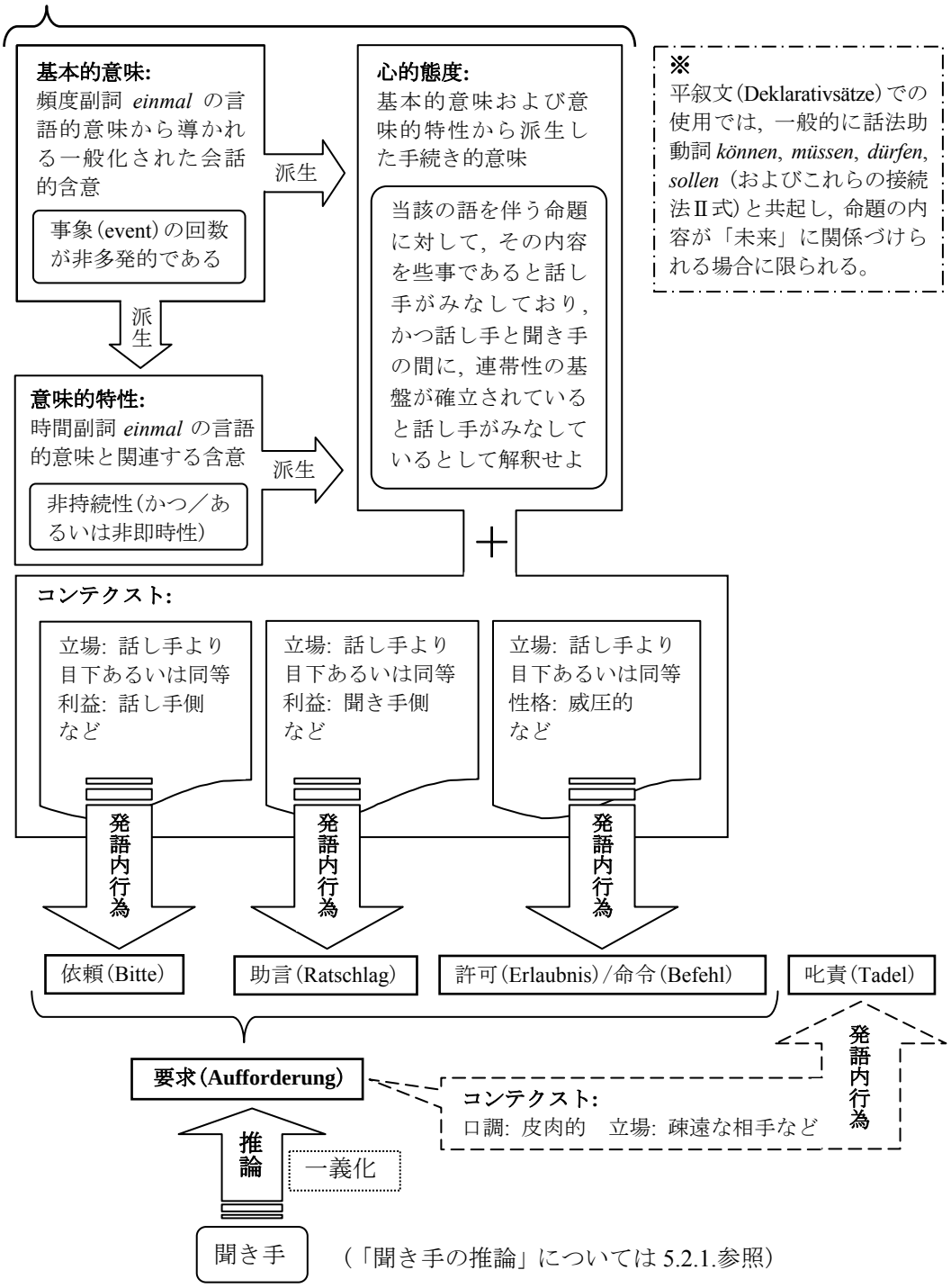
度は，下記(220)にまとめられよう。

(220) 当該の語を伴う命題に対して，その内容を些事であると話し手がみなしているとして解釈せよ。

しかし，(220)はまだ不十分である。4.4.以降の語用論的考察で明らかになったとおり，「要求」が遂行されうる文タイプであれば，いかなる場合にも心態詞 *mal* が適切に使用され，望まれた機能を発揮するというわけではない。聞き手が「ソト(目上の相手)」や「ヨソ(疎遠な相手)」の社会的立場にある場合には，「些事性」の含意との関連において，依頼発話で最も頻繁に使用されうる話法助動詞 *können* との共起文で心態詞 *mal* が使用されると，とりわけ「厚かましい(押し付けがましい)」印象をもたらし，かえって不丁寧な態度を示す。つまり，「些事性」を含意することで，依頼発話の「緩和」を図る心態詞 *mal* の使用が，語用論のレベルで不適切な効果を生むのである。また，このことは，„höflich“(丁寧な)という概念をネガティブ・ポライトネスの観点から捉える限りにおいては，聞き手が，「ウチ(友人)」の相手であっても同様の評価を得る。しかし，ポジティブ・ポライトネスー聞き手が「認められた」あるいは「仲間とみなされた」と感じるのを増やすコミュニケーション手段ーの観点から見直すと，心態詞 *mal* が，「ウチ」の相手に使用された場合の積極性がうかがえる。筆者は，この点に言及して，心態詞 *mal* に付随する「連帯性の指標」としての機能を導き出した。「連帯性」は，話し手と聞き手間における信頼性の基盤であり，両者が，互いに好意的であるという前提として定義づけられる。そして，話し手・聞き手相互にそのような関係を前提するということは，心態詞としての *mal* が，統語的に主語としての聞き手の存在／立場(特に Duz-Verhältnis)を含み込んでおり，「事象の回数制限」を意味する基本的意味が，命題の形成される前段階で作用するのに対し，心態詞 *mal* の機能的な意味が，命題の形成後に駆動することを示唆している。このことは，第 5 章で述べる心態詞 *mal* の移動の仮説を補強するものである。以上をふまえ，下記(221)に，最終的な心態詞 *mal* の心的態度をまとめ，(222)の図によって，心態詞 *mal* の全容を概観する。

(221) 当該の語を伴う命題に対して，その内容を些事であると話し手がみなしており，かつ話し手と聞き手の間に，連帯性の基盤が確立されていると話し手がみなしているとして解釈せよ。

(222) ［ ***mal*** ＋平叙文（Deklarativsätze）※/疑問文（Interrogativsätze）/ 命令文（Imperativsätze）［命題p］］



先に, *mal* の心的態度に関して,「連帯性」という概念との結びつきを述べ, この観点から,「疎遠な相手」や「目上の相手」に対する *mal* の不適切な用法に説明を与えたが, 実際, こ

の点に無知であることが原因で，母語話者同士の相互行為において不具合が生じるとはほとんど考えられない。つまり，本章で述べた *mal* の語用論的考察は，母語話者の言語的直観を覆すようなものではない。むしろ彼らの言語的直観に従って，理論的な説明を構築するに至ったのである。そこで，以下，本章の記述がどのような目的意識から生じたものであるかをあらためて記す。

本章で行った主に語用論的な分析は，日本におけるドイツ語教育の一端として，‘生きた’コミュニケーション能力の向上を目指すものである。序論でも述べたとおり，心態詞 *mal* は，ドイツ語の日常において，非常に頻繁に用いられる不変化詞の 1 つであり，この不変化詞を伴わずして，相手に何かを依頼したりすれば，概ね，「無愛想で素気なく，断定的な話し方とみなされる」(Busse 1992: 39) 可能性が高い。そのため，場面に応じて，この不変化詞を使用することは，非母語話者にとってドイツ人との言語コミュニケーション，ひいては人間関係を維持する上で不可欠であると考えられる (cf. Bublitz 2003: 184)。しかし，辞書や辞典，文法書，教科書においては，その形体上，心態詞 *mal* の詳細な記述はほとんどなされず，先行文献に従う形で，「要求を和らげ，丁寧な (höflich) 印象を与える」といった記述に留まっている。その結果，ドイツ語学習者が，会話参加者と自分の立場を考慮することなく，「依頼」とあらば *mal* を多用したとて仕方のないことであろう。たとえ，相手が「違和感」を感じ取ったとしても，本人は良かれと思って発話しているのである。そして，いわゆるコュニケーションの破綻は，こうした微細な誤解の積み重ねが引き起こすのである。「心態詞を学ぶことは，常に，ドイツ人との社交という形での学習でもある」(Busse 1992: 54) ということは，心態詞の意味と用法を分析し，その見直しを図ることが，常に，ドイツ人との社交を見直すきっかけにもなりうる。さらに言えば，ドイツ語における「心態詞」は，ドイツ人ならびにドイツ文化を知る手掛かりであるとさえ考えられるかもしれない。本研究では心態詞 *mal* を中心に扱ったが，筆者は，この意味において，今後の心態詞研究が，さらにその窓口を提供するものであると期待する。

4.5.3. 課題

本研究では，心態詞 *mal* の不適切な使用として，話法助動詞 *können* と共起した決定疑問文を一貫して扱ったわけであるが，これは，何度も述べるとおり，日常会話における依頼発話として最も頻繁に利用されうる発話形式であることに起因する。会話参加者の立場を変え

て，単純にその差を導き出す調査を行う際，もとより命令文という発話形式が不適切であると考えられたこともその理由である。さらに，平叙文に関しても，そもそも話し手が，「疎遠な相手」や「目上の相手」に「許可」を与えるような立場にない場合，そのような文タイプでの発話はやはり不自然かつ不丁寧であることから，調査の前段階ですでに除外した。しかし，*können* と共起し，かつ決定疑問文であるという条件を満たす形式には，(223)のような発話も十分に考えられよう。

(223) a. Kann ich *mal* das Fenster aufmachen?（窓を開けていい？）

b. Kann/Darf ich *mal* Ihren Kuli haben?（ボールペンをお借りしてよろしいですか）

このように，主語を一人称単数 *ich* にした場合，相手の立場に関わらず，*mal* の使用は全く問題とならない。母語話者にとっては，むしろ *mal* がない場合に不自然であると感じられるようである。特に(223b)からもうかがえるとおり，主語を一人称単数にすることによって，(平叙文＋二人称敬称の場合とは逆に)相手に「許可」を申し出る発話行為となるため(Kann ich ～? =Darf ich ～?)，「依頼」とはまた別であるという見解も一理あるかもしれないが，相手の所有物の貸与に関するような内容では，相手に，例えば「ボールペンを貸す」という行為を求めている点で，やはり「依頼」であることに違いはないであろう。ゆえに，発話行為タイプとしては，心態詞 *mal* の使用環境を満たすことになるが，この場合，なぜ「疎遠な相手」や「目上の相手」であっても，*mal* の使用が不適切にならないかは説明されない。「許可(依頼)」の読みは，話法助動詞 *können/dürfen* と一人称単数 *ich* の結びつきから生まれるのであり，この点に，心態詞 *mal* は関与していないからである。これらの発話における *mal* の影響を導くには，やはり *mal* の有無に注目した調査を実施すべきであろう。母語話者数名によれば，この場合の *mal* は，「単に韻律的な理由から添えられているにすぎない」という意見もあるが，当然，その信憑性を問うことは今後の課題とせざるをえない。

最後に，下記(224)の興味深い対話例によって，心態詞 *mal* の使用の困難さをあらためて提示しておきたい。(224)では，たとえ親しい間柄であっても，いや，十分に親しいと想定されうる間柄であっても，*mal* 単独の使用が「ポライトネス」の観点で問題視されることを示している。

(224) Situation: Ehefrau hat mittags zu ihrem Mann gesagt:

„Komm, hilf mal *abwaschen." Er tut es widerwillig…*

Ein Gespräch am gleichen Abend:

Er: *Du hast mir praktisch befohlen, abzuwaschen.*

Sie: *Ich hab nur gesagt: „Hilf mir bitte* mal *beim Abwaschen".*

Er: *„Bitte" hast du nicht gesagt.*

Sie: *Also gut, selbst, wenn ich gesagt habe: „Hilf* mal *beim Abwaschen", dann ist das noch lange kein Befehl.*

Er: *Mir klang das aber so.*

Sie: *Gut, also entschuldige, so war das nicht gemeint.* （Vorderwülbecke 1981: 156）

［状況: 正午に妻が夫に対して:

「来て, 洗い物を *mal* 手伝って。」 夫は, 嫌々ながら手伝う・・・

その夜の会話:

夫: 君は僕に, 実際には洗い物をするよう命令しただろ。

妻: 私はただ, 「洗い物を *mal* 手伝ってください」って言っただけよ。

夫: 「ください」とは言わなかったぞ。

妻: わかったわ。じゃぁたとえそうだとしても, もし「洗い物を *mal* 手伝って」と言ったからって, それでも命令ではないわ。

夫: でも僕にはそう聞こえたんだよ。

妻: わかったわ, ごめんなさい。そんな意味はなかったのよ。］

実際, (224)の妻による開始発話(二行目)は命令文であり, 洗い物をするよう「命令」したことに対する夫の不満は, この文形式に依拠するとも考えられる。しかし, 続いて, „bitte"(英: please)を使用したか否かに重きを置いているということは, やはりそのような文形式の問題ではない。そして, „bitte"を使用しなかったことを認めたうえで, 妻としては, „mal"による緩和策を講じたことを主張しているのである。相互コミュニケーションの成立には, 「親しい間柄」という概念自体, およびその共同体におけるさらなる立場上の関係, さらに, 身振りや表情, 音声的要素, ひいては個々人の性格といった細かい観点が絡み合うことは言うまでもない。ただ, これらの点をふまえたうえで, 少なくともこの対話文における„mal"という単語の存在が, 「話し手(妻)が想定しているほど, 聞き手(夫)にとって洗い物が些事でな

い」ことをうかがわせ, 「洗い物を嫌う夫が, 妻に難癖をつけている様子」を想像させるのは, まさにこの不変化詞の奥深さを物語っていると言えよう。

5. 心態詞の結合　－*mal* 分析の展望に代えて－

2.3.3.で簡単に触れたが，心態詞は，他の心態詞と互いに結合する場合がある。その際，それぞれの心態詞が結合可能であるかどうかは，必ず文タイプに依存するのであるが（Thurmair 1989, 1991; 本論 2.3.1.も参照），そのような生起制限をふまえたとしても，心態詞結合のパターンは驚くほど多く見られる。下記（225）に再録（= （50））したのは，心態詞結合の先駆的な研究者の一人である Thurmair（1989: 282）からの引用であるが，平叙文という文タイプを取り上げただけでも 24 種が観察される。

(225) = (50)　denn auch, denn wohl, doch einfach, eben einfach, halt eben, halt einfach, doch schon, *doch mal*, *einfach mal*, *doch ruhig*, *ruhig mal*, ja auch, ja eben, ja einfach, ja mal, ja schon, ja sowieso, ja wohl, doch sowieso, wohl auch, wohl sowieso, denn doch, doch wohl, doch nicht etwa
（斜体で示した結合は，他の手段，とりわけ話法の助動詞によって，要求の性質が与えられた場合に限られる）（ibid.）

また，「結合」（Kombination）[81]は，必ずしも２語から形成されるとは限らない。文タイプによっては，三語や四語から成る場合も認められ，「論文の表題」であるという点で，少々大袈裟であるにせよ，（226）のように５つの心態詞が結合して現れる場合も十分に可能である。

(226)　'Kombinieren Sie **doch nur ruhig auch mal** Modalpartikeln!'（Thurmair 1991: Titel）
（仮訳:「心態詞をただ単にちょっと結合してみてくださいよ」）

さらに，このような心態詞の結合は，ある特定の語順に従って並べられる。後述するが，例えば，（227a）は文法的であるが，心態詞 *ja* と *doch* を入れ替えた（227b）は非文となる。

[81] Bublitz（2003）では,「心態詞の結合」を„Partikelkollokation“（直訳: 不変化詞連語）という用語で扱っているが, Lemnitzer（2001）が指摘するとおり，それぞれの語が，文法性を維持した上で削除可能である場合の結合－合成的な（kompositionell）結合－と，いずれの語も分離することが不可能である場合の結合－複合語彙素（komplexes Lexem）－があり, Lemnitzer（2001）における„Kollokation“は前者の場合のみを指す。このような点をふまえ，本研究では，「合成的結合」と「複合語彙素」をまとめ，概して„Kombination“の意味で「結合」という語を用いることとする。

(227) a. Konrad ist *ja doch* verreist.（Konrad は旅行に出たよね）

b. *Konrad ist *doch ja* verreist.

本章では，心態詞 *mal* の結合形を例に，このような語順制限の原理を追求する。その際，筆者による心態詞 *mal* の統語論的・意味論的な仮説を提示し，主に心態詞 *ja*, *denn*, *wohl* との結合形を取り上げて，その仮説の有効性を検証する。それにより，「構造と意味のインターフェース」という大きなテーマのもとで，心態詞 *mal* が本来的に示す多義的な振舞いを導き出すことが主な目的である。ここで述べる *mal* の仮説は，まだ経験的な分析に基づくものではなく，筆者独自の理論的な考察にすぎない。従って，結論はあくまでも暫定的なものである。しかし，これまでほとんど扱われてこなかった心態詞 *mal* の統語論的・意味論的な構造を，詳細に考察しようとする試み自体が，今後さらに追及すべき *mal* 分析のこれからの重要な課題であると考える。本章における考察が足がかりとなって，最終的には，心態詞研究全体に対する今後の展望を提供するものであると期待する。

次節では，まず先行文献の記述を交えて，心態詞結合に関する概要を述べる。

5.1. 概要

心態詞に関する文献は豊富にある。しかし，その「結合」に関して詳述しているものはほとんど見当たらない[82]。初期で最も代表的なものとしては，やはり Thurmair（1989）が挙げられよう。„Modalpartikeln und ihre Kombination“（心態詞とその結合）という表題のこの論文では，*aber*, *auch*, *bloß*, *denn*, *doch*, *eben*, *eigentlich*, *einfach*, *etwa*, *halt*, *ja*, *mal*, *nur*, *ruhig*, *schon*, *vielleicht*, *wohl* の„'anerkannte' Modalpartikeln“（「承認された」心態詞）（ibid.: 294）と並び，追加的に *eh*, *sowieso*, *nicht*, *mir* が取り扱われ，個々の不変化詞の特徴と，それぞれが結合した場合に見られうる規則的な特性が記述される。その際，統語的な観点に基づき，（二語からなる結合の場合の）全 171 の結合可能性のうち 45 種が非文法的であるとして排除される。さらに，意味的な観点を含め，実際の日常会話において比較的頻繁に用いられる結合を約 50 種とする。そのうえで，Thurmair（1989）の主張は，「心態詞が結合した場合の意味は，個々の

[82] 心的態度を表す不変化詞に関する独英対照を行う Bublitz（1978: 43）では，「紙幅の関係上，個々の語の機能を分析するに留め，結合形および結合性の制限に関しては扱わない」と明示する。このことは，心態詞結合というテーマが，いかに幅広く，奥深いものであるかを示唆している。

心態詞の意味の総和である」と捉えることにある。

Lemnitzer (2001) は, Thurmair (1989) を参照して, コーパス (Frankfurter Allgemeine Zeitung (フランクフルター・アルゲマイネ紙) 1990-1992; 13 年間分の Tageszeitung (日報)) の枠内で頻繁に現れた心態詞結合に焦点を絞り, 個々の心態詞の意味が, 結合した場合にはいかに反映されるかを経験的に考察している。ここでの関心は, 心態詞とみなされるそれぞれの語が, 文法性を維持した上で削除可能である場合の結合－合成的な (kompositionell) 結合－であるか, いずれの語も分離することが不可能である場合の結合－複合語彙素 (komplexes Lexem) －であるかを分析し, Thurmair (1989) における記述の裏付けを行うことにある。結論としては, 上記の枠組みに限ってではあるものの, Thurmair (1989) の主張は常に維持されるわけではなく, 明確な連語 (Kollokation) として捉えられる場合と, 曖昧な複合語彙素とみなされる場合が考えられるため, いまだ問題の多い分析であると述べられる。

また, Thurmair (1991) では, 心態詞結合における３つの一般的な規則が掲げられる。１つは, 文タイプに関する制限的な規則であり, (228) のようにまとめられる。

(228) *Rule 1*: A modal particle A is compatible with a modal particle B if and only if A appears in at least one sentence mood alone in which B also appears alone. (Thurmair 1991: 21)

例えば, 心態詞 A が, 文タイプ Z においてのみ現れ, 心態詞 B が文タイプ Y (Z≠Y) においてのみ現れる場合, これらの心態詞が共起することはない。一方, 心態詞 A が文タイプ X と Y において現れ, 心態詞 B が文タイプ Y と Z において現れる場合, 文タイプ Y において共起する可能性がある。例えば下記 (229) がその好例である。心態詞 *denn* は決定疑問文および *W*-疑問文で現れ, *etwa* は決定疑問文でのみ現れる。従って, 両者は決定疑問文においてのみ共起する。

(229) Diesen ganzen Wust von Daten! Willst du das *denn etwa* analysieren? (Thurmair 1989: 237)
(この山積みのデータを！ まさかこれを分析するつもりなのかい？)

下記 (230) は, ２つ目の規則である。

(230) *Rule 2*: A combination of modal particle A with modal particle B is only possible if the meaning of A is compatible with the meaning of B.（Thurmair 1991: 25）

ここで述べられている'meaning'とは，個々の心態詞が表す心的態度，つまり含意のことを指す（3.5.4.を参照）。例えば，(231）における *ja auch* の結合では，それぞれの含意が競合しないために結合可能となる。

(231) A: Mensch, die kann vielleicht gut singen!（おお，彼女はなんて歌がうまいんだ！）
B: Ja, die nimmt ***ja auch*** Gesangsstunden.
（だって（君も知ってのとおり）彼女は歌のレッスンに通ってるじゃないか）

Thurmair（1991: 26）によれば，*ja auch*-結合は，まさに２つの意味の総和であるとされる: A の先行発話の原因は予期できたことであると指示し，およびその理由を挙げ（＝*auch*），さらに，その理由を聞き手も知っているはずだということを表している（＝*ja*）。

一方，たとえ同じ文タイプ規則に従っていても，聞き手の否定的な返答を想定する *etwa* と，肯定的な返答を想定する *auch* は，それぞれの意味において競合するために共起が不可能となる（cf. Thurmair 1991: 27）。

(232) a. Ist das Kleid ***etwa*** durchsichtig?（この服はまさか透明なの？）
b. Ist das Kleid ***auch*** durchsichtig?（この服は本当に透明なの？）
c. *Ist das Kleid ***etwa*** $_{MP}$ ***auch*** $_{MP}$ durchsichtig?

「心態詞が２つ以上使われる場合にはある一定の順序に従って並べられる」（井口 2000: 142）。岩崎・池上・Hundsnurscher（1994: 606）では，「例えば，*ja doch*, *ja schon*, *aber ja*, *doch einfach*, *doch nur*, *ja wohl*, *wohl schon* の順番のみ可能である」とされる。Thurmair（1991）における３つ目の規則は，この語順に関するものである。

(233) *Rule 3*: The sequence of modal particles in combination is strictly regulated.
（Thurmair 1991: 29）

(234) a. Du könntest *ja ruhig* die Sachen wegräumen.（Thurmair 1991: 29）

（さっさと物を片づけたらどう？）

b. Was wird's *denn auch schon* groß sein?（ibid.）

（これは大したことではないだろう）

c. Da hättest du *ja doch wohl mal* kurz vorbeischauen können!（ibid.）

（その時，ちょっとぐらい立ち寄ることだってできただろうに！）

d. Du könntest **ruhig ja* die Sachen wegräumen.（ibid.）

e. Die könnten **wohl ja auch*/**wohl auch ja* ihr Auto richten.（ibid.）

f. Was bringt Ihnen das **schon denn*?（ibid.）

Thurmair（1991）は，(234a-f)の例に基づいて上記(233)の規則を導き，このような語順規則が導かれる理由として５つの要因を挙げる。しかし，ここでなされる説明は，そもそも(234)のような記述例に従って，５つの推論的な主張を行っているにすぎず，例えば，そのうちの３つ目の主張である下記(235)において，直接，発話行為タイプを決定づけるような心態詞が，なぜ結合において最後尾に位置することになるのか，また４つ目の主張である(236)では，緩和や強調の機能をもつ心態詞が，なぜ常に最後尾に位置することになるのかという説明は全くなされない。

(235) Those modal particles through which the illocutionary type of the utterance is clearly determined occur in final position in a combination: this concerns the word order behavior of *mal*, *ruhig*, accentuated *JA*, as well as *schon* and *auch* (in WH).（Thurmair 1991: 30）

(236) Those modal particles whose function lies in weakening or strengthening the illocution always occur in final position in a combination. This explains why the weakning *mal* and the strengthening *nur*, *bloß* and (accentuated) *JA* always occur in final position.（ibid.: 31）

Thurmair（1991: 31）では，さらにもう１つ別の説明が提案される。(237)に示すとおり，結合

順序を大まかなグループに分け，心態詞以外の文法的な機能（同音異義語）が接続詞（conjunctions）（*aber*, *denn*, *doch*）や談話詞（discourse particles）（*ja*, *doch*, *eben*）である心態詞は，結合の開始位置に現れ，それに対して，副詞（adverbs）（*einfach*, *schon*, *mal*）は最後尾に現れるとする。同様に，とりたて詞（focus particles）（*auch*, *nur*, *bloß*）は比較的最後尾に近い位置，文副詞（sentence adverbs）（*wohl*, *eigentlich*, *vielleicht*）は，おおよそ文中に置かれるとされる。

(237)

ja				*wohl*		*auch*		*einfach*
denn	〉	*halt*	〉	*eigentlich*	〉	*nur*	〉	*ruhig*
doch		*eben*		*vielleicht*		*bloß*		*schon*
aber						*etwa*		*mal*

この説明も興味深いものではあるが，Thurmair 自身が思いつき的（speculative）であると示唆するとおり，とりわけ，「文副詞＞とりたて詞＞副詞」の語順の説明が不十分であろう。さらに，こちらも Thurmair 自身指摘することであるが，同じグループ内の心態詞が結合した場合の語順については考慮されていない。

Abraham（1991c, 2000, 2005[2]）でも，心態詞結合の考察がなされる。その中で，「文法化」（grammaticalization）の現象に関心を置く Abraham（2000: 322）では，「文法化の研究において，心態詞は理想的な分野である」とされ，“monogenetic”の立場にたって，同音異義語（homonyms）の意味的な機能と統語的な振舞いが，心態詞の現れに反映されると捉えられる（cf. ibid.: 326）。主に命令表現（imperative expressions）に注目するこの文献の第 5 節では，命令形（imperative forms）における心態詞の語順が考察され，ここでも文タイプによる制限と発話行為による制限に言及される。下記（238）は，心態詞結合に関する制限をまとめたものである。

(238) 1. MPs [= modal particles] can be combined only if they occur in identical clause type contexts;
2. the speaker thereby reinforces his illocutionary intention;
3. the point of reference of an MP is of importance: MPs referring to a presently actual situation cannot co-occur with an MP which refers back to a previous point of time;
4. the allo-categorial forms of MP lexical elements (their “homonyms”) influence the linear behavior of MPs. （Abraham 2000: 345）

本論の第 2 章では，「心態詞の結合」は語用論的特徴の 1 つであると述べたが（実際，発話行為タイプによる制限は語用論的な観点に基づく），以上の先行研究からすでにわかるとおり，その原理は，主に統語論的・意味論的な観点から説明される。

意味最小限主義の立場をとる代表的な研究者である Doherty（1985）は，心態詞の意味を記述したうえで，それに基づく心態詞結合の可能な分析を行う。2.3.3.で述べたとおり，Doherty（1985）の主な関心は，心態詞の解釈に際して，言語的・非言語的な貢献度を厳密に区別することにあり，その主張の 1 つは，心態詞の意味が認識的な態度（epistemische Einstellung）を表現するとみなす点にある。ここでの認識的な態度表現とは，命題が関係する事態の成立・非成立に関する話し手の態度の表現を指す。また，文の意味は，語彙的・統語的・音韻的表現の部分からステップごとに構築され，文全体の意味は，その部分の表現の基本意味の結合から成る。この際，文の文字通りの意味と，表現によって言語慣習的に含意される意味，さらに，その表現が前提とする意味というレベルが区別される（cf. 吉田 1987: 197）。

この枠組みで，言語表現の態度をみてみると，例えば（239a-c）は，それぞれ（239a'-c'）のように表わされることになる。以下, Doherty（1985）に関する吉田（1987）の記述を参照する。

(239) a. Peter ist an der Uni.（Peter は大学にいる）

a'. Ass (pos_s (p))

b. Peter ist *nicht* an der Uni.（Peter は大学にいない）

b'. Ass (neg_s (p))

c. Peter ist *vermutlich* an der Uni.（Peter は大学にいるだろう）

c'. Ass ($VERMUTLICH_s$ (p))　　（態度の担い手は subscript で表す）

（239a'）では，命題 p（Peter ist an der Uni）に対して，肯定の態度 pos が向けられており，その態度の担い手が話し手 s であると示される（実際の話し手ではなく，文の態度の担い手: 下記疑問文の場合を参照）。また，（239a）は，平叙文であることから，文の態度は Ass（= assertion）で表わされることになる。同様に，（239b'）では否定の態度 neg が向けられており，（239c'）で

は，話し手 s と，命題 p に関する推測 VERMUTLICH (p)の間に判断＝確認 Ass の関係が成り立つことが表されている。

また，下記(240)のような疑問文では，文の態度は確認されないため *nicht-Ass* と表され，態度の担い手も不特定 *x*(= man)となる。さらに，否定疑問文であることから，否定が疑問の対象となるため，文字通りの否定と逆の肯定の態度が，話し手 s によって含意される。

(240) Ist Konrad nicht verreist? (Doherty 1985: 21ff.) (Konrad は旅行中じゃないの？)

nicht-Ass (neg_x (q)) & IM (pos_s (q)) (IM = implicate)

このようにして, Doherty (1985)では，命題 p の外側の階層が，事態に対する態度の範疇 E (= Einstellung)と, *E* に対する判断の範疇 EM (= Einstellungsmodus)に細分化され，文は，文の形の *EM* と文の形でない *E* を少なくとも 1 つ持つ。そして，*EM* は平叙文や疑問文といった統語形式のほかに，文イントネーションも含むと考えられ，平叙文であっても疑問音調の場合(= 2 次疑問)，文の態度は一時的に Ass' (潜在的判断)で表わされることになる(判断が確定されていないという意味でダッシュが付けられる)。つまり，平叙文の法で潜在的に主張された態度 Ass' (E_σ (p))(σ は態度の担い手の変項)は，平叙イントネーションで話し手によって確認される: Ass (E_s (p))。疑問音調では確認されない: nicht-Ass (E_s (p))。この際，話し手 s は逆の態度を含意する: IM (nicht-E_s (p))。例えば下記(241)のような 2 次疑問では，「Konrad は旅行中である」という肯定的な態度 E を *x*(= nicht-s)が担っており，そのことを確認しない。このとき，「Konrad は旅行中でない」という態度 nicht-E の含意を話し手 s が担う。

(241) Konrad ist verreist? (Doherty 1985: 21) (Konrad は旅行中なの？)

Ass' (pos_x (p)) & IM (nicht-E_s (p))

以上をふまえると, Doherty (1985: 62)で述べられるとおり，文の態度意味の基本構造は *EM*－*E*－*p* (= 態度の法－態度－命題)になるわけであるが，この構造において，「心態詞(Doherty は„Einstellungspartikel“と呼ぶ)は，態度の法 EM と同じく，態度に対する話し手の判断を確定する」(Doherty 1985: 65)ことになる。この立場から, Doherty は, *doch*, *etwa*, *denn*,

ja, *wohl* を態度詞（Einstellungspartikel）とみなし，これらの態度詞によって，話し手は，事態のあり方に関係する認識的な態度を表現する。

例えば，心態詞 *doch* は，平叙文にも 2 次疑問にも現れ，その作用域にある態度 E の潜在的な確認を話し手 s に関係づける。また, *doch*/*DOCH*（大文字は強勢あり）の用法は，３つのタイプ（*Erinnern-doch* , *Trotzdem-DOCH* , *Widerspruch-DOCH*）に大別されると考えられるのであるが（cf. Ikoma 2007: 84ff.），そのいずれの場合でも, *doch* の使用は文字通りの態度と対極の態度の対立が示される。とはいえ, *doch* は，文で表現された態度を常に話し手に関係づけるため，対立の態度は含意され，その担い手は不特定 x で表わされる。従って，*doch* の態度意味は（242）のようになる。例として，（243a）が平叙イントネーションで発話された場合，（243b）で表すことができる。

(242) ***doch***: Ass' (E_s (p)) & IM (neg_x (p))（Doherty 1985: 71）

(243) a. Peter ist *doch* krank.（だって Peter は病気じゃないか）

b. Ass (pos_s (p)) & IM (neg_x (p))

一方，心態詞 *ja* は，*doch* と異なり，疑問文（2 次疑問も含む）と両立することはない。従って, *ja* は，その作用域にある態度 E を話し手のものとして主張的に確定する。さらに, *ja* も文字通りの態度と並んで，不特定の担い手の態度を含意するのであるが，こちらも *doch* と異なり，その含意された態度は，文字通りの態度と同じものとなる。この *ja* による含意は，一般常識や話し手・聞き手間における既知情報を指し，これと *ja* が用いられた文の一致が表される。

(244) ***ja***: Ass (E_s (p)) & IM (E_x (p))

(245) a. Peter ist *ja* krank.（だって Peter は病気じゃないか）

b. Ass (pos_s (p)) & IM (pos_x (p))

最後に，*wohl* の分析も述べるが，*wohl* に関しては，5.1.1.2.以降でより詳細な記述を行う。

wohl は, *doch* 同様, 平叙文や 2 次疑問と両立し, 話し手を事態に対する態度に関係づける。ただし, *wohl* (p)の場合, *p* の真は導かれず, *wohl* によって話し手に関係づけられる態度は不透明(opak)である。そのため, *wohl* が用いられた文では, 常に肯定あるいは否定の態度が前提される。その態度を α で表わすと, α は E の値で特定され, これと話し手の推測の態度 VERMUTUNG が関係づけられる。

(246) ***wohl***: Pres (α (p)) & Ass' (VERMUTUNG$_s$ (α = E))　(Pres = presupposition)

(247) a. Peter ist *wohl* krank.(たぶん Peter は病気だろう)

b. Pres (pos (p)) & Ass (VERMUTUNG$_s$ (p))

結果として, 2.3.3.で触れた *ja*, *doch*, *wohl* の結合では, 下記(248)(=(51a-f)の再録)のような例文が挙げられたうえで, (249)(=(52)の再録)の解釈により, その語順制限の原理が説明される(cf. Doherty 1985: 83)。ここから, 心態詞の結合における語順規則として, 「主張の強さが異なる心態詞の結合では, その強さ(assertive Stärke)が弱いものを, より強いものの下位に置くことが要求される」(ibid.)(弱いものが右に来る)ということが仮定される。

(248) a. Konrad ist *ja doch* verreist.(Konrad は旅行に出たよね)

b. *Konrad ist *doch ja* verreist.

c. Konrad ist *ja wohl* verreist.(Konrad は旅行に出たのだろうね)

d. *Konrad ist *wohl ja* verreist.

e. Konrad ist *doch wohl* verreist.(Konrad は旅行に出たのだろうよ)

f. *Konrad ist *wohl doch* verreist.(ibid.)[83]

(249) Mit „ja“ ist der Sprecher auf eine assertive Haltung zu der im Skopus der Partikel stehenden Einstellung festgelegt; mit „doch“ ist der Sprecher aber nur auf die im Skopus der Partikel stehende Einstellung festgelegt; mit „wohl“ ist der Sprecher sogar nur noch auf eine opaque Einstellung zu der im Skopus der Partikel stehenden Einstellung festgelegt.

[83] 脚注 20 を参照。

［「ja」によって，話し手は，この不変化詞の作用域にある心的態度に対して，断定的な態度を確定する；しかし，「doch」によっては，この不変化詞の作用域にある心的態度しか確定しない；さらに，「wohl」によっては，この不変化詞の作用域にある態度に対して，曖昧な心的態度を確定するにすぎない］

態度意味を結合した場合における文の意味の解釈順序は，基本的に統語論的な配列とは逆に下（右）から上（左）へと進む（bottom-up）。そこで，例えば上記（248a）のような *ja* と *doch* の結合では，最終的に（250）の解釈が得られることになる。つまり，*doch* の態度意味のうち，含意の部分だけが残る。

(250) Ass (pos_s (p)) & IM (neg_x (p) & pos_y (p))

（248a）では，「Konrad は旅行中である（p）」という肯定の態度 pos が話し手により確証され，「Konrad は旅行中でない（¬p）」の態度 neg が不特定の担い手により含意され，さらに別の不特定の者による「Konrad は旅行中である（p）」という態度 pos も含意される。また，（248b）のように *ja* と *doch* の入れ替えが不可能であることは，その主張の仕方の強さに依存する。*doch* は，作用域の態度の潜在的確認 Ass' (E_s (p))であるのに対し，*ja* は，作用域の態度の確定的判断 Ass (E_s (p))である。従って，下（右）から上（左）への合成（Komposition）による意味解釈に基づき，*ja* を先に pos_x (p)に適用すると，その時点で pos_x (p)が確定されてしまい，その次に潜在的確認を表す *doch* の態度を適用させることができなくなる。

以上，先行研究に従い，心態詞結合に関する簡単な概要を述べたが，2.3.3.で示唆したとおり，このような心態詞結合の語順制限に関しては，いまだ完全には研究されていないのが現状である（cf. Helbig 1994[3]: 75）。分析として非常に詳細である Doherty（1985）においても，そもそも心態詞を，命題に対して認識的な態度を表す態度詞として扱い，そのための考察に最適であると考えられる *doch*, *etwa*, *denn*, *ja*, *wohl* を取り上げて説明することに限定されてしまっていて，例えば，本研究のテーマである心態詞 *mal* に関しては言及されない。そこで，まず次節では，上記（248c, d）のような *ja wohl*-結合に関する最近の分析を参照し，その分析に従って，心態詞 *mal* の結合に関しても統一的な分析を行う。

5.1.1. 心態詞 *ja* と *wohl* の結合

ここでは，主に Zimmermann（2005a, b）における *ja* と *wohl* の結合に関する考察を取り上げたい。本来, Zimmermann（2004a, b）の分析対象は *wohl* に絞られ,（後述するが）談話詞としての *wohl* を„Satztypmodifikator“（文タイプ修飾語）とみなす主張が論の中心であるが，そこで展開される *wohl* の分析およびその *ja* との結合に関する示唆は，今後の心態詞研究に対して，非常に興味深いアプローチを提供するものである。というのも，心態詞 *ja* と *wohl* の結合では,（251a-c）に挙げるとおり［ja wohl］の語順となり,（251a'）＝（248d）のように［wohl ja］の語順では非文となることは先に述べたが, Zimmermann（2004a, b）は，このような心態詞の語順が，どのような意味的要因によって決定づけられているかという疑問に, Doherty（1985）とは異なる見解によって，１つの答えを提示しているからである。

(251) a. Konrad ist *ja wohl* verreist.（Doherty 1985: 83）
（Konrad は旅行に出たのだろうね）
a'. *Konrad ist *wohl ja* verreist.（ibid.）
b. Das darf *ja wohl* nicht wahr sein.（Thurmair 1989: 211）
（それはたぶん本当ではありえないだろうね）
c. Heute ist *ja wohl* Müllers letzter Arbeitstag.（Zimmermann 2004b: 565）
（今日は，たぶん Müller さんの退職日だね）

5.1.1.1. 心態詞 *ja* の意味と機能

そこで，以下ではまず，心態詞としての *ja* の意味に関して簡単にまとめる。本研究では（252）に示す田中（2001）を採用し, Kratzer（1999）に従い，一般に「同意の *ja*」や「確認の *ja*」と呼ばれる用法で扱うこととする（=（253））。

(252) 命題の真実性に対する特定の可能性の高さを表さず，命題が事実であることに疑い・議論の余地なし，と断定する話し手の主観的な心的態度を表す。（田中 2001: 242）

(253) [[*ja(α)*]]:

ja α is appropriate in a context c if the proposition expressed by α in c is a fact of w_c which – for all the speaker knows – might already be known to the addressee.（Kratzer 1999: 1）

a. Webster schläft ja.

b. Descriptive meaning: λs(sleep(Webster)(s)) = p

c. Expressive meaning contributed by *ja* (roughly):

λs(p(w_s) & might(s)(λs'(know(s')(p)(ιx(addressee(s)(x)))))) (ibid.: 4)

(253)の妥当性は，例えば，下記(254)の例で示される。(254)では，質問者である Webster は，「Austin が誰と結婚したか」を知らない(知らないからこそ質問している)。にもかかわらず，返答者の Spencer が，心態詞 *ja* を伴って発話することはありえない。

(254) Webster asks Spencer: "Who did Austin marry?"

Spencer: *Austin hat **ja** Ashley geheiratet.

Austin has *ja* Ashley married （Kratzer 1999: 2）

また，語順というテーマを扱う上で必須要素となる作用域に関しては，Zimmermann（2004a）を参照する。2.3.2.1.ですでに述べたことであるが，1970 年代において，心態詞は「発話行為指標／発語内指標」（Sprechaktindikatoren/illokutive Indikatoren）とみなされ（Wunderlich 1976; Helbig 1977, etc.），それぞれの心態詞が，それぞれの発語内行為と 1 対 1 の関係にあると考えられていた。しかし，例えば Wunderlich（1976: 137）自身も訂正を加えることであるが，「不変化詞は文の他の部分や文の形式的特性と共にしか機能を発揮しない」のであり，下記(255)の *doch* の例からもわかるとおり，それぞれの発語内行為の解釈は，文脈などの要素に依存する。

(255) a. **doch$_1$**: 確認の表現（相手に同意を求める）

Er arbeitet *doch* fleißig.（*nicht wahr?*）

b. **doch$_2$**: 既知のこと，忘れたことなどを想起させることで強めを表す。

Wir müssen *doch* morgen nach Berlin.（*Ich hatte es ganz vergessen.*）

a'. Er arbeitet *doch* fleißig.（後続発話として）Ich hatte es ganz vergessen. = **doch$_2$**

（cf. 吉田 1987: 194）

そこで，主に Jacobs（1991）をはじめとする，現代の意味論的な心態詞研究では，心態詞は「発話行為オペレータ」を修飾するといった見解がなされるようになり，Zimmermann（2004a）でも，この傾向に沿って，*expressive meaning* を表す *ja* を，„Sprechaktmodifikatoren/ Illokutionstypmodifikatoren“（modifiers of the speech act operator）（発話行為オペレータ修飾語／発話行為タイプ修飾語）であると捉える（cf. also Gornik-Gerhardt 1981; Lindner 1991; Ickler 1994; Kratzer 1999; von Fintel/Latridou 2002）。この考え方によれば，平叙文（Deklarativsätze）でしか現れない心態詞 *ja* は，発話行為オペレータ（断定オペレータ）である"ASSERT"を修飾すると解される（Zimmermann 2004a: 284）。ここで，「発話行為オペレータ修飾語」を一言でまとめるならば，発話行為オペレータである"ASSERT"や"?"と並行する形で[84]，文に内在する発話行為を修飾して，発話行為を強調したり，限定したりする役目を担うものと捉えられる。この際，当然「発話行為オペレータ」に関する具体的な説明も求められるが，管見では，その正確な定義は見当たらない。しかし，後述する *wohl* の分析を参照する限りにおいて，発話行為オペレータとは，「直接統語構造には反映されず，意味的な素性である文タイプ素性と密接に関連する統語論と意味論の接点をなす要素であり，さらには，最終的な発話行為の決定に関与する点で，意味論と語用論の接点をなす要素でもある」と捉えることができる。心態詞 *ja* を例に，この点を見てみたい。

例えば，(256) に関する Zimmermann（2004a）の分析では，*ja* は聞き手との共有知識（Common Ground）の中に付加価値（Mehrwert）としての意味要素 α を追加するとされ，「主張」（Assertion）の発話行為に対し，「聞き手との共有知識の構築」という態度を付与することになる。それによって，「主張」の度合いを強調すると考えられる。

(256) a. Du hast *ja* ein Loch im Pullover.

b. ≈ < Hörer hat _ ein Loch im Pullover; *der Sprecher erwartet, dass der Hörer wissen sollte, dass p* >

（cf. Zimmermann 2004a: 284）

[84] 「断定／主張のオペレータ」の考え方は，元来 Frege に遡る（cf. 黒田・野本 2006^2: 33ff.）。そこでは，"⊢"という記号が用いられている。

上で述べた「意味要素 α の追加」という考え方は,「含意のトリガー要素」(elements triggering implicatures)(Zimmermann 2004b: 552)と考えられる感情表現(Expressiva)(例: verdammt), 挿入句(Parenthesen)(例: wie ich behaupte), 含意を引起す不変化詞(implikaturauslösende Partikeln)(例: auch)の分析に依拠するものである。例えば,(257a)における *verdammt* や(257b)の *auch* では, Grosz (2005)や Zimmermann (2004)が記すとおり, それぞれに並行する話し手のもう 1 つの意図が慣習的に含意(konventionelle Implikaturen)される。(257a)の例では, 感情表現である形容詞 *verdammt* を用いて, „Herbert sagt, dass sein Hund, den ich nicht leiden kann, zweimal am Tag gefüttert werden sollte."(Herbert は, 私が我慢ならないと感じる彼の犬が, 一日に二度餌を食べると言った)のように関係文で表すことができることからも, そのような含意が反映することは明白であろう。

(257) a. Herbert sagt, dass sein *verdammter* Hund zweimal am Tag gefüttert werden sollte.

Herbert says that his *damned* dog twice a day fed be should

≈ < Herbert sagt, dass sein _ Hund zweimal am Tag gefüttert werden sollte; *Sprecher mag Herberts Hund nicht*>

< Herbert says that his _ dog should be fed twice a day; t*he speaker does not like Herbert's dog*> (cf. Grosz 2005: 181)

b. Der Kapitän weiß, dass der Smutje *auch* betrunken war.

the captain knows that the cook *also* drunk was

≈ < Der Kapitän weiß, dass der Smutje _ betrunken war; *jemand anders war betrunken*>

< The captain knows that the cook _ was drunk; *somebody else was drunk* >

(Zimmermann 2004a: 265)

つまり, 下記(258)に示すとおり, 含意のトリガー要素 α を含んだ文の意味は, 命題 p から *α* を除いた意味と *α* の意味の和から成ると考えられる。

(258) [[[$_p$…α…]]] =<[[p - α]]; [[α]]>[85]

asserted implicated meaning（cf. Zimmermann 2004a: 267, 2004b: 554）

さらに，これらの文で共通するのは，*α* を除いた意味，つまり命題部分の真偽判断は問題とされない点である。以上を心態詞 *ja* の分析に応用すると，例えば(259a)の文は，(259b)や(259b')のように表わされることになり(b と b'は同じ内容を示している)，この際，*ja* の意味を除いた意味である「Hein が海に出ている」という命題は真であることが前提(= faktiv)とされる。

(259) a. Hein ist *ja* auf See.（Hein は海に出ているね）

b. = < ASSERT(Hein ist _ auf See); [[ja]]>（Grosz 2005: 183）

b'. = <*ja* + *ASSERT*(Hein ist auf See) >（cf. Zimmermann 2004a: 284）

以上のような心態詞と発話行為オペレータ修飾語との関連をふまえて，Zimmermann (2004a)は，心態詞／談話詞の下位分類(sub-classification)(Grosz 2005: 170)を提案する。とい

---

[85] ここで１つ留意すべき点がある。この(258)の記述を，例えば(257a)の文で具体的に示すと，[[[Herbert sagt, dass sein verdammter = α Hund zweimal am Tag gefüttert werden sollte.]] =< [[Herbert sagt, dass sein Hund zweimal am Tag gefüttert werden sollte. - verdammt]]; [[verdammt]]> となるが，これでは，最後の[[verdammt]]という記述が不明確である。なぜなら，含意のトリガー要素としての *α* = *verdammt* が作用する対象が示されておらず，[[α]]だけの表示では *verdammt* の含意を読み込むことができないからである。Zimmermann (2004b: 552, ex.(21))では，この点を汲みしたと見られる記述もあるが，Zimmermann (2004b: 554, ex.(29))では，やはり [[[$_p$…α…]]] =<[[p - α]]; [[α]]>と記されている。そこで，本来であれば，例えば[[α (p')]] などとして，(p')は命題((257a)では命題の一部 [[verdammt (sein Hund)]])を指すものとすべきである。この点は，Zimmermann(2004a, 2004b)の論点である *wohl* に関しては当てはまらないのであるが(*wohl* は含意のトリガー要素でないため)，後述の心態詞(*ja*, *doch*, *denn*, *mal*, およびそれらの結合形(*wohl* を含む))に関する全ての意味記述において問題となることである。本文の下記(259b, b')においても，本来，[[ja (p')]] や *ja* (p')などと修正することで，心態詞 *ja* が作用する対象を記すべきである。そのうえで，(p')は命題(Hein ist auf See)を指示し，解釈としては，[[ja (p')]]あるいは *ja* (p')は，発話行為オペレータ *ASSERT* と並行する形で，*ASEERT* (p) を修飾するとみなされる(Zimmermann 2004a, b)。また，後述の疑問文では，(p')は„bipartition“[p ¬p]を，*ja wohl*-結合では[wohl (p)]を指示するといった修正も必要であろう(筆者は，平叙文でも„bipartition“を認める立場をとるが，ここでは詳述を避ける)。つまり，ここで最も重要なことは，含意のトリガー要素に類似の概念として心態詞を捉える場合，その意味解釈の際に必要となる，心態詞が作用する対象(その結果として「含意」を示す)を明記すべき点にある。しかし，おそらくこのような修正だけでは，形式的な記述としてはいまだ不十分であるように思われる。そこで，この点を断ったうえで，理解の混乱を避ける意味でも，以下では，便宜上 Zimmermamn (2004a, b)や Grosz (2005)における記述を参照して，心態詞 *mal*(およびその結合形)に関する意味記述に応用する。

うのは，いわば *ja-type* としての「発話行為オペレータ修飾語」に対して，*wohl-type* と考えられうる「文タイプ修飾語」（Satztypmodifikatoren）（Modifier on sentence Type Operators）の区別である。この「文タイプ修飾語」については 5.1.1.3.で説明するが，その前に，以下で，*wohl* を扱うにあたって回避できない問題に言及しておく必要がある。「*wohl* は心態詞か」という問題である。そもそも，この疑問は，心態詞研究において今日なお非常に困難な課題の 1 つであり，本研究で解決できてしまうような問題ではない。しかし，この点をふまえたうえで，本研究では，*wohl* が抱える問題を紹介するとともに，意味最小限主義の立場から，本研究における見解を述べておくこととする。

5.1.1.2. 不変化詞 *wohl*

不変化詞としての *wohl* は，下記（260）に示すとおり，元来 *gut/angenehm*（良い／快い）の意味で用いられる述語形容詞／様態副詞を同音異義語に持つ[86]。「ここで wohl によって表現されているのは，さまざまな意味での『良好』あるいは『快適』な状態であって，客観的な陳述内容（あるいは命題 Proposition）の一部としての＜様態＞を示している」（岩崎 1988: 5ff.）。

(260) Hans fühlt sich heute nicht *wohl*.（Asbach-Schnitker 1977: 38）
（Hans は今日，気分がすぐれない）

そして，この *wohl* が，16 世紀以降に話し手の推測や確信を表す不変化詞として用いられるようになる[87]。このように，同音異義語（Homonym）が存在し，かつ話し手の心的態度を表す用法もあるという点では，「心態詞」と変わりはないように思える。しかし，岩崎（1988）の表題でもある 1 つの疑問が示すとおり，これまで不変化詞 *wohl* は特殊な立場に置かれてきた。「wohl は話法詞か心態詞か」という疑問である。Helbig（1994[3]: 239）では，„Mitunter wird *wohl* auch als Modalwort aufgefaßt; auf jeden Fall ist eine Grenze zwischen Abtönungspartikel und Modalwort bei *wohl* schwer zu ziehen.“（時々，*wohl* は話法詞としてもみなされる；いずれにせよ，*wohl* の場合，心態詞か話法詞かの境界線を引くことは困難である）と述べられる。

---

[86] 本来副詞は，屈折変化も，性・数・格による変化もなく，比較級も存在しないものであるが，*oft*（しばしば），*wohl*（快い），*bald*（まもなく），*gern*（好んで），*sehr*（とても）は例外で，*wohl* の場合，述語形容詞としての用法において，*wohler*（より良い），*am wohlsten*（最も良い）と比較級・最高級変化を起こす（cf. Duden 2006[7]: 576）。

[87] *wohl* の通時的な研究は Sambe（1988）に詳しい（cf. also Abraham 1991）。

Thurmair（1989: 140）でも，„Bei *wohl* ist also in Aussagesätzen ein Übergangsbereich anzusetzen zwischen der Modalpartikel-Funktion und der Satzadverb-Funktion.“（従って，*wohl* に関しては，平叙文において，心態詞機能と文副詞機能の間に，ある移行領域が見て取れる）と示唆される。岩崎（1988）は，（261a-e）における *wohl* が文の中でどのような役割を演じているか，そのはたらきは<話法詞>（Modalwort）に近いのか，それともむしろ<心態詞>（Modalpartikel, Abtönungspartikel）の１つと考えるべきなのかに検討を加える。下記（262）に岩崎（1988）の一節を引用する。

(261) a. Das hat er *wohl* nur getan, um uns zu ärgern.（岩崎 1988: 5）
（彼はたぶん私たちを怒らせようとしてそれをしただけだろう）
b. Das ist *wohl* nicht dein Ernst?（ibid.）（ひょっとしてそれは本気なのかい？）
c. Ob er *wohl* krank ist?（ibid.）（彼は病気なのだろうか）
d. Was wird sie *wohl* dazu sagen?（ibid.）（一体彼女は何を言おうとしているのだろう）
e. Bist du jetzt *wohl* still!（ibid.）（ひょっとして静かにすることもできないの）

(262) wohl にかぎっては，これまで研究者たちによってあるいは話法詞の１つと考えられ，あるいは心態詞の一種と見做されてきた。たとえば Ursula Hoberg は話法詞という術語は使ってはいないものの，彼女のいわゆる SG-Adverbialgruppe なる語類の中で，wohl を vermutlich, vielleicht, wahrscheinlich 等々の他の話法詞と同列に論じているし，Gerhard Helbig もこれを話法詞の一つに数えている。これとは逆に Harald Weydt は wohl を心態詞の一つととらえ，その特性を話法詞と対比しつつ論じているし，Duden の『現代ドイツ語文法』も心態詞のリストの中に wohl を挙げている。また Schulz / Griesbach の『ドイツ語文法』でも，心態詞という言葉こそ用いていないが，Modalglieder という同文法独特の語類を設定して，wohl を denn, doch, ja 等々の心態詞の仲間として扱っている。（岩崎 1988: 9）

（262）から，すでに不変化詞 *wohl* の問題性がうかがえよう。扱われてきた術語のみを見ても *wohl* は捉えどころに困る。例えば，Asbach-Schnitker（1977）では„Satzpartikel“，Doherty（1979）では„Satzadverb“と微妙な違いがあり，前者は今日における„Abtönungspartikel/Modalpartikel“を，後者は„Modalwort“を指しているように思われる。一方，同時代の Bublitz（1978）では，

„Modalpartikel“と明示される。また，先に挙げたとおり，その後 Doherty（1985）は，*wohl* に限らず，„Einstellungspartikel“という用語を導入して，一般に心態詞として扱われる *ja*, *doch*, *etwa* などを分析する。その同じ年，Helbig/Kötz（1985）では，一貫して„Partikeln“という語で不変化詞全般を表し，その中で *ja*, *doch*, *denn* などと並び *wohl* も考察されるが，その後 Helbig/Helbig（1993[2]（初版は 1990））では，*wohl* は„Hypothesenindikator“（仮説標識）であるとして明確に„Modalwort“として扱う。しかし，他方 Helbig（1994[3]（初版は 1988））は，„Abtönungspartikel“と明示している。さらに，„Abtönungspartikel“での扱いでいえば，Zifonun et al.（1997）や Hentschel/Weydt（2003[3]）が挙げられる。現代における *wohl* 研究には，田中（2001）や Zimmermann（2004）がある。まず，Zimmermann（2004a: 254）は，„Insbesondere wird gezeigt, dass die unbetonte Partikel *wohl* [...] als Diskurspartikel und nicht als Modalpartikel analysiert werden sollte.“（特に，文アクセントのない *wohl* が，[...]心態詞としてではなく，談話詞として分析されるべきであることが示される）として，*wohl* を„Diskurspartikel“という用語で„Modalpartikel“と明確に区別する。しかし，（先述のとおり）これは *wohl* を„Satztypmodifikator“（文タイプ修飾語）とみなし，心態詞の下位分類を試みた点に依拠している。少なくとも，たとえ「心態詞」と区別するとはいえ，„Diskurspartikel“（談話詞）という用語を当てているのは，*wohl* を単に「話法詞」（Modalwort）として扱うわけではないことを明示しているものと考えられよう。また，*wohl* を「話法詞」（Modalwort）とみなす井口（2000）を参照しつつ，田中（2001）は，*wohl* を「心態詞」として扱う傾向が見受けられる。田中（2001: 243）によると，*wohl* は「命題の真実性に対する特定の可能性の高さを表さず，命題が事実であると想定してはいるがそれに必ずしも疑いの余地なしとしない（疑いの余地を認める）話し手の主観的な心的態度を表す」と定義され，「[...]いずれにしても wohl が話法詞と異なり特定の可能性の高さよりむしろ[...]」（ibid.: 237）や「wohl を話法詞に分類される sicher, wahrscheinlich, vermutlich 等とではなく，一般に心態詞（Abtönungspartikel, Modalpartikel）とみなされている ja と比較しながら」（ibid.）といった記述からも，*wohl* を話法詞ではなく心態詞と捉えたうえで，心態詞 *ja* との比較研究を行っていることがうかがえる。最後に，岩崎（1988）は，「いわば Modalitätspartikel ともいうべき特殊なもの」としてはいるものの，最終的に，「[（261）]で挙げた wohl もまた，－話法詞ではなく一種の心態詞と考えるべきではなかろうか」とひとまず結論づける。

さて，そもそも，このような解釈の違いはどこから生じるのか。実際は，これまでに挙げたいずれの *wohl* 研究においても，常に共通する点が１つある。それは，„Unsicherheit“（不確

実性）や„Ungewißheit“（不確実性）など用語は異なるものの，とにかく，この際の *wohl* が „Vermutung“（推測）を表すということである。そして，先の疑問は，「この„Vermutung“の心的態度を表す *wohl* が，なぜ，議論の余地なく『心態詞』あるいは『話法詞』としてみなされないのか」に換言される。

岩崎（1988: 11ff.）によると，その理由は，「一般に認められている話法詞に共通する性質が wohl にはあまりにも欠け過ぎている」ことにある。以下，岩崎（1988）に従い，その性質を箇条書きで記す。

(263) a. 話法詞は単独で文の前域を占めることができる。

Vielleicht ist sie krank.（たぶん彼女は病気だろう）

**Wohl* ist sie krank.

b. 話法詞は単独で決定疑問文に対する答えとなりうる。

Ist sie krank? －*Wahrscheinlich*.（彼女は病気なの？－おそらく）

Ist sie krank? －**Wohl*.

c. 話法詞は疑問文では用いられない。

*Was wird er *vermutlich* dazu sagen?

Was wird er *wohl* dazu sagen?（それについて，彼は何を言うだろう）

d. 同一文の中で 2 個以上の話法詞を同時に用いることはできない。

*Das wird dir *vermutlich schwerlich* gelingen.[88]

Das wird dir *wohl schwerlich* gelingen.（君にはほとんど不可能だろう）

e. 話法詞には文のイントネーション上のアクセントを置くことができる。

（岩崎 1988: 11ff.; 訳は筒井による）

このうち，(263e) の特徴に関しては，部分的に *wohl* にも共通する。例えば井口（2000: 108ff.）においても議論されることであるが，(263a, b) に関して，下記（264a-d）に挙げるとおり，*wohl* は単独で文頭に置かれる場合（認容の用法）や応答詞として機能する場合が報告され，これらの場合の *wohl* には，いずれも文アクセントが置かれる。

[88] 母語話者によると，この例のような話法詞の共起は，非文（*）とまではいかないという意見も得ている。とりわけ，„schwerlich“の前に„nur“を置くと，その容認度が増す。

(264) a. *Wohl* ist er noch jung, aber doch schon sehr erfahren.

（確かに彼は若いが，しかしとても経験豊かである）（井口 2000: 109）

b. Kommst du mit? －*Wohl*.[89]（いっしょに来る？－行くよ）（ibid.）

c. Können Sie bitte etwas Salz bringen?－Sehr *wohl*.[90]

（塩を持ってきてくれないかな？－わかった）（ibid.）

d. A: Sind Sie mit dem Essen zufrieden?（食事にご満足なさいましたでしょうか）

B: Ja*wohl*/Sehr *wohl*.（Helbig 1994[3]: 242）（はい，とても）

井口（2000）は，下記（265a, b）の比較において，文アクセントの置かれない *wohl* は事実判断を表し，（265b）のように文アクセントが置かれた場合の *wohl* は事実主張を表すとする。そして，「事実判断を表す *wohl* は文肢性も文性も持たないので，*wohl* を心態詞として分類する文法書もある」と断りをいれる。

(265) a. Das ist *wohl* Péter.（それは Peter でしょう）（井口 2000: 108）

b. Das ist *wóhl* Peter.（それは間違いなく Peter です）（ibid.）　（´はアクセント位置）

端的に言えば，文アクセントの置かれない *wohl* は「心態詞」の可能性があり，文アクセントが置かれた場合は「話法詞」であると解されるのである。そのうえで，井口（2000）は両者をまとめて，さしあたり *wohl* を「話法詞」として分類している。しかし，井口（2000: 109）自身，「事実判断の話法詞の中で wohl は特殊である」として，その理由を，「wohl 以外の事実判断の話法詞では想定された命題が現実世界に当てはまるかどうかの話し手の判断がそれぞれの話法詞固有の意味で表わされている。[...] これに対して，wohl には固有の意味と呼べるようなものがない。単にその文の命題が想定世界のものである（つまり話し手が想定しているにすぎない）ことを表現するだけである」ことに見い出す。この観点は，おそらく岩崎（1988）に依るものであると思われ，むしろ岩崎（1988）は，この点に基づいて（少なくとも当該文献においては）*wohl* を「心態詞」とみなすに至る。このことをまとめたのが次の

[89] この *wohl* を文法的であると判断する場合，その際は，*Jawohl* の意味でアクセントが置かれると思われる。一方，先の（263b）における *wohl* が非文法的であるとされるのは，この際の *wohl* が「おそらく」の意味ではなく，「たぶん」といった比較的低い蓋然性を表す場合であると考えられる。また，応答としての *wohl* を促す質問の内容にも依存する。

[90] （264c）と（264d）におけるような *wohl* の使用は，本来，例えば「高級な／古風なレストラン」といったコンテクストでない限り，今日ほとんど見受けられない周辺的な用法である。

一節である。「陳述内容の現実度についての話し手の評価を示している点では狭義の話法詞と共通のものをもっているが，話法詞のようにその評価を語彙のもつ意味によって明示するのではなく，陳述内容の信憑性についての話者のいささかの疑念，それを 100 パーセント確信することのできない話し手の心の揺れを聞き手に伝えるシグナルのはたらきをしている」（岩崎 1988: 15）。

3.5.4.で述べたとおり，筆者も，まさにこの点こそ「話法詞」と「心態詞」の境界であるとみなし，それゆえ，語彙的意味を持たない *wohl* を「心態詞」として扱う。上記（263c）において，*wohl* が補足疑問文で現れるのも，自らが想定していることをいわば自問するといった場合であり，このことも，*wohl* に語彙的意味が付随していない点に依拠する（cf. 井口 2000）。さらに，（263d）の点も，3.5.3.で述べた心態詞の作用域と合致し，やはり *wohl* を「心態詞」とみなす根拠となる。

しかし，ここで１つ大きな問題にぶつかる。早くは 60 年代後半に始まり（Weydt 1969 他），とりわけ，先に挙げた岩崎（1988），Sambe（1988），Helbig（1988），Thurmair（1989）などの 80 年代以降の *wohl* 研究において，「*wohl* は心態詞か」という議論は，常に文アクセントの置かれない *wohl* についてなされてきた。このことは決して，文アクセントの置かれた *wohl* に関して，今日まで研究されてこなかったというわけではない。先に述べたとおり，井口（2000）を見ただけでも，文アクセントのある *wohl* の問題点，およびそこから導かれる「話法詞」としての可能性が議論の的となっている。Helbig/Helbig（1993[2]）で，*wohl* が„Modalwort“（話法詞）として扱われるのもこの点に依るところが大きい。しかし，本研究においては *wohl* を「心態詞」とみなす以上，文アクセントの置かれた *wohl* をもやはり「心態詞」として扱うべきであり，そのための理論的な説明が求められるのは当然であろう。換言すると，「心態詞」としての *wohl*（強勢なし）と *wohl*（強勢あり）の共時的な共通意味を探る必要性である。もともと様態副詞（Modaladverb）／述語形容詞（prädikatives Adjektiv）としての *wohl* には強勢が置かれ，この同音異義語と *wohl*（強勢あり）との密接な関係が予測されることをふまえた場合，*wohl*（強勢なし）と *wohl*（強勢あり）の共時的な共通性を導く試みは，意味最小限主義の立場をとる本研究の課題の１つである。

5.1.1.2.1. „wohl“の共時的な意味的共時性

wohl は，（266a-l）に示すとおり，文タイプ（Satztyp/Formtyp）に従って多様に用いられる。以下，便宜上，文アクセントが置かれる *wohl* を *WOHL*，強勢のない *wohl* を *wohl*，両者をまと

めて指す場合には„wohl“と綴る。

(266) a. Hans fühlt sich heute nicht *WOHL*.（Asbach-Schnitker 1977: 38）

（Hans は，今日気分がすぐれない）

b. A: Sind Sie mit dem Essen zufrieden?　B: Ja*WOHL*/Sehr *WOHL*.（Helbig 1994[3]: 242）

（A: お食事はお気に召されましたか。B: はい。とても）

c. A: Eine solche Lösung ist indiskutabel.　B: Sie ist *WOHL* diskutabel.

（Asbach-Schnitker 1977: 38）

（A: そのような解決策は議論に値しない。B: 議論に値するよ）

d. Lebe *WOHL*!（Brauße 1992: 223）[91]

（お達者で！）

e. Hein ist *wohl* auf See.（Zimmermann 2004a: 254）

（Hein はたぶん海へ出ているだろう）

f. Peter ist *wohl* schon zu Hause?（Helbig 1994[3]: 241）

（ひょっとして Peter はすでに自宅にいるのかい？）

g. Ich verstehe *wohl*, was gemeint ist, aber ich bin anderer Ansicht.（Brauße 1992: 227）

（確かにどういう意味か理解しているが，私は他の見解だ）

h. Ist Peter *wohl* schon zu Hause?（ibid.）

（もしや Peter はすでに自宅にいるの？）

i. Ob sie *wohl* den Zug verpaßt hat?（Meibauer 1994: 230）

（彼女は電車に乗り遅れたのだろうか）

j. Bist du *wohl* still?（Zimmermann 2004a: 276）

（静かにしてくれる？）

k. Hast du *wohl* ein Tässchen Kaffee für mich?（ibid.: 278）

（私にコーヒーを１杯くれるかい？）

l. Wer hat den Brief *wohl* geschrieben?（Meibauer 1994: 230）

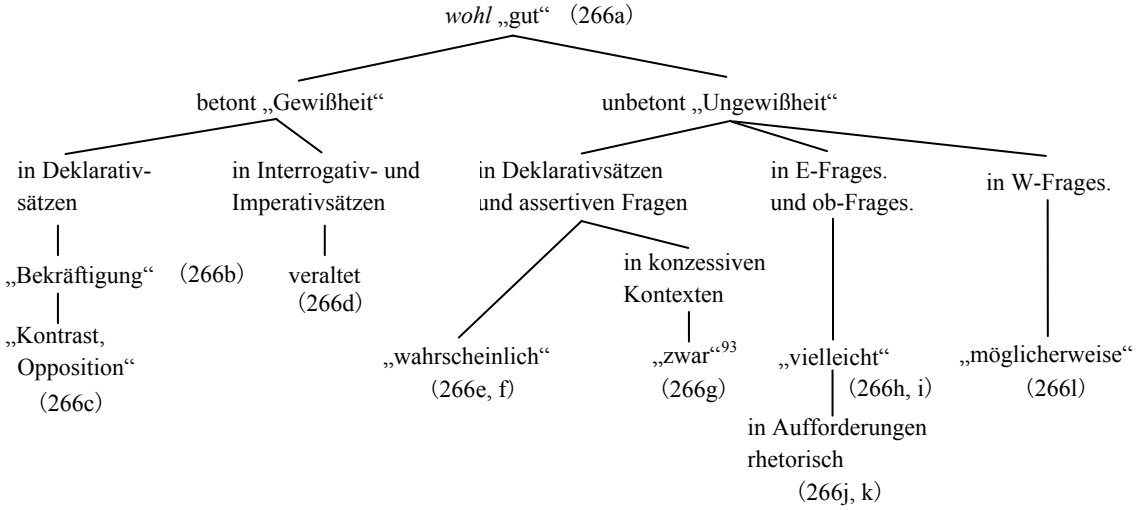
（いったい誰がこの手紙を書いたんだ）

---

[91] この際の *wohl* の用法は，„Wohl bekommt's.“（おいしく召し上がれ）や„Wohl oder übel.“（良かれ悪しかれ）といった決まり文句として今日に残るが，純粋に„gut“を意味するこのような *wohl* は，*wohlmeinend*（好意的な），*wohlhabend*（裕福な），*Wohltat*（善意）などの複合語を除いて，19 世紀以降ほとんど用いられなくなった（cf. Brauße 1992: 223）。

下記(267)は, Brauße (1992)による„wohl“の派生図[92]である。この図からも明らかであるが, „wohl“は強勢の有無によって用法が大別される。そこで, ここで扱う„wohl“の問題点を提示するにあたり, とりわけ(266c)と(266e)のような例に注目する。

(267) (cf. Brauße 1992: 233)



まず, (266c)のような例には, 他にも(268a-c)が挙げられる。

(268) a. A: Nastassja ist nicht verheiratet. (Nastassja は結婚していない)

B: Sie ist *WOHL* verheiratet. (Meibauer 1994: 227) (結婚しているよ)

b. A: Peter hat kein Auto. (Peter は車を持っていない)

B: Er hat *WOHL* eins. (持っているよ) (井口 2000: 108)

c. A: Er hat die Prüfung nicht bestanden. (彼はその試験に合格しなかった)

B: Er hat sie *WOHL* bestanden. (合格したよ)

これらの例における *WOHL* には常に文アクセントが置かれ, いずれも否定的な先行発話に対する「反論」(Widerspruch)として用いられる(cf. Helbig 1994[3]: 239)。*WOHL* のこの用法は, 下記(269a, b)からうかがえるとおり, *WOHL* が「陳述を強化」(Bekräftigung einer Aussage)す

[92] 様態副詞の *wohl* „gut“から枝分かれしていることに基づき, 筆者は, この図を„wohl“の「派生図」と理解しているが, „zwar“の意味を表す *wohl* の用法は, 大抵は *betont* (強勢のある)であることを指摘しておく。

[93] 脚注 92 を参照。

る機能を持っていることに由来する。このことは，様態副詞としての„wohl“が，「十分に／しっかり」といった意味を表し，そのような語に対照アクセント（Kontrastakzent）を置くことから容易に理解できよう。Asbach-Schnitker（1977）によれば，この場合の *WOHL* は„*wohl* der Gewissheit“（確信の *wohl*）と名付けられ（cf. also Sambe 1988），話し手による比較的高い蓋然性の態度表明であると解される。

(269) a. Die betonte Form und auch die Konjunktion können als Parallelform zu *jawohl* im Sinne einer Bekräftigung der Wahrheit des Gesagten interpretiert werden.（Weydt/Hentschel 1983: 18）

［強勢のある形とその接続詞は *jawohl* に相当し，発話内容の真実性を強化する意味で解釈される］

b. *wohl* in betonter Form drückt eine Bekräftigung der Aussage aus, [...]（Brauße 1992: 225）

［強勢のある *wohl* は，陳述の強化を表し，[...]］

一方，（266e）の *wohl* は，„*wohl* der Gewissheit“（確信の *wohl*）に対して，„*wohl* der Vermutung“（推測の *wohl*）と呼ばれ（cf. Asbach-Schnitker 1977; Doherty 1985; Abraham 1991a），命題に対する話し手の「推測」を表すと考えられる。この場合，話し手による比較的低い蓋然性を表す態度が示される。（266e）同様，（270a-c）が推測の *wohl* の例である。

(270) a. Diese Probleme versteht er *wohl* nicht.（Helbig 1994[3]: 238）

（これらの問題を，彼は理解しないだろう）

b. Sie hat *wohl* das Auto verkauft.（ibid.）（彼女はたぶん車を売ったのだろう）

c. Wir werden ihn *wohl* dort treffen.（ibid.）（私たちはそこで彼に会うことになるだろう）

これまで，先行文献で議論されてきた，*wohl* に関する主な問題点は，下記（271a-h）にまとめられる。このうち，（271a-c）に関しては，本研究では前節で述べた立場をとる。つまり，„wohl“は「心態詞」（Modalpartikel）であり，その同音異義語に様態副詞（Modaladverb）／述語形容詞（prädikatives Adjektiv）を持つ。そして，心態詞と話法詞の相違を語彙的意味の有無に言及し，命題に対して心態詞が担う話し手の心的態度は含意であるとする。また，（271d, e）は，通時的な研究において考察される問題であるが，ここでは意味最小限主義の立場から，心

態詞としての *wohl*/*WOHL* の共時的な分析を試みるため詳しい考察を控える[94]。残る（271f, g）は，すでに（271g）で明示されるとおり，„wohl“の共時的意味の解釈に関係する問題である。

(271) a. Ist *wohl* im Mittelfeld eine Modalpartikel?（cf. Meibauer 1994: 230）

［中域における *wohl* は心態詞か］

b. Wie soll der kategorielle Status von *wohl*/*WOHL* geklärt werden?（cf. ibid.: 229）

［*wohl*／*WOHL* の範疇ラベルはどのように説明されるか］

c. Gibt es einen Bedeutungsunterschied zwischen *wohl* (MP) und *wahrscheinlich*?

（Brauße 1992: 221）

［*wohl*（心態詞）と話法詞 *wahrscheinlich* に意味的な違いがあるか］

d. Wie soll die Umkategorisierung des Adjektivs *wohl* zur Modalpartikel *WOHL* geklärt werden?（cf. ibid.: 232）

［形容詞 *wohl* から心態詞 *WOHL* への範疇転換はいかに説明されるか］

e. Worin besteht die modale Komponente der Bedeutung von *wohl*, die das Wort den Modalpartikeln zuordnet und wie konnte sie aus der ursprünglichen Bedeutung „gut“ entstehen?（ibid.）

［*wohl* を心態詞に分類する場合，その語意の話法的要素はどこに見い出されるか。また，その意味的要素は，基本的意味,gut‘から，どのように導かれるか］

f. Warum kann *WOHL* die Wahrheit von p präsupponieren, während *wohl* eine Hypothese über p ausdrückt.（ibid.）

［*WOHL* が p の真実を前提とするのに対し，*wohl* が p に関する仮定を表すのはなぜか］

g. Welche synchrone Beziehung besteht zwischen der unbetonten Modalpartikel *wohl* und der betonten Modalpartikel *WOHL*?（ibid.: 232）

［強勢の置かれない心態詞 *wohl* と強勢の置かれる心態詞 *WOHL* には，どのような共時的関係があるか］

---

[94] Sambe（1988），Abraham（1991a），Brauße（1992）などを参照されたい。とりわけ（271e）に関する Brauße（1992）の示唆は興味深い。Brauße（1992: 228）では，„Es ist *gut* möglich, daß ...“（...は十分にありうる）や„Es ist *gut* denkbar, daß ... “（...は十分に考えられる）における *gut* が，„wahrscheinlich“（おそらく）の意味で用いられていると捉えられ，さらに，„Es ist *gut* ein Jahr her.“（もうすぐ一年になる）や„Ich habe *gut* zehn Minuten gewartet.“（私は 10 分ほど待った）における *gut* が，数量表現と結びつくことでその数量の正確さをぼかす点が挙げられる。

先に述べたが，„wohl“は，アクセントの有無によっていわば正反対の意味を表す語であると考えられる。すなわち，命題に対する話し手の（聞き手の）蓋然性の高低（推測⇔確信）を表すという点である（= (271f)）。この際，意味最大限主義の立場からみれば，両者は，「同音ではあるが異なる語彙である」と捉えられることになるが，本研究では意味最小限主義の立場から考察を行うため，*wohl* と *WOHL* は，「同じ意味を持つ１つの語彙である」という前提が存在することになる。つまり，*wohl* と *WOHL* には「共通する意味がある」ということである。しかし，これまで強調してきたことであるが，そもそも「心態詞」には語彙的な意味は付随していない。従って，ここでの「共通意味」というものがどういったものを指すのかという問題が浮上する。結果，本節における問題は，次の点に集約される：*wohl* と *WOHL* に共時的に共通する意味的な核／関係は何か（cf. Sambe 1988; Brauße 1992: 222ff.; Meibauer 1994: 232; Zimmermann 2004a: 282）（= (271g)）。

この問題を解く手がかりとして，本研究では Zimmermann（2004a）による示唆を取り上げる。Zimmermann（2004a: 255）は，„Die betonte Variante *WOHL* […], steht nicht im Mittelpunkt des Interesses.“（強勢の置かれた場合の *WOHL* は，[…] 中心的な関心事ではない）と述べており，*wohl* と *WOHL* の共通意味に関する記述は，ほんの１ページによるものにすぎない。にもかかわらず，そのアプローチは非常に的を射ていると思われる。そこで，次節でその考察を紹介する。

5.1.1.2.2. „wohl“の意味的核に関する示唆

上でも述べたことであるが，ここで記す Zimmermann（2004）による考察は，あくまでも示唆を述べているにすぎない。従って，ここでの目的は，Zimmermann（2004a, b）に反駁することではなく，あくまでその示唆を踏襲する立場にあることを強調しておく。しかし，全く議論の余地がないというわけではない。筆者は，下記（272）に挙げた示唆を，いまだ非統一的な考察であると考える。そこで，Zimmermann（2004a）の見解を補足する形で，心態詞„wohl“の共時的な共通意味に関する筆者の結論を導く。

(272) Die auch synchron noch von beiden Ausdrücken geteilte Grundbedeutung besteht darin, dass sie die Gültigkeit bzw. Existenz des Gegenteils der ausgedrückten Proposition im jeweiligen diskursiven Kontext zulässt.（Zimmermann 2004a: 282）

［共時的にみてもなお２つの表現が分かち合う基本的な意味は，それらが，各々の談話コンテクストで表わされた命題に対する，反対命題の効力やその存在を許容することにある］

(272)の説明にあたり，まず, Zimmermann (2004a, b)における *wohl* の考察をふまえる。Zimmermann (2004a, b)では，下記(273a)は，「推測」を表す *wohl* を伴う発話(273b)との比較において「断定」(assert)を表す文とみなされる。

(273) a. Hein ist auf See.（Hein は海へ出ている）＝「断定」

b. Hein ist *wohl* auf See.（Hein はたぶん海へ出ているだろう）＝「推測」

(274)は, Zimmermann (2004a, b)における「断定」の解釈を示したものである。表記は，よりわかりやすく示すために筆者が少し手を加えたが，考え方は, Zimmermann (2004a, b)を完全に踏襲するものである。

(274) a. $CG_i = \{..., p_1, p_2, p_3, p_4 ...\}$ ((273a)の発話前の CG)

b. $CG_j = \{\ldots, p_1, \cancel{p_2}, \cancel{p_3}, p_4, \mathbf{p} \ldots\}$ ((273a)の発話後の CG)

(p = proposition, CG = common ground)

ここで CG とは，「話し手にとって，会話参加者間の共有知識とみなされうる命題の集合」(Zimmermann 2004: 269; cf. Stalnaker 1978)を指す[95]。そして, Zimmermann (2004a: 269ff.)に従えば，「*p* と断定することは，会話参加者双方の共有知識と両立可能な(kompatibel)あらゆる可能世界の集合から，*p* と両立しない世界を排除すること」であると解される。つまり，(274a)の発話が遂行された時点で，「Hein は海に出ている」という *p* と両立不可能な世界，例えば「Hein は海に出ていない(p_2)」や「Hein は地上にいる(p_3)」といった世界が排除される。一方, ASSERT (p)[96]と依然両立可能な世界，例えば「Hein は船に乗っている(p_1)」や「Hein

[95] 本研究では，いわゆる「共通知識(common knowledge)のパラドックス」には言及しないこととする。詳しくは, Sperber/Wilson(1995[2]: 17ff.)，西阪(2004[2]: 1ff.)，田窪 他(2001[2]: 135)を参照。

[96] Zimmermann (2004a)において，ASSERT(大文字で表記)とは，疑問オペレータ(Frageoperator)を表す"?"(疑問符で表記)と同様，「発話行為オペレータ」(Sprechaktoperator)を指す。そのため, Zimmermann (2004a: 271)自身が指摘するとおり，単に「主張の程度」(Stärke von

は背が高い(p_4)」といった世界は保持されることになる。「Hein が海に出ている」という世界において「Hein が船に乗っていること」は十分に予想され，また，「Hein が海に出ていること」は，「Hein は背が高いか否か」とは関連性が薄く，少なくとも「Hein は背が高いこと」を打ち消す理由には全くならないためである。

それに対して，*wohl* が用いられた(274b)では，*p*(Hein は海に出ている)と¬*p*(Hein は海に出ていない)のどちらの世界とも両立したうえで，CG に $ASSUME_x$ (p)[97]が追加されると分析される(= (275))。この際，「追加」という点では CG に変化がもたらされるものの，「断定」の場合のように世界の排除はなされない(唯一，¬$ASSUME_x$ (p)が排除される)。

(275) a. CG_i = {..., p_1, p_2, p_3, p_4 ...}((273b)の発話前の CG)

b. CG_j = {…, p_1, p_2, p_3, p_4, **$ASSUME_x$(p)** …}((273b)の発話後の CG)

(p = proposition, CG = common ground, x = speaker, hearer or both)

まとめると，*wohl* (p)では，*p* も¬*p* も，代替可能な候補として同等に両立するということであり，これを一言に集約すると，先(272)における「反対命題の効力を許容」ということになる。Zimmermann (2004a)では詳細は述べられないが，ここで，„p ¬p"とは，真理値を返す前の段階である「思想」(Gedanke) (cf. Frege(1915)を指し，「断定」はその「分別」(judgement) (Lohnstein 2007)を意味すると考えられる(cf. 黒田・野本 2006[2]: 119, 209; Lohnstein 2007: 75)。つまり，*ASSERT* は，「„p ¬p"に作用して *p* を真とするオペレータである」(cf. Lohnstein 2007, etc.)と分析できよう。Lohnstein (2007: 75)で„bipartition"と呼ばれる「思想」の概念については，3.6.1.で述べたとおりである。

次に，*WOHL* の考察を見ていく。Zimmermann (2004a: 282)によれば，*WOHL* (p)は(276)のように解釈される。

(276) Die Verwendung von *WOHL p* zeigt die Existenz einer Äußerung der Form *nicht p* im vorhergehenden Diskurs an. *P* und *nicht p* stehen also als (wiedersprüchliche) Festlegungen im Diskurs gleichberechtigt nebeneinander.

Festlegungen)に作用する *wohl* とは，オペレータとしての階層が異なる。このことを表記すると，ASSERT (*wohl* (p))となる。

[97] $ASSUME_x$ (p)は，表記の上では *wohl* (p)と同義である。そのうえで，脚注 96 を参照。

［*WOHL p* という用法では，先行する談話において, *nicht p* の形をとる発話の存在が示される。従って, *p* と *nicht p* は, (反論的な) 断定として，談話という形において同等のレベルで存立する］

(268a-c) でも示したとおり，*WOHL* の用法では，先行発話において，反対命題が明示される場合がほとんどである。比較的高い蓋然性を示す話し手の確信でもって，相手の否定的な評価を打ち消して肯定するのである。下記 (277) の B の発話では,「Hein が海に出ていること」に対する話し手の確信が反映している。

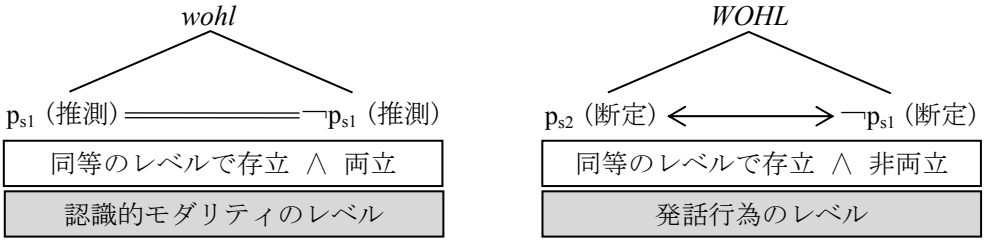
(277) A: Hein ist *nicht* auf See. (Hein は海に出ていない)
B: Hein ist *WOHL* auf See. (Zimmermann 2004a: 255) (Hein は海に出ているよ)

この際，A による¬*p* と B による *p* の間に「反論」という関係が生じており，この点から, *WOHL* の用法では，*p* が¬*p* に対する反論的な断定 (Festlegung) として，談話という形をとって同等に存立すると解される。このことを, Zimmermann (2004a) は「反対命題の存在を許容」とまとめている (= (272))。

以上のような「反対命題の効力／存在の許容」という観点に基づき, Zimmermann (2004a) は, *wohl* と *WOHL* の共時的な意味的核に関する可能性を示唆する。しかし，ここで 1 つの問題が見受けられる。Zimmermann (2004a) が主張するとおり, *wohl* の用法では，ある命題 p に対する話し手の推測を表すことで，同時にその反対命題¬p の効力も認められることになる。そして，この点で両者は同等のレベル，つまり「認識的モダリティ」(epistemische Modalität) のレベルで存立し，かつ *p* と¬*p* が両立することがうかがえる。一方，*WOHL* の用法では, Zimmermann (2004a) が示唆するとおり，確かにある命題 p とその反対命題¬p の存在が認められることになり，発話行為オペレータである *ASSERT* のレベルで存立し合うことになるが, 両者を「反論的な断定」として分析することは，*p* と¬*p* が両立せず互いに打ち消し合う関係にあることを意味する。つまり，認識的モダリティの扱いを受ける *wohl* (p) と異なり, *WOHL* (p) では発話行為レベルでの示唆がなされており，このレベルにおいては，*p* と¬*p* は両立しない。このことを図示したのが (278) である。従って, Zimmermann (2004a) による „wohl“ の共時的な意味的関係の示唆 (272) は，*p* と¬*p* の解釈レベルが異なるため，両立性の

観点に基づく場合，統一的な分析とは認められない。

(278)



（s1 = speaker 1, s2 = speaker 2）

しかし，先に述べたとおり，Zimmermann（2004a: 255）は，„Die betonte Variante *WOHL* in [(277)], die Nichteinverständnis von Sprecher B mit einer vorhergehenden negativen Aussage signalisiert, steht nicht im Mittelpunkt des Interesses.“（否定的な陳述である先行発話に対して，話し手 B が意見の不一致を示す［(277)］の *WOHL* は，中心的な関心事ではない）と述べており，もともと Zimmermann（2004a）は *wohl* の分析に焦点を絞っている。そこで，筆者は，Zimmermann（2004a, b）の *wohl* に関する分析を踏襲した上で，*WOHL* の用法に関してのみ，「発話行為」と「認識的モダリティ」の観点から見直しを図る。

前節で述べたとおり，本来 *WOHL* には「陳述の強化」という機能が備わっており，このことが，命題に対する話し手の確信の態度に結びついている。そして，その結果，反論として用いられるようになったと考えられる。この際，話し手の確信とは，やはり「認識的モダリティ」のレベルで扱われるものである。また，Zimmermann（2004a）では，否定的な先行発話の命題¬p に対し，*WOHL* (p)を反論的な断定として扱っているが，話し手による確信の態度表明が，発話行為レベルにおいて「断定」であるか否かには疑問の余地がある。そのため，筆者は *WOHL* に関して，発話行為のレベルでは「断定」と「断言」の関係，さらに認識的モダリティのレベルでは，「確実性」と「不確実性」の関係に言及することで，„wohl“の意味的な共通性の抽出を試みる。

5.1.1.2.3. *WOHL* の解釈

WOHL (p)の発話では，¬*p* が会話参加者の先行発話として明示的に遂行される。

(279) a. A: Er hat die Prüfung *nicht* bestanden.（彼は試験に合格しなかった）

B: Er hat sie *WOHL* bestanden.（cf. Helbig 1994[3]: 239）(=（268c）)（合格したよ）

b. A: Die Lösung ist *nicht* akzeptabel.（その解答は認められない）

B: Die Lösung ist *WOHL* akzeptabel.（ibid.）（それは十分認められる）

（279a, b）において話し手Bは，それぞれの陳述の程度を強め，命題内容の真実性を確信していると考えられる。この限りなく真に近い話し手の評価という点に基づき，Zimmermann（2004a）では，この際の発話が「断定」として解され，先行発話の反対命題¬p の「断定」と対立関係にあることから，反論として機能すると分析される[98]。このような捉え方は，Doherty（1985），Sambe（1988），Brauße（1992），Helbig（1994[3]）などからも推察できる。以下，ここでは（279a）の例を取り上げて考察する。

(280) A: Er hat die Prüfung nicht bestanden.（彼はその試験に合格しなかった）

B_1: Er *HAT* sie bestanden.（合格したんだ）

B_2: *Doch*, er hat sie bestanden.（いや，合格した）

B_3: Er hat sie *WOHL* bestanden.（合格したよ）

（$280B_{1,2,3}$）は，いずれも先行発話に対する反論的用法として解釈される。（$280B_1$）は *Verum-Fokus* の用法で，完了の助動詞 *haben* に強調アクセントが置かれている。また，（$280B_2$）の *doch* を伴う発話では，応答詞としての *doch* が，対立命題を表明する不変化詞であることに基づけば，この発話が反論的な断定であることに疑いの余地はない。しかし，（$280B_3$）の発話による反論に関しては，筆者は「断定」として解釈しない。ここで，*WOHL* の不適切な用法と考えられる（281）の例を見てみたい。

---

[98] *WOHL* による反論の場合，下記のような２つの命題間における反論（p vs. q）を許容しない。
A: Er hat die Prüfung bestanden.（彼はその試験に合格した）　*p*
B: *Er ist *WOHL* durchgefallen.（彼は落ちたよ）　*q*
この際の *WOHL* (q)をいかすには，必ずその前に応答詞 *nein*（いいえ）や„Das glaube ich nicht.“（私はそう思わない），„Das stimmt nicht.“（それは合っていない）といった否定的な評価を明示する応答発話が必要となる。さらには，„Ich glaube, er ist *WOHL* durchgefallen.“（私が思うに，彼は落ちたよ）でも許容されるという意見も得た。このことは，後述の「*WOHL* = 断言」という見解を支える手がかりといえる。

(281) A: Er hat die Prüfung *bestimmt*/*vermutlich* nicht bestanden.

（彼はその試験に間違いなく／たぶん合格しなかった）

B_1: ? Er hat sie *WOHL* bestanden.（合格したよ）

B_2: *Doch*, er hat sie bestanden.（いや，合格した）

B_3: *Doch*, er hat sie *WOHL* bestanden.（いや，合格したよ）　　（? = 意味的に不適切）

(281A)の発話は，話法詞 *bestimmt*（間違いなく）や *vermutlich*（たぶん）を伴った反対命題の表明である。この際, *bestimmt* では命題内容に対する話し手 A の「確信」, *vermutlich* では「推測」の評価が表されていることになる。この反対命題に対して，(281B_1)の発話が遂行された場合，筆者が尋ねた数名の母語話者によれば，「直観的な意味解釈において違和感がある」という報告を受けた。これは，(268)で挙げた他の命題内容においても同様であった。また，ここで興味深いのは，B_2 のような応答詞 *doch* を伴った場合には，問題なく反論として機能し，さらには，そのように応答詞 *doch* を伴うことで, *WOHL* による発話も許容されるという点である。これらの点に基づき，以下で筆者は，先の(280B_3)の発話を，発話行為レベルにおいて「断言」として扱うことで(281B_1)の不適切性を説明する。

Vanderveken (1990)および久保 (2002)によれば，„assertives“(言明型)の発話行為タイプには，数ある下位分類の中に„assert/aver“(断定), „avouch“(断言)という区別が見られる。(282)にその定義を記す。

(282) a. **断定:** 話し手が，推理や信念ではなく，客観的な事実・証拠に基づいて，ある命題を陳述すること。

b. **断言:** 話し手が，客観的な事実ではなくとも，自らの確信あるいは推論的な根拠に基づいて，ある命題を陳述すること。

(282)に従い，筆者は, *WOHL* の用法を話し手の確信に基づく陳述行為，つまり「断言」であるとみなす。このことを記述的に示すと，例えば(283)のようになる。

(283) A: Er hat die Prüfung nicht bestanden. $\mathbf{ASSERT_x(\neg p)}$

B: Er hat sie *WOHL* bestanden. $\mathbf{AVOUCH_y\ (BE_SURE_y(p))}$

（x = speaker A, y = speaker B）

この仮説に従って，先の(281)を考察すると，まず，話法詞 *bestimmt* や *vermutlich* を伴う話し手 A の発話は，命題に対する話し手の「確信」や「推測」が反映される点で「断言」の発話行為であるとわかる[99]。一方，話し手 B_1 の発話も，話し手の確信の態度を表わす「断言」である。つまり，両者が「断言」の発話を行っており，確かに，命題に対する評価(認識的モダリティレベル)の食い違いではあるが，発話行為レベルでは，並行的な意見交換(両立)であって，このレベルでは「反論」に値しないと考えられる(= (284))。

(284) $\mathbf{AVOUCH_x}\,(\mathrm{BE_SURE_x}\,(\neg p)) \not\Longleftrightarrow \mathbf{AVOUCH_y}(\mathrm{BE_SURE_y}\,(p)) \quad \Longleftrightarrow$ = 反論

「ある事態を事実として知っているから A だ」と言う相手に対し，「ある事態を事実として知っているから A ではない。(B だ)」と言う場合，「断定」に対する「断定」として反論に値すると考えられるが，「ある事態から推論しておそらく A だ」と言う相手に対し，「ある事態から推論しておそらく A ではない。(B だ)」と言うことは，確かに意見の食い違いではあるが，同時に，互いの主張を排除しているわけでもない。従って，(281B_1)では，本来，反論として機能しなければならない *WOHL* の用法が不備に終わる。ちなみに，反論として機能する必要のない *wohl* は，問題なく使用が許容される(cf. A: Er hat die Prüfung *bestimmt*/*vermutlich* nicht bestanden. B: Er hat sie *wohl* bestanden.（彼はその試験に間違いなく／たぶん合格しなかった。たぶん彼は合格した))。それに対して，(281B_2)の場合，まず応答詞 *doch* の使用により，話し手 A の確信／推測といったモダリティに関わらず，「彼は試験に合格しなかった」という否定的な命題部分(¬p)の「否定(¬(¬p))」によって反論が成立していると解釈できる。つまり，「否定の否定」により，打ち消しによる強い肯定(反論)を示したうえで，「彼は試

[99] 例えば，目の前で雨が降っているのを確認している状況で，„Es muss jetzt regnen.“(今雨が降っているにちがいない)とは言わないように，話し手の確信という認識的な態度を反映する話法詞(*bestimmt*, *sicher*, *gewiss* など)が使用される時点で，その発話は「断定」ではなく「断言」とみなされる。もちろん，事前に「きっと今雨が降っていると思う」といったような予測があった状況で，実際に屋外に出て雨降りを確認し，「やっぱり」という意味で，„Es regnet bestimmt.“(確かに雨が降っている)という発話が成り立つかもしれないが，この発話も，先の予測の確認として機能していることから，本来，この場合の *bestimmt* も確信の認識的態度の反映であることにちがいない。

験に合格した」という「断定(p)」によって，さらに反論的な主張を補強していると考えられる(= (285))。

(285) $\mathbf{AVOUCH_x}$ (BE_SURE$_x$ (¬p)) $\Longleftrightarrow$ $\mathbf{NEGATION_y}$(¬p) & ASSERT$_y$ (p)
$\Longleftrightarrow$ = 反論

このように解釈することで，(281B$_3$)も説明が可能になる。(281B$_3$)でも，まず話し手Aの確信／推測に関係なく，「彼は試験に合格しなかった」という否定的な命題(¬p)の「否定(¬(¬p))」によって，強い「肯定」の立場を表明している。このように反論的な立場を明示したうえであれば，その直後に「彼は試験に合格した」という事態を「確信している」とする「断言(p)」を表明したとしても，(281B$_1$)のように'純粋な'「『断言』に対する『断言』」とはならない(= (286))。

(286) $\mathbf{AVOUCH_x}$ (BE_SURE$_x$(¬p) $\Longleftrightarrow$ $\mathbf{NEGATION_y}$ (¬p) & AVOUCH$_x$ (BE_SURE$_x$(¬p))
$\Longleftrightarrow$ = 反論

このことは，「断言」に対して「断言」のみでは反論にならないことの裏付けであるとともに，応答詞 *doch* の役割を明確に示す好例でもある。事実，同じく「断言」であっても，(287)のようなBの発話は非文となる。

(287) A: Er hat die Prüfung *bestimmt*/*vielleicht* nicht bestanden.
（彼はその試験に<u>間違いなく</u>／<u>たぶん</u>合格しなかった）
B: **DOCH*, er hat sie *wohl*/*vielleicht* bestanden.

続いて，(281B$_1$)のような *WOHL* の不適切な用法を認識的モダリティのレベルで考察する。この際，Zimmermann（2004a, b）の *wohl* の分析に則り，下記(288)に示すとおり，*WOHL* (p)の用法をCGの観点から見てみる。

(288) a. CG$_i$ = {..., p$_1$, p$_2$, p$_3$, p$_4$ ...}（(281B$_1$)の発話前のCG）
b. CG$_j$ = {…, p$_1$, p$_2$, p$_3$, p$_4$, **BE_SURE$_x$(p)** …}（(281B$_1$)の発話後のCG）
（p = proposition, CG = common ground, x = speaker）

WOHL (p)が，認識的モダリティとして話し手の確信を表すと捉える限り，(*wohl* (p)の場合と同じく) *WOHL* (p)では¬BE_SURE$_x$ (p)が排除される。つまり，話し手が命題 p を確信していない世界である。また, *wohl* (p)で話し手が命題 p に対して推測の態度を表わす場合，その反対命題¬p に対しても同等の推測が成り立つと考えられた。それに対し, *WOHL* (p) の場合，同一の話し手が命題 p を確信しつつ，同等にその反対命題¬p も確信しているとは考えにくい。そのため，(288b) の CG において, BE_SURE$_x$ (¬p)も排除されると考えるのが妥当であろう。ただし，ここで重要なことは，¬*p* が完全に排除されるのではなく，その認識の度合いに偏りが存在すると考えられる点である。例えば Kratzer（1981: 56）では，確信の認識的モダリティとしての *müssen*（英: must）が，それを伴わない発話よりも弱い主張を表すとされる。また，下記のとおり，田中 (2001: 243ff.) にも，非常に興味深い記述がある。

(289) a. Hans hat kein Auto. －Er hat WOHL eins.（田中 2001: 243）
（Hans は車を持っていない。－彼は持っているよ）
b. Ich habe WOHL bemerkt, dass da etwas nicht stimmt.（ibid.）
（私は，何かが違っていることに気づいていた）

(289a) における *WOHL* には対照アクセントが置かれており，当該の命題 p を反対命題¬p と対照させる働きをもつ。田中 (2001) によれば，(289b) における *WOHL* もこれに準じると考えた場合，「[(289b)] ではしたがって，対照アクセントにより，『私は気づかなかった』という－p に対する『私は気づいていた』という p の妥当性が際立たせられていることになる。ところが，同時に wohl によって, p の真実性の完全な主張も妨げられているのである。つまり話し手は，自分が『気づいていなかった』ということに対して，あくまで『気づいていた』という事実を伝えたいが，何らかの事情からそれをまったく疑いのないものとしては主張していない，あるいは主張できない，ということになる。[(289b)] は wohl にアクセントが置かれている上，日本語でしばしば，『よく』とか『充分に』などと訳されるため，wohl を含まない文と比べて『強い主張』であるような印象を受けるが，実際にネイティブ・スピーカーは，この文を wohl を含まない文よりもむしろ『和らげられた主張』とみなす傾向にある」(ibid.: 243ff.)。筆者も，この考え方を踏襲する。話し手が *p* を確信するとは, *p* に対する比較的高い蓋然性を示すと同時に，その割合が決して 100%ではない，つまり，(282a) で示した定義に基づけば，客観的事実に基づく「断定」ではないことも暗示している。換言すると，

たとえ BE_SURE$_x$ (¬p)は排除されたとしても, *WOHL* (p)によって話し手は, ¬*p* を完全否定することはできないことも含意していると考えられる。この意味において, *WOHL* (p) でも, *wohl* (p)同様に *p* と¬*p* が両立する。このことを, まず(281)の話し手 A による *vermutlich*(たぶん)を伴う発話文とのやり取りで図示すると, 下記(290)のようになる。

(290) **ASSUME$_x$** (¬p) ═══ ¬**DENY$_y$** (¬p) ═══ = 両立

(281)において, 話法詞 *vermutlich* により, 話し手 A が「彼は合格しなかった」という命題を不確実な事態として表現(推測の態度表明)しているのに対し, 話し手 B_1 は,「彼は合格した」という命題に対し確信の態度を表わすことで, 同時に「合格しなかったかもしれない」という不確実性(可能性)も含意している。つまり,「『合格しなかった(こと)』を否定することはない」という意味であり, 換言すれば,「『合格した』と断定はしない」という態度表明である。この際, もし明確な反論として機能させるには,「確信」の表明によって「合格しなかったかもしれない」という可能性を残すのではなく,「合格した」という「断定(p)」によって¬*p* の可能性を打ち消すべきである。そして, この「断定(p)」は同時に,「合格しなかったかもしれない」という相手の「推測(¬p)」の排除でもある。しかし,(281B_1) の発話は, *WOHL* を伴う「確信」の態度表明であり,「合格しなかったかもしれない」という不確実性(可能性)を排除しきれず, A の発話の「推測(¬p)」と両立する。この点に関する 1 つの裏付けとして, 例えば(291)のような発言を挙げる。

(291) (2007 年 7 月 8 日; 小沢一郎民主党党首が記者団に対して)

a.(有権者は)我々に過半数を与えてくれると**確信している**が, もしそういう結果が出なかったら, 私が政治の場で働く余地はない“

(cf. http://www.yomiuri.co.jp/election/sangiin2007/news/20070708it12.htm)

„Ich halte es für gewiss, dass uns die Wähler Ihre Stimme geben, (oder: Ich bin mir der Zustimmung der Mehrheit der Wähler gewiss,) aber wenn es nicht zu diesem Resultat kommen sollte, gibt es in der politischen Welt keinen Platz mehr für mich.“

b. #(有権者は)我々に過半数を<u>**与えてくれる**</u>が, もしそういう結果が出なかったら, […]“

„Die Wähler geben uns Ihre Stimme, aber wenn es nicht zu diesem Resultat kommen sollte, [...]“ (訳は筒井による)

話し手の「確信」の態度は，認識的モダリティのレベルで *p* と¬*p* の効力を許容すると捉えることから，(291a)の発話では，後続文で¬*p* の「可能性」を述べることは問題ないが，(291b)のような「断定」では，少なくとも(291a)との比較において，¬*p* の「可能性」を述べることは意味解釈に困難をきたす。(291)は日本語の例で比較したものであるが，いずれもドイツ語に訳して母語話者に尋ねた結果，解釈における許容度の点で，やはり(291b)は意味的に不適切であると判断された。

このように，*WOHL* (p)が¬*p* の可能性を残すという分析は，先行発話が¬*p* の確信である話法詞 *bestimmt* を伴う場合にも有効である。先に，*WOHL* (p)の場合，同一の話し手が命題 p を確信しつつ，同等にその反対命題¬p も確信しているとは考えにくいことから，話し手の CG において，BE_SURE_x (¬p)も排除されると述べた。しかし，同一の話し手ではなく，対話における異なる話し手間である場合，相手の「確信(¬p)」の発話に対し，「確信(p)」でその反対命題¬p の「確信」の認識を排除することはありうる。(281)の話し手 A による「確信(¬p)」の発話(話法詞 *bestimmt* を伴う)に対して，話し手 B_1 が「確信(p)」の発話(*WOHL* を伴う)で応答する場合である。しかし，それが話し手による「確信」である限りにおいて，両者の認識は，ともに「不確実性(可能性)」の認識と両立し，このことが発話行為レベルに反映して，先の(284)で示したとおり，「断言」に対する「断言」という点でやはり「反論」に値しないと考えられる。従って，本来「反論」として機能しなければならない *WOHL* の用法が不備に終わると説明できる。

以上をふまえ，最後に，*WOHL* の適切な用法(292)を再考する。

(292) = (283)　A: Er hat die Prüfung nicht bestanden.　$\mathbf{ASSERT_x(\neg p)}$

B: Er hat sie *WOHL* bestanden.　$\mathbf{AVOUCH_y\ (BE_SURE_y(p))}$

この際，話し手 A の発話は，「彼は試験に合格しなかった(¬p)」という事態を真であるとみなす「断定」であり，「彼は試験に合格した(p)」という命題(世界)の排除を意味する。一方，話し手 B の発話は，「彼は試験に合格した」という事態を「確信している」とする「断言」であり，この発話は，確かに話し手 A の発話に対する反論ではあるが，筆者は，Zimmermann (2004a)らが示唆する「断定的な反論」ではなく，「断言的な反論」であると分

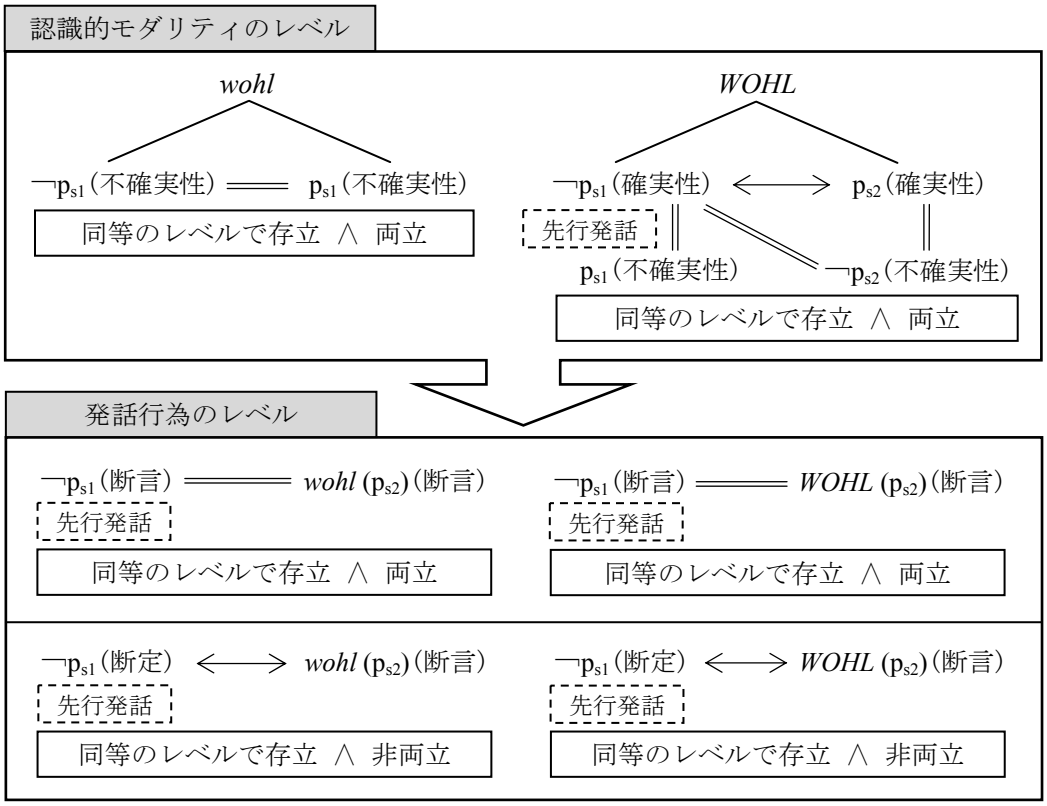
析する(= (293))。

(293) **ASSERT**$_x$(¬p) ⟺ **AVOUCH**$_y$(BE_SURE$_y$ (p)) ⟺ = 反論

つまり, *WOHL* (p)による反論は, 相手が¬*p* を「断定」したことによる「*p* の排除」に対する反論であり, 「¬*p* の断定によって *p* を排除すること」を許容しないという, 相手の「発話行為の修正を求める反論」であると結論づけられる。

まとめると, 認識的モダリティの観点において, *WOHL* (p)は, *wohl* (p)同様, *p*(確実性)と¬*p*(不確実性)の効力を許容し, このことが, 発話行為レベルに反映する。つまり, 発話行為の観点において, *WOHL* (p)は, 「断定」ではなく「断言」であると考察され, それゆえ, 先行発話が「断言」である場合には, *WOHL*(p)による反論は成り立たない。このように *WOHL* を再考することによって, モダリティおよび発話行為のレベルから, „wohl"の共時的な意味的共通性を統一的に説明することができる。下記(294)に, その意味的共通性を図示する。

(294)



(s1 = speaker 1, s2 = speaker 2)

5.1.1.3.「文タイプ修飾語」としての *wohl*

5.1.1.1.の最後の話題に立ち返る。「発話行為オペレータ修飾語」（Modifikatoren des Sprechaktoperators）として扱われる，いわば *ja-type* の心態詞に対して, *wohl* を「文タイプ修飾語」（Satztypmodifikatoren）とみなす分析である。それにあたり，まず 5.1.1.2.以降では, *wohl* の扱いに関する本研究の見解を述べた。本研究ではひとまず *wohl* を「心態詞」とみなし，意味最小限主義の立場に基づいて生じる *wohl* と *WOHL* の意味的な核の問題とその解決案を提示した。ここでは, Zimmermann（2004a, b）による *wohl* の分析を紹介し，心態詞 *ja* と *wohl* の結合を見る。

Zimmermann（2004b: 545）は, *wohl* の用法では，「話し手による„epistemic uncertainty“（認識的な不確実性）が表される」と述べる[100]。 例えば（295a）のような平叙文（Deklarativsätze）は,（295b）のように解され，この際の *wohl* の意味構造は（295c）のように表される。

(295) a. Peter ist *wohl* zuhause.（Peter は家にいるだろう）

b. Sprecher vermutet, dass Peter zuhause ist.（Zimmermann 2004a: 262）

c. *wohl (φ) = VERMUT (Sprecher, φ)*（cf. Grosz 2005: 173）

Sprecher = epistemische Verankerung（認識的な視点）

（295c）における *Sprecher* とは, Zimmermann（2004a: 257）が, „epistemische Verankerung“（epistemic reference point）（Zimmermann 2004a, b）と名づけるもので，当該文における認識的な視点の担い手を指す。つまり，談話における異なる会話参加者の知識・認識を指示するものである。Zimmermann（2004a: 258）の考察では，平叙文における認識的視点の担い手は「話し手」であり，疑問文では聞き手（もしくは同時に話し手も）と分析される。つまり，それぞれの文タイプで, *wohl* が表す「認識的な不確実性」の態度を担っているのが，平叙文では話し手，疑問文では聞き手（もしくは同時に話し手も）ということであり，裏を返せば，疑問文において，聞き手が当該の事態を確実であると評価している場合，その相手に *wohl* を伴う疑問文を用いることは不適切となる（= （296））。

[100] 同じく「認識的な不確実性」を表す話法詞 *vielleicht* や *vermutlich* との違いは，*wohl* が語彙的意味として「陳述内容の現実度についての話し手の評価」を明示しているのではなく，あくまでも，「そのような評価を聞き手に伝えるシグナルのはたらきをしている」という点にある（5.1.1.2., 3.5.4.を参照）。

(296) Flugkunde zu Airlineangestellter: # Geht der Flug wohl um 17.10 Uhr?

（乗客が航空会社の従業員に対して: # この便はたぶん 17 時 10 分発ですか？）

この点をふまえて, Grosz（2005: 171）では,「*wohl* を伴う質問では, 聞き手の知識を求めているのではなく, 聞き手の意見／想定を求めている」と述べられる。つまり, 聞き手に対して, 白か黒かの明確な返答を求めているわけではないことが示され, その結果, *wohl* を伴う要求（依頼）文では, *wohl* はしばしば「緩和」（Abschwächung）としての役目を担うと捉えられる。

また, 決定疑問文（Entscheidungsfragesätze）の場合は, まず「決定疑問文」という文タイプの分析を確認しておく必要がある。近年における決定疑問文の分析では, 例えば（297a）に挙げた„Regnet es?“（雨が降っているの？）は,（297c）で示される｛es regnet（雨が降っている）p, es regnet nicht（雨が降っていない）¬p｝という *Protofrage*（原始疑問）に, 疑問符（の記号）で表された発語内的力としての疑問オペレータ（illokutionärer Frageoperator）（Zimmermann 2004a）が適用されたものと解釈される。この「原始疑問」とは, まさに 3.6.1.でみた「思想」（Gedanke）の概念と重なるものであり, Lohnstein（2007: 75）における„bipartition“を指すものである。

(297) a. Regnet es? (Entscheidungsfrage)（*yes/no*-question）

b. p = es regnet (ausgedrückte Proposition)（expressed proposition）

c. {p, ¬p} = {es regnet, es regnet nicht} (Protofrage)（proto-question）

d. ?{p, ¬p} = ?{es regnet, es regnet nicht} (ausgeführte Frage)（real question）

≈ Sag mir was korrekt ist: Es regnet oder es regnet nicht.

(Tell me which of the alternatives is correct: It rains or it doesn't.)

（Zimmermann 2004a,b: 262, 549; Grosz 2005: 172; cf. also Lohnstein 2007: 75）

このような決定疑問文の解釈をふまえて, *wohl* を伴う下記（298a）の文を見てみると, まず（298b）のような *Protofrage* 内の解釈が不適切であるとわかる。なぜなら, その解釈では,「聞き手が, Hein が海に出ていることを推測しているか, あるいは推測していることはないか」を聞き手に問うことになるためである。このことから, *wohl* の作用域が, 少なくとも *Protofrage* よりも広いと想定される。

(298) a. Ist Hein *wohl* auf See? (Zimmermann 2004a: 263) (Hein は海に出ているの？)

b. ≠ ?{VERMUT (Hörer, Hein ist auf See), ¬VERMUT (Hörer, Hein ist auf See)}

≈ Sag mir was korrekt ist: Du vermutest, dass Hein auf See ist, oder es ist nicht der Fall, dass du vermutest, dass Hein auf See ist.

(Tell me which is correct: You assume that Hein is at sea, or you don't assume that Hein is at sea) (cf. Zimmermann 2004a: 263; Grosz 2005: 173)

では, *wohl* が *ja* と同様に, 発話行為オペレータ修飾語とみなされない理由は何であろうか。それは, 例えば(299a)に挙げるような平叙文における *wohl* の用法から導かれる。5.1.1.2.2. で述べたとおり, *wohl* の用法では命題 p とその反対命題¬p は両立する。換言すると, *wohl* は, *ja* の場合と異なり, [Hein ist auf See] (Hein は海に出ている) が真となる世界が容認されない。つまり, *wohl* は, *ja* のように記述的意味に追加的意味を付与するのではなく, 命題に対する認識的な強さ (epistemische Stärke) を弱める働きをすると捉えられる (cf. ibid.; Grosz 2005: 182)[101]。そのため, (299a) は, *ja* の場合で示したような (299b) や (299b') では解釈されえない。

(299) a. Hein ist *wohl* auf See. (cf. (259))

b. ≠ <*ASSERT* (Hein ist _ auf See); [[wohl]] >

b'. ≠ <*wohl* + *ASSERT* (Hein ist auf See) > (cf. Zimmermann 2004a: 267)

結果として, *wohl* の作用域は, *Protofrage* (bipartition) よりも広く, 発話行為オペレータよりも狭いことがうかがえ, (298a) で挙げた決定疑問文の例で示せば, 下記 (300b) のような解釈が

---

[101] Zimmermann (2004a, b) では, 下記のような例を通して, *wohl* が副文を抜け出て含意として解釈されえない点にも言及される。下記では, いずれも *wohl* で表わされる態度の担い手が話し手ではなく文の主体であり, その裏付けとして, 例 2 では, 態度の担い手が主語 *Deern* であるため, *faktive* (事実的) な動詞 *wissen* の内容, つまり副文である *dass*-節の中に, 不確実性の認識的態度を表す *wohl* を用いることが不可能であることが示される。

例 1: Schröder sagt, dass die SPD *wohl* Hilfe verdient.

(Schröder は, SPD は支援を受けるに値するだろうと言っている)

≠ <Schröder sagt, dass die SPD _ Hilfe verdient; *Sprecher ist unsicher, ob die SPD Hilfe verdient* >

例 2: *Die Deern weiß, dass Hein *wohl* auf See ist.

(その少女は, Hein が海に出ているだろうと知っている)

≠ <Die Deern weiß, dass Hein _ auf See ist; *Sprecher ist unsicher, ob Hein auf See ist* >

(Zimmermann 2004a: 265, 2004b: 553)

与えられることになる。(300b)は，「Hein が海に出ているか否かに関する聞き手の推測を聞かせてほしい」という解釈を表している。

(300) a. Ist Hein *wohl* auf See?

b. < ? *VERMUT*(Hörer,{Hein ist auf See, Hein ist nicht auf See})>

≈ Sag mir deine Vermutung darüber, was korrekt ist: Hein ist auf See oder Hein ist nicht auf See. (cf. Zimmermann 2004b: 550)

5.1.1.3.1. *wohl* の統語的な振舞い

本節では，以上述べた *wohl* の分析が，統語的な観点においていかに反映されるかという Zimmermann (2004a, b)の論述を要約する。

Zimmermann(2004a: 272)によると，文タイプ(平叙文，疑問文，感嘆文など)は，Rizzi (1997)で提唱された Split C 構造における ForceP(= Satzmodus に相当)に指定され，Force^0 に位置する文タイプ素性(*decl*, *int*, *imp*)によって決まると仮定される。Rizzi (1997)で言及される Force の概念は Chomsky (1995)に依るもので，生成文法の立場から„*The Fine Structure of The Left Periphery*"において，節構造(CP: complementizer phrase)の左端周辺部を談話領域と結びつける接点(インターフェース)と仮定し，下記(301)のような豊かな統語構造を提案した。ForceP, TopP, FocP, FinP などの機能範疇(functional category)は，補文標識システム(complimentizer system)を細分化したものである(cf. Rizzi 1997: 297)。

(301)

ForceP	—	TopP	—	FocP	—	TopP	—	FinP	—	IP・・・VP
force		topic		focus		topic		finiteness		inflection
(発話)力[102]		話題		焦点		下位話題		定形節		屈折

Zimmermann (2004a, b)では，さらに「ForceP は，文タイプを指定する他に，命題に対する態度表明の強さ(程度)もエンコードする」という新しい「想定」(Annahme)を立てる。そのうえで，*wohl* は LF(logical form)で ForceP の指定部に移動するオペレータであると主張

[102] Force の概念は，平叙文(declarative)，疑問文(interrogative)，命令文(imperative)，感嘆文(exclamative)といった文ムード(sentential mood/sentential force)を指すものであり，発語内効力(illocutionary force)自体を指すものではない。„Force"と規定すると，この *illocutionary force* と混同しやすく，統語構造と語用論が直結するかのような誤解を与えるが，ForceP はあくまで文タイプとしての最上位範疇である。

する（cf. also Grosz 2005: 176）。このことを, Zimmermann（2004a, b）に従って構造で示すと, 平叙文では（302）, 決定疑問文では（303）のようになる。

(302) a. Hania hat wohl auch ihre Chefin eingeladen.（Zimmermann 2004b: 545）

Hania has also her boss-fem invited

'Presumably, Hania has invited her boss, too.'

b. [$_{\text{ForceP}}$ decl$_{\text{Sprecher}}$ [$_{\text{TopP}}$ Hania [$_{\text{FinP}}$ hat [$_{\text{VP}}$ *wohl* [$_{\text{VP}}$ auch ihre Chefin eingeladen]]]]]. = overt

（cf. Zimmermann 2004a. 273; 2004b: 558）

c. [$_{\text{ForceP}}$ *wohl*$_{\text{i}}$ decl$_{\text{Sprecher}}$ [$_{\text{TopP}}$ Hania [$_{\text{FinP}}$ hat [$_{\text{VP}}$ t$_{\text{i}}$ [$_{\text{VP}}$ auch ihre Chefin eingeladen]]]]]. = covert

spec-head-agreement

（ibid.）

(303) a. Hat Hania *wohl* auch ihre Chefin eingeladen?（Zimmermann 2004b: 545）

Has Hania also her boss-fem invited

≈ 'What is your guess: Did she or didn't she invited her boss?'

b. [$_{\text{ForceP}}$ hat+int$_{\text{Hörer}}$ Hania [$_{\text{VP}}$ *wohl* [$_{\text{VP}}$ auch ihre Chefin eingeladen]]]? = overt

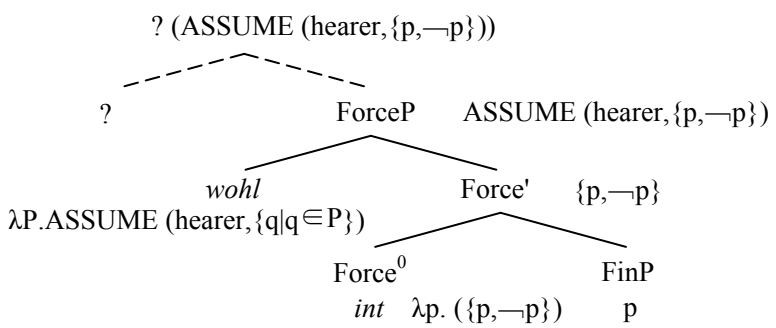
（cf. Zimmermann 2004b: 558）

c. [$_{\text{ForceP}}$ *wohl*$_{\text{i}}$ hat+int$_{\text{Hörer}}$ Hania [$_{\text{VP}}$ t$_{\text{i}}$ [$_{\text{VP}}$ auch ihre Chefin eingeladen]]]? = covert（ibid.）

spec-head-agreement

また, 下記（304）は, （303a）の文の完全な意味的派生過程（entire semantic derivation proceeds）を樹形図で示したものである（cf. Zimmermann 2004a, b; Grosz 2005）[103]。

(304)



[103] ForceP と疑問オペレータ"?"を結ぶ点線は, Grosz（2005: 179）を参照したうえで, 筆者が加工したものである。疑問オペレータは, Force^0 における文タイプ素性[int]と密接に関係するものであるが, 統語構造に直接反映する範疇ではないと考えられるためである。

上記の構造が示すとおり, *wohl* は, 動詞句 VP の付加位置(= IP layer)(Grosz 2005: 176; cf. Cinque 1999)に基底生成され, そこで *spell out* する。そして, 意味的には LF で ForceP の指定部(spec)に移動すると捉えられる。さらにその際, (302c)と(303c)の矢印が示すように, *spec-head-agreement* により, *wohl* は文タイプ標識(Satztypindikator)である *decl*/*int* の素性を引き継ぎ, 認識的視点(epistemische Verankerung)を決定すると述べられる。結果, 前節および本節の考察から, Zimmermann (2004a, b)は, „discourse particle"としての *wohl* を„Satztypmodifikatoren"(文タイプ修飾語)とみなす。

では, 5.1.1.1.で述べた *ja* と, これまでの *wohl* に関する分析をふまえて, 両者が結合した場合の語順がいかに分析されるかを見てみよう。

5.1.1.4. *ja* と *wohl* の語順とその解釈

(305)に示すとおり, 心態詞 *ja* と *wohl* が結合した場合, その語順は必ず[ja wohl]となり, (305a')のように[wohl ja]とすると非文になる。

(305) a. Konrad ist *ja wohl* verreist. (Doherty 1985: 83)
(Konrad は旅行に出たのだろうね)
a'. *Konrad ist *wohl ja* verreist. (ibid.)
b. Das darf *ja wohl* nicht wahr sein. (Thurmair 1989: 211)
(それはたぶん本当ではありえないだろうね)
c. Heute ist *ja wohl* Müllers letzter Arbeitstag. (Zimmermann 2004b: 565)
(今日は, たぶん Müller さんの退職日だね)

そこで, このような結合における *ja* と *wohl* の語順はどのように決まるか, つまり, *ja* と *wohl* それぞれの意味的な振舞いが, 語順に対していかに関与するかという疑問が生まれる。この点に関して, Zimmermann (2004a, b)は, 「発話行為オペレータ修飾語」と「文タイプ修飾語」という分析から説明を試み, (306)の点を示唆するに至る。(306)は, Grosz (2005) では (307) のように換言される。

(306) The different status of *ja* is confirmed by the fact that *ja* obligatorily takes syntactic and semantic scope over *wohl* when the two particles co-occur.（Zimmermann 2004b: 564）

(307) the fact that *ja* obligatorily precedes *wohl* in overt syntax mirrors their respective scope behavior at LF.（Grosz 2005: 184ff.）

下記(308)はその具体例で，意味的な解釈は(309)で示される。これらに従い，*ja wohl*-結合の解釈をまとめると，「*wohl* によって修飾された命題に対する認識的な想定を表現し，この想定を聞き手も共有しているという想定を表現する」(cf. Grosz 2005: 185)となる。そこで，*wohl* が *ja* をスコープにとる„Heute ist *wohl ja* Müllers letzter Arbeitstag“は非文となる。「*p* であると聞き手も知っていると想定している話し手が，そのことを話し手および聞き手が知らないかもしれないと想定する」のは矛盾をきたすためである。そして，この *ja wohl*-結合の解釈は，「発話行為オペレータ修飾語」が常に「文タイプ修飾語」よりも広いスコープを取り，それが語順に反映されることを意味している。

(308) = (305c) Heute ist *ja wohl* Müllers letzter Arbeitstag.
today is *ja wohl* Müller's last work-day
= Speaker assumes that today is Müller's last day at work and expresses his expectation that hearer should entertain the same assumption on the base of evidence available to him. （Zimmermann 2004b: 565）

(309) [ja_i [*ASSERT* [$_{ForceP}$ $wohl_j$ $decl_{Sprecher}$ [$_{TopP}$ heute [$_{FinP}$ ist [$_{VP}$ t_i t_j ...]]]]]] = LF
= <*ja* + *ASSERT* [*VERMUT* (Sprecher, heute ist Müllers letzter Arbeitstag)]>
（cf. Zimmermann 2004a: 284; Grosz 2005: 186）

以上の分析をふまえ，次節から心態詞 *mal* の結合に関する分析に移る。その際の道具立てとして，5.2.1.と 5.2.2.で，心態詞 *mal* の意味論的・統語論的な仮説を提起する。そして，5.2.3.において，心態詞 *ja*, *denn*, *wohl* との結合形を取り上げ，その仮説の有効性を検証する。

5.2. *mal* の結合

心態詞 *mal* の結合に関しては，特に Bublitz（2003）が挙げられる。Bublitz（2003: 185）によれば，*mal* は，他の心態詞や副詞と結びつく傾向が極めて高い。口頭言語コーパスである Freiburger Korpus（フライブルク・コーパス）に従う限り，*mal* が単独で使用される割合と，他の心態詞や時間副詞，話法詞と重複する割合は１対９であるとされる（ibid.: 187）。Bublitz（2003: 188）は，このような重複現象を„Partikelkollokation“（不変化詞の連語関係）と名づけ，特に *ja mal, doch mal, schon mal, eben/halt mal, nun mal, ruhig mal, kurz mal* に注目して *mal* の機能を考察する。結合で使用された場合の *mal* は，他の緩和標識（話法詞や接続法を含む）を促進するいわば„Katalysator“（媒体）であると捉えられ，少なくともここに挙げた結合では，一貫して，いずれも心態詞 *mal* の効果が高められ，„Intensivierung der Abschwächung“（緩和の最大化）（ibid.: 196）を導くものであるとされる（cf. ibid.: 187, 199）。そして，「ドイツ語において „Abschwächungspartikel“（緩和詞）の代表格である *mal* は，意味的，機能的な核（Kern）であり，結合全体の内容と意味を決定している」（ibid.: 198）と結論づけられる。

2.3.1.の（45）で挙げた Thurmair（1989: 279）における表に従えば，心態詞 *mal* の結合可能性としては，下記（310）の 19 パターンが挙げられる（二語の結合に限る）。とはいえ，まず取り消し線で表わされる *aber mal* は，統語的に不可，つまり文タイプ制限によって非文となる結合であるため排除される。というのは，心態詞 *aber* が感嘆文（Exklamativsätze）でしか現れないのに対して，心態詞 *mal* は平叙文（Aussagesätze/Deklarativsätze），疑問文（Interrogativsätze），命令文（Imperativsätze）で現れるためである（= 統語的制約）[104]。

(310) ~~*aber mal*~~, *?auch mal*, **bloß mal*, *?denn mal*, *doch mal*, *eben mal*, *?eigentlich mal*, *einfach mal*, *?etwa mal*, *halt mal*, *ja mal*, **JA mal*, *nicht mal*, *nur mal*, *ruhig mal*, *?schon mal*, *sowieso mal*, *?vielleicht mal*, *wohl mal*

[104] Thurmair（1989: 280）では，確かに„aus syntaktisch-distributionellen Gründen nicht zulässig“（統語的・配語的な理由から容認不可）とされているが，これは，Thurmair（1989）が文タイプ（Formtyp）を７つに分類していることに依拠する。例えば„Du hast (vielleicht) einen tollen Pelzmantel!“（君は（なんて）素敵な皮のコートを持っているんだ！）（Thurmair 1989: 45）のような文は（文-）感嘆文（(Satz-)Exklamativsatz）とみなされ，基本タイプの１つとする平叙文（Aussagesatz）とは区別される。上の文が，„Hast DU einen tollen Mantel!“のように動詞第一位で言換え可能であるという動詞位置の任意性，および感嘆符が示すとおり，いずれも感嘆イントネーションで発音される点に従った分類である。しかし，このような分類を仮定せず，例えば Bublitz（1978: 43）に従い，基本的な文タイプを平叙文（Aussagesatz），要求文（Aufforderungssatz），決定疑問文（Entscheidungsfragesatz），補足疑問文（Ergänzungsfragesatz）の４つに絞った場合，„Du hast (vielleicht) einen tollen Pelzmantel!“は統語的に平叙文とみなされ，「心態詞 *aber* が感嘆文でしか現れず，心態詞 *mal* が感嘆文では現れないために結合不可」とする Thurmair（1989）の主張は，統語的制約ではなく意味的制約ということになる。

また，アスタリスク記号が示すのは，心態詞としての意味機能が支障をきたす結合である（= 意味的制約）。例えば，*bloß mal* や *JA mal* は，いずれも命令文と共起可能であり，共に「要求」を表す発話行為での現れにおいては問題ない。しかし，この場合の *bloß* や *JA*（強勢あり）は，「要求」の強制力の比重を強める（verstärken）という目的で使用されるのに対し，*mal* はその比重を弱める（abschwächen）ために用いられる。最後に，疑問符のつけられた結合は，心態詞 *mal* としての用法では容認不可能な結合というものである。例えば，*denn mal* や *eingentlich mal* では，文全体の発話行為は必ず「質問」（question/interrogate）になるため，「要求」（request）に一義化される心態詞 *mal* の用法は相容れない。つまり，発話行為タイプ制限に相当する。この点に関しては，5.2.3.で再度述べる。

以上から，心態詞 *mal* との‘純粋な’結合としては，下記（311）の 9 種が残ることになる[105]。このうち，要求行為を表す文での *ja mal* や *doch mal* は非常に顕著な結合であり，*doch mal* に関しては，„Diese Kombination ist wohl die frequenteste und kann als stereotypisiert angesehen werden“（おそらく最も頻出し，ステレオタイプとみなされうる結合である）（Thurmair 1989: 226）と考えられる。

(311) ***doch mal***, ***eben mal***, ***einfach mal***, ***halt mal***, ***ja mal, nicht mal, nur mal***, ***ruhig mal***, ***wohl mal***

（311）の結合に共通するのは，（心態詞 *mal* の側から見た結合であるため当然であるが）いずれも発話行為「要求」（Aufforderung）が遂行されうる文で使用されるという点である。「*doch mal*, *einfach mal*, *ja mal*, *ruhig mal* が平叙文で用いられるのは，やはり話法の助動詞などを含み，要請の意味を持つ場合である」（井口 2000: 143）。

先に述べたとおり，心態詞結合に関する Thurmair（1989）の主張は，「心態詞が結合した場合の意味は，個々の心態詞の意味の総和である」と捉える点に集約される。井口（2000: 144）でも，「基本的にはそれぞれの心態詞が持つ機能が加算されたものと考えてよい」と述べられる。Bublitz（2003: 196）にいたっては，„Das Augenmerk des Hörers richtet sich nicht auf jedes einzelne der beiden Elemente in ihrer linearen Abfolge, sondern auf ihre Duplizität.“（聞き手の関心は，個々の単語の語順にあるのではなく，その多重性に向けられる）と述べられ，不変化詞

[105] *sowieso mal* に関しては，1.5.1.の（18）で示したとおり，*sowieso* は本研究における心態詞に該当しないと考えるため，ここでも除外することとした。

の表すステータスの並行性(Parallelität)から，聞き手は，意味的・機能的な類義性(Synonymie)を推し量るとまとめられる。

しかし，例えばVorderwülbecke（1981: 151）では, Becker（1976）に言及して，このように心態詞結合を純粋な意味の総和であるとみなす考え方を誤り(Fehler)であるとする。実際に「誤り」であるかどうかはさておき，「不十分」であることは言うまでもないであろう。結合が単に「意味の総和」であるならば，語順が制限される理由が説明できない。先に挙げた *ja mal* や *doch mal* だけを見ても，その語順を入れ替えると一変して非文になるのである(**mal ja*, **mal doch*)。また，非文とまではならなくとも，例えば「要求」における *eben mal* が純粋に心態詞結合とみなされるのに対し, *mal eben* と語順を変えた場合, *eben* はむしろ時間副詞として機能することになる(cf. Thurmair 1989: 247)。そのため，下記(312)のように，別れ際に発せられた要求文で *mal eben* が用いられると，時間副詞としての *eben* が，„schnell“(早い)や „gerade“(今しがた)を意味することで，「要求」の内容が発話直後に実行されることを望むことから容認が不可能となる。

(312) *Beim Abschied:* *Und schreib mir *mal eben*!（Thurmair 1989: 248）
(別れの際: じゃあ，すぐに手紙書いてね)

以上の点から，筆者は，心態詞結合における語順の意義に注目し，たとえ「意味の総和」であるとしても，このことがいかに統語的な振舞いを決定づけているかという疑問を呈する。つまり，個々の心態詞の統語的な現れとその意味構造との間に，どのような関係が存在しているかという「構造と意味のインターフェース」に焦点を置き，そこから心態詞 *mal* の意味をあらためて推敲する。先に述べたとおり，本研究では，心態詞 *ja*, *denn*, *wohl* との３種の結合を取り上げる。たとえ試験的な段階であれ，これらの結合を考察するだけでも，心態詞 *mal* の統語論的・意味論的な振舞いを確認することができると考えられるためである。

5.2.1. *mal* に関する意味論的仮説　－発話行為オペレータ修飾語

ここでは，心態詞 *mal* の作用域(scope)に注目し，心態詞 *mal* を「発話行為オペレータ修飾語」とする見解を示す。2.3.2.1.や 4.4.2.2.3.で述べたとおり，心態詞 *mal* は，発話に「要求」の性質を付与し，意図された話し手の態度を明確にすると考えられてきた(cf. Wunderlich

1976; Helbig 1977; Franck 1980; Thurmair 1989; Hentschel 1991)。下記(313)の例が示すとおり，心態詞 *mal* は，主に「話法助動詞 *können* を伴う平叙文」や「(決定)疑問文」において，多義的な発話行為を表すと考えられうる発話を，「要求」の読みに限定(一義化)する。また，(313d)の例は, *mal* が発話に「要求」の性質を付与することを顕著に示している。

(313) a. Du kannst das Fenster schließen.［主張／要求］ = 多義的
(直訳: 君は窓を閉めることができる)
a'. Du kannst *mal* das Fenster schließen.［要求］(Helbig 1977) = 一義的
(窓を閉めて)
b. Machst du das Fenster auf?［質問／要求］(窓を開けるの？)
b'. Machst du *mal* das Fenster auf?［要求］(窓を開けてくれる？)
c. Kannst du *wohl* Dänisch sprechen?［質問／要求］
(ひょっとしてデンマーク語を話せるの？)
c'. Kannst du *mal* Dänisch sprechen?［要求］
(デンマーク語を話してみてくれる？)
d. (Im Telefongespräch(電話での会話において))
Hast du *mal* was zu schreiben?［要求］
(何か書くものある？(あれば貸してくれる？))(# = 語用論的に不適切)

では，この「要求の一義化」は，心態詞 *mal* の心的態度といかなる関係にあるのだろうか。本研究では，心態詞の心的態度を「含意」であるとみなし，4.5.2.1.では，心態詞 *mal* の心的態度について言及した。下記(314)に, *mal* の心的態度をまとめた(221)を再録する。

(314) = (221) 当該の語を伴う命題に対して，その内容を些事であると話し手がみなしており，かつ話し手と聞き手の間に，連帯性の基盤が確立されていると話し手がみなしているとして解釈せよ。

(314)に，仮に「当該の発話を『要求』として解釈せよ」といった態度(指令)も含まれていると考えてみると，大きな問題あるいは矛盾が生じる。筆者が，心態詞の機能的な意味であ

る心的態度として応用した手続き的コード化の考え方とは,「聞き手が行う推論処理の仕方に制約を課し, 聞き手がとるべき推論の方法を指示して, 無駄な労力を使わず効率よく意図された効果を得る助けを促す」(3.5.4.2.を参照)というものであった。この際, ー相手の立場によって方向性は異なるものの－本来「要求の緩和」を目的として用いられる *mal* が, 聞き手の推論処理に対して,「これは要求である！」などと制約を課してしまっては本末転倒である。*mal* の機能が「緩和」であり, その「緩和」の対象となるのが「要求」であることから, *mal* が使用された場合, その発話は「要求に一義化」される, という一連の流れは, 話し手側の観点から捉えると矛盾をきたす。もし, 話し手が, *mal* を用いて「要求の一義化」を意図したうえで,(話法助動詞 *können* を伴うような)間接的な発話行為を遂行したのであれば, 同時に, その話し手が,(自ら明示した)「要求」に対して緩和策を講じるというのは,「緩和」の対象となるべき「要求」を必要とするために, もともと緩和的な要求でありうる多義的な発話行為を, あえて一義的な発話行為として遂行するといった循環論的な問題をはらむ。従って, 話し手側から捉えた場合, 心態詞 *mal* の心的態度は,(314)に記した内容に留めるべきであり,(313a-d)のような発話が,「要求」として理解される要因は, 聞き手側に委ねられていると考えた方が妥当である。つまり, 心態詞 *mal* の使用で, 話し手による(314)の心的態度を向けられた聞き手が, 当該発話の最適な関連性を図るうえで「要求」の読みを導くと考えられる。換言すれば, 妥当な文タイプや命題内容といった条件下で *mal* が使用されたからには,「要求」として解釈することが, 最も効率の良い解釈であると聞き手が判断するのである。(313d)などはその典型であり, *mal* を伴わない場合の発話であれば, 単に「書くものがあるか否か」を問う質問として解釈が可能であるのに, そこに(314)のような心的態度を示されては, もはや解釈のしようがなくなってしまう。

以上のことをふまえ, そのような「要求の一義化」の原理が, *mal* の作用域にどのように反映されるかを考えてみる。ここでは, その原理が最もわかりやすい決定疑問文を例にとることにする。決定疑問文という文タイプに関する分析は先(297)で示したとおりであるが, そこに心態詞 *mal* を適合すると, 例えば(315a)の発話は,(315b)のように解釈されうる。というのも, 下記(316a-c)の分析では, それぞれ(316a'-c')のような問題点が観察されるためである(以下, *mal* の作用域に関しては「連帯性」の態度は関与しないため, 混乱を避ける意味で記述に加えないこととする)。

(315) a. Machst du (*ein)mal* das Fenster auf?（窓を開けてくれる？）

b. < *mal* + *?*{Hörer macht das Fenster auf, Hörer macht das Fenster nicht auf}>

＝(*?*{Hörer macht das Fenster auf, Hörer macht das Fenster nicht auf}) & *BEILÄUFIG* (Sprecher, (Hörer macht das Fenster auf))

（*Sprecher* = *Einstellungsträger*（態度の担い手））

(316) a. *?*{Hörer macht *ein Mal/kurzzeitig/(irgendwann)* das Fenster auf, Hörer macht *ein Mal/ kurzzeitig/(irgendwann)* das Fenster nicht auf} = 時間副詞解釈

a'. ［要求］に一義化される（［質問］を排除しない）理由が説明できない点で誤りである。

b. *?*{*BEILÄUFIG* (Sprecher, (Hörer macht das Fenster auf)), ¬(*BEILÄUFIG* (Sprecher, (Hörer macht das Fenster auf))} = *Protofrage* 内解釈

b'. ［聞き手が窓を開けることを話し手が些事とみなさないこと］を聞き手に問うことになるために誤りである。

c. *?* (*BEILÄUFIG* (Sprecher, {Hörer macht das Fenster auf, Hörer macht das Fenster nicht auf})) = *Protofrage* 外かつ発話行為オペレータ内解釈

c'. ［聞き手が窓を開けないことを話し手が些事とみなす］という点で誤りである。

結果として，(315b)の解釈が妥当であるとみなされる。従って，決定疑問文における心態詞 *mal* の使用では，*mal* が，疑問符"?"で表わされる発話行為オペレータ（疑問オペレータ）を修飾する形で，発話が「要求に一義化」されると考えられる。

しかし，*mal* という語が，それ自体で発話行為標識（Sprechaktindikator）として「要求」と１対１の関係にあるわけでもない。2.3.2.1.で触れたが，心態詞を発話行為標識とみなす考え方は通用しない（5.1.1.1.も参照）。実際，例えば„Kommt Hein bei dir vorbei?“（Hein は君のもとに来るの？）という決定疑問文に *mal* が付与されたとしても，決して「要求」の読みが生じることはない。また，ある種の平叙文における *mal* をも心態詞とみなす Bublitz (2003) に従うならば，例えば„Natürlich gibt es Unterschiede, ich nenne mal ein Reizthema: [...]“（ibid.: 186）における *mal* は，「陳述の重要性や関連性を比較的小さいものであると特徴づけ，かつ真理判断の断定を相対化する」（ibid.）とされ，この用法が「要求」と結びつくことはない。要するに，心態詞 *mal* は，あくまで「一人称主語／二人称主語」かつ「現在時制／未来時制」で，「話法

助動詞 *können*, *sollen*, *müssen*, *dürfen* を伴う平叙文」や「(決定)疑問文」といった潜在的に「要求」を表しうる発話という条件のもとで，慣習的に「依頼」を生み出しており，その原理として，話し手は，*mal* によって「些事性」を含意し，「聞き手の実行能力の見込み」(cf. Bublitz 2003: 186)を示すことで，聞き手に「要求(依頼)」としての読みを推定させるものと考えられる。

このような考察に基づき，本研究では，心態詞 *mal* を「発話行為オペレータ修飾語」とみなす。その結果，平叙文においては，断定オペレータ"ASSERT"を修飾し，疑問文では，疑問オペレータ "?"を修飾することで，潜在的に「要求」を表わす発話が「要求」の発話として一義化される可能性を与える[106]。5.1.1.1.において，「発話行為オペレータとは，直接統語構造には反映されず，意味的な素性である文タイプ素性と密接に関連する統語論と意味論の接点をなす要素であり，さらには，最終的な発話行為の決定に関与する点で，意味論と語用論の接点をなす要素でもある」と述べた。後者は，例えば下記(317)の発話文が，この発話自体で「疑問／質問」の発語内的力をもつものの，後続発話(コンテクスト)次第で，「勧誘」や「依頼」，場合によって「非難」といった異なる発語内行為(効力)が決定するという「会話シークエンス」(konversationelle Sequenz)の考え方に類似するものとして捉えることができる[107]。

(317) Hast du morgen Abend Zeit? (明日の夜あいてる？)

つまり，平叙文という文タイプは，「断定」の発語内的力をもつものの，「断定」の発語内行為(効力)としては決定されておらず，文タイプは，全体としての言語行為の一助にすぎない。同様に，疑問文でも，「質問」の発語内的力をもつが，同時に「質問」の発語内行為(効力)として一義的に決定されるわけではないと考えられる。そこで，「会話シークエンス」における後続発話に相当するものとして，心態詞 *mal* がある種その役割を担い，それぞれの発語内的力(断定・疑問オペレータ)に作用して，「要求」の発語内行為を決定づける手助け

[106] 命令文に関する考察は行っていないが，この文タイプにおいては，文タイプ自体がすでに「要求の一義化」を成しているとも考えられることから，*mal* はやはり発話行為オペレータ(命令オペレータ(仮: "!"))に作用し，「些事性」と「連帯性」の含意によって，要求の緩和に貢献するものと考えられる。なお，このことは，4.5 節で示唆した「*mal* の緩和機能が，命令文において最も顕著に示される」という点と合致するものである。

[107] 「会話シークエンス」に関しては，飯野(2007: 37ff.)を参照した。

を行うのではないかと推測される。この意味で，筆者は，心態詞 *mal* が発話行為オペレータを修飾する語であるとみなす。

5.2.2. *mal* に関する統語論的仮説 －生成位置と移動

本節では，不変化詞*(ein)mal* の統語的な振舞いについて述べる。ここで「不変化詞」と称したのは，時間副詞*(ein)mal* も考慮に入れて，意味最小限主義の立場から，(*ein)mal* に関する１つの統語的な仮説を提起するためである。そのうえで，次節以降において，心態詞 *mal* の結合形を手がかりに，前節の意味論的な分析も加味しながらその仮説の有効性を確認する。

まず，文の表層に見られる心態詞の現れとして, Grosz（2005）を参照する。Grosz（2005）によれば, Cinque（1999）が提唱した„universal hierarchy of clausal functional projections“（機能投射の普遍的階層性）における $\text{Mood}_{\text{speech act}}$（例: frankly = offengesagt など）あるいは $\text{Mood}_{\text{evaluative}}$（例: fortunatly = glücklicherweise など）(=（318)）を境目とした心態詞の配語，つまり，これらの語よりも左側に生起するか否かに基づいて，下記（319）の表に示すとおり，心態詞の<u>統語的な／語順のタイプ</u>は，*ja-type*（ja, denn, eben, doch,（wohl））と *mal-type*（ruhig, mal）に大別される（Grosz 2005: Ch.2; cf. Thurmair 1989: 278ff.; 1991: 33; Abraham 2000: 339ff., 344）。とりわけ，他の心態詞との結合に際しての *mal* の位置に関しては, Abraham（2000: 339）において, „The MP *mal* occurs more frequently in combinations with other particles, however, always in second position.“とある。

(318) *The universal hierarchy of clausal functional projections (a second approximation)*

[*frankly* $\text{Mood}_{\text{speech act}}$ [*fortunately* $\text{Mood}_{\text{evaluative}}$ [*allegedly* $\text{Mood}_{\text{evidential}}$ [*probably* $\text{Mood}_{\text{epistemic}}$ [*once* T(Past) [*then* T(Future) [*perhaps* $\text{Mood}_{\text{irrealis}}$ [*necessarily* $\text{Mod}_{\text{necessity}}$ [*possibly* $\text{Mod}_{\text{possibility}}$ [*usually* $\text{Asp}_{\text{habitual}}$ [*again* $\text{Asp}_{\text{repetitive(I)}}$ *often* $\text{Asp}_{\text{frequentative(I)}}$ [*intentionally* $\text{Mod}_{\text{volitional}}$ [*quickly* $\text{Asp}_{\text{celerative(I)}}$ [*already* T(Anterior) [*no longer* $\text{Asp}_{\text{terminative}}$ [*still* $\text{Asp}_{\text{continuative}}$ [*always* $\text{Asp}_{\text{perfect(?)}}$ [*just* $\text{Asp}_{\text{retrospective}}$ [*soon* $\text{Asp}_{\text{proximative}}$ [*briefly* $\text{Asp}_{\text{durative}}$ [*characteristically(?)* $\text{Asp}_{\text{generic/progressive}}$ [*almost* $\text{Asp}_{\text{prospective}}$ [*completely* $\text{Asp}_{\text{SgCompletive(I)}}$ [*tutto* $\text{Asp}_{\text{PICompletive}}$ [*well* Voice [*fast/early* $\text{Asp}_{\text{celerative(II)}}$ [*again* $\text{Asp}_{\text{repetitive(II)}}$ [*often* $\text{Asp}_{\text{frenquentative(II)}}$ [*completely* $\text{Asp}_{\text{Sgcompletive(II)}}$ （Cinque 1999: 106）

(319)

統語論的分析（**syntaktische Analyse**）（cf. Grosz 2005: 77, 79）	
***ja/denn*-Typ**（*ja*, *eben*, *doch, denn, (wohl)*）	***mal*-Typ**（*ruhig*, *mal*）
[$_{(CP)}$ [$_{FP1}$ *ja* [$_{FP2}$ *eben* [$_{FP3}$ *doch* [$_{Mood\text{-}speech\ act}$ *offengesagt* [$_{Mood\text{-}evaluative}$ *glücklicherweise* [$_{FP4}$ *ruhig* [$_{FP5}$ *mal* ... [$_{(CP)}$ [$_{FP1}$ *denn* [$_{FP2?}$ *wohl* [($_{Mood\text{-}speech\ act}$) [$_{FP2}$ *wohl* [$_{Mood\text{-}evaluative}$ *glücklicherweise* … (*FP = functional projection*)	
（cf. also Thurmair 1989, 1991; Abraham 2000; Bublitz 2003）	

下記（320）は，その際のテストで使用された具体例である。

(320) a. ^{OK}Du kannst *ja glücklicherweise ruhig mal* zu ihr rübergehen.（Grosz 2005: 74）

b. ?*Du kannst *ja ruhig mal glücklicherweise* zu ihr rübergehen.（ibid.）

c. ?*Du kannst *ja ruhig glücklicherweise mal* zu ihr rübergehen.（ibid.）

d. ^{OK}Du kannst *doch offengesagt ruhig mal* zu ihr rübergehen.（ibid.: 75）

e. ?*Du kannst *doch ruhig mal offengesagt* zu ihr rübergehen.（ibid.）

f. ## Du kannst *doch ruhig offengesagt mal* zu ihr rübergehen.（ibid.）

g. ^{OK} Das ist ja *wohl glücklicherweise* kein Problem.（ibid.: 81）

h. $^{OK?}$ Du kannst *ja wohl glücklicherweise* zu ihr rübergehen.（ibid.）

i. ## Du kannst *ja glücklicherweise wohl* zu ihr rübergehen.（ibid.）

以下では，まず，動詞句 VP を Ereignis（英: event）（イベント），時制句 TP を Proposition（命題）とみなす。従って，時間副詞としての*(ein)mal* はイベントを修飾し（厳密には，アスペクト句 AspP の指定部（spec）に基底生成: 4.3.1.参照），心態詞としての *mal* は，時制を含む命題を作用域にとるとする。

本研究は意味最小限主義の立場をとる。つまり，心態詞とその同音異義語の用法に共通する最少の抽象的意味を抽出する立場である。そこで，不変化詞*(ein)mal* は，基底構造で動詞句 VP の付加位置に生起し（cf. Abraham 2000; Zimmermann 2004a, b; Grosz 2005; cf. also Cardinaletti

2007)，基底生成の段階では，潜在的に，[temporal]素性と[modal]素性を同時にとると仮定する。心態詞が VP の付加位置あるいは IP layer（Cinque 1999）に基底生成されるという考え方は, Abraham（2000）, Zimmermann（2004a, b）, Grosz（2005）などでも取られる立場であるが，心態詞 *mal* に関して，時間副詞 *einmal* が動詞句内部での解釈を許容する点に基づき，２つの素性を同時にとりうる（$mal_{[\text{temporal (feature)\&modal (feature)}]}$）と仮定することは筆者による提案である。また，その際, [modal]の素性には[-3.person, -past]の下位素性（subfeature）が含まれると考える。なぜなら，心態詞としての *mal* が使用される場合には，三人称あるいは過去時制であってはならないという条件が課せられるためである。そのうえで，前節（313）で挙げた例のように，潜在的に「要求」の解釈が可能な文に対して，話し手が *mal* を心態詞として使用する場合，上述の下位素性がトリガーとなって *mal* は時制句 TP の付加位置，つまり命題のソトに随意的に移動すると捉える。このとき，その移動の結果として[modal]の素性が認可され，[temporal]の素性は不適合（imcompatible）となる[108]。このことを示したのが下記（321）である。

(321) a. Machst du *mal* das Fenster auf?

b_1. [$_{VP}$ $mal_{[\text{temporal\&modal}]}$ [$_{VP}$ du das Fenster aufmachen]]? = 基底

b_2. [$_{TP}$ du_k [$_{VP}$ $mal_{[\text{temporal\&modal}]}$ [$_{VP}$ t_k das Fenster auf~~machen~~]] machst]? = 命題形成

b_3. [$_{TP}$ $mal_{i[\cancel{\text{temporal\&}}\text{modal}]}$ [$_{TP}$ du_k [$_{VP}$ t_i [$_{VP}$ t_k das Fenster auf~~machen~~]] machst]]? = 移動

b_4. [$_{ForceP}$ $machst_{m[+int]}$ [$_{FinP}$ du_k [$_{TP}$ $mal_{i[\text{modal}]}$ [$_{TP}$ t_k [$_{VP}$ t_i [$_{VP}$ t_k ... auf~~machen~~]] t_m]]]]? = 表層

一方，下記（322）に示すような，潜在的に「要求」を表さない文（三人称，完了）で，仮に時制句 TP の付加位置に移動した場合，心態詞としての *mal* の素性が照合できないため, *mal* は基底位置（VP）に留まることで[temporal]の素性が認可されるものとする。つまり，時制句 TP に何もマージされず，そのまま（322）の表層が形成された時点で, *mal* が VP 内に留まっていることを意味する。そしてこの際も，その非移動の結果として, [modal]素性が不適合となる。

[108] 素性が不適合（imcompatible）になるとは，時間副詞としての読みが不適切になるということであり，心態詞 *mal* の意味から,（時間副詞 *einmal* にも付随する）「基本的意味」が削除（erasion）されるということではない。

(322) Peter hat *mal* in Berlin gewohnt.

[$_{VP}$ *mal*$_{[temporal\&modal]}$ [$_{VP}$ Peter in Berlin wohnen-haben]] = 基底

[$_{FinP}$ Peter$_k$ hat [$_{TP}$ t$_k$ [$_{VP}$ *mal*$_{[temporal\&modal]}$ [$_{VP}$ t$_k$ in Berlin ~~wohnen-haben~~]] gewohnt] = 表層

*[$_{FinP}$ Peter$_k$ hat [$_{TP}$ *mal*$_{i[modal]}$ [$_{TP}$ t$_{k'}$ [$_{VP}$ t$_i$ [$_{VP}$ t$_k$ in Berlin]] gewohnt]]

このような考え方は, *mal* の時間副詞などとの共起に関する Bublitz（2003）や Coniglio（2007）の示唆に起因するものである。例えば Coniglio（2007: 108）には，下記（323）のような記述がある。

(323) Problematischer stellt sich der Fall von *mal* dar, da die Unterscheidung zwischen der Modalpartikel und dem homophonen Temporaladverb oftmals schwer ist. Repetitive Adverbien wie *wieder* scheinen als Grenzlinie zwischen *mal* in seiner Partikelfunktion (ia) und dem Temporaladverb (*ein)mal* (ib) zu fungieren.

(i) a) Komm (**ein)mal* wieder vorbei (= MP).

b) Komm wieder (*ein)mal* vorbei (= Temporaladverb).（Coglinio 2006: 108）

［比較的問題なのは *mal* の場合である。なぜなら，心態詞とその同音異義語である時間副詞との区別がしばしば困難なためである。*wieder* のような反復を表す副詞が，心態詞機能を持つ *mal*（ia）と時間副詞*(ein)mal*（ib）との境界づけとして機能するように思われる］

(i) a) (**ein)mal* また立ち寄りなさい（= 心態詞）。

b) (*ein)mal* また立ち寄りなさい（= 時間副詞（いつかの意））。

従って，例えば（324a-c）のような文において, *mal* がスクランブリングされるか否かで時間副詞$_{[temporal]}$あるいは心態詞$_{[modal]}$としての使用の区別がなされることになる。

(324) a. Kommst du *morgen mal*$_{[temporal]}$ zu mir?（明日（一度）私のところに来る？）

a'. Kommst du *mal*$_{[modal]}$ *morgen* zu mir?（明日私のところに来てくれる？）

[$_{ForceP}$ kommst$_{[+int]}$ [$_{FinP}$ du$_k$ [$_{TP}$ *mal*$_{i[modal]}$ [$_{TP}$ t$_{k'}$ [$_{VP}$ *morgen* [$_{VP}$ t$_i$ [$_{VP}$ t$_k$ ...]]]]]]]? = 表層構造

[*mal*$_{i[modal]}$ [? [$_{ForceP}$ kommst$_{[+int]}$ [$_{FinP}$ du$_k$ [$_{TP}$ t$_{i'}$ [$_{TP}$ t$_{k'}$ [$_{VP}$ *morgen* [$_{VP}$ t$_i$ [$_{VP}$ t$_k$ ...]]]]]]]]]

= Logical Form（論理形式）

b. Gehst du *irgendwann* $mal_{[temporal]}$ zur Uni?（いつか（一度）大学に行くの？）

b'. Gehst du $mal_{[modal]}$ *irgendwann* zur Uni?（いつか大学に行ってくれる？）

c. Zeigst du ihm *zunächst* $_{VP}$ $mal_{[temporal]}$ das Bild?（まず（一度）彼にその写真を見せる？）

c'. Zeigst du ihm $_{TP}$ $mal_{[modal]}$ *zunächst* das Bild?（まず彼にその写真をみせてくれる）

（cf. Bublitz 2003: 195）

例えば,（324a）では,「聞き手が, 明日中に少なくとも一度話し手のもとに来るか否か」が問われているのに対し, *mal* が移動した（324a'）では,「聞き手が, 明日中に話し手のもとに来ること」が聞き手に求められている。同様に,（324b）では,「いつか少なくとも一度大学に行くか否か」が問われており,（324b'）では「いつか行ってほしい」ということが表現されている。その裏づけとして, 例えば（325）に示すとおり, 心態詞としての *mal* の使用では, 純粋な「質問」としての解釈が容認されにくい。

(325) A: Gehst du *mal* morgen zur Uni?（いつか大学に行ってくれる？）

B: ＜（依頼と判断した上で）行かない旨を伝え, A の意図を確認する＞

Nein, ich gehe morgen nicht. Soll ich lieber gehen?

（ううん, 明日は行かないよ。それとも行ってくれってこと？）

A: # Nein, das meinte ich nicht. Ich wollte nur fragen.（# ＝ 語用論的に不適切）

（ううん, そういう意味じゃなくて。ただ訊きたかっただけ）

cf. A: Gehst du morgen *mal* zur Uni?（明日（少なくとも一度）大学に行くの？）

B: ＜（依頼と判断した上で）行かない旨を伝え, A の意図を確認する＞

Nein, ich gehe morgen nicht. Soll ich lieber gehen?

（ううん, 明日は行かないよ。それとも行ってくれってこと？）

A: ＜行くのであれば, 家の鍵を預けておこうと思い＞

Nein, das meinte ich nicht. Ich wollte nur fragen.

（ううん, そういう意味じゃなくて。ただ訊きたかっただけ）

以上, 本節では, 心態詞 *mal* の統語的な振舞いに言及し, まず表層において, *mal* は他の心態詞との比較で, 最も右側, つまり最も命題寄りの位置に現れること, また, 先行文献の記述や時間副詞との共起に基づいて, 意味最小限主義の立場から, 基底で *mal* が動詞句 VP の

付加位置に生起し，心態詞としての使用では，時制句 TP の付加位置に移動するといった仮説を呈示した。

次節では，この統語的な観点と，前節で述べた心態詞 *mal* の意味的振舞いに関する予測，つまり，心態詞 *mal* は「発話行為オペレータ修飾語」であるという観点を兼ね合わせ，これらの捉え方の有効性を検証するために，*mal* の他の心態詞（ja, denn, wohl）との結合に注目する。考察の対象とするのは，（326a-c）のような文での心態詞 *mal* の意味的・統語的な現れである。その分析は，個々の心態詞の意味が，実際の発話の語順にいかに反映されるか（構造と意味のインターフェース）という大きなテーマの一端に寄与すると考えるものである。

(326) a. Ich wasch[sic!] das Gemüse. Du kannst *ja mal* die Zwiebeln schneiden.（Thurmair 1989: 213）
（私は野菜を洗うわ。あなたはたまねぎを切ってちょうだいね）

b. Gehst du *denn mal* zum Chef?（Thurmair 1989: 249）
（チーフのところに行くの？）

c. Kannst du *wohl mal* das neue Bild mitbringen?
（その新しい写真を持ってきてくれる？）

5.2.3. *ja mal, denn mal, wohl mal* の解釈

前節（319）で，*ja-type* と *mal-type* という Grosz（2005）による心態詞の統語的な分類を紹介した。IP layer における $\text{Mood}_{\text{speech act}}$ と $\text{Mood}_{\text{evaluative}}$ を境界とした，心態詞の表層での現れに関する区別である。ここでは，まず，統語的に *ja-type* である心態詞 *ja* と不変化詞 *mal* の結合を見てみる。

(327) a. Du kannst *ja mal* folgendes versuchen:（次のことを試してみたらいいですよ）
（http://www.spotlight-wissen.de/archiv/message/565766.html）

b. Du kannst *ja mal* wieder anrufen!（また電話くれたらいいよ）
（http://osdir.com/ml/debugging.ddd.general/2002-09/msg00026.html）

c. Na du kannst *ja mal* schreiben was du so den ganzen Tag so treibst.
（まあ，一日中することを書いたらいいじゃない）（MK., Föritz: Amicus, 2006, S. 218）

（327a-c）に挙げるとおり，心態詞 *ja* と *mal* の結合では必ず［ja mal］の語順となる。このこと

は, Grosz (2005) による統語的な観点を踏襲するものである。では，どのようにこの点を説明できるであろうか。

前節で述べたとおり, *mal* は，基底で動詞句 VP の付加位置に生起し，その際, [temporal] 素性と [modal] 素性を潜在的に併せもつと捉える。一方，心態詞の同音異義語の意味素性を考慮に入れるこのような考え方において，心態詞 *ja* は，その同音異義語が応答詞であるため，そもそも VP 内部で解釈されることはありえない。そこで，本来 *ja* は, *mal* と異なり，基底で時制句 TP の付加位置にマージすると仮定する。このことをふまえて, (327a) の例を統語的・意味的な構造で示すと (328) のようになると考えられる。

(328) = (326a) Du kannst *ja mal* die Zwiebeln schneiden. (Thurmair 1989: 213)

a_1. [$_{VP}$ *mal*$_{[temporal\&modal]}$ [$_{VP}$ du die Zwiebeln schneiden können]] = 基底

a_2. [$_{TP}$ *mal*$_{i[\cancel{temporal\&}modal]}$ [$_{TP}$ du$_k$ [$_{VP}$ t$_i$ [$_{VP}$ t$_k$ ...]]]] = 命題形成 & *mal* の移動

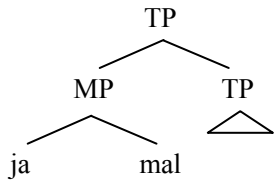
a_3. [$_{TP}$ *ja* [$_{TP}$ *mal*$_{i[modal]}$ [$_{TP}$ du$_k$ [$_{VP}$ t$_i$ [$_{VP}$ t$_k$ ...]]]]] = *ja* のマージ

a_4. [$_{FinP}$ du$_k$ kannst [$_{TP}$ *ja* [$_{TP}$ *mal*$_{i[modal]}$ [$_{TP}$ t$_{k'}$ [$_{VP}$ t$_i$ [$_{VP}$ t$_k$ ...]]]]]] = 表層

b. [*ja*$_j$ + *mal*$_{i[modal]}$ [*ASSERT* [$_{ForceP\ [+decl]}$ [$_{FinP}$ du$_k$ kannst [$_{TP}$ t$_j$ [$_{TP}$ t$_{i'}$ [$_{TP}$ t$_{k'}$ [$_{VP}$ t$_i$ [$_{VP}$ t$_k$ …]]]]]]]]]
= LF

(328) に示すとおり, (327a) の表層は，心態詞としての *mal* が TP の付加位置に移動した後に，心態詞としての *ja* がマージしたものであると捉えられる。この際，(327) のような発話文における *ja* が，いずれも「助言」あるいは「許可」の行為として，発語内行為「要求」に貢献する蓋然性が高いことに基づき, (328b) に示すとおり，意味的には, *ja* と *mal* は [ja mal] という合成的な (kompositionell) 結合として，LF (論理形式) でともに発話行為オペレータ (断定オペレータ) *ASSERT* を修飾するという解釈が可能となる。この際，合成的な結合のあり方としては，可能性として，(329) のような構造が仮定される。(329) は，(328a$_4$) の表層構造における *ja* と *mal* の関係を指す。

(329)



このような *ja* と *mal* の結合に関する分析は，同じく統語的に *ja-type* とみなされ，同音異義語が応答詞あるいは接続詞／接続副詞である心態詞 *doch* との結合にも当てはまると考えられる。例えば下記(330)のような文は，(330a, b)のように解釈できよう。

(330) Du könntest *doch mal* im Schwimmbad anrufen, wann [...]（Thurmair 1989: 227）

a_1. [$_{VP}$ *mal*$_{[temporal\&modal]}$ [$_{VP}$ du im Schwimmbad anrufen können]]

a_2. [$_{TP}$ *mal*$_{i[\cancel{temporal\&}modal]}$ [$_{TP}$ du$_k$ [$_{VP}$ t$_i$ [$_{VP}$ t$_k$ ...]]]]

a_3. [$_{TP}$ *doch* [$_{TP}$ *mal*$_{i[modal]}$ [$_{TP}$ du$_k$ [$_{VP}$ t$_i$ [$_{VP}$ t$_k$ ...]]]]]

a_4. [$_{FinP}$ du$_k$ könntest [$_{TP}$ *doch* [$_{TP}$ *mal*$_{i[modal]}$ [$_{TP}$ t$_{k'}$ [$_{VP}$ t$_i$ [$_{VP}$ t$_k$ ...]]]]]]

b. [*doch*$_j$+ *mal*$_{i[modal]}$ [*ASSERT* [$_{ForceP\ [+decl]}$ [$_{FinP}$ du$_k$ könntest [$_{TP}$ t$_j$ [$_{TP}$ t$_{i'}$ [$_{TP}$ t$_{k'}$ [$_{VP}$ t$_i$ [$_{VP}$ t$_k$ …]]]]]]]]]
= LF

しかし，例えば Lemnitzer（2001）では，*ja mal*-結合における *mal* は時間副詞として解釈される。ただ，この場合のような異なる見解においてこそ，本研究における仮説が有効であり，本来 *mal* の移動は随意的であるとすることで，この場合の *mal* が移動していないと捉えることも可能である。下記(331)に示すとおり，*mal* は移動しておらず，TP の付加位置に *ja* がマージされて投射が閉じた時点で，VP の付加位置に留まっていると考えるのである。

(331) = (326a) Du kannst *ja mal* die Zwiebeln schneiden.

a_1. [$_{VP}$ *mal*$_{[temporal\&modal]}$ [$_{VP}$ du die Zwiebeln schneiden können]] = 基底

a_2. [$_{TP}$ *ja* [$_{TP}$ du$_k$ [$_{VP}$ *mal*$_{[temporal\cancel{\&modal}]}$ [$_{VP}$ t$_k$ ...]]]] = 命題形成 & *ja* のマージ

a_3. [$_{FinP}$ du$_k$ kannst [$_{TP}$ *ja* [$_{TP}$ t$_{k'}$ [$_{VP}$ *mal*$_{[temporal]}$ [$_{VP}$ t$_k$ ...]]]]] = 表層

b. [*ja*$_j$ [*ASSERT* [$_{ForceP\ [+decl]}$ [$_{FinP}$ du$_k$ kannst [$_{TP}$ t$_j$ [$_{TP}$ t$_{k'}$ [$_{VP}$ *mal*$_{[temporal]}$ [$_{VP}$ t$_k$ …]]]]]]]] = LF

doch mal-結合における *mal* を時間副詞として扱う可能性も十分にあるが，その場合も同様に説明がつく。とはいえ，例えば Thurmair（1989）では，*ja mal*，*doch mal* の両結合における *mal* とも心態詞としてみなされ，発語内行為「要求」の枠内で考察されており，Bublitz（2003）でも，„Obgleich die temporale Bedeutung von *mal* in diesen Äußerungen [= Äußerungen der Kombinationen von *schon* und *mal*] nicht so stark hinter der modalen zurücktritt (wie etwa in den

Verbindungen mit *ja* und *doch*), [...]"（これらの発話＜*schon mal*-結合の発話を指す＞における *mal* の時間的な意味が（例えば *ja* や *doch* との結合におけるほど）強く話法的な意味の背後に隠れないにも関わらず[...]）（< >は筒井による）という記述があることから, *ja*, *doch* いずれの結合においても, *mal* は心態詞として扱われる傾向がうかがえる。

一方, Grosz（2005）の第 2 章と第 4 章（cf. also Thurmair 1991: 30ff.; Abraham 2000: 344）において，統語的にも意味的にも，同じく *ja-type* であると分析される心態詞 *denn* との結合では，*mal* の振舞いは *ja* の結合の場合と異なる。心態詞 *denn* の場合も，*ja* と同様に，接続詞としての同音異義語が VP 内部での解釈を許容しない。こうした点に基づく限りでは, *ja mal*-結合と同一の分析で解決されるように思われる。しかし，興味深いことに, Thurmair（1989: 250）でも指摘されるとおり，*denn* との結合における *mal* は，必ず時間副詞として，'irgendwann einmal'の意味で用いられ，（332a）と（332b）のような比較に基づいて裏づけがなされる。*denn mal*-結合におけるこのような現象の理由についても，本研究における仮説は，統一的な分析を提供する。

(332) a. Könnten Sie mir *denn mal* 5 Mark wechseln?（Thurmair 1989: 250）［*mal* = temporal］

b. *Könnten Sie mir *denn* <u>*bitte*</u> *mal* 5 Mark wechseln?（ibid.）

心態詞 *denn* は，下記（333a-f）の例に示すとおり，疑問文（決定疑問文／補足疑問文）の文タイプでのみ現れ，潜在的に「要求」でありうる発話で用いられた場合も，その発話を「質問」として解釈されるように促す役目を担う（cf. Grosz 2005: Ch.4）[109]。いわば「質問の一義化」である。この効果は，心態詞 *eigentlich* や *etwa* あるいは話法詞 *wirklich* や *tatsächlich* でも同様に観察される。

(333) a. Kannst du mir *denn* 50 Mark leihen? [echte Frage]（Thurmair 1989: 170）

（50 マルク貸してもらえるの？［純粋な質問］）

（cf. Kannst du mir *mal* 50 Mark leihen? [Aufforderung]）（ibid.）

（cf. 50 マルク貸してくれる？［要求］）

b. Kommst du *denn* bei mir vorbei?（cf. Kommst du *mal* bei mir vorbei?）

（私のところに立ち寄るの？）（cf. 私のところに立ち寄ってくれる？）

[109] „denn"に関しては, Redder（1990, 2005, etc.）などでも詳しく論じられている。

c. Hast du *denn* was zu schreiben?（cf. Hast du *mal* was zu schreiben?）

（君は何か書くものあるの？）(cf. 何か書くものある？（あれば貸してくれる？））

d. Hast du *etwa* was zu schreiben?（cf. Hast du *mal* was zu schreiben?）

（まさか何か書くものあるの？）(cf. 何か書くものある？（あれば貸してくれる？））

（cf. *Gehen Sie *etwa mal* ans Telefon?（Thurmair 1989: 251））

e. Kannst du *wirklich* die Dose öffnen?（cf. Kannst du *mal* die Dose öffnen?）

（Wunderlich 1976: 137）(その缶を本当に開けられるの？）(cf. その缶を開けてくれる？）

f. Kannst du *eigentlich* den Tresor öffnen?（cf. Kannst du *mal* den Tresor öffnen?）

（Franck 1980: 148）(その金庫を本当に開けられる？）(cf. その金庫を開けてくれる？）

その結果，心態詞 *denn* と心態詞としての *mal* の結合を仮定した場合, *denn* による「質問の一義化」と *mal* による「要求の一義化」において「競合」（Konflikt）が生じると考えられる。というのは, *denn* も *mal* も，意味的にはともに *ja-type*（= 発話行為オペレータ修飾語）とみなされる心態詞であるため，下記（334b）に示すように，LF 解釈の際に発話行為オペレータ修飾語としての競合が起こる。

(334) = (326b) Gehst du *denn mal* zum Chef?（Thurmair 1989: 249）

a.*[$_{\text{ForceP}}$ gehst$_{[+int]}$ [$_{\text{FinP}}$ du$_k$ [$_{\text{TP}}$ *denn* [$_{\text{TP}}$ *mal*$_{i[modal]}$ [$_{\text{TP}}$ t$_{k'}$ [$_{\text{VP}}$ t$_i$ [$_{\text{VP}}$ t$_k$ zum Chef]]]]]]]? = 表層

b. *[*denn*$_j$ + *mal*$_{i[modal]}$ [*?* [$_{\text{ForceP}}$ gehst$_{[+int]}$ [$_{\text{FinP}}$ du$_k$ [$_{\text{TP}}$ t$_j$ [$_{\text{TP}}$ t$_{i'}$ [$_{\text{TP}}$ t$_{k'}$ [$_{\text{VP}}$ t$_i$ [$_{\text{VP}}$ t$_k$ …]]]]]]]]] = LF

= **競合（Konflikt）**

従って, *mal* は心態詞として TP の付加位置に移動することはなく，下記（335）に示すとおり, *denn* がマージされて TP の投射が閉じることで *mal* の［modal］素性が不適合になると考える。

(335) Gehst du *denn mal* zum Chef?

a$_1$. [$_{\text{VP}}$ *mal*$_{[temporal\&modal]}$ [$_{\text{VP}}$ du zum Chef gehen]]

a$_2$. [$_{\text{TP}}$ du$_k$ [$_{\text{VP}}$ *mal*$_{[temporal\&modal]}$ [$_{\text{VP}}$ t$_k$ …]]]

a$_3$. [$_{\text{TP}}$ *denn* [$_{\text{TP}}$ du$_k$ [$_{\text{VP}}$ *mal*$_{[temporal\cancel{\&modal}]}$ [$_{\text{VP}}$ t$_k$ …]]]

a$_4$. [$_{\text{ForceP}}$ gehst$_{[+int]}$ [$_{\text{FinP}}$ du$_k$ [$_{\text{TP}}$ *denn* [$_{\text{TP}}$ t$_{k'}$ [$_{\text{VP}}$ *mal*$_{[temporal]}$ [$_{\text{VP}}$]]]]]]?

b. [*denn*$_j$ [*?* [$_{\text{ForceP}}$ gehst$_{[+int]}$ [$_{\text{FinP}}$ du$_k$ [$_{\text{TP}}$ t$_j$ [$_{\text{TP}}$ t$_{k'}$ [$_{\text{VP}}$ *mal*$_{[temporal]}$ [$_{\text{VP}}$ t$_k$ …]]]]]]]] = LF

以上のような考察から, *denn mal* という結合形において, *mal* が常に時間副詞としてしか解釈されない原因を求めることができる。確かに Thurmair (1989) は, 上記 (332) で挙げた例をもとに, *denn mal*-結合における *mal* の振舞いに言及しているが, その理論的な原理については全く説明されていない。その点, 本研究における意味的な分析は, 発話行為オペレータ修飾語としての競合という観点から, *ja mal*-結合の分析との統一性を維持したうえで, その原理を解明するものである[110]。さらに, これまでに示した *ja*, *denn* と *mal* の結合に関する分析結果は, *ja* と *wohl* の結合に関する先の (306) (= (336)) や (307) (= (337)) の点, つまり表層での語順が LF (論理形式) でのスコープ関係に反映するという点を踏襲するものである。

(336) The different status of *ja* is confirmed by the fact that *ja* obligatorily takes syntactic and semantic scope over *wohl* when the two particles co-occur. (Zimmermann 2004b: 564)

(337) the fact that *ja* obligatorily precedes *wohl* in overt syntax mirrors their respective scope behavior at LF. (Grosz 2005: 184ff.)

では, 最後に心態詞 *wohl* と *mal* の結合形について見てみたい。ここで, [wohl] と小文字で綴ったとおり, 以下では, 文アクセントの置かれない *wohl* との結合に注目する (そもそも心態詞 *mal* と文アクセントの置かれる *WOHL* は結合して現れない)。本研究では, 不変化詞 *wohl* を心態詞として扱うとしたことにより, 意味最小限主義の立場から, 5.1.1.2.以降で „wohl“の共時的な意味的共通性を考察した。同節でも述べたとおり, 不変化詞 *wohl* は, 今日なお多くの問題を抱える語である。しかし同時に, 多方面からのアプローチが可能な研究対象の１つに数えられることも事実である。そこで, あえてそのような語との結合形を考察することは, *mal* の意味機能を再確認あるいは新発見しうる手がかりとなりうる。というのも, 頻度副詞ないしは時間副詞から派生したことから, 極めて命題的であるかに思われる心態詞 *mal* と, 命題に対する話者の認識的な判断を示す意味で, 極めて話法詞的である心態詞 *wohl* の結合は, それぞれの統語的・意味的な振舞いに基づくと, 非常に興味深い現象を導く

[110] *denn mal*-結合では, *denn* の使用により, *mal* の [modal] 素性の適合を意図的に避け, 発話行為を「質問」に一義化させることによって, 時間副詞*(ein)mal* の語彙的意味を前景化させるのではないかと推察される。

と考えられるためである。そして，その結果から，心態詞 *mal* の特殊性，あるいは不変化詞 *mal* が本来的に表すと考えられる「多義性」（Vieldeutigkeit/Unbestimmtheit）の特徴が見えてくる。

まず，上記（319）の表および（320）のテスト文で示していたとおり，*wohl* は，統語的におおよそ *ja-type* であると考えられている（'wild guess'）（Grosz 2005）（表（319）では，「おおよそ」であることから括弧に入れた））。Thurmair（1991: 31）でも，„*wohl* is in the middle.“と述べられている。„middle“である以上，*ja*-type として決定することはできないが，少なくとも *mal* との結合では，下記（338a-e）に見られるとおり，表層で［wohl mal］の語順となる。

(338) a. Kannst du ***wohl mal*** ein bild[sic!] einstellen???（画像をしまってくれる？？？）
（http://www.banditforum.de/phpBB2/viewtopic.php?p=883084&sid=673613487b0e199e843187b8e9970e6c）

b. Kannst du ***wohl mal*** in kurzen Stichworten (ganz grob) übersetzen was der Gute da in diesem Video sagt?（（おおまかに）簡単な箇条書きでいいので，その人がビデオで何を言っているか訳してくれる？）
（http://forum.myfanbase.de/viewtopic.php?t=11168&sid=a336986ec15629b54cd0d870844a54e6）

c. Kannst du ***wohl mal*** eine DVD einlegen und ein paar Bilder machen?（DVD を入れて何枚かの写真を作ってくれる？）（http://www.hifi-forum.de/viewthread-95-4923-4.html）

d. Kannst du ***wohl mal*** deine Freundin bei H&M fragen, ob sie ein paar Tipps für mich hat?
（私にアドバイスをくれるか, H&M で働いている君の彼女に訊いてくれる？）
（http://profile.myspace.com/index.cfm?fuseaction=user.viewprofile&friendID=101385612）

e. Könnten Sie mir *wohl mal* helfen, den Kinderwagen die Treppe raufzutragen?
（階段でベビーカーを持ち上げるのを手伝っていただけますでしょうか）

（Thurmair 1989: 249）

この際，心態詞 *wohl* の同音異義語が，„gut/angenehm“（良い／快い）を意味する様態の副詞（Modaladverb）（英: manner adverb）としての *wohl* であることをふまえると，*wohl* も *mal* 同様，２つの意味素性を潜在的に併せ持ち（$wohl_{[\text{modaladv (feature) \&modal (feature)}]}$），随意的な移動を起こすと仮定すべきである。そのうえで，下記（339）のような *mal* との結合を考える際，様態副詞

である *wohl* は，基底において，VP 内部で直接述語を修飾する位置に生起すると考えられる（= (339a)）[111]。

(339) = (326c) Kannst du *wohl mal* das neue Bild mitbringen?

a. [$_{VP}$ *mal*$_{[temporal\&modal]}$ [$_{VP}$ du das neue Bild *wohl*$_{[modaladv\&modal]}$ mitbringen können]]

そのうえで，下記(340)に示すような，*wohl* の認識的意味に基づく緩和の機能をふまえ，仮に，*wohl* のみが TP の付加位置に移動した場合を考えてみる。この場合，*wohl* が心態詞として，*mal* が時間副詞としての解釈を受けることになる（(339)＝ひょっとしていつかその新しい写真を持って来れる？）。

(340) Der Hörer [...] ist somit in einer Situation, in der er nicht direkt mit *ja* oder *nein* antworten muss. [...] Die durch Verwendung von *wohl* angezeigte Möglichkeit der Vagheit in der Antwort schafft den nötigen Freiraum, um diese potentiell prekäre soziale Situation ohne Gesichtsverlust für die Beteiligten zu meistern.（Zimmermann 2004a: 278）

（下線は筒井による）

［従って，聞き手は，[...]直接*はい*あるいは*いいえ*で答えなくて良い状況に置かれる。[...]*wohl* の使用によって示された応答における曖昧さの可能性は，＜相手にコーヒーを入れてもらうような(Zimmermann 2004a: 278, ex.(60)を参照)＞潜在的に手間をかける社会的状況を，会話参加者のフェイスを侵害することなく制御するための必要な余地を作り出す］（＜＞は筒井による）

しかし，たとえ時間副詞としての解釈が可能であるとしても，筆者が尋ねた数名の母語話者によれば，(339)を含め，上記(338a-e)に挙げたような *wohl mal*-結合の(発話)文での *mal* が心態詞である蓋然性は非常に高いと判断された。このことに従えば，*mal* も心態詞としての

[111] この基底構造の語順は，表層において観察される一般的な傾向としての副詞的成分間の順番に合致する。例えば，„Ich habe heute (= Te) wegen der Prüfung (= Ka) sehr fleißig (= Mo) in der Bibliothek (= Lo) gearbeitet.“(私は今日(＝時)試験のために(＝理)とても熱心に(＝様)図書館で(＝場)学んだ)のような文に基づく語順の傾向で，„**te**mporal → **ka**usal → **mo**dal → **lo**kal“(時間→理由→様態→場所)に倣って(„Te-Ka-Mo-Lo-Regel“(テカモロの規則))(cf. Rug/Tomaszewski 2001: 83; 清野 2008: 55)と呼ばれる。

解釈を受けるために TP の付加位置に移動すると考えられる。そこで次に，まず *wohl* が移動し，続いて *mal* が移動する場合を仮定してみる（= (341)）。

(341) a$_1$. [$_{VP}$ *mal*$_{[temporal\&modal]}$ [$_{VP}$ du das neue Bild *wohl*$_{[modaladv\&modal]}$ mitbringen können]] = 基底

a$_2$. [$_{TP}$ *wohl*$_{j[\cancel{modaladv\&}modal]}$ [$_{TP}$ du$_k$ [$_{VP}$ *mal*$_{[temporal\&modal]}$ [$_{VP}$ t$_k$ das neue Bild t$_j$ ...]]]]

a$_3$. [$_{TP}$ *mal*$_{[\cancel{temporal\&}modal]}$ [$_{TP}$ *wohl*$_{j[\cancel{modaladv\&}modal]}$ [$_{TP}$ du$_k$ [$_{VP}$ t$_i$ [$_{VP}$ t$_k$ das neue Bild t$_j$ ...]]]]]

a$_4$. [$_{ForceP}$ kannst$_{[+int]}$ [$_{FinP}$ du$_k$ [$_{TP}$ *mal*$_{i[modal]}$ [$_{TP}$ *wohl*$_{j[modal]}$ [$_{TP}$ t$_{k'}$ [$_{VP}$ t$_i$ [$_{VP}$ t$_k$ das neue Bild t$_j$ ...]]]]]]]?

しかし，これでは(339a)の表層の構造が得られないばかりか，上記(340)の目的で使用される *wohl* をスコープにとることで，心態詞としての *mal* が *wohl* による緩和策を帳消しにしてしまう。この際の *mal* の用法が，聞き手に「要求の一義化」の解釈を促し，第 4 章で論じたとおり，ポジティブ・ポライトネスとして発話に貢献するのに対し，(340)にあるとおり，*wohl* はネガティブ・ポライトネスとしての緩和を果たすためである。このような場合の緩和策が適切なものとなるには，まず聞き手のポジティブフェイスに働きかけておいて，そのうえで，ネガティブフェイスを配慮する場合であろう。いわば厚かましさの抑制である。従って，その逆である(341)の移動順序では，*wohl* の移動の動機が不明である。

以上の観点から，本研究では下記(342)に示すように，表層でのスコープの狭い *mal* の移動後に，*wohl* が移動するという順序を仮定する。その結果，心態詞 *mal* が作用することで「要求の一義化」の解釈を受ける発話に対し，*wohl* が移動の動機を得ると考える。

(342) Kannst du *wohl mal* das neue Bild mitbringen?

a$_1$. [$_{VP}$ *mal*$_{[temporal\&modal]}$ [$_{VP}$ du das neue Bild *wohl*$_{[modaladv\&modal]}$ mitbringen können]] = 基底

a$_2$. [$_{TP}$ *mal*$_{i[\cancel{temporal\&}modal]}$ [$_{TP}$ du$_k$ [$_{VP}$ t$_i$ [$_{VP}$ t$_k$ das neue Bild *wohl*$_{j[modaladv\&modal]}$ ...]]]]

a$_3$. [$_{TP}$ *wohl*$_{j[\cancel{modaladv\&}modal]}$ [$_{TP}$ *mal*$_{i[modal]}$ [$_{TP}$ du$_k$ [$_{VP}$ t$_i$ [$_{VP}$ t$_k$ das neue Bild t$_j$ ...]]]]]

a$_4$. [$_{ForceP}$ kannst$_{[+int]}$ [$_{FinP}$ du$_k$ [$_{TP}$ *wohl*$_{j[modal]}$ [$_{TP}$ *mal*$_{i[modal]}$ [$_{TP}$ t$_{k'}$ [$_{VP}$ t$_i$ [$_{VP}$ t$_k$ das neue Bild t$_j$ ...]]]]]]]?

ここで，先に述べたような，*mal* が時間副詞である解釈の可能性を排除するために，(342)の順序を仮定したまま，念のため下記(343a)と(343b)の比較で見ていくこととする。(343b)に

おいて，*mal* は時間副詞 *morgen* の前に来ている。前節の(324)で述べたとおり，このことは，*mal* が確実に心態詞として使用されていることを示している。従って，(343b)の表層は($343b_1$)，LF(論理形式)は($343b_2$)のような構造であると推定される[112]。

(343) a. Kannst du *wohl morgen mal* das neue Bild mitbringen?

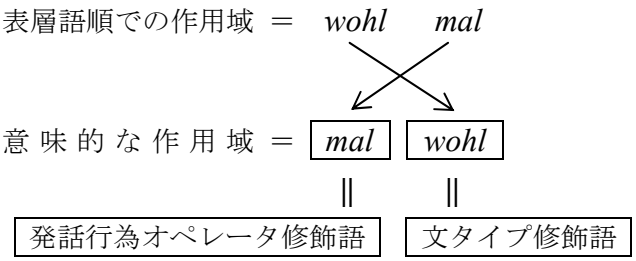
b. Kannst du *wohl mal morgen* das neue Bild mitbringen?

b_1. [$_{ForceP}$ kannst$_{[+\,int]}$ [$_{FinP}$ du$_k$ [$_{TP}$ *wohl*$_{j[modal]}$ [$_{TP}$ *mal*$_{i[modal]}$ [$_{TP}$ t$_{k'}$ [$_{VP}$ *morgen* [$_{VP}$ t$_i$ [$_{VP}$ t$_k$ das neue Bild t$_j$ ...]]]]]]]]?

b_2. $^{?}$[*mal*$_{i[modal]}$ [*?* [$_{ForceP}$ *wohl*$_{j[modal]}$ kannst$_{[+int]}$ [$_{FinP}$ du$_k$ [$_{TP}$ t$_{j'}$ [$_{TP}$ t$_{i'}$ [$_{TP}$ t$_{k'}$ [$_{VP}$ *morgen* [$_{VP}$ t$_i$ [$_{VP}$ t$_k$ das neue Bild t$_j$ ...]]]]]]]] = LF

しかし，($343b_2$)の先頭に疑問符を付したとおり，実際，この解釈には１つの問題が生じる。先の(336)や(337)で挙げたように，心態詞の結合では，表層での語順が LF でのスコープに反映すると考えられ，本研究においても，少なくとも *ja mal*-結合と *denn mal*-結合を見る限りでは，この点を踏襲するとみなされた。しかし，(343b)では，下記(344)で示すように，表層での作用域と LF での作用域の間に齟齬をきたす。なぜなら，心態詞 *mal* が「発話行為オペレータ修飾語」として，心態詞 *wohl* が「文タイプ修飾語」としてみなされるからである。

(344) *wohl mal*-結合における



この際，*denn mal*-結合におけるような「発話行為オペレータ修飾語」としての競合(Konflikt)は生じないものの，意味的な作用域をふまえると，上で示したような *wohl* の緩和機能は働

[112] *wohl* との結合かつ時間副詞との共起に関するその他の例:
a-$_1$. Kannst du *wohl*$_{[modal]}$ *irgendwann mal*$_{[temporal]}$ zu mir kommen?
a-$_2$. Kannst du *wohl*$_{[modal]}$ *mal*$_{[modal]}$ *irgendwann* zu mir kommen?
b-$_1$. Kannst du *wohl*$_{[modal]}$ *zunächst mal*$_{[temporal]}$ den Koffer da hochheben?
b-$_2$. Kannst du *wohl*$_{[modal]}$ *mal*$_{[modal]}$ *zunächst* den Koffer da hochheben?

かず，意味論的・語用論的観点において，やはり *wohl* の移動の動機が失われてしまう。そこで，筆者は，2 人称主語で，とりわけ話法助動詞 *können* を伴う決定疑問文での *wohl* は，おおよそ慣習的に，発話行為オペレータ"?"を修飾して，(340)のような意味で，潜在的な「要求」を緩和する役目を果たすと仮定する。つまり，このような条件下における *wohl* は，「文タイプ修飾語」ではなく，「発話行為オペレータ修飾語」として機能するのではないかと捉える。その結果，*wohl mal*-結合では，*ja mal*-結合と類似して，*wohl* と *mal* が合成的に(kompositionell)結合し，LF で両者ともに発話行為オペレータ"?"を修飾すると考える(= (345))。(346)は，(345a)の表層構造における *wohl* と *mal* の関係を指す。

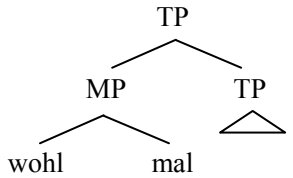
(345) Kannst du *wohl mal morgen* das neue Bild mitbringen?

a. $[_{ForceP}$ kannst$_{[+\,int]}$ $[_{FinP}$ du$_k$ $[_{TP}$ *wohl*$_{j[modal]}$ $[_{TP}$ *mal*$_{i[modal]}$ $[_{TP}$ t$_{k'}$ $[_{VP}$ *morgen* $[_{VP}$ t$_i$ $[_{VP}$ t$_k$ das neue Bild t$_j$ ...]]]]]]]]? = 表層

b. [*wohl*$_{j[modal]}$ + *mal*$_{i[modal]}$ [*?* $[_{ForceP}$ kannst$_{[+int]}$ $[_{FinP}$ du$_k$ $[_{TP}$ t$_{j'}$ $[_{TP}$ t$_{i'}$ $[_{TP}$ t$_{k'}$ $[_{VP}$ *morgen* $[_{VP}$ t$_i$ $[_{VP}$ t$_k$ das neue Bild t$_j$ ...]]]]]]]]]] = LF

= <[*wohl* + *mal*] + *?* ({Hörer kann morgen das neue Bild mitbringen, Hörer kann morgen das neue Bild nicht mitbringen}) >

(346)



当然，これは仮説の域を出ないばかりか，説明が不十分であり，いまだ説得力に欠ける点も多いであろう。しかし，このような分析は，*wohl* が，表層の語順において，比較的高い位置，少なくとも *mal* よりも左に現れ，統語的には *ja*-type に属すと考えられる理由の 1 つになりうる。さらに，不変化詞 *wohl* が抱え続ける「話法詞か心態詞か」という問いも，まさに *wohl* のこのような振舞いに起因するとも考えられよう。一方，この分析は同時に，極めて命題的であるかに思われる *mal* が，表層の語順においてこそ最も低い位置に現れるものの，意味的には発話行為レベルに作用して，心態詞 *ja* などと同様に発話解釈の在り方を統制することをうかがわせる。言い換えれば，心態詞 *mal* は，命題の内側と外側の境界面で，本来的に多義的な振舞いをする特殊な心態詞であると考えられる。

5.3. 第 5 章のまとめ

本章では，心態詞の結合形を考察対象とした。結合には，文タイプ（Satzmodus）依存といった制限が課せられるものの，冒頭で述べたとおり，その種類は非常に豊富である。本研究では，主に Doherty（1985），Thurmair（1989, 1991），Abraham（1991c, 2000, 2005[2]）を取り上げ，結合に見られる規則性について言及した。

本章の主な目的は，心態詞 *mal* の結合形を例に，その語順制限の原理を追求することにあった。その際，筆者による心態詞 *mal* の統語論的・意味論的な仮説を呈示し，心態詞 *ja*, *denn*, *wohl* との結合形を取り上げて，その仮説の有効性を検証するというものであった。そこで，まず手がかりとして，先行文献の *ja wohl*-結合に注目することにしたが，その際，そもそも不変化詞 *wohl* をいかに扱うかという大きな問題があった。*wohl* を話法詞とみなすか，あるいは心態詞として扱うかという，今日なお議論の的になっている分類上の問題である。もし，*wohl* を話法詞として扱うのであれば，心態詞同士の結合ということにはならない。従って，本研究では，*wohl* をひとまず心態詞とみなしたうえで，意味最小限主義の立場から生じる „wohl“の意味的な共通性の問題に取り組んだ。そこでは，「推測の *wohl*（強勢なし）」と「確信の *wohl*（強勢あり）」に共通する共時的な意味的核を抽出することが課題となり，解決案として，発話行為レベルおよび認識的モダリティレベルから *wohl*（強勢あり）の解釈を見直すことで，„wohl“の共時的な意味的共通性に関する統一的な説明を試みた。また，*wohl* に関する最近の研究として Zimmermann（2004a, b）を取り上げ，*wohl* の統語的・意味的な分析を参照するとともに，*ja wohl*-結合に関する示唆にも注目した。その際，「発話行為オペレータ修飾語」（Modifikatoren des Sprechaktoperators）と「文タイプ修飾語」（Satztypmodifikatoren）という概念が提示され，Zimmermann（2004a, b）によれば，*wohl* は「文タイプ修飾語」であるという結論がなされた。そのため，発話行為オペレータ修飾語である *ja* と文タイプ修飾語の *wohl* が結合した場合，必然的に *ja* が *wohl* の左に置かれ，この語順が，論理形式（LF）のスコープにも反映するというものが，Zimmermann（2004a, b）における示唆であった。

以上をふまえて，心態詞 *mal* の結合に論点を移した。その際，筆者は，*mal* に関する意味論的および統語論的な仮説をたて，その有効性を検証する目的で，*ja mal*, *denn mal*, *wohl mal* という３つの結合形を考察対象とした。まず，意味論的な仮説としては，主に Zimmermann（2004a, b）と Grosz（2005）を参照して，心態詞 *mal* を，心態詞 *ja* と同様に「発話行為オペレータ修飾語」とみなした。そして，統語論的な観点では，心態詞 *mal* の基底位置を VP 内部

（VP の付加位置）とし，その際，*mal* の時間副詞としての解釈が可能であることを考慮して，意味最小限主義の立場から，基底生成の段階で［temporal］と［modal］の素性を潜在的に併せもつと仮定した。そのうえで，心態詞としての使用では，時制句 TP の付加位置に移動するという分析を追求した。その結果，統語的に *mal-type* でありながら，意味的に *ja-type* として振舞うと考えられる心態詞 *mal* の特殊性，つまり，命題のウチとソトの境界面で，*mal* が本来的に表すと考えられる「多義性」を示すに至った。これは，「構造と意味のインターフェース」という大きなテーマとの関連において，*mal* 研究における１つの展望を示すものでもある。本章の冒頭で述べたとおり，ここで述べた *mal* に関する仮説は，経験的な分析に基づくものではない。従って，そこから導かれる結論は，暫定的なものであると言わざるをえない。しかし，心態詞 *mal* を例に，こうした統語論的・意味論的な構造を詳細に考察する試みは，*mal* 研究だけに留まらず，心態詞研究全体に対しても，今後の開かれた展望を提供するものとなりうる。これは，筆者の切なる願望である。

6. 本研究のまとめ

本研究のテーマの１つは，ドイツ語の「心態詞」という語群の特徴をあらためて整理し，他の語群との明確な弁別を図ることにあった。心態詞研究を行う上で，「心態詞」という概念そのものの捉え方を明確にしておかなければ，その意味と機能を見直すことの必要性を論じる意義を見い出せないと考えられたからである。そこで，ある特定の心態詞を取り上げ，詳細な分析を行うための土台作りとして，「心態詞」という概念の見直しを図ることが，本研究の最初の課題となった。さらに，本研究の最大のテーマは，日常のドイツ語において，「命令」や「依頼」の発話で頻繁に使用される心態詞 *mal* の意味と機能を明らかにすることであった。心態詞 *mal* は，「行為指示型」（Direktive）の発話で用いられ，その要求（Aufforderung）の強制力の度合いを緩和する語用論的な機能を持つ不変化詞と考えられてきた。Weydt（1969）に端を発して盛期をむかえた心態詞研究では，これまで数多くの研究論文が発表されてきたが，その中で，心態詞 *mal* に焦点を当てたものはほとんど見当たらない。しかし，主に，外国語としてのドイツ語学習者にとって，*mal* の使用に当って困難にぶつかることが多い。心態詞 *mal* が，ドイツ語の日常会話で頻繁に使用されることをふまえればこそ，この心態詞が抱える問題を解き明かすことは，ドイツ語によるコミュニケーションの向上を目指すうえで不可欠なテーマとなろう。そこで，本研究では，この心態詞を主に統語論，意味論，語用論の観点から分析し，その意味と機能の見直しを目的とした。

第 1 章は，心態詞の概説とした。心態詞（Abtönungspartikel: Weydt（1969）の術語）とは，特定のコンテクスト（条件）において現れるドイツ語の不変化詞で，話し手の推量や心情，評価や立場を表現するものである。それゆえ，命題の真理条件に関与せず，話し手の心的態度・発話行為の様相に関わるとされる。本章では，まずいくつかの例を示しながらドイツ語の心態詞を概観した。心態詞はドイツ語において特徴的な現象であるとされるが（cf. Burkhardt 2001），他の言語において同じような機能を果たす表現が全く見当たらないわけではない。そこで，他言語（日本語，英語，中国語）における類似表現を紹介し，これらの言語との比較対照に基づき，ドイツ語の心態詞のあり方を見た。

続いて，現代ドイツ語で「心態詞」とされる語彙が，研究対象として，またその名称の点においても，どのような歴史的経緯をたどってきたかを考察し，心態詞研究における２つの代表的な立場，および先行文献に基づく心態詞の種類と特徴を紹介した。２つの立場とは，„Bedeutungsmaximalismus“（意味最大限主義）と„Bedeutungsminimalismus“（意味最小限主義）

である（cf. Posner 1979: 380）。このいずれの立場に従うかによって，心態詞研究の方向性が決定される。本研究では，意味最小限主義の立場に基づき，不変化詞 *mal* の心態詞以外の用法である時間副詞 *einmal*（かつて，いつか）および頻度副詞 *einmal*（一回／一度）との関連に言及して，いずれにも共通の抽象的意味／基本的意味（Grundbedeutung）を抽出した（4.5.2.1.を参照）。それによって，心態詞 *mal* の実用的な機能の見直しを図ることが目的であった。また，心態詞に関しては，過去多くの研究者がテーマに取り上げ，その先行文献は非常に豊富であるが，本来何を「心態詞」とするかという基準が現代においてなお曖昧であるため，研究者によってその扱いの範囲が異なっている。そこで，本研究では，今日「心態詞」として扱われる語の種類を限定し，それらの語に共通する特徴に関して先行研究を見た。その特定にあたり，主に Weydt（1969: 68, 1977: 218），Thurmair（1989: 37），Helbig（1994[3]: 32ff., 34ff., 36），Werner（2002: 70）で記述された心態詞の特徴（のいくつか）に修正を施し，最終的に，本研究における心態詞の必要条件をまとめた（= (347)）。

(347) = (17) Abtönungspartikeln; ［心態詞（に）は;］

a. sind unflektierbar.（= morphologisches Merkmal）［語形変化しない（＝形態論的特徴）］

b. können selbstständig nicht die erste Stelle im Satz ausfüllen und sind weder Satzglieder noch Fügteile.（= syntaktisches Merkmal）
［単独で文頭に生起せず，文肢（文成分）でも継合部でもない（＝統語論的特徴）］

c. haben einen Lautkörper, der anders akzentuiert ist oder in anderer syntaktischer Stellung mindestens noch eine andere Bedeutung hat und dann einer anderen Funktionsklasse angehört.（= syntaktisch-semantisches Merkmal）
［別にアクセントを置く音形，あるいは異なる統語構造において，少なくとももう１つ別の意味を表す音形があり，その音形は異なる機能をもったクラスに属する（＝統語論的・意味論的特徴）］

d. können nicht eine Antwort auf eine Frage bilden.（= syntaktisch-semantisches Merkmal）
［質問の応答にならない（＝統語論的・意味論的特徴）］

e. haben Satzskopus.（= semantisches Merkmal）［文全体を作用域にとる（＝意味論的特徴）］

f. tragen nichts zu den Wahrheitsbedingungen von Sätzen bei.（= semantisch-pragmatisches Merkmal）［文の真理条件に関与しない（＝意味論的・語用論的特徴）］（第 3 章）

g. zeigen bestimmte Restriktionen hinsichtlich der Satztypen/Satzmodi und der Illokutionstypen. (= semantisch-pragmatisches Merkmal)
［心態詞は，文タイプ／文の叙法と発話行為タイプに関して特定の制限がある（＝意味論的・語用論的特徴）］

h. signalisieren（implizieren） die Stellung des Sprechers zur Proposition. (= pragmatisches Merkmal)［命題に対する話し手の心的態度を含意する（＝語用論的特徴）］

結果として，さしあたり本研究で心態詞とみなすのは(348)に挙げる語群であるとした。

(348) = (18) *aber, auch, bloß, denn, doch, eben, eigentlich, einfach, (ein)mal, erst, etwa, halt, ja, nicht, noch, nur, ruhig, schon, vielleicht, wohl*

第 2 章では，(347)でまとめた心態詞の個々の必要条件に関して，形態論的･音声学的特徴，統語論的・意味論的特徴，意味論的・語用論的特徴に大別したうえで，具体的な説明を与えた。

まず，形態論的・音声学的特徴では，「心態詞は，語形変化しない」という特徴について述べた。先行文献において，同じく形態論的・音声学的特徴として扱われてきた「心態詞は，短い語，通常は一音節の語である」や「心態詞には，大抵強勢が置かれない」という特徴に関しては，それぞれ該当しない語が存在することに基づき，本研究における心態詞の必要条件としなかった。

統語論的・意味論的特徴に関しては，最初に，「心態詞は，単独で文頭に生起せず，文肢（文成分）でも継合部でもない」という特徴を挙げ，その際，先行文献として Brandt et al. (1999)と Cardinaletti (2007)の考察を紹介したうえで，本研究では，心態詞を最大範疇として扱うことを示唆した（詳述は第 5 章を参照）。また，文頭配置可能性に基づくと，心態詞は２つのグループに大別されるが（cf. Helbig 1994[3]），本研究で扱う心態詞 *mal* は，そのうちの中心的な下位クラスに属することになる。このクラスに属する心態詞には「他の品詞では同音異義語として現れる」という基準が適用されることから，「心態詞には，別にアクセントを置く音形，あるいは異なる統語構造において，少なくとももう１つ別の意味を表す音形があり，その音形は異なる機能をもったクラスに属する」という特徴を必要条件とみなし

た。さらに,「心態詞は, 質問の応答にならない」という特徴も必要条件の１つであるとした。その際, 決定疑問文に対する応答という点で, 心態詞と話法詞の違いを挙げ, 話法詞には文性があることを示した。一方,「心態詞は, 統語的に随意的であり, 削除しても文の文法性に支障をきたさない」という特徴に関しては, 研究者間の異なる見解に言及して, 必要条件から除外するとした。

続く心態詞の意味論的特徴としては,「心態詞は, 文全体を作用域にとる」という点を挙げ, 心態詞 *doch* を例に, その作用域と焦点について述べた。その際, 心態詞が時制句 TP の付加位置に置かれることを簡単に示唆した。生成位置に関しては,「心態詞はテーマとレーマの境界に現れる」ことにも触れたが, いくつかの例外を挙げることで, この特徴を必要条件とみなさないことを述べた。さらに,「心態詞は否定の対象にならない」という特徴も必要条件から除外した。先の「心態詞は文全体を作用域にとる」という必要条件に含まれるものとみなすためである。

最後に, 意味論的・語用論的特徴においては,「心態詞は, 文の真理条件に関与しない」,「心態詞は, 命題に対する話し手の心的態度を含意する」,「心態詞は, 発話行為タイプと文タイプに関して特定の制限がある」という３つの必要条件的な特徴に言及した。このうち, 最初の特徴に関しては, 本研究では特に詳細な考察が必要であるため, 第3章で詳述することとした。「心態詞の心的態度」を述べるにあたっては, その関連として, まず上記３つ目の特徴である「文タイプおよび発話行為タイプとの共起制限」に触れた。その際,「文タイプおよび発話行為タイプ」という概念の理解が必要であったため, それぞれについて簡単な説明を加えた。さらに, 心態詞の機能として, (1) 発話行為タイプ標識あるいは修飾語としての機能, (2) メタ語用論的指令としての機能, (3) 心的態度表明としての機能の３つの異なる方向性が挙げられるが, ここで重要なことは, 意味最大限主義と意味最小限主義のどちらの立場をとるかにあり, 本研究では, 後者の立場をとることから, 心態詞の機能を「心的態度の表明」とみなし, 正確には「含意としての心的態度の表明」であるという見解を示唆した。本章の最後は, 必要条件とはみなさないものの, 心態詞研究における重要なテーマの１つである「心態詞の結合可能性」という特徴に当てた。結合においては, 心態詞の意味と語順の関係が問われるが, ここでは, 先行文献における分析を簡単に紹介するに留め, 本研究における仮説的な分析は第5章で行うこととした。

第3章は, 心態詞と話法詞の境界づけの試みであった。ともに話し手の心的な評価や判断

を表すとされる点で，これまで両者の特徴的な区別が困難とされてきた心態詞と話法詞の区別は，心態詞あるいは話法詞研究における 1 つの重要な課題である。この課題に取り組むにあたり，まず，先行文献における「命題」と「モダリティ」という概念を詳述した。そのうえで，それぞれの概念に関する本研究の捉え方を提示した。

「心態詞は命題に関与しない」という特徴は，心態詞に関するあらゆる文献で述べられることであるが，ここで言われる「命題」がどのような概念として扱われているかはほとんど記されない。しかし，等しく「命題」と呼んでいても，真理条件意味論，認知意味論，語用論といった異なる研究分野によって，その概念の捉え方に微妙な相違がある。この際，例えば語用論（関連性理論）の立場をとり，高次表意を非命題的とみなす場合，真理条件的か否かという点で話法詞と心態詞を区別する本研究の立場とは相容れないことになる。また，認知意味論（中右 1994）の立場から，S モダリティと D モダリティを区別せず，等しく文演算子として扱うとした場合も，やはり話法詞と心態詞は区別されない。そこで，本研究では，真理条件意味論における「命題」の捉え方を採用し，等しく「モダリティ」表現として扱われる話法詞と心態詞の明確な区別を提案した。その際，心態詞の心的態度を「含意」とみなすことが最大の論点になったが，当然，この「含意」という概念に関しても説明が必要であった。そこで，Grice（1967: 1975，1989 で刊行）が提唱したコミュニケーション理論を紹介し，心態詞 *aber* を例に，意味最小限主義の立場に従った心態詞の基本的意味（Grundbedeutung）の抽出を試みた。また，心態詞の機能的な意味である心的態度が，その基本的意味から派生する意味であると捉えたうえで，その心的態度の導出にあたり，関連性理論における「談話連結詞」（discourse connectives）に関する分析を適用して，「手続き的意味」（procedural meaning）という「含意」に言及した（心態詞 *mal* に関する基本的意味および心的態度に関しては，第 4 章を参照）。

最後に，「命題」のあり方に従った心態詞と話法詞の区別によって生じる問題点を挙げ，その解決策として，Frege の「思想」（Gedanke）の概念を採用した。そこから，本研究における「命題」の定義を（349）とし，「文の命題」と「文の意味」に関しては（350）にまとめた。これにより，心態詞と話法詞の意味的な区別を提案した。

(349) = (121) 文の命題は，あらゆる時点において，同一の可能世界に対して，それぞれ真偽が問われうる可能世界の集合である。

(350) = (123) a. 文の命題: $p_{(w, t)}$ $\neg p_{(w, t)}$

b. 文の意味（内包）: $p_{(w, t)}$

c. 文の外延: $p_{(w_1, t_1)}$ （p = Proposition, w = world, t = time）

第 4 章では，心態詞 *mal* に関して，形態，統語，意味，語用の観点から具体的な分析を行った。まず，心態詞 *mal* の使用環境，機能，形態を概観した。続いて，心態詞 *mal* の意味論的考察として，その派生元である時間副詞 *einmal*（いつか，かつて）に焦点を当て，先行文献における意味論的な分析を紹介した。さらに，時間副詞 *einmal* の語彙形成過程で関連づけられる頻度副詞としての *einmal*（一回／一度）について触れ，最終的に，心態詞 *mal*，時間副詞 *einmal*，頻度副詞 *einmal* の明確な区別を図った。その際，時間副詞 *einmal* が，頻度副詞 *einmal* と心態詞 *mal* のいわば「意味的な橋渡し」を担うことを示唆し，その要因として，「作用域」と「強勢」の観点を取り挙げた。その結果，頻度副詞 *einmal* から時間副詞 *einmal* という意味的な変遷を経て，心態詞 *mal* が語彙的に派生したと考えられる妥当性を述べた。

また，心態詞 *mal* が特に行為指示型（Direktive）において使用されることをふまえ，時間副詞 *einmal* との密接なつながりを検討した。というのも，行為指示の発語内目的（illocutionary point）を持つ発語内行為の成功条件（felicity conditions）の 1 つに，「命題内容は，聞き手が実行可能なこれから先の事柄（命題内容条件）」（久保 2002: 6）という項目があり，一方，心態詞 *mal* が使用される場合には，発話の内容が未来と関係していなければいけないことが示唆されているからである（cf. Thurmair 1989; 185）。この点は，「いつか」という未来の時を表す時間副詞 *einmal* との関係を強く想起させ，時間副詞 *einmal* の意味的な解釈が，心態詞 *mal* の用法に寄与すると考える妥当性につながるものである。ここで論点となるのは，時間副詞 *einmal* が設定する「不特定の時間幅」という捉え方で，話し手は，この時間副詞 *einmal* の意味論的意味に基づいて，聞き手による要求の実行に対し，「いつでも良い」といった話し手の意図を表面上示すのではないかという分析が提案された。

続く本章の第 4 節では，心態詞 *mal* の機能に関する語用論的な考察を行った。先行文献で述べられてきた心態詞 *mal* の機能としては，下記（351a, b）が挙げられるが，このうち，（351b）の機能については問題があると考えられた。

(351) = (159) 心態詞 *mal* の機能:

a. 発語内行為「要求」の強制力を緩和／強制力の比重を軽減する。

（Frank 1980; Thurmair 1989: Helbig 1994; Zifonun et al. 1997; 岩崎 1998; 井口 2000; Bublitz 2003）

b.「要求」に丁寧な（höflich）（英: polite）性格を与える。

（Frank 1980; Thurmair 1989; Weinrich 1993; Helbig 1994; 岩崎 1998; Werner 2000; Bublitz 2003）

そこで, 92 名の被験者を対象としたアンケート調査およびその統計処理に基づき, 少なくとも, 話法助動詞 *können* を伴う決定疑問文（*yes/no*-interrogatives）では, 要求における命題内容および相手の立場（例: 他人・教授・友人）を問わず, 心態詞 *mal* は「要求に丁寧な性格を付与する」という（351b）の機能を発揮し難いことを指摘した。また, 会話の相手（疎遠／目上）によっては, むしろより不丁寧な, 不自然な発話として作用し, あるいは厚かましい（押し付けがましい）印象を与えることも認められた。心態詞 *mal* が発話に及ぼすこのような影響に関しては, Wunderlich（1976）, Helbig（1977）, Franck（1980）に従い, *mal* の有する「要求の標識（Indikator）としての特性」に言及した。この特性が, *können* を伴う間接的な要求の機能と矛盾するという考え方である。そして, この問題の理論的な解決を発展させる形で, 心態詞 *mal* の本来の使用意義の見直しを図った。その手がかりとして, 本研究では, 日本語の程度副詞「ちょっと」との比較分析を行った。「mal は, さしずめ我々の„ちょっと“という奴に甚だよく似ている」（関口 1961）と述べられるほど, 心態詞 *mal* には, 日本語の翻訳レベルで, 頻繁に「ちょっと」が用いられるが, *mal* と「ちょっと」に類似する意味機能と, そこから導かれる相違点に注目することによって, *mal* の不適切な使用の原因と, 同時にその積極的な使用意義が見えてくると考えられたからである。結論として, 本研究では, 心態詞 *mal* の使用意義の１つを「連帯性の指標」（Solidaritätsindikator）（英: solidarity marker）という点に見い出し, この観点と「ポライトネス理論」（Brown/Levinson 1987）における「丁寧さ」の概念との関係に言及して, 心態詞 *mal* の機能的な意味である心的態度をまとめた。その際, 心態詞 *mal* の基本的意味の抽出も, 重要な課題の１つであった。本研究では, Grice の理論における「一般的な会話的含意」を適用し, 頻度副詞 *einmal* の語彙的意味に基づく「事象の回数が複数回でない」という一般化された会話的含意を「非多発性」（Nicht-Repetitionalität）という性質で捉え, この意味を, 心態詞とその同音異義語に共通する基本的意味であるとみなした。

また，先行文献で他の特性として考えられてきた，いわゆる「非持続性」(Nicht-Dauerhaftigkeit)や「非即時性」(Nicht-Sofortigkeit)は，この基本的意味である「非多発性」からの派生であると考えた。そして，特に„Komm mal sofort her!“(*mal* すぐに来て)という文の考察をふまえて，最終的に，基本的意味としての「非多発性」と，そこから派生する「非持続性」という２つの特性が，心態詞 *mal* に付随する特性として最も重要な役目を担うと考えるに至った。さらに，„Kannst du mir *mal* 100 Euro leihen?“(*mal*100 ユーロ貸してくれる？)といった金銭の絡む依頼発話を取り上げ，心態詞 *mal* が含意する内容には，「非多発性」と「非持続性」とは別に，これらの特性からさらに派生する形で，語用論レベルにおける「些事性」(Beiläufigkeit)(cf. Bublitz 2003: 186)の含意をも含まれることを論じた。この些事性の含意は，(352)に示す心態詞 *mal* の使用環境と密接に関係する。

(352) = (205b) 心態詞 *mal* は，聞き手による「要求」の実行に対する負担の比重が比較的軽いと話し手がみなす場合に適切に使用される。

そして，「非多発性」という基本的意味を携えて，そこからさらに機能的な意味としての「心的態度」を手続き的コード化の考え方に求め，心態詞としての *mal* による「些事性」の含意と，先に述べた心態詞 *mal* に付随する「連帯性の指標」という含意的な機能を併せて，心態詞 *mal* の心的態度を(353)のように結論づけた。

(353) = (221) 心態詞 *mal* の心的態度:

当該の語を伴う命題に対して，その内容を些事であると話し手がみなしており，かつ話し手と聞き手の間に，連帯性の基盤が確立されていると話し手がみなしているとして解釈せよ。

最後の第 5 章では，*mal* 分析に関する今後の展望として，心態詞の結合形を考察した。結合には，文タイプ依存といった制限が課せられるものの，結合の種類は非常に豊富である。本研究では，主に Doherty（1985)，Thurmair（1989, 1991)，Abraham（1991c, 2000, 2005[2])を取り上げ，結合に見られる規則性について言及した。本章の主な目的は，心態詞 *mal* の結合形を例に，その語順制限の原理を追求することにあった。その際，筆者による心態詞 *mal* の統語論的・意味論的な仮説を提示し，心態詞 *ja*, *denn*, *wohl* との結合形を取り上げて，その仮説

の有効性を検証した。

まず，手がかりとして，先行文献の *ja wohl*-結合に注目した。その際，そもそも不変化詞 *wohl* を心態詞として扱うか，話法詞とみなすかという問題があり，本研究では，ひとまず心態詞としてみなしたうえで，その結果，意味最小限主義の立場から生じる„wohl“の意味的な共通性の問題に取り組んだ。また，*wohl* に関する最近の研究として Zimmermann（2004a，b）を取り上げ，*wohl* の統語的・意味的な分析を検討するとともに，*ja wohl*-結合に関する示唆に注目した。そこでは，「発話行為オペレータ修飾語」（Modifikatoren des Sprechaktoperators）と「文タイプ修飾語」（Satztypmodifikatoren）という概念が論点となり，Zimmermann（2004a，b）によれば，*wohl* は「文タイプ修飾語」という結論がなされる。これらの点をふまえ，心態詞 *mal* の結合に関して，筆者は，意味論的および統語論的な仮説を立てた。まず，意味論的な仮説としては，心態詞 *mal* を，心態詞 *ja* などと同様に「発話行為オペレータ修飾語」とみなすというものであった。また，統語論的な観点では，心態詞 *mal* の基底位置を VP 内部（VP の付加位置）とし，その際，*mal* の時間副詞としての解釈可能性に言及して，意味最小限主義の立場から，*mal* は，基底生成の段階で［temporal］と［modal］の素性を潜在的に併せもつと仮定した。たとえ仮説的な段階であれ，このような分析を試みることで，心態詞 *mal* が本来的に表すと考えられる「多義性」を明示することが目的であった。

以上，本研究では，心態詞 *mal* を中心的な研究対象に取り上げ，主に，統語論，意味論，語用論の観点から，その意味と機能を見直した。それにより，とりわけ語用論的な分析に基づき，日本におけるドイツ語教育の一端として，‘生きた’コミュニケーション能力の向上を図るとともに，他の心態詞分析に関する将来的な展望を提供することを目的とした。そもそも，本研究の発端は，四年前，筆者自身が経験した些細な出来事にある。博士後期課程 2 年目の夏に，それまで日本で温めていた（心態詞と関係のない）博士論文の構想を，A4 用紙 10 枚のドイツ語に訳し，以前から約束を取りつけていたあるドイツ人の先生のもとへ向かったときのことである。初対面の相手とのひととおりの挨拶を終えて，かばんから書類の束を取り出し，筆者は，その先生に遠慮がちに依頼した（つもりでいた）。„Können Sie mal das Konzept meiner Dissertation durchlesen?“。そのとき，一瞬ではあったが，その先生は微かに，しかし確かに眉をひそめた（ように感じた）。今思えば，そもそも接続法Ⅱ式や副詞 *bitte*（英: please）を使用しなかった時点で，すでに不自然な依頼発話であると思われ，同時に，たとえ上記のような発話が，相手の気を損なわせたとしても，筆者の口調や態度そのものが，不自然あるいは威圧的であったのかもしれない。そのため，その原因を„mal“に見い出そうとしたこと

が，そもそも単なる思い過ごしであった可能性もある。そして，もし当時もこのように考えて別に問題視しなかったとしたら，本研究には至らなかったであろう。しかし，上記の文において，自らが正確な意味を知らずに‘適当に’使用した語は„mal“のみであったことから，筆者はその後，ドイツ語の教科書や参考書に目を通して考えた。「きっと„mal“が曲者にちがいない」。

当時，留学中であった筆者は，「使用するとより自然な感じになる」と授業で学んだ記憶がある，あるいは現地でよく耳にするといった理由と，だからこそ，語調を整えることができるといった意味合いだけで，「心態詞」としての明確な意識はほとんどないまま，とりわけ *ja*, *doch*, *denn*, *mal* を多用していた（当時に限らず，現在もなお，口癖のように使用してしまうときがある）。ちょうど，日本人のドイツ語話者が，日本語の「ね」と類似しているために，北ドイツの口語表現„ne? (= nicht wahr?)“を多用するのと同じように。本来，例えば「そのことをあなたもすでに知っていますね」という日本語をドイツ語で表現する場合，„Das weißt du schon, ne?“と言うより，„Das weißt du ja schon.“と発話した方が適切かつ自然である。序論および 4.5.2.1.で引用したが，心態詞全般について，„Partikellose Sprache ist im Deutschen eindeutig als barsch, schroff oder apodiktisch markiert.“（心態詞を伴わないと，ドイツ語では明らかに，無愛想で素気なく，断定的な話し方とみなされる）（Busse 1992: 39）や，„Es ist daher unabdingbar, dass Nicht-Muttersprachler Partikeln als unentbehrliche Mittel der Beziehungspflege lernen.“（従って，非母語話者が，人間関係を維持するために，心態詞を不可欠な手段として学ぶことは必須である）（Bublitz 2003: 184）といった記述があるとおり，心態詞の使用は，明らかに‘自然な’会話を遂行するうえで不可欠な表現手段である。このことを，Thurmair（1989: 298）は，„[...], sind sie [= Modalpartikeln] ein wichtiges Mittel zur Erweiterung der Ausdrucksmöglichkeiten.“（[...]，心態詞は表現力の可能性を拡大させる重要な手段である）と述べている。さらに，„Einüben der Partikeln ist [...] immer auch Einüben in Formen des sozialen Umgangs der Deutschen.“（心態詞を学ぶことは，[...]常に，ドイツ人との社交という形での学習でもある）（Busse 1992: 54）という記述も見られ，これらのことが，ドイツ語教育の現場での心態詞の意義を論じていることは言うまでもない。確かに，初級レベルの授業で，心態詞の用法を事細かに説明することは，事実上不可能かつ不適切であると思われる。一般の辞書や辞典，文法書，教科書においても，その形体上，心態詞だけを詳細に記述するわけにはいかず，ドイツ語学習者が，あまり意味や機能を吟味せずに，心態詞を多用してしまうケースも起こりうるであろう。ただし，それが「依頼行為」といったまさしく「社交」での緊張緩

和に役立つような心態詞の場合には，その使い方を誤ることは，すなわち，社交の乱れにつながりかねない。この意味において，本研究で取り上げた心態詞 *mal* の分析には，研究対象としての明確な意義があると考えられる。心態詞を比較的詳細に扱うとすれば，おそらく中級レベル以上の会話や作文の授業が適当であり，さらにその際には，「円滑な言語コミュニケーション」という観点からドイツ語教育を目指すといった大前提も必要となる。そして，これらの条件が整ったならば，心態詞の意味および用法を分析し，それによる可能な修正を行った本研究におけるような考察は，ドイツ語による（言語）コミュニケーションの実態，ならびにドイツ人との社交を見直す手がかりを提供するとともに，その使用に際しての人間関係の構築・維持に貢献するものとなるにちがいない。

全世界で３億部以上を売り上げ，無数の読者を魅了したと謳われる「ハリーポッター」シリーズの第 2 巻（1999）に，次のような一節がある。

(354) »Gib mir die Pfanne.«

»Du hast das Zauberwort vergessen«, sagte Harry gereizt.

[...]

»Ich habe >bitte< gemeint!«, setzte Harry rasch nach.（Rowling 1999: 6）

ダドリーはニタッと笑い，ハリーに向かって「フライパンを取ってよこせよ」と言った。

「君，あの魔法の言葉を付け加えるのを忘れたようだね」ハリーがイライラと答えた。

[...]

ハリーは慌てて言った。「僕，『どうぞ』のことを言ったんだ。別に僕・・・・・・」

（松岡 2000: 7）

「魔法のことば」とまでは言わずとも，„mal“というたった３文字の単語にも，「不思議な力」が宿っていることに疑いの余地はない。

参考文献

Abraham, W.（1991a）: “Discourse particles in German: How does their illocutive force come about?,” In: Abraham,W.（Hrsg.）*Discourse Particle*s. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins. 203-252.

Abraham, W.（1991b）: “Modal particle research. The state of the art,” In: *Multilingua* 10（1/2）. 9-15.

Abraham, W.（1991c）: “The grammaticization of the German modal particles,” In: Traugott, E.C./ Heine, B.（ed.）*Approaches to Grammaticalization.* Vol. 2. Amsterdam/Phiadelphia: Benjamins. 331-380.

Abraham, W.（2000）: “Modal particles in German: Word classification and legacy beyond grammaticalisation,” In: Vogel, P.M./Comrie, B.（ed.）*Approaches to the typology of word classes.* Berlin/New York: Walter de Gruyter. 321-350.

Abraham, W.（2005[2]）: *Deutsche Syntax im Sprachvergleich. Grundlegung einer typologischen Syntax des Deutschen.* Studien zur deutschen Grammatik 41.Tübingen: Gunter Narr Verlag.

Altmann, H.（1979）: “Funktionsambiguitäten und disambiguierende Faktoren bei polyfunktionalen Partikeln,” In: Weydt, H.（Hrsg.）*Die Partikeln der deutschen Sprache.* Berlin: Walter de Gruyter. 351-364.

Altmann, H.（1993）: “Satzmodus,” In: *Syntax. HSK 9.1.* 1006-1029.

Asbach-Schnitker, B.（1977）: “Die Satzpartikel „wohl“,” In: Weydt, H.（Hrsg.）*Aspekte der Modalpartikeln. Studien zur deutschen Abtönung.* Tübingen: Max Niemeyer Verlag. 38-61.

Atsuo, K.（1989）: “Textorte und Partikeln im Japanischen und Deutschen,” In: Weydt, H.（Hrsg.） *Sprechen mit Partikeln.* Berlin/New York: Walter de Gruyter.

Austin, J.L.（1962）: *How to do things with words.* Urmson, J.O. and Sbisà, M.（ed.）Oxford: Clarendon Press.

Autenrieth, T.（2002）: *Heterosemie und Grammatikalisierung bei Modalpartikeln.* Linguistische Arbeiten 450. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

東照二（2002[7]）:『社会言語学入門』研究社.

Bartsch, R.（1972）: *Adverbialsemantik.* Frankfurt/Main: Athennäum Verlag.

Bartsch, R.（1979）: “Die Unterscheidung zwischen Wahrheitsbedingungen und anderen Gebrauchsbedingungen in einer Bedeutungstheorie für Partikeln,” In: Weydt, H.（Hrsg.）*Die Partikeln der deutschen Sprache.* Berlin: Walter de Gruyter.

Bastert, U.（1985）: *Modalpartikel und Lexikographie.* Eine exemplarische Studie zur Darstellbarkeit von *doch* im einsprachigen Wörterbuch. Tübingen.

Bäuerle, R.（1979）: *Temporale Deixis temporale Frage.* Tübingen: Gunter Narr Verlag.

Becker, N.（1976）: “Die Verknüpfungspartikeln „denn, mal, doch” und andere,” *Zielsprache Deutsch.* 3. 6-12.

ベルガー, ディーター・橋本文夫・藤田五郎・佐伯禎明・鐵野善資（1990）:『ドイツ文法・疑問の解明　ドゥーデン編集部の回答』三修社.

Borst, D.（1985）: *Die affirmativen Modalpartikeln doch, ja und schon: Ihre Bedeutung, Funktion, Stellung und ihr Vorkommen.* Linguistische Arbeiten 164. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

Blakemore, D.（1987）: *Semantic Constraints on Relevance.* Oxford: Blackwell.

Blakemore, D.（1988）: “*So* as a Constraint on Relevance,” *Mental Representation: The Interface between Language and Reality*. Kempson, R.（ed.）Cambridge: Cambridge University Press. 183-195.

Blakemore, D.（2000）: “Indicators and Procedures: *Nevertheless* and *But*,” *Journal of Linguistics* 36: 3. 463-486.

Brandt, M./Reis, M./Rosengren, I./Zimmermann, I.（1992）: “Satztyp, Satzmodus und Illokution,” In: Rosengren, I.（Hrsg.）*Satz und Illokution.* Linguistische Arbeiten 278. Tübingen: Max Niemeyer Verlag. 1-90.

Brandt, P./Dettmer, D./Dietrich, R. A./Schön, G.（1999）: *Sprachwissenschaft. Ein roter Faden für das Studium.* Köln/Weimer/Wien: Böhlau Verlag.

Brauße, U.（1992）: “„Wohl“－Lexikalische Variation von Adverbialen,” *Deutsche Sprache* 20. 219-234.

Brown, P./Levinson, C. S.（1987）: *Politeness: Some universals in language usage.* Cambridge: Cambridge University Press.

Bublitz, W.（1978）: *Ausdrucksweisen der Sprechereinstellung im Deutschen und Englischen.* Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

Bublitz, W.（2003）: “*Nur ganz kurz mal*: Abschwächungsintensivierung durch feste Muster mit *mal*,” In: Held, G.（Hrsg.）*Partikeln und Höflichkeit*.（Reihe Cross cultural communication Vol. 10）. Frankfurt am Main: Peter Lang. 179-201.

Burkhardt, A.（1994）: “Abtönungspartikeln im Deutschen: Bedeutung und Genese,” In: *Zeitschrift für germanistische Linguistik 22*. 129-151.

Burkhardt, A.（2001）: “Abtönungspartikeln im Deutschen und ihre historisch-lexikographische Beschreibung im ‘neuen Paul’,” In: *Energeia* 26. 42-71.

Busse, D.（1992）: “Partikeln im Unterricht Deutsch als Fremdsprache,” In: *Muttersprache* 102. 37-59.

Bußmann, H.（2002）: *Lexikon der Sprachwissenschaft.* Dritte, aktualisierte und erweiterte Aufl. Stuttgart: Kräner.

Cardinaletti, A.（2007）: “Für eine syntaktische Analyse von Modalpartikeln,” In: Thüne, E.-M./Ortu, F.（Hrsg.）*Gesprochene Sprache - Partikeln.*（Deutsche Sprachwissenschaft international. Band 1）. Frankfurt am Main: Peter Lang. 89-101.

Carston, R.（1988）: “Implicature, Explicature and Truth-Theoretical Semantics,” *Mental Representations: The Interface between Language and Reality.* Ruth, K.（ed.）Cambridge: Cambridge University Press. 155-181.

Carston, R.（2000）: “Explicature and Semantics,” *UCL Working Papers in Linguistics*, 12. London: University College. 1-44.

Chomsky, N.（1995）: *The Minimalist Program.* Cambridge: The MIT Press.

Chomsky, N.（2001）: “Derivation by phase,” In M. Kenstowicz（ed.）*Ken Hale: A Life in Language*. Cambridge: The MIT Press. 1-52.

Cinque, G.（1999）: *Adverbs and Functional Heads. A Cross-Linguistic Perspective*. New York/Oxford: Oxford University Press.

Cinque, G.（2006）: *Restructuring and Functional Heads. The Cartography of Syntactic Structures.* Vol. 4. New York/Oxford: Oxford University Press.

Coniglio, M.（2007）: “Deutsche Modalpartikeln: Ein Vorschlag zu ihrer syntaktischen Analyse,” In: Thüne, E.-M./Ortu, F.（Hrsg.）*Gesprochene Sprache - Partikeln.*（Deutsche Sprachwissenschaft international. Band 1）. Frankfurt am Main: Peter Lang. 103-113.

Coulmas, F./Marui, I./Reinelt, R.（1983）: “Kleines Formellexikon Japanisch- Deutsch,” Berlin: Erich Schmidt Verlag.

Doherty, M.（1979）: “Wohl,” In: *Linguistische Studien*. Arbeitsberichte. 60. 101-140.

Doherty, M.（1985）: “Epistemische Bedeutung,” *studia grammatica.* XXIII.

Doherty, M.（1987）: “Epistemc Meaning,” Berlin/Heidelberg/New York: Springer.

DUDEN（2006[7]）: *Die Grammatik*. Mannheim: Duden Verlag.

Engel, U.（1988）: *Deutsche Grammatik.* Heidelberg: Julius Groos Verlag.

Engeln, B.（1984）: *Einführung in die Syntax der deutschen Sprache.* Bd.I. Burgbücherei Schneider, Baltmannsweiler: Pödagogischer Verlag.

Engeln, B.（1986）: *Einführung in die Syntax der deutschen Sprache.* Bd.II. Burgbücherei Schneider, Baltmannsweiler: Pädagogischer Verlag

Franck, D.（1979）: “Abtönungspartikel und Interaktionsmanagement,” In: Weydt, H.（Hrsg.）*Die Partikeln der deutschen Sprache.* Berlin: Walter de Gruyter. 3-13.

Franck, D.（1980）: *Grammatik und Konversation.* Monographien Linguistik und Kommunikations-wissenschaft 46. Königstein: Scriptor.

Frey, W./Pittner, K.（1999）: “Adverbialpositionen im deutsch-englischen Vergleich,” In: Bierwisch, M.（Hrsg.）*studia grammatica 47.* Berlin: Akademie Verlag. 14-40.

Fukui, N.（1995）: *Theory of Projection in Syntax.* California: CSLI Publicataions./Tokyo: Kurosio Publishers.

Gazdar, G.（1979）: *Pragmatics: Implicature, Presupposition and Logical Form.* New York: Academic Press.

Gerstenkorn, A.（1976）: *Das „Modal“-System im heutigen Deutsch.* Münchner germanistische Beiträge, Bd. 16. München: Münchner Universitäts-Schriften.

Goffmann, E.（1975）: *Interaktionsrituale. Über Verhalten in direkter Kommunikation.* Frankfurt/M.: Suhrkamp.

Gornik-Gerhardt, H.（1981）: *Zu den Funktionen der Modalpartikel „schon“ und einiger ihrer Substituentia.* Tübingen: Gunter Narr Verlag.

Grewendorf, G.（1988）: *Aspekte der deutschen Syntax. Eine Reaktions-Bindungs-Analyse.*（Studien zur deutschen Grammatik 33）. Tübingen: Gunter Narr Verlag.

Grewendorf, G./Zaefferer, D.（1991）: “Theorie der Satzmodi,” In: *Semantik. HSK 6*. 270-285.

Grice, H. P.（1967）: “Logic and Conversation,” Harvard University: William James Lecture.

Grice, H. P.（1975）: “Logic and Conversation,” In: Cole, P./Morgan, J.（ed.）*Syntax and Semantics 3: Speech Acts.* New York: Academic Press. 41-58.

Grice, H. P.(1978): “Futrher notes on logic and Conversation,” In: Cole, P.(ed.) *Syntax and Semantics 9: Pragmatics.* New York: Academic Press. 113-127.

Grice, H. P.(1989): *Studies in the Way of Words.* Cambridge, MA: Harvard University Press.

Grice, H. P.(1996): “Logic and Conversation,” In: Geirsson, H/Losonsky, M.(ed.) *Readings in Language and mind*. Cambridge, MA: Blackwell Pablishers. 121-133.

Grimm, J./Grimm, W.(1862): *Deutsches Wörterbuch.* Dritter Band. Leipzig: Verlag von S. Hirzel.

Grimm, J./Grimm, W.(1885): *Deutsches Wörterbuch.* Sechster Band. Leipzig: Verlag von S. Hirzel.

Grimm, J./Grimm, W.(1960): *Deutsches Wörterbuch.* Vierzehnter Band.Ⅱ. Abteilung. Leipzig: Verlag von S. Hirzel.

Grosz, P.(2005): *'dn' in Viennese German. The Syntax of a Clitic Version of the Discourse Particle 'denn'*. University of Vienna: MA thesis.

Grosz, P.(2006): *German Discourse Particles are Weak Sentence Adverbs.* University of Viena: ms, *XXXII Incontro di Grammatica Generativa - University of Florence - March 3, 2006.*

Gu, Y.(1990): “Politeness phenomena in modern Chinese,” *Journal of pragmatics.* Vol. 14. No. 1. North-Holland. 237-257.

郡司隆男・阿部泰明・白井賢一郎・坂原茂・松本祐治(2004):『意味』岩波書店.

グループ・ジャマシイ[砂川有里子・駒田聡・下田美津子・鈴木睦・筒井佐代・蓮沼昭子・ベケシュ アンドレイ・森本順子](1998):『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版.

Hinrichts, U.(1983): “Können Abtönungspartikeln metakommunikativ funktionieren?,” In: Weydt, H.(Hrsg.) *Partikeln und Interaktion.* Tübingen: Max Niemeyer Verlag. 274-290.

Helbig, G.(1977): “Partikeln als illokutive Indikatoren,” *Deutsch als Fremdsprache* 14. 30-44.

Helbig, G.(1984): *Studien zur deutschen Syntax.* Band 2. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.

Helbig, G.(1994[3]): *Lexikon deutscher Partikeln.* 3., durchgesehene Aufl. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.

Helbig, G./Buscha, J.(1999[19]): *Deutsche Grammatik.* Leipzig: Langenscheidt, Verlag Enzyklopädie.

Helbig, G/Helbig, A.(1993[2]): *Lexikon deutscher Modalwörter.* 2., durchgesehene Aufl. Leipzig: Verlag Enzyklopädie.

Helbig, G./Kötz, W.(1985[2]): *Die Partikeln.* 2., überarbeitete Aufl. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.

Hentschel, E.（1983）: “Partikeln und Wortstellung,” In: Weydt, H.（Hrsg.）*Partikeln und Interaktion.* Tübingen: Max Niemeyer Verlag. 46-53.

Hentschel, E./Weydt, H.（1990）: *Handbuch der deutschen Grammatik.*（邦訳: 『ハンドブック 現代ドイツ文法の解説』（1995）:［西本美彦・高田博行・河崎靖 共著］同学社）.

Hentschel, E.（1991）: “Aspect versus particle: Contrasting German and Serbo-Croatian,” In: *Multilingua* 10（1/2）. 139-149.

Hentschel, E./Weydt, H.（2003）: *Handbuch der deutschen Grammatik.* 3., völlig neu bearbeitete Auflage. Berlin/New York: Walter de Gruyter.

東森勲・吉村あき子（2003）:『関連性理論の新展開 認知とコミュニケーション』研究社.

平林周祐・浜由美子（1988）:『外国人のための日本語例文・問題シリーズ 10 敬語』荒竹出版.

Hoberg, U.（1973）: “*Vielleicht － wahrscheinlich － sicher*. Bemerkungen zu einer Gruppe von pragmatischen Adverbialen,” In: *Linguistische Studien* Ⅳ. Festgabe für Paul Grebe zum 65. Geburtstag. Teil 2.: Düsseldorf. 87-102.

Hornstein, N.（1990）: *As Time Goes By.* Cambridge: The MIT Press.

井出祥子（2006）:『わきまえの語用論』大修館書店.

井出祥子・荻野綱男・川崎晶子・生田少子（1986）:『日本人とアメリカ人の敬語行動－大学生の場合－』南雲堂.

Ickler, T.（1994）: “Zur Bedeutung der sogenannten >Modalpartikeln<,” In: *Sprachwissenschaft* 19. Nr.3. 374-404.

飯野勝己（2007）:『言語行為と発話解釈 コミュニケーションの哲学に向けて』勁草書房.

Ikoma, M.（2007）: *Prosodische Eigenschaften der deutschen Modalpartikeln.* Hamburg: Verlag Dr. Kovač.

井口靖（1986）:「文の意味構造におけるModalwortの位置付け」『エネルゲイア』第12号. 52-64.

井口靖（1995）:「『とりたて詞』とモダリティ」『阪神ドイツ語学研究会 会誌』第 7 号. 7-22.

井口靖（1999）:「非命題副詞の機能について」『阪神ドイツ語学研究会 会誌』第 11 号. 7-29.

井口靖（2000）:『副詞』大学書林.

今井邦彦（2001）:『語用論への招待』大修館書店.

今井芳昭（2006）:『依頼と説得の心理学』サイエンス社.

板山眞由美（1988）:「ドイツ語の『敬意表現』について－その予備的考察－」*Seminarium*; 第 10 号. 大阪市立大学ドイツ文学会. 69-84.

板山眞由美・山下仁・下川浩（1991）:「ドイツ語の『敬意表現』に関する質問紙調査」『情報科学研究』第 9 号. 独協大学情報センター. 123-134.

板山眞由美（1992）:「ドイツ語の要請表現と『敬意』－質問紙調査にもとづいて－」『流通科学大学論集－人文・自然編－』第 5 巻第 1 号. 流通科学大学学術研究会. 11-28.

Iwasaki, E.（1972）: “Abtönungspartikeln im Deutschen und Japanischen,” In: *Energeia 4*. 103-110.

Iwasaki, E.（1977）: “Wie hieß er noch?,” In: Weydt, H.（Hrsg.）*Partikeln und Interaktion.* Tübingen: Max Niemeyer Verlag. 63-72.

岩崎英二郎（1986）:「独和辞典と心態詞」『エネルゲイア』第 12 号. 34-39.

岩崎英二郎（1988）:「wohl は話法詞か心態詞か」慶應義塾大学藝文學會『藝文研究』52 号. 5-17.

岩崎英二郎（1998）: *Deutsch-Japanisches Wörterbuch der Deutschen Adverbien.* 『ドイツ語副詞辞典』白水社.

岩崎英二郎・池上嘉彦・Hundsnurscher, F.（編集）（1994）:『ドイツ言語学辞典』紀伊國屋書店.

Jacobs, J.（1991）: “On the semantics of modal particles,” In: Abraham,W.（Hrsg.）*Discourse Particle*s. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins. 141-162.

Kaufmann, S.（2004）: “A modal analysis of expressive meaning: German *ja* under quantifiers,” manuscript, handout for Kōbe Shōin Graduate School, Kōbe, Japan, February 27, 2004. ［Available online at: http://www.ling.northwestern.edu/~kaufmann/Papers/kyoto_hout_small.pdf］

川崎昌子（1989）:「日常会話のきまりことば」『日本語学』2 月号 vol.8. 明治書院. 134-146.

Kawashima, A.（1972）: “Ausdruck der Höflichkeit im Deutschen und Japanischen,” In: *Energeia 4*. 111-123.

Kawashima, A./Kaneko, T.（1987）: “Japanische Satzschlußpartikeln und ihre Entsprechungen im Deutschen,” In: Kaneko, T./Stickel, G.（Hrsg.）*Deutsch und Japanisch im Kontrast. Band 4. Syntaktische-semantische Kontraste.* Heidelberg: Julius Groos Verlag. 415-451.

Kawashima, A.（1987）: *Studien zur germanistischen und kontrastiven Linguistik.* Tokyo: Dogakusha Verlag.

Kawashima, A.（1989）: “Textsorte und Partikeln im Japanischen und Deutschen,” In: Weydt, H.（Hrsg.）*Sprechen mit Partikeln.* Berlin/New York: Walter de Gruyter. 276-281.

Kemme, H. M.（1979）: *Ja, denn, doch usw. Die Modalpartikeln im Deutschen. Erklärungen und Übungen für den Unterricht an Ausländer.*（Publikationen der Projektgruppe „Lehrschwierigkeiten im Fach ‚Deutsch als Fremdsprache‘“. Nr. 5）. München: Goethe-Institut.

北原保雄(2005[13])『問題な日本語 どこがおかしい？ 何がおかしい？』大修館書店.

金水敏・今仁生美(2002[2]):『意味と文脈』岩波書店.

小泉保(2001):『入門 語用論研究—理論と応用—』 研究社.

近藤泰弘(2000):『日本語記述文法の理論』ひつじ書房.

König, E.(1991): "Gradpartikeln," In: Stechow, A. v./Wunderlich, D.(Hrsg.) *Handbuch Semantik. Ein internationales Handbuch der zeitgenössischen Forschung.*(Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft 6). Berlin/New York: Walter de Gruyter. 786-803.

König, E.(1997): "Zur Bedeutung von Modalpartikeln im Deutschen: Ein Neuansatz im Rahmen der Relevanztheorie," In: *Germanistiche Linguistik* 136. 57-75.

幸田薫(1986): "Deutsche Abtönungspartikeln in Fragesätzen und ihre japanischen Entsprechungen," 『東京学芸大学紀要』第 2 部門 人文科学; 第 37 集 東京学芸大学紀要出版委員会. 169-181.

幸田薫(1992):「発話行為に係る不変化詞 aber, „allerdings", doch」『ドイツ文学』88 号 日本独文学会. 11-22.

Kratzer, A.(1981): "The National Category of Modality," In: Eikmeyer, H.-J./Rieser, H.(ed.) *Words, Worlds, and Contexts. New Approaches in Word Semantics.* Berlin/New York: Walter de Gruyter. 38-74.

Kratzer, A.(1999): *Beyond 'Ouch' and 'Oops'. How descriptive and expressive meaning interact*. ms, handout for Cornell Conference on Theories of Context Dependency, Cornell University, March 26, 1999.[Available online at: http://semanticsarchive.net/Archive/WEwNGUyO]

Krifka, M.(2004): *Sprechakte und Satztypen*. Ms,(Hauptseminar Sommersemester. Institut für deutsche Sprache und Linguistik). Humbolt-Universität zu Berlin.[Available online at: http://amor.rz.hu-berlin.de/~h2816i3x/lehrstuhl.html]

Krivonosov, A.(1977a): *Die modalen Partikeln in der deutschen Gegenwartssprache.* Göppinger Arbeiten zur Germanistik 214. Göppingen: Verlag Alfred Kümmerle.

Krivonosov, A.(1977b): "Deutsche Modalpartikeln im System der unflektierten Wortklassen," In: Weydt, H.(Hrsg.) *Aspekte der Modalpartikeln. Studien zur deutschen Abtönung.* Tübingen: Max Niemeyer Verlag. 176-216.

久保進(編著)・阿部桂子・越智希美子・鈴木光代・向井留実子(共著)(2002):『発語内行為の意味ネットワーク—言語行為論からの辞書的対話事例分析—』 晃洋書房.

久野暲(1978):『談話の文法』大修館書店.

国松浩二 他(編著)(2000[2]):『独和大辞典』小学館.

黒田亘・野本和幸(編)(2006[2]):『フレーゲ著作集４ 哲学論集』勁草書房.

Kwon, M.(2005): *Modalpartikeln und Satzmodus. Untersuchung zur Syntax, Semantik und Pragmatik der deutschen Modalpartikeln.* München: Dissertation.

Lakoff, G.(1973): "Hedges: A study in meaning criteria and the logic of fuzzy concepts," In: *Journal of Philosophical Logics 2.* 458-508.

Langacker, R. W.(2004): "Aspects of the Grammer of Finite Clauses," In: Achard, M./Kemmer, S.(ed.) *Language, Culture and Mind.* Stanford: CSLI Publications. 535-577.

Leach, G. N.(1983): *Principles of pragmatics.* Longman Group Limited: London.(邦訳:『語用論』(1987):[池上嘉彦・河上誓作訳]紀伊國屋書店).

Lemnitzer, L.(2001): "Wann kommt er denn nun wohl endlich zur Sache? Modalpartikel-Kombinationen. Eine korpusbasierte Untersuchung," In: Lehr, A.(Hrsg.), *Sprache im Alltag*. Berlin/New York: Walter de Gruyter. 349-371.

Löbner, K.(1989): "German *Schon – Erst – Noch*: An Integrated Analysis," In: *Linguistic and Philosophy* 12. 169-212.

Lüger, H.H.(2001): "Höflichkeit und Höflichkeitsstile," In: Lüger, H.H.(Hrsg.) *Höflichkeitsstile*. Frankfurt am Main/New York: Peter Lang. 3-23.

Levinson, S. C.(1983): *Pragmatics.* Cambridge: Cambridge University Press.

Levinson, S. C.(1983): *Pragmatics.*(Übersetzung: *Pragmatik.*(2000[3]): neu übersetzt von Wiese, M. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.).

Lindner, K.(1991): "'Wir sind ja doch alte Bekannte' The use of German *ja* and *doch* as modal particles," In: Abraham,W.(Hrsg.) *Discourse Particle*s. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins. 163-202.

Lohnstein, H.(2007): "On Clause Types and Sentential Force," In: *Linguistische Berichte*. 209.

Lüger, H.H.(2001): "Höflichkeit und Höflichkeitsstile," In: Lüger, H.H.(Hrsg.) *Höflichkeitsstile*. Frankfurt am Main/New York: Peter Lang. 3-23.

Lyons, J.(1968): Introduction to theoretical linguistics. Cambridge: Cambridge University Press.

真嶋潤子・濱田朱美(1999):「日本語初級教科書の分析試案 ー『ちょっと』の意味・用法からー」『日本語・日本文化研究』第 9 号 大阪外国語大学日本語講座. 27-44.

益岡隆志・仁田義雄・郡司隆男・金水敏（2001[2]）:『文法』岩波書店.

May, Corinna（2000）: *Die deutschen Modalpartikeln. Wie übersetzt man sie (dargestellt am Beispiel von* eigentlich*,* denn *und* überhaupt*), wie lehrt man sie?* Frankfurt a.M.: Peter Lang.

Meibauer, J.（1991）: "Existenzimplikaturen bei rhetorischen w-Fragen," In: Reis, M./Rosengren, I.（Hrsg.）*Fragesätze und Fragen.* Tübingen: Niemeyer. 223-242.

Meibauer, J.（1994）: *Modaler Kontrast und konzeptuelle Verschiebung. Studien zur Syntax und Semantik deutscher Modalpartikeln.* Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

Meibauer, J.（2001[2]）: *Pragmatik.* 2. verbesserte Aufl. Tübingen: Stauffenburg Verlag.

Meibauer, J.（2002）: *Einführung in die germanistische Linguistik.* Stuttgart/Weimar: Verlag J.B. Metzler.

三宅和子（1994a）:「『詫び』以外で使われる詫び表現－その多用化の実態とウチ・ソト・ヨソの関係－」『日本語教育』82 号 日本語教育学会. 134-146.

三宅和子（1994b）:「日本人の言語行動パターン－ウチ・ソト・ヨソ意識－」『筑波大学留学センター日本語教育論集』第 9 号 筑波大学. 29-39.

Möllering, M.（2004）: *The Acquisition of German Modal Particles. A Corpus-Based Approach.* Peter Lang: Frankfurt am Main.

中條宗助（編著）（2006）:『ドイツ語類語辞典』三修社.

中村捷・金子義明・菊池朗（2001）:『生成文法の新展開 －ミニマリスト・プログラム－』研究社.

中右実（1994）:『認知意味論の原理』大修館書店.

中山治（1985）:「『ぼかし』の構造－日本語の表現心理」『月刊言語』12 Vol.14 No.12. 大修館書店. 64-69.

西阪仰（2004[2]）:『相互行為分析という視点－文化と心の社会学的記述』金子書房.

仁田義雄（2002）:『副詞的表現の諸相』くろしお出版.

根本道也 他（編集）（2007[8]）:『新アポロン独和辞典』同学社.

信岡資生（編集）（2003[3]）:『クラウン独和辞典』三省堂.

太田達也（1998）:「心態詞 －生きた会話をつくり出す小さな言葉－」『基礎ドイツ語』第 4 号 8 月号. 三修社. 17-19.

Öhlschläger, G.（1985）: "Untersuchungen zu den Modalpartikeln des Deutschen," In: *Zeitschrift für germanistische Linguistik* 13. 350-366.

岡田伸夫(1985):『副詞と挿入文』大修館書店.

岡本佐智子・斎藤シゲミ(2004):「日本語副詞『ちょっと』における多義性と機能」『北海道文教大学論集』第五号. 65-76.

岡本真一郎(1991):「感情表現の使い分けに関与する要因」愛知学院大学人間文化研究所『人間文化』6 号. 94-105.

岡本順治(1983):「接続詞としての ABER, DOCH, OBWOHL の意味ー話し手と聞き手の知識構造ー」『エネルゲイア』9 号. 41-60.

太田達也(1998):「心態詞 ー生きた会話をつくり出す小さな言葉ー」『基礎ドイツ語』第 4 号 8 月号. 三修社. 17-19.

Oppenrieder, W./Thurmair, M.(1989): "Kategorie und Funktion einer Partikel," In: *Deutsche Sprache.* 26-39.

Ormelius-Sandblom, E.(1997): *Die Modalpartikeln ja, doch und schon. Zu ihrer Syntax, Semantik und Pragmatik.* Lunder germanistische Forschungen, 61. Stockholm: Almqvist u. Wiksells.

Paul, H.(1992): *Deutsches Wörterbuch.* 9., vollständig neu bearbeitete Aufl. von Helmut Henne und Georg Objartel unter Mitarbeit von Heidrun Kämper-Jensen: Tübingen.

彭飛(1990):『外国人を悩ませる日本人の言語慣習に関する研究』和泉書院.

彭飛(1994):『「ちょっと」はちょっと』講談社.

Posner, R.(1979a): "Bedeutung und Gebrauch der Satzverknüpfer in den natürlichen Sprachen," In: Grewendorf, G.(Hrsg.) *Sprechakttheorie und Semantik.* Frankfurt/M.: Suhrkamp. 345-385.

Posner, R.(1979b): "Bedeutungsmaximalismus und Bedeutungsminimalismus in der Beschreibung von Satzverknüpfern," In: Weydt, H.(Hrsg.) *Die Partikeln der deutschen Sprache.* Berlin: Walter de Gruyter.

Rathert, M.(1999): *Einfache Temporalitätsphänomene.* Die Kompositionalität von Tempus (Perfekt) und Temporalitätsadverbien (*bis* und *seit*) in geraden Kontexten. University of Tübingen: Master's thesis.

Redder, A.(1990): *Grammatiktheorie und sprachliches Handeln: »denn« und »da«.* Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

Redder, A.(2005): "Wortarten oder sprachliche Felder, Wortartenwechsel oder Feldtransposition?," In: Knobloch, C./Schaeder, B.(Hrsg.) *Wortarten und Grammatikalisierung.* Berlin: Walter de Gruyter. 43-66.

Reichenbach, H.（1947）: *Elements of Symbolic Logic.* New York: The Macmillan company.

Reis, M.（1977）: *Präsuppositionen und Syntax.* Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

Reis, M.（1991）: "Echo-w-Sätze und Echo-w-Fragen," In: Reis, M./Rosengren, I.（Hrsg.）*Fragesätze und Fragen.* Tübingen: Niemeyer. 49-76.

Rizzi, L.（1990）: "Speculations on Verb Second," In: Mascaró, J/Nespor, M.（eds.）*Grammar in Progress.* Dordrecht: Foris Publications. 375-386.

Rizzi, L.（1997）: "The fine structure of the left periphery," In: Haegeman, L.（eds.）*Elements of Grammar.* Dordrecht/Boston/London: Kluwer. 281-337.

Rowling, J.K.（1999）: *Harry Potter und die Kammer des Schreckens*. Harry Potter. Bd.2. Carlsen.

松岡佑子（2000）:『ハリー・ポッターと秘密の部屋』静山社.

Ross, J. R.（1970）: "On deklarative sentences," In: Jacobs, R. A./Rosenbaum, P. S.（eds.）*Readings in English transformational grammer.* Cambridge: Waltham. 222-272.

Rug, W./Tomaszewski, A.（2001）: *Grammatik mit Sinn und Verstand.* Stuttgart: Ernst Klett International.

Sachweh, S.（1998）: "„So Frau Adams↓ guck mal↓ ein feines Bac-Spray↓ gut↑" Charakteristische Merkmale der Kommunikation zwischen Pflegepersonal und BewohnerInnen in der Altenpflege," In: Fiehler, Reinhard/Thimm, Caja（Hrsg.）*Sprache und Kommunikation im Alter*. Radolfzell: Verlag für Gesprächsforschung 2003. 143-160.

佐久間淳一・加藤重弘・町田健（2004）:『言語学入門』研究社.

Sambe, S.（1988）: "Die Partikel „wohl" und einige ihrer Bedeutungsvarianten－unter besonderer Berücksichtigung der „Vermutungs"-Bedeutung－," 慶應義塾大学藝文學會『藝文研究』52 号. 132-147.

三瓶愼一（1997）:「心態詞 －生きた会話をつくり出す小さな言葉－」『基礎ドイツ語』第 4 号 8 月号. 三修社. 17-19.

澤田治美（2006）:『モダリティ』開拓社.

Schiffer, S.（1972）: *Meaning.* Oxford: Clarendon Press.

Searle, J. R.（1969）: *Speech Acts: An Essay in The Philosophy of Language.* Cambridge: Cambridge University Press.

Searle, J. R.（1969）: *Speech Acts: An Essay in The Philosophy of Language.*（邦訳: 『言語行為 言語哲学への試論』（1986）:［坂本百大・土屋俊 訳］勁草書房）.

Searle, J. R.(1979): *Expression and meaning: Studies in the Theory of Speech Acts.* Cambridge: Cambridge University Press.

Searle, J. R.(1983): *Intentionality.* Cambridge: Cambridge University Press.

Searle, J. R./Vanderveken, D.(1985): *Foundations of Illocutionary Logic.* Cambridge: Cambridge University Press.

清野智昭(2008):『中級ドイツ語のしくみ』白水社.

関口存男(1954):『ドイツ語學講話』三修社.

関口存男(1961):『冠詞 ー意味形態的背景より見たるドイツ語冠詞の研究ー』第二巻. 三修社.

Sekiguchi, T.(1977): "Was heißt ‚doch'?(Eingeleitet und übersetzt von Ezawa, K.)," In: Weydt, H.(Hrsg.)Aspekte der Modalpartikeln. Studien zur deutschen Abtönung. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

周国龍(1994):「要求行為における『ちょっと～』の機能に関する一考察」『名古屋大学人文科学研究』23 号 名古屋大学大学院文学研究科. 167-178.

Spencer, O. H.(2000): *Culturally Speaking: Managing Rapport through Talk across Cultures.*(邦訳:『異文化理解の語用論』(2004):[浅羽亮一(監修)田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・熊野真理・福島佐江子訳]研究社).

Sperber, D./Wilson, D.(1986, 1995): *Relevance: Communication and cognition.* Cambridge, MA: Blackwell.

Sperber, D./Wilson, D.(1995[2]): *Relevance: Communication and cognition.*(邦訳:『関連性理論ー伝達と認知ー』(1999[2]):[内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子]研究社).

Stalnaker, R. C.(1978): "Assertion," In: Cole, P.(eds.)*Pragmatics.* SYNTAX and SEMANTICS 9. New York: Academic Press. 315-332.

Stalnaker, R. C.(1998): "Pragmatic Presuppositions," In: Kasher, A.(Hrsg.)*Pragmatics.* Volume IV: Presupposition, Implicature and Indirect speech acts. London/New York: Routledge. 16-31.

Stenius, E.(1967): "Mood and language game," *Synthese*. Volume 17, Number 1. 254-274.

Stechow, A, v.(2002): "German *seit* 'since' and the ambiguity of the German perfect," In: *studia grammatica* 53. 393-432.

Schwan, S.（1999）: “Wat zijn wel Partikels? Ein kontrastiver Vergleich zum Gebrauch der Partikeln im Deutschen und im Niederländischen unter besonderer Berücksichtigung von *wel* und *wohl*,” In: *Orbis Linguarum.* Vol. 14. Legnica.
［Available online at: http://www.orbis-linguarum.net/1999/14_99/STEFAGOT.html］

Stolt, B.（1979）: “Ein Diskussionsbeitrag zu *mal*, *eben*, *auch*, *doch* aus kontrastiver Sicht（Deutsch-Schwedisch）,” In: Weydt, H.（Hrsg.）*Die Partikeln der deutschen Sprache.* Berlin/New York: Walter de Gruyter. 479-487.

鈴木康志（2007）:「ドイツ語命令・要求表現における心態詞について」『愛知大学 言語と文化』No. 18. 85-110.

高田博行（2007）:「歴史語用論の可能性－甦るかつての言語的日常」『月刊言語』12 Vol.36 No.12. 大修館書店. 68-75.

高殿良博（1996）:「日本語とインドネシア語における依頼表現の比較」 『国際関係紀要』第 9 巻 第 1, 2 合併号.
［Available online at: http://www.asia-u.ac.jp/kokusai/Kiyou.files/pdf.files/9-12/9-12-15.pdf］

高原脩・林宅男・林礼子（2002）:『プラグマティックスの展開』勁草書房.

滝浦真人（2007）:「会話の„場“を切り取る敬語－敬意と疎外のダイクシス」『月刊言語』2 Vol.36 No.2. 大修館書店. 48-55.

武田明子（1994）:「ドイツ語話者から見た日本語発話方略の特徴とミス・コミュニケーション Besonderheiten und Mißverständnisse in der japanischen Sprechweise aus der Sicht deutschsprechender Personen」*Symposion 9.*（語用論）48. 87-96.

田窪行則･西山佑司･三藤博･亀山恵･片桐恭弘（2001[2]）:『談話と文脈』岩波書店.

田中一嘉（2001）:「不変化詞 wohl の意味と機能－心態詞 ja との比較から－」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第 50 巻. 237-249.

田中敏・山際勇一郎（2004[16]）:『ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』教育出版.

寺門伸（1979）:「現代ドイツ語における話法の副詞と副詞の話法的用法」『早稲田大学大学院 文学研究科紀要』別冊第 6 集. 35-45.

寺村秀夫（1982）:『日本語のシンタクスと意味 第 I 巻』くろしお出版.

Thomas, J.（1995）: *MEANING IN INTERACTION. An Introduction to Pragmatics.*（邦訳:『語用論入門 —話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』（1998）:［浅羽亮一（監修）田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・成瀬真里訳］研究社出版）.

Thurmair, M.（1989）: *Modalpartikeln und ihre Kombinationen.* Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

Thurmair, M.（1991）: “'Kombinieren Sie doch nur ruhig auch mal Modalpartikeln!': Combinatorical regularities for modal particles and their use as an instrument of analysis,” In: *Multilingua* 10（1/2）. 43-59.

時枝誠（1950）:『日本文法 口語篇』岩波書店.

筒井友弥（2005a）:「心態詞 *mal* の使用条件に関する試論」『広島ドイツ文学』 19 号. 51-65.

筒井友弥（2005b）:「ドイツ語の決定疑問文における *können* と *mal* の共起性について」『欧米文化研究』12 号. 広島大学社会科学研究科. 115-131.

筒井友弥（2006a）:「心態詞 *mal*, 時間副詞 *einmal*, 頻度副詞 *einmal* の区別について」『広島ドイツ文学』20 号. 73-90.

Tsutsui, T.（2006b）: „Zur Funktion der Abtönungspartikel „mal“ - Anhand eines Vergleichs mit der japanischen Gradpartikel „chotto“,“ *Neue Beiträge zur Germanistik*. Band 5 Heft 3. 77-95.

筒井友弥（2007）:「心態詞 *schon* と *mal* の結合について」『エネルゲイア』第 32 号. 95-112.

Tsuzuki, M./Miyamoto, S./Qin, Z.（1999）:「日中英対照 統語形式のちがいによる丁寧度」日本認知科学会 16 回大会（第 2 回認知科学国際会議を兼ねる）.

［Available online at: http://logos.mind.sccs.chukyo-u.ac.jp/jcss/ICCS/99/olp/p1-16/p1-16.htm.］

Ungerer, F./Schmid, H. J.（1996）: *An Introduction to Cognitive Linguistics.*（邦訳: 『認知言語学入門』（1998）:［池上嘉彦ほか訳］大修館書店）.

宇佐美まゆみ（2002）:「連載 ポライトネス理論の展開 B&L のポライトネス理論（1）－その位置づけと構成－」『月刊言語』3 Vol.31 No.3. 大修館書店. 118-113.

薄井良子（2004）:「反意意見表明における『ちょっと』の働き－『ちょっと』は不快感を緩和するか－」『予稿集』日本語用論学会 第 7 回（2004 年度）大会. 29-32.

Vanderveken, D.（1990）: *Meaning and Speech Acts.* Cambridge: Cambridge University Press.

Vanderveken, D.（1990）: *Meaning and Speech Acts.* Volume 1.（邦訳: 『意味と発話行為』（1997）:［久保進 監訳 西山文夫・渡辺扶美枝・渡辺良彦 訳］ひつじ書房）.

von Fintel, K./Iatridou, S.（2002）: “The Meanings of Epistemic Modality,” ms, handout for Sinn und Bedeutung 7, University of Konstanz, October 5, 2002.

［Available online at: http://web.mit.edu/fintel/www/konstanz-ho.pdf］

Vorderwülbecke, K.（1981）: “Progression, Semantisierung und Übungsformen der Abtönungspartikeln im Unterricht Deutsch als Fremdsprache,” In: Weydt, H.（Hrsg.）*Partikeln und Deutschunterricht.* Heidelberg: Julius Groos Verlag. 149-160.

Wagner, K. R.（1974）: “Die Sprechsprache des Kindes,” *Sprache und Lernen. Teil 2: Korpus und Lexikon.* Düsseldorf: Schwann.

Wahrig, G.（2000）: *Deutsches Wörterbuch.* Gütersloh/München: Bertelsmann Lexikon Verlag.

Weber, H.（1977）: *Kleine generative Syntax des Deutschen.I. Traditionelle Syntax und generative Syntaxtheorie.* Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

Wegener, H.（1998）: “Zur Grammatikalisierung von Modalpartikeln,” In: Barz, I./Öhlschläger, G.（Hrsg.）*Zwischen Grammatik und Lexikon, Forschung zu einem Grenzbereich.* Tübingen: Max Niemeyer Verlag. 37-55.

Weinrich, H.（1993）: *Textgrammatik der deutschen Sprache.* Mannheim/Leipzig /Wien/Zürich: Dudenverlag.

Weinrich, H.（1993）: *Textgrammatik der deutschen Sprache.* Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich: Dudenverlag.（邦訳:『テクストからみたドイツ語文法』（2003）:［脇坂豊編; 植木迪子・江口豊・大瀧敏夫・大浜るい子・竹内義晴・田中慎・中澤三津子・日置孝次郎・増本浩子・脇坂豊訳］三修社）.

Werner, K.（1984）: *Übungen zu den Partikeln.* Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.

Werner, A.（1997）: “Läuse im Pelz unserer Sprache - eine Betrachtung zu den Partikeln im Deutschen,” 『阪神ドイツ語学研究会 会誌』第 9 号. 7-26.

Werner, A.（1998）: *Deutsche Modalpartikeln im Kontrast zum Japanischen – im Rahmen eines Wortartensystemvergleichs.* Siegen: Dissertation.

Werner, A.（2002）: *Modalpartikeln im Japanischen. Ein Vergleich mit deutschen Modalpartikeln ドイツ語 日本語.* Reihe Sprach- und Kommunikationswissenschaften – Band 3. Siegen: UniVerSi – Universitätsverlag.

Weydt, H.（1969）: *Abtönungspartikel: Die deutschen Modalwörter und ihre französischen Entsprechungen.*Linguistica et Litteraria 4. Berlin/Türich: Bad Homburg, etc. Gehlen.

Weydt, H.（1977）: “Nachwort – Ungelöst und strittig,” In: Weydt, H.（Hrsg.）Aspekte der Modalpartikeln. Studien zur deutschen Abtönung. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

Weydt, H.(1981): “Methoden und Fragestellungen der Partikelforschung,” In: Weydt, H.(Hrsg.) *Partikeln und Deutschunterricht. Abtönungspartikeln für Lerner des Deutschen.* Heidelberg: Julius Groos Verlag. 45-64.

Weydt, H./Harden, T./Hentschel, E./Rösler, D.(1983): *Kleine deutsche Partikellehre. Ein Lehr- und Übungsbuch für Deutsch als Fremdsprache.* Stuttgart: Klett.

Weydt, H./Hentschel, E.(1983): “Kleines Abtönungswörterbuch,” In: Weydt, H.(Hrsg.) *Partikeln und Interaktion*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag. 3-24.

Wilson, D./Sperber, D.(1993): “Linguistic form and Relevance,” *Lingua*, 90. 1-25.

Wittgenstein, L.(1921): *Tractatus Logico-philosophicus.* 2.rev. Aufl. 1932, London.

Wolski, W.(1986): *Partikellexikographie. Ein Beitrag zur praktischen Lexikologie.* Tübingen: Niemeyer.

Wunderlich, D.(1975[2]): “Zur Konventionalität von Sprechhandlungen,” In: Wunderlich, D.(ed.) *Linguistische Pragmatik.* Wiesbaden: Athenaion. 11-58.

Wunderlich, D.(1976): *Studien zur Sprechakttheorie.* Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag.

吉田光演(1987):「ドイツ語心態詞の組み合わせについて」『Ryudai Review of Langauge & Literature』No.32. 193-214.

吉田光演(1990):「『やっぱり』の意味論」『金沢大学独文研究室報』7. 17-34.

吉田光演(2005):「ドイツ語の完了助動詞にはなぜ haben , sein があるのか？ －ドイツ語教育における文法の再考の試み－」『広島独文学会誌』第 19 号. 37-50.

吉田光演・保坂靖人・岡本順治・野村泰幸・小川暁夫(共著)(2001):『現代ドイツ言語学入門―生成・認知・類型のアプローチから』大修館書店.

神久聡(1999):「ドイツ語話法詞のモダリティ表現と話し手の視点についての一考察」『エルンテ ＜北＞のゲルマニスティク』郁文堂. 1-20.

Zaefferer, D.(2001): “Deconstructing a classical classification: A typologicallook at Searle’s concept of illocution type,” *Revue international de philosophie.* 217. 209-225.

Zifonun, G/Hoffmann, L./Strecker, B.(1997): *Grammatik der deutschen Sprache.* Bd. 1. Berlin/New York: Walter de Gruyter.

Zifonun, G/Hoffmann, L./Strecker, B.(1997): *Grammatik der deutschen Sprache.* Bd. 2. Berlin/New York: Walter de Gruyter.

Zimmermann, M.（2004a）: “Zum *Wohl*: Diskurspartikeln als Satztypmodifikatoren,” In: *Linguistische Berichte* 199. 253-286.

Zimmermann, M.（2004b）: “Discourse Particles in the Left Periphery,” In: Shaer, B., Frey, W. & Maienborn, C.（eds.）*ZAS Papers in Linguistics (ZASPiL)* 35. 543-566.

周国龍（1994）:「要求行為における『ちょっと～』の機能に関する一考察」名古屋大学人文科学研究 23 号. 167-178.

楊暁安・久井恭子（2004）:「文末語気詞とイントネーション ー情報源から見る中国語“啊”、“吧”と日本語『よ』、『ね』」」北海道文教大学論集 5 号. 21-33.

謝辞

本論文は，大変多くの方々のご協力とご支援を得て，広島大学大学院社会科学研究科に提出したものである。最初に断っておくが，本内容に関していまだ残された不備については，全て筆者の責に帰するものである。

まず，主査の吉田光演先生をはじめ，副査の山田純先生，田中暁先生，Christel H. Kojima-Ruh 先生，稲葉治朗先生に厚くお礼申し上げたい。

特に吉田先生には，本論文のみならず，これまでに筆者が携わった全ての論文，および学会，研究会，ゼミでの発表，さらに学内における様々な教育的活動への参加において，常に，厳しくも温かいご指導をいただき，それにより，筆者の学術的な精神が鍛えられたことは，本論文執筆における最大の励みであった。

山田先生，田中先生，Kojima-Ruh 先生，稲葉先生には，それぞれ，根本的な改善を促すご助言をいただき，本論文の完成に向けての支えとなった。そのうえ，先生方のご意見やご指摘に対する修正は，本論文の多大なる向上につながった。

また，同大学大学院教育学研究科の大浜るい子先生にも，この場を借りてお礼申し上げたい。大浜先生のゼミに参加し，筆者の発表に対して先生や院生からいただいたご指摘は，その後の執筆における糧となった。

さらに，社会科学研究科の先輩である田中雅敏氏，かつての同僚である橋本将氏には，今なお公私にわたり支え続けていただき，その支援は，筆者にとってかけがえのないものである。お二人にも改めて感謝の意を表する。

他，様々な学会，研究会，ゼミ等で，ここに書き切れないほど多くの先生方や院生と出会い，時に厳しいご批判をいただきつつ，時にご褒称を授かったことは，筆者の研究活動における宝となっている。ここに心より謝辞を述べる。

最後に，本論の執筆に際して，筆者が弱音や愚痴をこぼすたび，「私には何もわからないから何もしてやれない」が口癖になってしまった母に，ここで心からの感謝の気持ちを伝えたい。ようやくのささやかな孝行の第一歩として，息子の思いを全て汲み取り，全てを尽くしてくれた母に本論文を捧ぐ。